

文學士 矢野太郎編

國史叢書

北肥戰誌 一

國史研究會藏版

北肥戰誌は、神功皇后の三韓征伐（紀元八六〇年）より、天正十八年豐太閤小田原北條氏を亡ぼし天下一統（紀元二二五〇年）に至る迄、凡そ千四百年間、九州・二島の諸豪鍋島・少貳・菊池・大友・龍造寺、其他の諸家の由來・活動の顚末・諸氏相互の關係幷に之等の諸氏と皇室・足利氏・太閤・中國の陶・大內、四國の長曾我部及び諸外國との關係等を、肥前國を中心として詳述し、尙ほ古跡・寺社の緣起等を附記せるものにして、冊數三十卷あり。書名は北肥戰誌と名附くれど、其の內容より察すれば、九州・二島の治亂記として見るを適切なりとす。之を西國治亂記・西國太平記等の諸書に比するに、記事の詳細確實なること、之等の諸書の及ぶ所にあらず。

本書、原名覺書・一名治亂記といふ。原著者は誰なるか知るを得ずと雖も、馬渡俊繼といへる者之が取捨選擇を加へて年經ること久しきに及び、鍋島侯の執事この書の散逸を恐れ、君侯宗茂一覽の後、新に長森氏に命じて訂正淨書せしめ、而して治亂記と名づく。時に享保五年なり。これ本書の序に依り明なれども、北肥戰誌と名附けたるは、その何時なるか知るを得ず。蓋し享保以降なるは明なり。

長森氏は通稱傳次郎、以休と號す。寶暦三年一月七十歳にして卒す。林大學頭信篤の門人として令名あれど、著作詩文一も傳はらず、僅に九州治亂記序文あるのみ。以休の末孫あり、傳次郎と稱し、後有斐と改む。官司法及法制屬奏任三等に至る、詩文を善くし久米博士と友たり、今を距ること十年前に死す。養子藤吉郎法學士にして官勅任二等に至る(檢事正大藏大臣官房長)今野に在りて商業に從事し、中澁谷に住す。

本書刊行に當り、侯爵鍋島家は特に印行の許諾を與へられ、東京帝國大學史料編纂掛は原書の謄寫を許可せられたり。記して茲に厚意を深謝す。

大正七年二月

國史研究會識

例言

一、本編は北肥戰誌三十卷の內、第一卷より卷之十六迄を採收す。

一、反讀を讀下しに改め、語尾を補ひ、句讀を施す等、既刊の諸書に同じ。

一、原本の特長と思はるゝ文字及び地名・人名は多く原本のまゝに從へり。

目次

北肥戰誌

卷之四

卷之五

卷之六

卷之七

卷之八

卷之九

卷之十

卷之十一

卷之十二

卷之十三

卷之十四

卷之十五

卷之十六

目次終

北肥戰誌

序

謹曰若稽古、其治也、其亂也、猶四時之錯行。而成敗離合紛紜于數百年之間。蓋政令休明則邦家永久、敎化陵夷則民庶離散。三代之盛・五季之衰、豈其可不鑑于茲乎。惟夫九州天府之國。而都會之地、山川神秀拔其粹也。人物雄偉出其類也。是以、名趾勝蹟儼存于彼、豪傑將士發揮于此。我肥之勳績、亦卓爾於此中。然其實者、非史策則其不可得而傳也。無其人則其不可得而述也。粤有馬渡氏俊繼者。乃肥州之産、而覃思事跡。故閱市求家取實闕疑、更互演繹刪其繁亂。而其編以足徵之矣。不又幸哉。自爾以來蠹食年久、而知者鮮矣。不又惜哉。執事小川俊方知之不措、感而有餘、以達于君所。賢嗣君乙覽之後、新降高命淨書訂證、因名

曰治亂記。總三十卷。是其休明陵夷、熙々然昭々乎不在于此書哉。

于時享保庚子年　　長森氏記之

北肥戰誌 卷之一

異賊襲來の事

竊に聞く。昔神功皇后三韓を御征伐のため、鎮西へ遷幸ましく、先づ肥前國背振山の絶頂に御陣を召され、異國御渡海の評議を決せられ、夫より松浦潟へ遷らせらる。折節酷暑の頃なれば、玉島川に御逍遙あり。則ち彼の湊より御船を出されけるに、海路の御道引(みちびき)は、住吉大明神白髮の翁に現じ給ひ、御召船の梶取は志賀の明神、先陣は伊豫の三並、軍奉行は武内宿禰にて、高麗國の奥女眞へ御討入あり。海陸の御合戰に、高麗八箇道、新羅・百濟・契丹の三韓を悉く御退治ましく、異國の王は我が日本の犬なりと、御弓の筈にて御書を付けられ、頓て御歸朝あり。筑前國へ上らせられしに、此時、后御懷胎にて、皇子應神天皇を御誕生まします。其御産所を今に香

異國征伐の初

椎と申す。御出生の時、靈香四方に薰じ、近邊の椎の木の葉、皆香しくなりし故に、かくは申すなり。是れ日本より異國を征するの初なり。其後、人王三十四代推古天皇の御宇に、三韓反復して奇異の曲者、日本へ攻め來る。其身、鐵なる故、是を和人は鐵人といひけり。時に伊豫の國の住人樹下の押領使越智益躬、勅命を蒙り是を追討す。その後、人王三十九代天智天皇の御時にも、新羅國和朝を背く故、先例に任せられ、越智守興に勅定あつて征伐せられぬ。同じく四十五世聖武天皇の御宇にも、亦三韓日本に背くに依りて、藤原宇合の息男淘若を以て、是を誅戮あり。それよりは異國より日本を侵す事もなかりし處に、星霜久く去りて、人王六十八代後一條院の御宇、寛仁三年己寅〔未〕の春、新羅の賊起りて、三月に高麗を出船し、四月一日對州へ著き、同三日壹岐へ來り、同じき八日、筑前の國志摩の郡へ上りしを、筑・肥の軍士馳集りて、悉く是を退治す。又人王七十三代堀河の院の御宇、寛治年中にも、蒙古の大勢、兵船をそろへて攻め來るの間、九州の諸士、壹岐・對馬・筑前の海上へ漕ぎ向つて相戰ふ。中にも肥後の國の住人菊池の太郎經隆、綸旨を給はつて戰功を

抽んで是を追討す。其後、龜山の院の御宇、文永二年乙丑、蒙古又數千艘、其勢三百七十六萬人、八月十三日筑前國博多の津に襲來す。鎭西大きに騷動し、九國の士卒皆馳集り、蒙古と相戰ふに、異敵、蟻の如くに見えて、防戰中々叶ひ難く、味方悉く中國へ引退く。蒙古、勝に乘り博多・箱崎の陸上へ上り、既に千手・秋月邊まで押し來りしに、原田次郎と秋月九郎が軍兵共、山中に隱れ居て、或は鬼面、或は獅子頭等、靑・黃・赤・白・黑に異形を眞似、あそこの木蔭・こゝの叢より現れ出で、烈しく討戰ひし程に、異賊共、是は正しく神軍よと膽を消し、皆逃去りて數百萬の者共、自然と船を返し、殘らず高麗へ歸りぬ。然る處に、又程もなく同十一年甲戌十月六日、蒙古數千艘對州へ著船し、同十九日、筑前國今津の沖に來り、明くる廿日、博多へ入る。九州は申すに及ばず、五畿七道周章し、關東・六波羅より、鎭西の武士に御敎書をなされ、諸國の軍兵博多へ馳集る。折節雪消の洪水にて、筑後國千年川に到り、薩・隅・日・豐・肥後國の軍兵共、渡る事を得ざりしに、神代民部大輔良忠、假橋を渡して悉く之を渡す。後に鎌倉へ聞えて、時の執權北條相模守時宗、良忠を賞せられ、嚴密の御

敎書を以て領知を加恩ありけり。時に肥後國菊池左京大夫隆泰、大將の號を給はつて、錦の御旗を下され、博多へ發向し、箱崎の松原にて蒙古と合戰す。菊池大に利を得、隆泰が三男三郎有隆、鎌形といふ所にて、異賊の大將鬼盤藏を討取りぬ。時に菊池が指す所の錦の御旗に、血多く付きけり。其體赤き星に異ならず。軍散じて後、彼の御旗を叡覽あり。菊池に赤星と總名を下し給はる。是よりして三郎有隆、赤星と名字を替へけり。此戰に松浦山代彌三郎階討死し、千葉介賴胤疵を蒙り、明くる建治元年八月十三日、領地肥前の小城に於て歲三十七にて失せぬ。斯くて蒙古程なく退散しけり。斯樣に折々蒙古襲來して合戰に及び、如何にも難儀なりしかば、異國警固の爲め關東御下知を加へられ、九州の武士に課役を以て、建治二年三月より博多の津に、石築地を構へらる。其所、博多冷泉津より北の方三四里が間を、高さ四五丈に大石を疊み、屛風を立てたる如くに事々しく之を築く。太宰少貳資能、兼ねて太宰府にありて此事を奉行す。茲に因りて鎭西の輩、各〻人夫を具して博多の津に向ひ、請取の役所を定め、彼の石築地を普請す。其輩には筑前に

異國防禦の爲に石築地を構ふ

原田孫次郎種遠・秋月左衞門尉種賴・田淵次郎・宗像大宮司・千手・黑河・山鹿・麻生・少貳の一族はいふに及ばず、豐前に城井常陸守時網・長野・田河、筑後に田尻三郎種重・神代民部大輔良忠・黑木新藏人大夫・星野・河崎・西牟田彌次郎永家・草野筑後權守永綱・酒見菅太郎教員・末安右馬允兼光、肥後に菊池左京大夫隆泰・阿蘇大宮司推季・相良・蘆北三郎、肥前國に高木伯耆六郎家宗・龍造寺左衞門尉季益・國分彌次郎季高・三浦・深堀彌五郎時仲・大村太郎家直・越中次郎左衞門尉長員・安富・深江民部三郎賴淸・有馬左衞門尉朝澄・後藤三郎氏明・同塚崎十郎定明・橘薩摩十郎公員・白石次郎入道・多久太郎宗國・於保四郎種宗・馬渡美濃八郎・今村三郎・尻田六郎能家・綾部又三郎幸重・上松浦に波多太郎・鴨打次郎・鶴田五郎馴・下松浦に松浦丹後權守定・峯五郎省・平戶源五郎答・伊萬里源次郎入道如性・山代又三郎榮以下兩黨の輩、豐後に大神の一族、薩州に島津兄弟、日向に伊東・土持、大隅に牛糞・河俣を初として、悉く博多へ馳せ集り之を勤む。九國の大儀是に過ぎたるはなし。斯かる處に、弘安四年辛巳五月廿日に、又蒙古が船四千餘艘、壹岐へ著船し、筑前內志賀・野子の浦より東の海上を、尺

寸の隙もなく船筏を組んで、陸地の如く行路を自由に横行し、卽時に博多・箱崎へ攻め入らんとす。此事、大友因幡守親時が許より早速京都へ注進申す。又少貳經資よりも、鎌倉六波羅へ早馬を以て急を告ぐ。此時將軍家は惟康親王、執權は北條相模守時宗にて、早速四國・九州の武士、彼所へ馳向ひ、異賊を防ぐべきの旨、御教書を下されしかば、大友・島津・伊東・菊池・相良・少貳・秋月・原田・松浦・三原・宗像・草野・星野を初め、各〻博多へ馳集り蒙古と合戰す。蒙古豫ねて日本の用心をや量りけん。件の石築地に猶二三丈が程高く、己が船に勢樓を切組み置き、是を俄に組立てゝ、日本勢の陣所を遙か目下に見なし、其頃曾てなかりける佛郎機を放し掛けしかば、其音天地に響き、中る所微塵となり、味方是が爲に討たるゝ事數を知らず。大に懼ぢ恐れて、皆爰かしこに逃竄し、大將の下知をも相用ひず、更に戰はむともせざりけり。

異敵上陸して戰ふ

異敵、勝に乘り悉く陸へ駈上り、和兵と討戰ふ。時に少貳が弟武藤豐前守景資、一族郎徒を相催し、是等と防戰しけるが、百路原に於て賊軍の大將劉相公、長七尺に餘り、其形夜叉の如く、黑き馬に乘りて鉾を携へ、和兵を追つ立て相戰ひしを、

九州諸氏の戰功

景資自ら射て落す。彼の景資は元祖小次郎資頼以來、弓箭の古實を相傳して、無雙の弓の上手なり。斯くて九州の武士、蒙古の後へ廻り、中にも松浦黨の者共、壹岐・松浦の海上にして討戰ひ、山代又三郎榮・志佐次郎繼以下手疵を蒙り、討死する者數輩なり。肥前國龍造寺左衛門尉季益が一族も、三百餘騎にて漕ぎ向ひ、大瀬門・小瀬門・三年浦・幾島・松島に於て蒙古と合戰し、季益が嫡男龍造寺又次郎季時、特に軍忠を抽んで、賊兵を切る事二百十三人なり。然れども異賊事ともせず、其外後藤三郎氏明・同伯父塚崎十郎定明・子息中野五郎頼明・大村又次郎家信・安富左近將監頼泰・深堀左衛門尉時光・子息彌五郎時仲・櫛田の宮の執行次郎・伴朝臣兼信等、同じく軍功あり。筑後の國人には田尻三郎種重・同弟次郎種光討死し、西牟田彌次郎永家、閏七月廿二日、松浦鷹島に於て戰功を播(ほどこ)し、壹岐の石田五郎爲治討死す。肥後國菊池四郎武房も、博多に於て挑戰し、蒙古を多く討取り、其忠賞として頓て肥後守に任ず。太宰前少貳入道覺惠は、博多の軍に疵を被りしが、其手にて今年八十四歲、閏七月十三日竟に死す。爰に又伊豫國の住人河野藏人大夫通有も、伯父伯耆守通

時と同じく、筑前國野子浦・志賀島に於て、蒙古が船に切掛り、賊船二艘切り取り、大將一人生虜り、大に功を現し、通有疵を被り、通時討死しけり。蒙古亡びて後、通有彼の討取る首共を、己が領地肥前神崎庄尾崎といふ所にして、大なる楠の枝に掛け、一々是を實檢す。其所今に蒙古屋敷實檢場といふなり。扨通有、家人久萬彌太郎成俊を以て、件の蒙古の首を京都へ運送せしかば、其軍忠莫大なりとて、通有對馬守に任ぜられ、伊豫國山崎庄・肥前國神崎庄内・肥後國下久々村、以上三百町を御加恩あり。斯くて五月廿一日より軍始り、六七月の間に、總て海陸七十四度の合戰あり。

海陸七十四度の合戰

異賊は討たるれども數百萬にて弱らず、味方は勝つとも無勢にて勞れたり。此事、日々に關東・六波羅へ、注進櫛の齒を曳きしかば、宇都宮三河守貞綱が折節在京せしを、鎭西の加勢として差下さる。其勢六萬餘騎、既に長府へ著陣し、中國の大内・厚東兩人も博多へ來りぬ。扨伊勢・岩清水・加茂・春日等の諸寺諸山へ、奉幣を立てられしかば、誠に其利益にや。閏七月晦日、俄に大風梢を碎き、蒙古數千艘ども一艘も殘らず、大波の爲に打碎かれ、數百萬の異賊、海底に沈みしこそ不思議なれ。斯

異國勢殲滅

くて此度軍功ありし輩には、六波羅の御下知を蒙り、太宰少貳經資之を司りて、皆恩賞を給はりぬ。此後は九州の諸士、彌〻博多の津を警固して、姪の濱に番所を構へ、代る〳〵此所を守りぬ。蒙古も恐れて來らざりけり。

九州の探題北條英時誅戮の事

文永・弘安に蒙古來りし後は、鎌西少時く靜かなりしに、元弘・建武の頃より、九州又騷亂す。其濫觴を尋聞くに、人王九十五代の帝後醍醐天皇、鎌倉の執權北條相模守平高時入道崇鑑を御惡みの仔細あつて、彼の一家を御退治あるべしと、足利治部大輔高氏・新田小太郎義貞以下の諸將に、綸旨を下されしかば、東西蜂の群る如く、南北蟻の集るに似て、皆從ひ奉り、竟に高時入道、元弘三年癸酉五月廿二日、鎌倉に滅亡し、兩六波羅の左近將監時益・越後守仲時も、同月九日、江州番場にて討たれぬ。

北條高時亡ぶ

然るに近年、北條家より一族の中を選んで、諸國の守護に差置きたりしを、悉く近國の武士に仰せて誅伐あり。其中に長門の探題陸奥上野介時直計りは、別儀を以

後醍醐天皇九州の武士へ綸旨を下す

て死罪を宥められ遠流せられ、越前國牛原の地頭淡川右京亮時治は、同月十二日牛原に於て誅せられ、名越遠江守時有・同修理亮有公・同名兵庫助貞時は、越中國小塚にて討取られぬ。然るに此時、九州の探題をば武藤修理亮英時と申す。初め當今、御叛反を思召し立ちける時、九州の武士へも綸旨を下されしに、菊池入道寂阿・大友入道具簡・少貳入道妙恵三人ともに、皆勅命に應じ彼の英時を討たんとしけるに、大友・少貳は未だ事の安否を窺ひて、軍を控へて打出でず。菊池は肥後を發して博多へ攻め來りし處に、少貳・大友、却つて探題の方になり相戰ひし程に、菊池入道忽ち討死しけり。然るに程なく兩六波羅亡び、北條家の極運次第に相見えしかば、少貳も大友も己が科を遁れむ爲め、今は又英時を誅伐すべしと、廻文を以て肥・筑・豐の軍兵を相催す。斯かりし程に、少貳方には龍造寺又六郎家親・於保五郎宗喜・高木伯耆守家朝・深堀孫太郎時通・同高濱又五郎時綱・安富・深江恩房丸・今村孫太郎入道・子息孫三郎高弘・神代・末安以下、肥前・筑後の御家人等馳せ加はる。大友には諸方・臼杵・戸次・新開等豐後國の輩一味同心して、五月廿五日探題英時が居たりし博多姪濱城

探題英時自害

へ押寄せむとす。　英時は少貳が心變りを聞いて、事實なるかと疑ひしかば、家の子長岡六郎を少貳が館へ差遣しけり。　長岡、太宰府へ到りて妙惠に案內し、差入りて見るに、其事決定と見え、新しき旗棹なんど取揃へ、馬よ物具よと相犇く半ばなり。事の體疑ふべきにあらざりしかば、妙惠入道に對面し、刺違へて死なむと思ひし處に、妙惠が長男武藤左衞門尉顯經、計らず出合ひたり。　長岡取りあへず、正なき和君の心變りよと、拔きざまに突きけるを、顯經心早き者にて、碁盤のありしを取合せ請けしかども、餘る刀にて深手を負ひ終に死にけり。　長岡も當座に討たれぬ。　斯かりし程に、少貳・大友、頓て博多へ押寄す。　探題の方には宗像の大宮司・原田孫四郎種貞・三原・秋月の一族相集りて、城を出で川より西に相備ふ。　折節五月雨に水增して、寄手渡りを見繕ひ少し猶豫してありける處に、少貳が家人宗十郎、一番に打入れ馳渡す。　時に殘らず相續いて向へ馳上り、探題方宗像大宮司が先陣にありしを追崩す。　探題の軍兵、一戰の中に打負け引退く。　探題英時は城へ引籠り、防戰叶ひ難く終に自害して失せにけり。　斯かりし程に、城中の兵或は腹を切り、或は落失せ、

忽ち城は灰燼となる。寄手にも討死・手負多く、少貳が手には於保四郎宗喜疵を蒙りけり。其外、筑・肥の武士軍功多かりき。

尊氏將軍九州御下向の事

尊氏九州に下向

博多の探題英時討たれて後、九國・二島の輩、或は上洛して王化に隨ふもあり。或は在國して將軍の下知を守るもあり。今は天下一統すべきに、北條亡びてより程なく、足利尊氏將軍と新田義貞朝臣中惡しくなり給ひ、尊氏卿終に勅勘せられ、建武三年丙寅正月晦日、洛陽糺河原の合戰に、新田左中將に討負けられ、洛を落ちて二月十二日酉の刻、攝州兵庫より豊後の大友が船に召され、鎭西の方へ下らる。御供には御舍弟左馬頭直義を初め、足利尾張守高經・同子息新右衞門尉氏經・畠山上總介國淸・細川阿波守和氏・同弟源藏人賴春・同掃部助師氏・同名兵部大輔顯氏・同卿公定（マヽ）禪・同三位皇海・同弟帶刀先生義敢・今河三郎賴貞・同四郎賴兼・桃井・市川修理亮義盛・上杉伊豆守重能・一色右馬入道々猷・仁木四郎次郎義長・大島兵庫頭義政・高三河守師

直・同尾張守師泰・同名豐前守師久・大高次郎重成・南遠江守宗繼・佐竹源藏人氏義・小俣少輔太郎入道々剩・同少輔七郎氏連・曾我左衞門尉師祐・熱田大宮司・白石太郎・八木岡五郎、其外九國の大名には、宇都宮彈正少弼氏貞・島津上總四郎氏久・大友千世松丸・千葉大隅守胤貞・武藤孫三郎賴賢・朝日但馬將監資直以下、同船より相從ひ兵庫を出船ありし時は、其勢凡そ四五千餘騎とも見えたりしが、室へ著船あつて一兩日逗留の中、必ず官軍慕ふべしと詮議せられ、其用心として細川の一族七人、足利尾張守父子・大島兵庫頭・今川兄弟に、軍兵を副へて殘し置かれし故、今は雜兵僅か百餘人に過ぎず。斯くて同廿六日、長州赤間ヶ關に著船あり。此事隱なければ、太宰筑後入道妙惠、急ぎ子息新少貳賴尙を名代として、將軍の御迎に差遣す。先立て賴み思召すの旨、御自筆の御敎書を給はりし故なり。賴尙五百餘騎を召具し、同廿七日赤間ヶ關へ出向ふ。時に妙惠、錦の御直垂二領を兩御所へ調進しけり。將軍御兄弟を兩御所と申す。

多々良濱合戰の事

菊池の勤王

肥後國菊池左京大夫武重は、元より宮方にて、此頃在京したりけるが、尊氏卿、此度九州へ落下らるゝ由聞付けしかば、急ぎ本國へ人を下し、舍弟掃部助武敏が方へ申遣しけるは、今度尊氏兄弟、筑紫へ逃げ下らるゝ由、其聞えあり。早速出向ひ一々首を刎ね、叡感に預るべしといひ送りけり。武敏、兄が下知を得て取る物も取敢へず、其勢七千餘騎、八代を立ちて筑後へ討つて出で、高良山に陣を取り、將軍の御下著を待懸けけり。少貳入道是を聞き、さらば菊池を討ち散すべしと、同廿八日、原田次郎と畦倉豐前守を先陣とし、筑後へ馳向ひ、三原三郎と一つになり、菊池が高良山の陣へ寄せむと議す。菊池は元來勇氣無雙の者なりしかば、少貳入道が寄來る由を聞いて、さらばこなたより逆寄に寄せて戰ふべしと、水木(みづき)の渡りへ討ち出づ。少貳が先陣畦倉豐前守、寄懸の旗を進めて一番に水木の渡りを馳渡し、菊池勢と亂合ふ。是を見て原田・三原も續いて川を渡し、畦倉と一つになり暫く戰ひしに、畦

倉・三原・原田が兵、元より小勢にて菊池に取籠められ、一人も殘らず討たれにけり。少貳が者共是を救はむとしけれども、川水深く船もあらず、味方の眼前に討たるゝを見ながら、阿容々々(おめ〳〵)と引退き、海士隈に陣を取る。同廿九日、秋月四郎入道寂心・菊池に馳加はり。少貳が海士隈の陣へ押寄せ討ち破る。少貳入道利を失ひ、太宰府へ引退き、己が館にて戰はんとしける處に、味方に逆心の者あつて、城に火を懸けしかば、少貳力なく有智山の要害へ取籠る。菊池・秋月續いて有智山へ押詰め攻め戰ふ。少貳入道一族、家人を下知し、城戸を固めて防戰しけるに、郎從の三卷新三郎・宗助五郎・藤右馬允、俄に心變りして敵を引入れしかば、少貳が陣中騷動し、入道の子越後守・尾張守、其外宗徒の一族に、加茂左近將監資道・城又次郎經元・吉田小次郎景村・武藤次郎盛尙・同孫次郎貞元・同小次郎資淸・同筑後次郎盛秋・同愛鶴丸以上十餘人、同じ枕に討死し、雜兵五百餘人討たれしかば、妙惠入道も今年六十五歲にして、腹搔切つて失せぬ。入道の末子に禪應とて僧ありしが、父の死骸を火葬にし、閑に下火の佛事をなし、己れも同じ炎に飛入り死にけり。（太平記には禪應を宗應とあり。又有智山討死を二百六十三人と記す。）斯

有智山城没落

くて將軍は、同月廿九日に赤間ヶ關より、又御船に召され、內海の行程一日にして明くる晦日、筑前國蘆屋に著船あり。出燭の時分なり。此曉有智山沒落して、妙惠入道を初め一門悉く滅亡しける由、早隱あらざりしかども、新少貳賴尙深く是を隱密にす。今敗軍の士卒に弱氣を付けじとの思慮なるべし。翌くれば三月朔日、將軍御兄弟蘆屋を打立たれ、賴尙を先陣にて宗像に到り給ひ、南遠江守・曾我左衛門尉を以て、當社の大宮司を御賴みありけるに、氏重仔細に及ばず、同日酉の刻、急ぎ我が館へ請じ申し馱餉を奉り、御供の輩へも勞を休めさせ、兩御所へ御馬・鎧を調進す。

尊氏軍評

新少貳賴尙は五十町御先ゑよのを濱といふ所に陣をとる。然るを將軍召寄せられ合戰の御評定あり。賴尙畏まつて申しけるは、去る宰府軍の專は、某以下御迎に罷出でし故、父入道無勢に依りて打負け候歟。さりながら妙惠は國の案內者に候へば、定めて其身に於ては仔細候まじ。又明日の御合戰の事、當國人等は必ず味方に馳參るべし。菊池が一勢計りは、某が手の者を以て悉く誅伐仕るべき事、案の中たる由申し上ぐ。將軍御氣色斜ならず。斯くて菊池掃部助武敏・阿蘇大宮司惟直・秋月入

香椎宮の縁起

道寂心等、有智山を攻め落し、其勢に募り博多・箱崎へ打入らむとす。此時、少貳の一族共、板付・諸岡原に相支へ防ぎ戰ひしかども、菊池勢に打負け、窪能登彦四郎貞廣・同四郎經家・出雲又四郎能村以下討死して引退く。菊池彌〻勝に乘り、村々を放火して陣を箱崎に進む。既に其告ありしかば、將軍御兄弟、三月二日辰の刻宗像を御立あり。行程五六里を過ぎて、未の刻計りに香椎に到り、大明神の鳥居の前を打通られしに、神官等、杉の枝を折持ちて來る中にも、淨衣著たる老翁の申しけるは、抑〻當社は昔神功皇后新羅御征伐あつて、御歸朝の砌、應神天皇を此所にて御誕生ましまし〳〵けるに、忽ち異香薰じ、其邊の椎木まで皆香しかりしより、則ち椎木を以て御神體に比し香椎宮と號し奉りぬ。又杉木を以て神寶と貴み申すなり。然れば此度御敵は篠の葉を印と仕るの間、味方は此杉の葉を御印となされ然るべしとて、兩御所より初め軍兵共の鎧の袖に、皆杉の葉を差しけり。將軍御悅ありて、其報答に白銀作の太刀を與へらる。されば軍散じて後、彼の老翁を尋問はれしかども、是を知る人なかりけり。神勅かと覺えて不思議なり。夫より赤坂といふ所に到りて御

多々良濱合戰

覽あるに、前は多々良濱とて、五十町の干潟あり。南に小川流れ、其南は箱崎とて四方一里の松原なり。赤坂と松原との間、砂の白き事、玉を敷けるに異ならず。斯くて菊池は其勢六萬餘騎と聞え、秋月備前守種貞・草野次郎大夫永久・星野黑木問注所を先陣に進ませ、小川を越えて、北向に松原を後に當てゝ陣を張る。太平記大全には、菊池勢一萬六千、同評書には、菊池勢三萬餘人とあり。將軍の御陣には、高尾張守師泰・宇都宮彈正少弼氏貞・島津上總四郎氏久・千葉大隅守胤貞・大友千世松丸、大手の先陣を蒙りて三百餘騎、多々良濱を前に當てゝ南向に陣を取れば、新少貳賴尙は手勢五百餘騎、皆馬より下り立ち東手を支へたり。將軍の御勢都合千騎には過ぎざりけり。太平記大全には、二萬千八百六人。同評書には、二萬八千人とあり。將軍其日の御裝束には、妙惠入道が進らせたりし赤地の錦の直垂に、唐綾縅の御鎧、御太刀は御重代の大はゞ、重籐の弓に上矢をさゝる。御馬は黑糟毛、昨日宗像の大宮司が進上申せし駿馬なり。源家相傳の小袖と申せし御鎧は、熱田大宮司之を著る。御舍弟左馬督の裝束には、是も妙惠が進らせたる赤地の錦の直垂に、紫革縅の物具、篠作といひける重代の太刀、重籐の弓に上矢をさゝれ、同じく宗像が進らせたる栗

毛なる馬にぞ召したりける。されば當家戰場の御出立に樣々の祕說あり。御先祖賴義將軍・義家朝臣、奧州十二年の合戰に、暗夜雪中自ら手を碎き戰ひ給ひしに、亂合ひの時必ず過あるべしと、淸原の武則が計らひにて、大將に七印とて七つの印を付奉る。是れ源家の武具の祕說なれば容易く知る人なし。今は七つまではなかりしかども、其例に任せられ、荒々武具に懸けられけり。將軍宣ひけるは、遠國へ下向して珍しき敵に駈合はせ、今は最期の合戰なるぞ。必ず面々未練の軍して、西國の輩に笑はれ候な。先づ督殿一陣に進み給へ。尊氏は後陣に控へて、合戰の雌雄を見合せ、入れ替つて闘ふべしと下知ありしかば、直義朝臣承り候とて、則ち二引兩の御旗を進め給ふ。太宰少貳賴尙は、黃綴の腹卷に同じ毛の妻取りたる袖付けて之を著る。此袖と申すは先祖武藤小次郎資賴、文治五年奧攻に賴朝公より給はりたる少貳重代の鎧の袖なり。甲の緖をしめ、小長刀を拔き持ちて黑鮫なる馬に乘り、唯〻一騎兩御所の御所へ參りて申しけるは、敵は大勢と見えて候へども、皆國々の假武者にて候へば、竟には味方に馳せ付き申すべし。菊池計りはよも三百餘騎

には過ぎ候まじ。賴尙唯今御前にて一命を投げなば、凶徒は忽ち風前の塵なるべし。早御旗をと進め申す。其體天晴とぞ見えし。曾我左衞門尉師祐は、器量人に勝れ。今度の下向にも、歩（かち）にて一歩も後れず御供しけるが、其日の出立には、練貫の小袖の上に赤綴胴丸の菱の板より切落されしを著、四尺餘りの大太刀二振佩いて、白木の弓の大きなるに征矢二三十亂差（みだれざし）に取差し、甲の緒をしめ、直義の馬の前に立つたり。其骨柄、人に變はりてぞ見えし。御旗の下には仁木四郎次郎義長、宗像大宮司が直義朝臣へ進らせたる黃絨の鎧を下し給はりて是を著、栗毛なる馬に乘り眞前にぞ進みたる。兩陣間近くなりしかば、菊池が先陣の兵三萬餘騎、少貳が支へたる東の手さきより鬨を作りて喚きて懸る。少貳五百餘騎、太鼓を早め射手を進めて、一矢射違ふると均しく瞳と亂合ふ。折節北風烈しく砂を吹立てしかば、菊池が勢は黑煙の中にぞ見えたりける。時に直義の兵共、横合に懸りて打戰ふ。其中に曾我左衞門尉は、敵の馬に乘移り押へて首を搔き、鴾毛なる馬の逞きを乘取りて、直義朝臣の前へ參りて分捕見參に入れ、師祐こそ能き馬を得て候へ。今は千騎にも

向ひ候べしとて、又敵中へ駈けて入る。誠に其體一騎當千なり。仁木四郎は元より馬に乘りたれば、一番に割つて入りて多くの敵を切落し、血かはになりて打戰ふ。斯くて直義の軍、勝に乘り大勢の敵を追立て、松原を追過ぎ、博多の津沖の濱まで攻め付けたり。斯かる處に菊池武敏、味方の引くには目を懸けず、己が手勢三百餘騎取返し、火を散らし相戰ふに、直義の軍兵忽ち打負けて、松原内外東の迦を二手になりて引退く。直義も此時既に討たれ給ふかと見えたる處に、少貳が家人杉原平四郎と窪能登守經廣、直義の命に代りて討死す。直義是を見給ひて、旗差旗を能くさせと下知せられ、後陣の將軍へ御使を以て申遣されけるは、唯今某は御命に代りて討死仕るぞ。將軍は此陣を以て長門·周防の方へ押渡らせ給ひ、御心長くせさせ給ひて、御本意を遂げらるべし。是を直義が僅に御覽あれと、錦の直垂の右の袖を切つて、將軍にぞ遣されける。是を見て兵共、皆我先にと御馬の前に駈塞る。菊池武敏、此體を見、軍は早打勝ちぬるぞ。懸れ殿原と錦の御旗を眞前に靡し、哆いて松原の北の迦に討つて出で、小川を駈け渡さむと打混す處に、直義の先陣肥前

國千葉大隅守が旗差唯〻一人、月に星の旗を一番に進め、川へ颯と打入る。時に菊池が軍兵、少し猶豫して見えける處に、後陣より將軍、白旗を靡かし、退く味方を引立て鬨を作つて馳向はる。是に力を得、少貳賴尙直義朝臣に向つて、時分は能く候ぞ。駈けさせ給へと相進む。督殿、元より拔き持たれし太刀を打振り、馬の足を出さむとし給ふ。是を見て皆其命に代らむと、前後にあり。中にも義長・師祐、猶眞前にぞ進んだり。少貳家人饗場彈正左衞門は、赤革の片白の鎧を著、鴇毛なる馬に乘り、爰こそ殿の討死の所にて候へと、主の賴尙を勵し川へ颯と打入れたり。饗場が子息、黑革の鎧を著、黑き馬に乘りたりしが、父に續いて打渡り、敵中へ駈け入り散散に相戰ひ、父子ともに手を負ひたり。是を見て少貳を初め、山鹿次郎賴行・仁木四郎次郎義長・曾我左衞門尉師祐・千葉大隅守胤貞・大友・立花次郎貞載・松浦鴨打彥六增以下、饗場討たすな。續けやと悉く川を駈け渡し、菊池と合戰す。菊池・秋月・阿蘇・草野・星野・黑木問注所入り亂れて戰ひしが、終に討負けて、城越前守・赤星六郎兵衞・八代刑部丞・左森六彌太・山形新五郎・岩野日向守・下田彥七以下宗徒の輩、三十

菊池敗れて筑後に退却

阿蘇大宮司戰死

七人討死し、大將の武敏、痛手を蒙りしかば、相戰ふに事叶はず、筑後國へ引退き黒木の城に取り籠る。 秋月備前守は太宰府まで落ちたりしが、直義朝臣の軍兵共の頻に慕ふに返合はせ、一族廿餘人、皆一所にて討死す。 阿蘇の大宮司は、兄弟三人郎從二百人本國へ志し、肥前國小城山を越えし處に、千葉大隅守が所領の鄕民共、雲霞の如く集りて、落人通さじと取籠むる。阿蘇が兵、是を防いで山上より大石を餘多落し掛け、打破りて通らむとす。 地下人、事ともせず、千鳥がけに石を除け大宮司と相戰ふ。 大宮司が者共、皆鬪ひ勞れてければ百六十餘人矢場(やには)に討たれ、大將大宮司八郎惟直・同弟次郎太夫惟成(ある書に光直と)一所に討死す。 其弟惟澄も二ヶ所疵を蒙りしが、當の敵十四人切伏せ、慕ふ者を追ひ拂ひ、兄の死骸を舁せて辛々(からく)肥後へ歸りぬ。 斯くて直義朝臣は、少貳を召具せられ、北ぐる敵を追々太宰府へ討ち入れらる。 將軍尊氏卿は勝鬨を執行ひ、箱崎へ御陣を召しけり。 爰に於て八幡宮の司官〔祠カ〕等、傅き(かしづ)申す事大方ならず。 尊氏卿仰せられけるは、幸に當社は我が家の氏神なれば社參すべし。 但し奉幣の義は合戰の觸穢其憚ありと、御行水あつて箱崎八幡へ社參せら

尊氏妙惠の亡靈を弔ふ

れ、廻廊の前より伏し拜み給ひ、則ち吉良殿の進らせられし四目結作の白太刀を奉納あり。扨御寄附の地あるべしとて、文章の爲め古き文書共を召されし中に、昔鎮西八郎源爲朝、三事の爲に、九州在國の時、當社を信仰し一所の地を寄せられける其狀あり。尊氏卿、是を披見せられ、昔より眞に當家の守護神たり。されば爲朝程なく洛に歸り、其佳名を天下に顯し、弓箭の道に於ては又上越す者もなく、名譽を當代に貽し畢んぬ。尊氏、爲朝が先例を模して、凶徒悉く退治せしめ、不日上洛すべき事疑なしと、神前に向ひ良暫く伏し拜み給ふ。翌くれば三月三日、太宰府より直義朝臣、少貳が一族武藤豐前次郎を御使にて、昨日の合戰勝利の義を賀し申さる。扨尊氏卿も、同日午の刻太宰府へ御陣を移され、原山の一坊に入らせ給ふ。此時、妙惠入道が最期の振舞子供一族共が死樣、御心閑に尋ね聞召され、兩御前ともに御愁歎淺らす。斯くて妙惠が亡魂を御弔ひあり。彼の菩提の爲に、當國小田の郷を以て、安養院へ寄附せられ。又御諷誦を上げられし。其文にいふ。

敬白　請諷誦事　　三寶衆僧御布施

右志者、妙惠禪定門幽靈、建武第三仲呂晦日、依レ與ニ義兵一相ニ代尊氏一令ニ天亡一畢。因レ茲弟子毎憶ニ彼恩一思ニ其志一、所下拭ニ哀淚一催中悲歎上也。就レ中幽靈平生之時、有ニ契約旨一、然間、迎ニ初七日之忌辰一所レ鳴ニ三箇之逸韻一也。加レ之、爲下毎日佛料所上寄ニ永代僧食一村一畢。然者聖靈酬ニ此追修一證ニ九品之果位一、可レ救ニ六趣之類一。仍諷誦所レ唱如レ件。

建武三年三月六日　　弟子源朝臣尊氏

とぞ書かれける。

北肥戰誌卷之一終

北肥戰誌　卷之二

菊池攻并將軍御歸洛の事

斯くて尊氏公、太宰府へ御陣を居ゑられ、御敵御退治の評定區々なり。中にも少貳賴尙を御前へ召され、九國の侍共を招かれけるに、我れ先にと馳せ參る。將軍、さらば先づ菊池掃部助武敏が、筑後國黑木の城にありけるを攻めらるべしと、同三月十三日、上野左馬助賴兼を大將にて、軍兵を差向けらる。同十七日、筑後國人等末安又三郎兼親以下、上野に馳加はり黑木に押寄す。菊池防戰叶ひ難く、當城を去りて豐後國へ引退き、玖珠の城に入る。然る間、同廿三日、一色右馬入道々猷・戶次豐前太郎賴時・同名四郎入道を豐後へ差向けらる。此勢玖珠へ發向して、三日三夜攻め戰ふ。時に肥前國三浦深堀孫太入道が一族、道猷に屬して戰功あり。菊池、爰を

も沒落し、一色以下、太宰府へ歸りぬ。將軍重ねて仁木義長を大將にて、神代・高木・松浦黨を肥後國へ差向けられ、菊池が居城を攻めさせらる。此勢一萬五千餘騎、既に筑後を歷て肥後へ討つて入る。時に菊池左京大夫武重は、未だ在京して國に居らず。弟武敏は他國にあり。其一方をも防ぐべき阿蘇大宮司惟澄は、小國の城にありしかども、先日多々良濱の引足に深手を負ひ、甲斐々々しき下知叶はず、一日一日戰ひて腹搔切り死す。菊池が留守の輩、力を落し、武重が幼息武光が今年九歲になりしを具して、男女悉く山林に逃隱れ、家人内河彥五郞、纔五百騎を以て、八代の城に楯籠りぬ。仁木・神代・高木・松浦押寄せて攻め戰ふに、内河も身命を捨てゝ之を防ぐ。斯かる處に、味方にてありける薩州の島津・伊佐左京進宗久心變りして、寄手に加はりしかば、内河防ぐに力盡き、一方を討ち破りて行方を知らず、十日計りに落城し、四十日の中に肥後國靜謐す。斯くて將軍所々の軍に討ち勝ち給ひ、九州の兵馳付き申す事、引も切らず。御勢雲霞の如く、太宰府に充滿しけり。扨御上洛に於ては、兵糧の爲め秋を待たれて然るべきか。又諸國の味方の力を落さぬ前に、上洛

尊氏上洛

を急がるべきかと、詮議區々なりける處に、備前國三石城に殘し置かれし尾張新右衞門尉と、播磨の赤松入道が許より、急ぎ御上洛あるべき由、得平因幡守を以て言上せしかば、さらば頓て上洛せらるべしと御議定あり。豫ねて又諸寺・諸社へ御運を開かれむがため其御祈禱あり。肥前國甲手東妙寺の長老へ給はりし尊氏朝臣の御書にいふ、

祈禱事、今度之義兵早速遂二本意一、將亦天下太平、子孫繁榮武運長久、之所レ可レ抽二精誠一之狀如レ件。

建武三年三月十三日　在判

東妙寺長老

既に將軍御上洛の事決定しありしかば、一色右馬入道道獻を鎭西の總管領とし、佐竹源藏人氏義を侍所と定められ、小俣少輔太郎入道道剩を以て監代とし、仁木四郎次郎義長・一色上野左馬助頼兼兩人を、大將軍と定められ、松浦黨其外國人等を差副へられ、筑前國姪濱の城に殘置かれ、肥前國にも綾部・千栗に兩城を構へて、軍兵

を入置き、所々の宮方を押へられ、四月三日に尊氏卿・直義朝臣、太宰府を進發あれば、九國の大友・少貳・千葉・宇都宮は、博多の津より纜を解き、兩御所は長門の府中に少時逗留まし〳〵、當所より御乘船あり。御船の船頭は赤間ヶ關の孫七。是は元暦の昔、九郎判官義經の壇浦の合戰に乘られし、當國櫛崎の船十二艘の船頭の子孫なり。吉例なりとて、當座に右京允に召成され、將軍御兄弟甚だ御悅ありけり。守護人厚東入道が計らひ申せし處なり。五月五日の夕に、備後の鞆に著船あり。爰にて評定を加へられ、將軍は御船、直義朝臣は陸地より海陸と御分れありて、同月十日、一同に鞆を御立ち攻め登り給ふ。少貳賴尙は一族家人を引率し、其勢二千餘騎、直義朝臣の先陣を申し給はり陸を打つ。斯くて海陸の大勢、同月廿五日の晨、攝州兵庫和田の御崎に著陣し、官軍の大將新田左中將義貞・楠河内判官正成と相戰ふ。此時少貳は濱の手へ向つて進みしに、一族の中武藤對馬小次郎・同豐前次郎、ともに若武者なりけるが、二騎眞前に乘出し、敵味方の目を驚かし勝負を決す。對馬小次郎は、川原毛の馬に黄糸の鎧を著たり。豐前次郎は、黑き馬に幌掛けたり。丘と船と

宮軍敗北

楠正成討死

の間、僅に一町計りにて、棧敷前の見物なり。又宗刑部大輔賴茂も、和田御崎に敵陣を駈け破り、千葉大隅守胤貞軍忠を抽んで、各〻將軍の御感に預りぬ。然るに宮軍終に利を失ひ、楠判官討死し、新田殿は敗北あり。將軍頓て入洛ましく〵ぬ。斯くて少貳は、都鄙の戰功莫大なりしかば、同九月下旬、歸國の御暇申せしに、將軍御兄弟御氣色斜ならず、上御所尊氏卿なり。よりは、賴尙を御前に召され、錦の直垂に御盃を添へて下し給はり、下御所直義朝臣なり。よりは、御祕藏の黃河原毛の御馬を給はり、兄弟筑前へ歸國す。是より九州大に亂れ、一日も未だ靜ならず。

世良親王八代へ御下向所々軍の事

尊氏卿、筑紫の軍に討ち勝ち給ひ、宮方力を失ふの由、帝都へ聞え、菊池左京大夫武重、我が國の事心元なく思ひて、其旨新田殿を以て奏聞を遂げしかば、則ち御暇を給はりぬ。武重さらば急ぎ罷下るべしと、禁裏の守護には伯父肥前守武幸・猶子次郎武季に、一族十二人・家人五百餘騎を差副へて、新田殿に預置き、其身は五千餘人

菊池武重肥後に下向

を具し、尼ヶ崎より船に乘り、夜を日に繼ぎて本國肥後へ下着し、先づ少貳六郎が當國の守護職を、將軍より給はつて府にありけるを、不日に追落し、菊池の本城へ大友の一族吉弘日向守を入置かれしも、一日の中に攻め落して、日向守が首を切り掛け、夫より島津左京進久濤（前名宗久。）が八代の城にありけるをも、亦一戰の中に追落し、國中を押すに手に立つ者あらず。斯かりしかば、肥後國十餘日の中に武重に歸伏して大勢と成り、筑後國へ討ち出でけるに、將軍は早御上洛ありしかば、千年川を隔てゝ陣を取り、少貳・大友が者共仁木右馬助（四郎次郎なり。）義長以下の武家方と相戰ふ。是を聞きて菊池掃部助武敏も、同じき建武三年丙子七月に、筑後國に蜂起して、兄武重に力を合す。斯かりし程に、仁木義長、筑後に在陣し、太宰筑後守頼泰と勢を一つにして、菊池武敏が陣取りたる豐福原へ押寄せ相戰ふ。時に肥前國の御家人龍造寺又六入道條善が一族等、仁木に馳せ加はりて軍功あり。菊池勝に乘り、義長・頼泰引退く。同八月、一色入道々猷・仁木右馬助・筑後國の者共相集りて勢を合せ、同國生葉郡阿彌陀ヶ峯の宮方と合戰す。此時、仁木が從軍に安富深江民部丞泰重、大

松浦肥前守在所に下向

征西將軍の宮御下向

手の城戸に押寄せ戰功を抽んづ。同晦日、一色入道・仁木右馬助、又豊福原へ押寄せ菊池と挑戰するに、雌雄兩陣にありて勝負なし。時に大村平太入道妙意・後藤辻五郎次郎貞明・有馬五郎成澄・深江民部丞泰重・安德小太郎成重・深江三郎五郎時廣・奈良田次郎入道辨西・尻田孫太郎入道々意以下、一色・仁木が手に屬して相戰ふ。□□□□□頃日、平戸の松浦肥前守貞、京都を去りて在所へ下る。此者は嵯峨天皇の苗裔にて、渡邊丹波守綱には十一代の孫なり。當時勅命に應じて在京せしとぞ聞えし。此時、一色入道より小俣入道へ下知せし書にいふ、

松浦肥前守貞、落二下鎭西一之由有二其聞一。早相二觸國々軍勢等一、可レ誅二伐之一之狀如レ件。

七月廿九日　　沙彌在判

少輔太郎入道殿

翌くる建武四年丁丑の三月、南帝第六宮世良親王、征西將軍の號を賜はりて、肥後國八代へ御下向あり。是は菊池左京大夫武重が九州の宮方共へ力を付けむ爲め、豫ねて芳野の皇居へ奏して、深く願ひ奉るに依つてなり。御供の公卿には、洞院の大

供奉の公卿并に將士

納言・春日の中納言・北畠源中納言・花山院少將・竹林院中將・坊城三位・高辻三位・日野左大辨・土御門左少辨・北畠三位中將・葉室左衞門督・中院侍從・九條大外記・同主水正。新田の一族には、山名播磨守・岩松相模守・桃井右京亮・世良田大膳大夫・田中彈正少弼・江田丹後守・堀口孫三郎・里見新藏人・一井又三郎・鳥山左衞門佐・大島兵庫助・堤宮內少輔・岩松左馬助・名和伯耆判官・同次郎・同修理亮・宇都宮三河守・加藤大夫判官・結城右馬助・熊谷民部大夫〔輔〕以下八代へ下向あり。斯かりしかば、菊池の一門はいふに及ばず、宮方の輩限なく悅び、急ぎ新造に御所を飾(しつら)ひ入れ奉り、是を守護す。

越前金ヶ崎城沒落

今月六日、新田義貞以下宮方の籠りし越前國金ヶ崎の城沒落の由、管領の方へ御敎書來る。此事に依りて、一色入道より肥・筑・豐の武家方共へ觸廻しぬる書にいふ。

越前國金ヶ崎城凶徒、今月六日卯時、義貞以下悉加二誅伐一燒二拂城郭一由事、同七日御敎書今日到來、案文遣レ之。可レ被レ存二其旨一。仍執達如レ件。

建武四年三月廿日　　沙彌

深堀孫太郎入道殿（肥前深堀の住人なり。）

末安土之丸殿筑後福岡村の住人なり。

同五年延元三年なり。戊寅正月、菊池左京大夫武重、一萬餘崎を引率し、八代を立ちて筑後に來り、同名掃部助武敏が在陣せしに參會し、其勢を合せて石垣山鷹取城へ楯籠る。一色入道是を聞いて、さらば彼等を退治すべしと、姪の濱の城を出で筑後國へ發向し、先づ瀨高庄に陣を取り、筑前・肥前兩國の勢を以て、三月三日石垣山の城を攻む。されども菊池落城せず。時に管領の勢の中に、松浦等多く討死す。同十四日、道猷下知を加へ、今河藏人大夫賴貞・本名佐竹源藏人氏義。小俣太郎入道々剩を以て、高尾山の敵を攻めさする。此時も亦松浦黨の中に、壹岐の石丸彌五郞近・同野田五郞安以下百五十討人たれて、寄手叶はず引退く。時に討死・手負の交名を記し、管領へ披露す。其狀にいふ、

一、注進

建武五年三月、於筑後國石垣山菊池武重以下凶徒合戰之時、松浦一黨等討死手負分捕幷平合戰交名之事、

北畠顯家討死

一、飯田彦次郎定、討死。　一、得富彦七家政、討死。　一、中村彌三郎、頭に疵を被る。

一、飯田次郎抑、討死。　一、西浦源次郎持、　一、寒水井彦次郎、討死。

一、宇久馬場七郎勇、討死。　一、河崎五郎□、討死。　一、同旗指五郎四郎、右こらり骨に射疵。

一、同中間左近太郎、討死。　一、巖本八郎守、討死。　一、得末又太郎、討死。

一、赤木堤彦六昵、討死。　一、菖蒲隈本五郎、討死。　一、常葉左衞門次郎重高、討死。

一、隈辻十郎入道覺乘代子息八郎長、討死。　一、波多馬渡五郎長、討死。

一、長田又次郎、左の股に射疵。　一、赤木又次郎入道源榮、　一、大塚三郎、右ひざ口に射疵。

一、鴨打二〔俣カ〕股彌五郎階、分捕。　一、鴨打彦六増、射疵。　一、鴨打石田彦三郎、左肩先に射疵。

以下略之

總合貳百五十四人

百五十八人之内
一、壹岐野田五郎安、此人は三日合戰の後、屬ニ今河殿御手ニ高尾山攻之時。

百五十八人之内
一、壹岐石丸彌五郎近、同前。

以下略之

今年の春、宮方一方の大將北畠源中納言顯家、美濃國に於て高・佐々木・細川以下と合戰あり。討死せらるゝ由、二月三日の御教書幷に太宰府の施行到來に依りて、一

色入道より武家方の輩へ觸れ送りし書にいふ、

陸奧前國司顯家卿。以下凶徒、於下津赤坂被誅伐由之事、今月三日御敎書御施行如斯。可被得其意候。執〔達脫カ〕如件。

建武五年二月廿五日　　沙彌在判

今村孫三郎殿肥前小城郡今村の住人なり。

同九月、豐後の大友刑部大輔氏時、筑後へ來り高良山に陣を取り、菊池武重以下宮方共の籠りたる生葉郡妙見城星野が居城なり。を攻めむとす。菊池是を聞き、其不意を討つべしと、高良山へ取懸けて大友と相戰ふ。大友利を失ひ、竹井本庄へ引退く。此時既に討たるべかりしを、一族の戶次兵部少輔氏季と新開宮内少輔踏み留り、氏時に代りて討死す。斯くて菊池は、筑後國所々の軍に打勝ちて肥後へ歸國す。斯かりし程に、管領一色入道、頓て筑後へ打越え高良山に陣を取る。

一色入道高良山に陣す

同十月初旬、一色入道其身は高良山に在陣し、佐竹源藏人氏義を肥後へ差向く。佐竹今月二日、筑後を立ちて、同七日八代へ討ち入り、宮の御所を圍み攻む。されど

も軍利あらずして引返す。此時石動彦三郎資成が申狀にいふ、

爲ニ菊池武重以下凶徒誅伐一、大將軍依ニ御發一向ニ筑後國一、肥前國御家人石動彦三郎、最前馳ニ參瀨高御在庄（所カ）之間、致ニ宿直一警ニ固之一。剩爲レ退ニ治菊池城一、去二日就レ被レ差ニ遣佐竹源藏人一屬ニ彼手一、迄ニ同十五日差戻之期一致ニ警固一候訖。次高良山御座同御歸陣之間、御供仕候了。以ニ此旨一可レ有ニ御披露一候。恐惶謹言。

建武五年十一月一日　菅原資成

進上御奉行所

翌くる暦應二年己卯正月十九日、菊池八郎・宇土三郎惠良小次郎、筑後國へ出張して、武家の管領と戰はむとす。頃日一色入道は、高良山の陣を拂つて筑前へ歸陣し、監代小俣入道筑後にあり。彼の敵と戰ふべきため、當國の守護代幷に士卒等、其外肥前國基肆・養父・三根・神崎四郡の兵を相催し、所々に於て合戰す。此時、石動彦三郎・山浦の定惠坊・原口十郎三郎等、武家を背きて宮方となる。所領に就いて恨ある故なり。則ち山浦・原口が跡を以て、深堀が一族高木三郎五郎時廣に給ふ。此時九

九州の武士宮方と武家方との二派にわかる

宮方

州の武士、宮方・武家方と分れて打戰ふ。〔相カ〕其雙方の輩を凡記するに、宮方には先づ肥後の菊池はいふに及ばず、城・赤星・加屋・鹿子木・隈部・宇土・阿蘇大宮司・八代・合志・河尻三郎・小代太郎。薩摩國には島津一族に、和泉三郎忠平・樺山兵部少輔・町田又三郎・北郷伊豆守、其外澁谷・谷山。大隅に牛糞。日向國に土持・齋所・庄・高山。筑後に松田・溝口・草野次郎大夫永久・星野孫六・黑木大膳大夫・西牟田彌次郎・諸富平三・南條・蒲池・深澤。肥前國に松浦平戶肥前守貞・藤津太郎・後藤又次郎光明・多比良・神代・宇木・西鄕、其外汜々の輩は記すに限なし。

〔武家方

又武家方へ從ふ者には、筑前に少貳の一族は申すに及ばず、宗像大宮司氏重・原田孫四郎種貞・三原三郎・山鹿次郎・澁谷下總守。對馬に宗刑部丞賴茂。壹岐に日高。肥前國に千葉刑部大輔胤泰・上松浦の波多・鴨打・佐志・神田・草野豐前守秀永、下松浦の松浦丹後守直・今富彥三郎・伊佐早次郎入道・開田佐渡次郎・空閑民部入道・彼杵大村太郎家直・後藤六郎朝明・同掃部允經明・同辻五郎次郎貞明・橘薩摩守彌次郎公經・有馬彥五郎入道連惠・安富深江民部丞泰重・同岩崎孫三郎泰治・深堀高木三郎五郎時廣・同高濱又五郎清綱・松浦伊萬里彌次郎充・同志

佐左近將監有・同庄山又次郎・白石次郎入道・高木伯耆太郎家直・綾部四郎次郎幸繼・今村孫三郎高弘・龍造寺孫六郎家種・多久小太郎宗國・馬渡諸王丸・南里源次郎家有・於保五郎宗喜・成松兵庫助章景・青木源四郎義勝・阿自岐孫四郎能康・山田孫四郎重村・後藤・中野五郎明・橘薩摩彌五郎玆雄。筑後に武藤・引地新左衞門高經・酒見虎熊丸・末安十々丸。豐前に城井・長野。豐後に大友の一族、其外臼杵美作守・佐伯山城三郎・加來彌四郎・朽網六郎・新開・齋藤・丹下・宇留島・宇佐の一族。薩摩國に島津總領上總入道々鑑が子供上總三郎師久・同四郎氏久・從弟島津下野守忠親。日向に伊東大和守祐煕、此の外末々の輩は記すに及ばず。

暦應四年辛巳に、宮方又筑後の生葉に討ち出づ。時に肥前國西尻田孫太郎軍忠あり。武家方に屬す。

翌くる康永元年壬午四月中旬、宮方菊池對馬守武茂・同肥後五郎武敎・大城七郎貞資以下蜂起して、中院侍從を大將として筑後へ來り、竹井の城に栖籠る。玆に因りて管領一色入道、五月初、竹井に押寄せ之を攻む。七月二日落城す。中院殿・菊池

以下風雨に紛れ出奔せらる。

康永三年甲申三月、大友刑部大輔氏時の弟近江次郎貞順、一族に離れ宮方となり、筑後生葉の城に旗を揚ぐ。一色入道馳せ向ひて之を攻む。六月半落城。同年の秋、宮方又生葉に蜂起す。一色重ねて發向し、九月初旬・同月廿日・廿一日、牛鳴山・阿彌陀ケ峯・宇河城、其外所々に於て合戰、宮方退散す。同十月又蜂起す。

翌くる貞和元年乙酉二月、菊池掃部助武敏・同名對馬守武茂・名和伯耆守長生・堀口孫三郎貞直・宇都宮三河守貞泰以下の宮方、筑後國へ又現形し、一色入道と打〔相カ〕戰ふ。

今年薩州に於て、島津の一族に北郷・町田・和泉・樺山、宮方にあつて旗を揚げ、平佐の河内に城を構へ、總領の島津陸奥守氏久と合戰す。菊池武重是を聞きて、北郷・町田を援はむ爲め、肥後國を發す。北郷伊豆守、菊池を迎へ其勢を合せ、猶籠城して島津と相戰ふ。

貞和四年戊子、一色宮内少輔直氏、將軍の命を蒙りて博多へ下向す。同名入道々獻に合力の爲に差下さるゝ所なり。直氏下著して、四月十六日軍兵を牽し、筑後へ發

足利直冬西國に下る

向して三池に於て、宮方の輩と相戰ひしが、利を得ず博多へ歸る。斯かりし程に、敵續いて博多へ攻め來る由風聞あり。茲に因りて同十九日、直氏廻文を以て、武家方の諸士を相催し、彼の敵を防がむとす。

同年十月十九日、直氏勢を率し、肥後國南の郡の宮方退治として發向す。時に肥前國の御家人深堀三郎五郎以下早速參陣す。

足利右兵衞佐直冬西國下り所々軍の事

貞和五年己丑、足利右兵衞佐直冬鎭西へ下向せらる。此人は將軍の御長男なり。然れども當腹の御子息にあらずして、繼母の讒により父子義絕あつて、洛の住居もなり難く、頃日は中國に徘徊せられしを、高武藏守師直、母上と談合し殺し申すべき由聞えしに付き、中國をも出奔あり。九月十三日、肥後國へ入られし處に、詫間別當太郎守直・河尻肥後守幸俊、是を馳走申し、近隣の者共多く從ひ奉りしかば、右兵衞佐殿、頓て詫間・河尻を以て宇都宮大和守が將軍の監代にて居たりしを、不日に追落

直冬少貳賴尙の壻となる

九州二島の武士宮方武家方佐殿方の三に分る

所々の合戰

され。夫より其威次第に輝き、太宰の少貳賴尙が壻になられ、同月下旬太宰府へ入り來らる。さても彼の賴尙は、將軍へ對して小大の忠臣なりしに、何すれぞ今不孝の名を立て、父子義絕ありし此直冬を、壻には取りて傅き申しけるかと、其謂を尋ね聞くに、將軍先年、九州へ沈落ありし時、少貳一家の者共大忠を盡し、目出たく御歸洛まし〳〵ぬ。然るに其御跡へ、一色入道を管領として殘置かれし處に、此入道軍忠に募り、少貳の一門を一向なきが如く振舞ひけるを、賴尙兼ねて遺恨に思ひしかども、腹を押へて堪へし折節、佐殿の下向ありし程に、彼の人を壻に取りなば、父子義絕せし人とはいひながら、正しく將軍の御子なれば、近國の武士從屬申すべし。さらば其威を借りて、一色入道に思ひ知らせばやと思案せしとぞ聞えし。然るに右衞門佐殿の威勢彌〻強く、既に大勢とならる。是より九州二島の武士、宮方・武家方・佐殿方と三つに分れて相戰ふ。翌くる觀應元年庚寅の春、直冬朝臣西肥前を征せむと杵島郡へ討ち入らる。塚崎の地頭後藤兵庫允光明、一族を率して相從ひ、三月廿三日、橘薩摩彌次郎公經が鹽見城を攻めらる。此時一色入道も、當郡の敵退

佐方に隨ふ面々

治として發向しけるに、塚崎の後藤掃部允經明・須古の白石彌次郎・精岳の藤津藤太郎、最前に城を去つて道獻に降參す。然るに三月下旬、道獻と直冬朝臣、宮裾原に於て〔相カ〕打戰はれ、四月七日同所にて又合戰し、道獻軍利あらずして、松浦に到りて陣を取る。同五月直冬朝臣、筑後國の宮方退治として、少貳賴尙を大將にて軍兵を差向けらる。時に肥前國の御家人等、直冬に隨ふ輩には、松浦に伊萬里武末九郎兵衛授、杵島に後藤兵庫允光明、彼杵に深堀高濱彌五郎政綱、高來に安富深江民部丞泰重、佐賀に龍造寺民部大輔家平、於保・高木の一族、三根に惠利近江守氏利・矢俣酉心房超成・板部越守成基、養父に立石源三郎・茂野長經を初め、筑後に諸富平三郎入道、早速參陣す。賴尙、其勢を率して筑後へ赴き、敵城を攻めて相戰ふ。宮方の輩に五條修理權大夫・菅原良氏・同良遠、其外菊池掃部助武敏・同名對馬守武茂・提・岩松・宇都宮以下の者共、生葉・三池・山門に群りて賴尙と合戰す。此時、直冬の從兵に龍造寺民部大輔家平、河北の軍に戰功あり。斯くて少貳賴尙、筑後の軍に勝利を得、肥後國〔左カ〕へ打通り、鹿子木大炊助が城を攻めけるに、龍造寺の一族家平を初め、子息九郎次

直冬諸氏を褒賞す

郎家貞・同名孫六郎家種・同孫九郎家顯・同左衞門次郎入道善智・子息孫次郎家政・同名孫三郎季利・同彦次郎家忠以下、進んで大城戸を打破り、家平疵を蒙る。されども鹿子木本城を持ちて破られず。寄手若干討たるゝに依りて、賴尙軍を引揚げ、太宰府へ歸陣す。此時直冬、軍兵共の戰功を賞せられ、龍造寺民部大輔家平に、本領の上肥後國野原・西郷・增永の地頭職を給はり、安富深江民部丞泰重へ、同國天草郷の内木砥河内浦天草大夫十郎が跡一所・周防國仁保庄平子彦三郎が跡一所、七月十七日に加恩せらる。同八月初、筑後國酒見虎熊丸一族を催し、直冬退治として、探題一色に屬し軍忠あり。同月廿八日、直冬朝臣、今川五郎直貞を軍奉行にて、筑前國月隈城を攻めらる。九月に及び落城せず。此時、深堀高濱彌五郎政綱分捕す。大村中尾次郎・吉田彦次郎等證人なり。仍りて政綱に、肥前國養父郡の内十五町を給はる。其外、波佐見六郎俊平・同次郎吉平も直冬に屬して軍忠を盡す故、俊平には伊開彦四郎が跡一所、吉平には山口彦五郎が跡、神崎庄馬郡十五町を給はりぬ。(但し此月隈合戰の事、明くる觀應二年九月廿八日ともいふ。)同九月、直冬朝臣、武家方誅伐の爲め、吉見四郎以下の軍兵を筑

後國へ差向けられ、同月六日巳刻、吉見、筑後國府へ討ち出づ。武家の新管領一色宮内少輔直氏、筑後の御家人に下知し、此敵を追拂はむと、今川掃部助賴貞を差遣し、吉見と相戰ふ。時に末安右馬三郎兼有、今川に屬して軍功を抽んづ。

菊池武重薩州に出陣諸城を攻落す

觀應二年卯四月、菊池左京大夫武重、薩州に於て和泉の城を攻め落す。島津陸奥守氏久・河上孫三郎賴久、人質を出し菊池に降參。武重、薩州に在陣する事、今年まで六箇年、城を落す事十六箇城なり。武重、島津が人質を携へて肥後へ歸る。其頃又武重が嫡男肥後守武光も、城越前守・赤星掃部助を先陣として、河尻肥後守幸俊が城を攻む。幸俊、此時一色入道に屬し、肥前の高來に在陣して、無勢なる故防ぐ事を得ず、早速落城す。

直冬等敗軍

同年九月、菊池肥後守武光・城・赤星・三池・星野・宇都宮筑後へ討ち出で、直冬朝臣・少貳賴尙と合戰す。直冬以下太宰府へ陣を引いて菊池と挑戰し、又打負けられ寶滿が岳へ取登らる。菊池續いて〔相カ〕打戰ひしに、直冬・賴尙爰をも攻め落され、討死・手負數を知らず。時に直冬の從兵に、肥前國の住人成松兵庫助章景討死す。同十月、少

貳菊池と相戰ひ彌〻利を失ひ、一族太宰彈正少弼經藤を人質に出しぬ。菊池は少貳が降參を免し、彼の人質を連れて肥後へ歸陣す。

同十二月中旬、下松浦黨の者共、直冬に與力し、肥前の小城へ攻め來る。千葉次郎胤泰が家人等、岩部・金原・中村を先とし、其外今村孫三郎高弘以下出で向ひて、松浦黨と合戰し、是を追退く。一色入道、其軍忠を賞して、同廿日各〻證判を得さす。

同三年壬辰二月、探題一色入道々獻、肥前國高來・彼杵の宮方退治として、小俣少輔七郎氏連を差遣す。氏連先づ彼杵へ打越え、矢上の城に入りて、高來の味方を相催すに、有馬・安富以下の武家方共、閏二月十六日千々岩の津へ馳せ參る。氏連、同十七日千々岩へ陣を移し、野井の城を攻め、又西郷次郎が杉峯城をも攻めて合戰し、三月二日、神代へ打通るの時、西郷出合ひて相戰ふの間、安富深江孫三郎泰治等、散散合戰し、西郷を追拂ひ、氏連暫く國府へ歸陣す。（國府とは小城をいひ、府中とは佐嘉をいふ。）同年の四月、當探題道獻入道の一族一色右馬權頭賴行、九州の守護代として下向す。是れは頃日鎭西の逆徒靜ならざる由、京都に聞えて差下さるゝ所なり。賴行直に太宰府に下

著して、先づ道獻入道へ面談し、右兵衛佐直冬幷に宮方の輩退治の事を議して、同六月、小俣七郎氏連を重ねて彼杵・高來へ差遣す。氏連、彼杵へ赴き、大村丹後守家徳・深堀五郎左衛門時勝・伊佐早次郎入道・矢上の何某を相語らひ、高來郡へ押渡り、多比良・神代・島原と合戰し、同八月に多比良七郎重通が城を攻落し、重通を誅伐す。外城を打破るの時、安富新三郎疵を蒙りけり。夫より氏連、西郷次郎が杉峯城をも攻破りて、井牟田を燒拂ひ、宇木の城に押寄せ、爰をも不日に攻落しぬ。斯くて高來・彼杵の兩郡、大半靜謐せしかば、氏連先づ國府へ歸陣せしむ。此頃探題守護職の兵軍以下、肥前國府に在陣して、神社佛閣を破却し燒き失ふ。仍りて征西將軍宮より、當國の宮方共へ令旨を下され、滅却の神社皆御再あ興り。宮、肥後の八代に御坐す。

直冬朝臣沒落の事

同年十一月、守護代一色右馬頭賴行、肥前の國府を立ち太宰府へ歸府する故、小俣七郎より、同月十八日、廻文を以て武家方の輩を相催し、筑前へ討つて入る。時に直

足利直冬没落

冬・賴尙、同廿四日觀世音寺に支へて相戰ふに、直冬以下打負けて浦の城へ引籠らる。守護代續いて是を攻めしに、城中防戰叶ひ難く、直冬・賴尙既に自殺すべかりし處に、菊池肥後守武光、其頃高良山に在陣し、此事を聞付け、急ぎ浦の城へ後詰して、守護代の勢を追拂ひ、直冬・賴尙等の命を助けぬ。是れは去年十月、寶滿の軍に賴尙、菊池に降參して、向後に於ては一味申すべきの由、契約せしに依りてなり。然るに賴尙、菊池に危急を援はれ悅の餘り、熊野の牛王に血をすゝぎて、子孫七代まで異心あるまじと起請文を出しぬ。されば延文四年の秋、賴尙、菊池を背きて大保原に於て合戰の時、菊池が旗の蟬本に一紙の起請を結付け、彼の賴尙に見せけるは、此時の神文なり。然るに直冬朝臣は、股肱と賴まれたる賴尙は宮方となり、骨肉を分けられし父將軍には、既に怨敵となりて、身の置所もなく、微服潜行して石見國へ落行かれ、三隅入道を賴み蟄居ありけり。今年觀應三年に文和と改元す。

北肥戰誌卷之二終

北肥戰誌 卷之三

九州所々軍の事

文和二年癸巳正月上旬、探題一色入道々猷に、同名宮内少輔直氏。其職を代りて新探題となり、九州の事を司る。同名右馬權頭賴行、彌〻守護代たり。此時、畠山治部大輔義熈・同子息民部少輔滿熈も、鎭西靜謐の仰を蒙りて下向せしめ、薩摩・大隅・日向の間に在國し、宮方の輩と合戰止む時なし。其頃守護代賴行は、肥前國千栗船隈城にありけるを、同月廿二日、菊池・赤星、不意に押寄せ相戰ふ。賴行城を守りて落されず。菊池、千栗の陣を引退き筑前へ打越え、少貳賴尙と一つになり、探題を攻めむと議す。探題・守護代ともに是を聞いて、さらば此方より發して戰ふべしと、肥前の千栗を打立ち筑前へ赴き、針摺原に於て、少貳菊池が兩勢對陣し、二月二日合

針摺原合戰

日奈田山合戰

戰す。少貳が家人には、武藤・朝日・窪・饗場以下、前後に相備へ、菊池が郎從には城・赤星・城野・鹿子木等左右に討ち探題と戰ふに、菊池が從兵の中、安富民部丞、軍忠を抽んで首二つ分捕し、探題の方にも小家彥三郎家高、高名して右の足に疵を蒙る。斯くて探題の軍、利を失ひ針摺原を引退き、肥前に歸り綾部の城に入らる。同年三月三日、探題一色入道・同宮內少輔、軍兵を率して筑前國へ發向ありて、博多に陣を取り、飯盛の城を取構へらる。其半ばに肥前の宮方共、探題の留守を計りて領內を亂妨する故、探題、早速肥前へ歸り、綾部の城に入りて、東肥前の領內を治め、神崎橫大路の城を築かせて、同年七月二日、菊池・赤星以下の宮方共、綾部城へ押寄せ、探題直氏と相戰ふ。綾部新次郎幸次、探題に屬して軍忠あり。菊池利あらず。筑前へ打越え、探題の新城飯盛に取懸け、是を攻む。此事注進あるに依りて、探題急ぎ筑前へ赴き、先づ日奈田山に陣を取らる。同十一月、宮方の輩、日奈田山へ押寄せ探題と相戰ふ。探題の軍敗れて筑前を退き、肥前の小城の城に入らる。文和三年甲午、探題一色宮內少輔直氏、小城を立ちて神崎仁比山の城に入らる。千葉介・龍造寺、

探題に相隨ふ。九月十九日、菊池・赤星仁比山へ取懸け相戰ふに、菊池討負け引退く。探題の兵、勝に乘り田手波古川に追詰め敵を討つ。夫より探題、千栗に陣を移さる。此時敵、姪の濱・飯盛の兩城を攻むるの由注進ありしかば、直氏是を拂はむため、則ち千栗を發して筑前へ討入らんと、背振山を越えらる。敵、彼の兩城を攻めし事は、元より菊池が謀にて、當山の絕頂に伏兵を置きたり。探題、是を知らずのさのさと通りし時、件の伏兵二萬餘騎、左右より鬨の聲を揚ぐ。探題の軍兵僅五千餘騎、鬨を合せて入り亂れ散々に相戰ふ。

背振山合戰

此肥前國背振山と申すは、昔性空上人の、眞如の月の前に心を澄し、天竺無熱池の水を此頂に汲んで、人間業障の垢の衣を濯がれし日本六辨財、其一數の靈地にて、高嶺雲に聳え、半腰に雷飛び、深谷に霧渦卷きて、渺々たる荒野なるに、敵味方凡そ三萬人、鬨の聲・矢叫の音夥し。爰に菊池が陣中より赤星と名乘り、其勢二千計り、探題の旗下を目懸けて切懸る。是を見て探題の手の者、其外宗像・江上・龍造寺・千葉・綾部・村田・立石以下、赤星を支へて相戰ふ。又菊池が陣より草野右近將監秀永と、上松浦の者共一同に懸りて、赤星に力

を合す。時に探題の家人遠江國奥山太郎、生年廿三と名乘り、白綾の母衣懸けて、筑前の宗像七騎と打連れ戰ひしが、痛手餘多蒙り、今は是までなりと、松浦草野右近察監が陣へ駈入り、松浦源八と引組み、合期叶はず生捕となり、深手にてありしかば、頓て其陣中にして死にけり。斯くて探題終に打勝たれ、菊池勢退散し、直氏恙なく筑前に赴き、姪の濱・飯盛の敵をも拂つて、先づ爰に在城せらる。

探題一色直氏歸洛の事

探題直氏敗れて姪の濱城に歸る

文和四年乙未、延文と改元す。今年少貳筑後守賴尙、筑前國早良郡岩門の城に楯籠る。依りて探題直氏・原田孫四郎種貞以下、彼の城を圍み攻む。少貳堅固に守りて相戰ふ。探題、利を得ずして姪の濱城へ引返さる。

延文二丁酉十月、少貳賴尙、岩門城を持つ事なり難きに依つて、筑後へ打越え、宇都宮壹岐守貞久・草野長門守守永・星野孫六入道を相語らひ、星野が生葉の城に入りて旗を揚ぐ。探題直氏・大友刑部大輔氏時等、生葉へ押寄せ相戰ふ。少貳以下の城兵、

直氏菊池に破られて歸京す

防ぐ事を得ず城を落去り、草野が發心嶽の城に入りぬ。延文三年戊戌正月、菊池肥後守武光、宮方の輩共に力を付くべしと、肥後國を發して筑後へ討入り、高良山に陣を取り、近國の味方を相催し、探題直氏・大友氏時と所所に於て合戰す。少貳も亦發心嶽の城を出で、三原に於て探題と防戰しけり。然るに今年の春より秋に至りて、探題度々の軍に、菊池が爲め大に利を失ひ、其威輕くなりしかば、敗軍の將は再び謀らずと身を謙退して、程なく歸京せられけり。斯かりしかは、大友氏時も宮方に降參す。然る處に、四月晦日、將軍尊氏卿薨去ありしに依つて、彌〻九州の武家方共力を落しけるとなり。

同年十一月、菊池肥後守武光、筑後の陣を返し、畠山治部大輔義熙の、日向國六笠の城にありけるを退治すべしと、日州へ發向す。宮の御勢に世良田大膳大夫・桃井右京亮・山名播磨守、其外山鹿・小代以下肥後國の輩、菊池に馳加はる。日向國は九州の東南にして、高山峨々と峙ち平地少く道狹し。菊池、彼の嶮難を四日四夜に打つて日州に著陣す。大友刑部大輔氏時も、頃日宮方に降參する故、菊池が催促に應じ

菊池武光六笠三俣の兩城を攻落す

て、此度出陣せしが、降參は一旦の和義なる故、忽ち飜りて中途より引返し、高崎の城に楯籠る。宇都宮大和守元綱も、大友に同心し、大河を前に當てゝ菊池が通路を相遮る。菊池、是を事ともせず、畠山父子の籠りたる六笠・三俣の兩城を、十一月十一日より攻め懸けて、日夜十餘日に攻め落し、首を切る事三百餘なり。畠山父子、辛々遁れて落ち去りぬ。菊池、兩城を攻め落し、同名肥前守武安・宗右馬助尙茂を六笠に居置き、名和伯耆七郎長重・河尻九郎を三俣の城に籠めて、日州を治め、己れは肥後に歸陣す。大友も宇都宮も、菊池が勇氣に呑まれ出で戰ふ事もなし。

菊池氏光妙見城を陷る

延文四年己亥二月、菊池肥後守武光、去年十一月日州合戰の時、大友氏時が中途より飜りて、高崎の城に引籠りしを憎しと思ひし故、是を攻め干して誅伐すべしと、肥後國を立つて、先づ筑後まで出張し、宮方の味方を相催し、上筑後を打通りて豐後へ赴きしを、大友の一族戶次丹後守賴時、妙見城にありて菊池が通るを支へむとす。武光是を聞いて、筑後國の味方一萬餘騎を以て、妙見城を一日の中に攻め落し、扨筑前の少貳へ使を立てゝ、高崎表へ出勢の事をいひ遣す。然るに少貳賴尙、菊池に

心を返し、其返答にも能はず、剩へ武光が使を切る。菊池腹を立てしかども是に拘らず、筑後國の宮方草野・星野・宇都宮・黒木・河崎・南條・溝口を催し加へ、大友退治の爲め、豐後國へ討入りて、先づ玖珠の城に入り、大友が高崎の城を攻めむとす。其跡に阿蘇大宮司・詫間別當等、菊池に對して逆心を企て、大友と引合せ、肥後國小國の城に楯籠り、九つの要害を構へたり。然る間、宮の御勢江田丹後守・鳥山左衞門佐・山名播磨守・桃井右京亮以下の輩、島津・山鹿・小代を相語らひ、阿蘇・詫間を攻めて、九つの要害の內、五箇所は攻め落しぬ。此時菊池武光は、豐後の玖珠の城にあり。

太宰少貳再び武家方となる事

太宰筑後守賴尙は、去る建武の合戰後、將軍家へ對して隨分の忠臣なりしかども、探題一色入道が權勢に募り、世に人もなく振舞ひしを猜み、旣に怨敵となりて、去る貞和年中、直冬朝臣を壻に取り、其後見として將軍へ向ひ、却つて弓を引き、近年は又直冬をも捨てて宮家となり、彼是の不義重過せしに依りて、諸人の嘲り大方な

少貳頼光また武家方となる

頼尚菊池に破らる

らず。頼尚も流石面目なく思ひて、今又先非を改め、將軍家へ對し忠節を勵まし、御赦免を蒙りて世の人口をも止めむと思立ち、去る二月、菊池が使を斬り義絶せしめ、同三月上旬に、筑前・肥前兩國の輩を相催すに、其勢一萬餘騎に及びぬ。頼尚是を從へて、筑後國の糸田へ討つて出で、菊池が豐後に赴きし其後を相遮り、子息早良次郎直資・從弟太宰中務少輔頼泰は、高良山に陣を張る。菊池は玖珠の城にありて、此由を聞き、其奴原一々追拂へと勢を分けて、高崎の城をば押へ置き、其身は筑後へ押來り、少貳が糸田の陣へ押寄せ相戰ふに、少貳打負けて太宰府へ引退き、高良山に陣したる直資・頼泰も一戰に及ばず、粥田の庄（秋月）へ陣を引く。斯くて菊池老臣共へ談合しけるは、容易く少貳は追散らしぬ。此儘豐後へ打越え大友をや攻めむ。又太宰府へ赴き少貳をや誅伐せむ。さなくば先づ八代へ歸りて、阿蘇・詫間をや追討すべきと意見を問ふ。城・赤星以下申して曰く、敵國の長陣は士卒の勞れなり。先づ〳〵御歸陣ありて、阿蘇・詫間等の凶徒を御退治あれと申す。武光、此議に同じ、筑後國を立つて八代へ歸り、宮の御勢と一つになり、小國表へ出張して、阿蘇・

阿蘇詫間菊池に破らる

詫間と相戰ひ、四箇所の要害一々攻め落すに、詫間は、五月廿八日軍門に降り、阿蘇大宮司は、同廿九日城を去りて落ち失せぬ。武光、小國の凶徒を退治し、諸軍を引いて程なく八代へ歸り入りけり。

大保原合戰の事

征西將軍の宮太宰府に御進發

同年の夏、太宰少貳賴尙、新將軍義詮公へ先非を悔い、御敎書を申し給はつて、九州二島を觸れ廻すに、武家方の士卒馳せ集り、其勢既に六萬餘騎になりて、大友と勢を合せ肥後へ發向し、征西將軍の宮を初め奉り、菊池一家を退治すべしと議す。此事、八代へ聞え、菊池入道宗愚家の子共を集めて、此度子息武光以下の者、軍旅揣きに依りて、南北の敵を閣き、軍を半ばに三國に歸り入りし故、今少貳大友大敵となりて蜂起すと、大に怒り悔みし程に、武光を初め、城・赤星・城野・八代、是を無念に思ひ、急ぎ彼の敵を退治して、宗愚に面を灌がんと評定し、同年七月下旬、征西將軍の宮一品式部卿世良親王を上將軍として、御馬を太宰府へ進め奉る。御供の月卿雲客

供奉の月卿雲客

には、洞院大納言・春日中納言・北畠源中納言・花山院少將・竹林院中將・土御門少將・坊城三位・高辻三位・北畠三位・日野左少辨・土御門右少辨・葉室左衞門督・中院侍從・九條大外記・同主水正、各〻甲冑を帶し、御馬の前後に相從はる。　武家には、山名播磨守・岩松相模守・桃井右京亮・世良田大膳大夫・田中彈正大弼・江田丹後守・同太郎・堀口孫三郎・里見新藏人・一井又三郎・鳥山左衞門佐・大島兵庫助・堤宮內少輔・岩松左馬助・名和伯耆判官長生・同次郎長顯・同修理亮長高・兒島備後入道義淸・宇都宮三河守貞久・同刑部丞・同左近大夫將監・結城右馬助・加藤大夫判官・熊谷民部大輔直氏・同子息豐後次郎。

宮方の武將

其外肥後國には、軍將菊池肥後守武光・同名右金吾武盛・同次郎武信・同孫三郎武明・同對馬守武茂・城越前守武顯・赤星掃部助武貫・八代大隅守・太宰彈正少弼・權少貳經藤・子息彥次郎親資・河尻新次郎・加屋兵部大輔・國府伯耆次郎・甲斐民部少輔（本名鹿子木八郎。）・小代太郎入道・隈部・宇同・城野・合志・大津山・大野式部大輔・派讃岐守。　筑後國には松田丹波守・同出雲守・溝口丹後守・草野長門守・星野孫六入道・黑木大膳大夫・西牟田讃岐守・諸富平三入道・南條河內守・御厨孫四郎・蒲池山城入道・深澤刑部允・

武家の武將

土肥九郎・本間次郎。肥前國には千葉刑部大輔胤泰・後藤又次郎光明・大村丹後入道・安富深江民部允泰重・同岩崎孫三郎泰治・白河參河入道・鹿島刑部大輔・稻佐治部大輔。薩摩國には島津河上又三郎親久・澁谷三河守・同修理亮・谷山右馬助。大隅には牛糞越前守。日向には伊東大和守・土持十郎・宮崎掃部助・齊〔齋カ〕所兵庫允・高山民部大輔・絹脇播磨守・河野邊四郎・波多野次郎見參（マヽ）・岡三河守・庄美作守。豐後には堤安藝權守家資・太田筑前入道、是等を宗徒の者として、肥後・肥前・筑後・豐後・薩摩・大隅・日向の軍兵都合五萬餘騎、筑後國へ著陣し、高良山を本陣に構へ、柳坂耳納山へ充滿し、太宰府へ討ち入らむとす。先陣は菊池肥後守武光なり。此事太宰府へ聞えしかば、太宰少貳筑後守賴尙、さらば中途へ出で向つて戰ふべしと、急ぎ太宰府を打出づ。相從ふ輩には、嫡子新少貳・早良次郎直資・從弟太宰中務大輔賴泰・武藤出雲・左近將監賴充・同名新左衞門經高・子息平井豐前守尙經・同名藏人大夫資貞・肥後刑部左衞門泰親・山井孫三郎經親・朝日但馬將監資眞・馬場肥前守經貞・堀三郎經勢・西上總介資氏・武藏對馬次郎賴資・同與次郎資俊・饗場左近將監、其外他家には、原田彈正少弼種

貞・秋月修理亮種高・同名式部大輔・山鹿麻生筑前守・本間左近次郎・相馬小太郎・土屋孫三郎・木幡左近將監・西河兵庫助・澁谷播磨守・松田彈正少弼・草壁六郎・宗像大宮司。肥前國には高木肥前守家直・國分彥次郎季朝・龍造寺左近將監家經・於保彌五郎弼宗・今村孫三郎利廣・江上太郎大夫・綾部修理亮・藤木三郎、松浦黨には松浦丹後守勝・平戶肥前守直・志佐左近將監有・同修理亮・有田出雲守持・山代彌三郎弘・伊萬里源三郎貞・波多太郎武・鴨打彥六增・吉井三郎・留主左衞門・草野駿河守永・安田平左衞門藏人・（以上松浦。）後藤次郎俊明・同名掃部允經明・有馬藤三郎房澄・深堀左衞門尉勝。筑後國には三原大和守・酒見豐後守武敎・末安右馬三郎兼秀。薩州には島津上總大夫判官師久・舍弟陸奧守氏久。大隅には牛糞刑部大夫。豐後には詫間別當太郎・高田筑前々司・高橋兵衞次郎・幡田又三郎以下都合六萬餘騎、上筑後大保原へ著陣す。大友刑部大夫氏時も、少貳へ力を合せんと軍兵を催し打出づ。此手には子息孫太郎氏繼・一族戶次丹後守賴時・同大神式部大輔直時・畠山治部大輔滿熈、其外新開右馬允・臼杵美作守・佐伯山城守・古庄左近大夫將監・吉弘左衞門尉・一萬田右京亮・志賀又六郎・吉岡左

近兵衞・田原孫八郎・齋藤式部大輔・利根・松岡・久保・德永・朽網・橋爪・大津留以下、豐前には城井豐前守・長野隱岐入道等相集りて貳萬餘騎、筑後の生葉に出で、星野孫六入道が城代を追出し、少貳賴尙に參會して、是も大保原に陣を取る。頃は延文四年七月下旬、九州の軍兵敵味方、都合拾三萬六千餘騎、高良山・耳納山・鰺坂・生葉へ打群り、山野民屋に充滿して、宮の御陣には日月の御旗を靡し、其下に引兩・鷹羽・月星・帆掛船・藤丸・三つ巴・菴に木瓜十文字、其餘家々の旗共を立てたり。少貳・大友が陣にも、一勢々々備を立て、馬の駈場を見繕ふ。

斯くて八月朔日、（太平記には七月十九日。或書には七月廿四日とあり。兩說非なり。）宮方の軍將菊池肥後守武光、光づ己が手勢を率し馬を乘り出し、密に千年川の深淺を巡見して、足場を見計り川を渡し、少貳が先勢武藤出雲左近將監・山鹿麻生筑前守・原田彈正・秋月修理亮が鰺坂へ、陣を進め切り掛る。武藤以下、如何思ひけむ。一戰にも及ばず大保原へ引退く。斯くて將軍の宮、御馬を大保原へ進めらる。先陣は菊池孫三郎武明・島津河上又三郎親久・牛糞越前守以下、肥後・薩摩・大隅の兵八千餘騎。二陣は肥後守武光手勢五千餘騎。

大保原合戰

三陣は肥前の兵千葉刑部大輔・大村丹後入道・後藤又次郎・安富民部丞・同孫三郎・白石三河守以下。四陣は豐後・筑後の兵草野長門守守永・星野孫六入道・黒木大膳大夫・南條河内守以下。五陣は宮の御旗本月卿雲客源家の貴族、其外名和・結城・熊谷・加藤・宇都宮なり。彼此都合五萬餘騎、大保原へ押寄せ、同六日の夜半計り、菊池武光選兵を勝つて三百餘騎、城越前守を前驅として、少貳が陣を夜討にしけり。陣中大に騷動し、同士討する事、算を亂して八百餘人切死す。此時、少貳勢の中に、肥前國の住人深堀五郎左衞門時勝自身太刀打し、親類志波原次郎兵衞明成・若黨岡本孫三郎疵を被る。同一族深堀高木左近將監貞房も、早良次郎直資の手に屬して戰功を勵す。（此夜軍、太平記には八月十六日夜とあり。）然るに菊池は、手合の軍に討ち勝つて是に機を得。翌くれば七日の黎明、宮方の先陣菊池孫三郎・河上・牛糞・伊東・土持・宮崎掃部允一戰を始めたり。少貳が前驅原田・秋月・三原・神代相懸（あひがかり）に懸りて戰ひしが、打負けて二陣に備へたる新少貳早良次郎直資が陣へ崩れ懸る。直資齒をかみて大音聲を揚げ、蓬し方方、直資爰にありと眞前に進んで戰ひしが、込み重なる敵の爲め、直資忽ち討死し、

菊池武明討死す

末安馬次郎兼秀以下宗徒の兵三十八、立所に討たれたり。菊池、彌〻勝に乘り、總軍五萬餘騎、太鼓を早め射手を進め、日月の御旗の蟬本に、一紙の書文を結付けて眞前に靡す。是は一年、少貳、浦の城にて菊池に援（すく）はれ、子孫七代に至るも、異心あるまじき由書きたる起請文なり。扱武光、手勢五千を以て松浦黨於保彌五郎・龍造寺左近將監・高木肥前守以下の肥前勢と入亂れ、少時戰ひて追崩す。少貳の陣よりも、朝日但馬將監資直（マヽ）・平井豐前守尙經七千餘騎、菊池孫三郎武明が陣へ割つて入る。武明、態と敵に中を割らせ、是を陰に閉ぢて圍めば、資直・尙經、又陽に開いて討戰ふ。斯かる處に、豐後勢の中より戶次式部大輔直時、横合に來りて、武明が後を擊つ。武明、前後に敵を請け散々に戰ひしが、討負けて終に討死しけり。是を見て一族十一人、手の者百餘人引組み〳〵皆討死す。されども河上・牛糞・伊東・肝附（付カ）・土持・宮崎、其外薩摩・日向・大隅の者共は、猶少貳が陣に切つて懸り、東西南北に馳け立つる。少貳方より宗徒の一族等、是を支へて相戰ひしが、利を失ひて敗走し、武藤藏人大夫資貞・朝日但馬將監資直・武藤新左衞門經高・窪能登太郎・戶次大神式部大輔直時を

菊池武信討死す

始め、百餘人討死しけり。爰に又、菊池肥前次郎武信・赤星掃部助武貫、其勢合せて二千五百餘騎、今日少貳が軍奉行太宰中務大輔賴泰が陣へ切懸る。賴泰是を見て己が一萬餘騎と、同名賴充が勢を一つに合せ、菊池・赤星を眞中に取籠む。武信・武貫過ぎし頃、菊池入道に恥しめられ、此合戰に一定討死と思儲けしかば、少しも騷がず、賴泰・賴充が大勢と駈合はせ、火を散らして相戰ひ、赤星は平井豐前守と引組み刺違へて死し、武信も退かず切死に死す。其外、宮の御勢には、結城右馬助・宇都宮刑部丞・加屋兵部大輔・庄美作守・加藤大夫判官・太田入道・熊谷民部大輔・同豐後守・太宰彥次郎・松田丹後守・同出羽守・御厨十郎・國分次郎・安富岩崎孫三郎以下討死し、少貳方にも武藤左近將監賴充・菊池孫三郎が老臣岡上左馬助生捕れぬ。敵味方拾三萬餘騎、さしもに廣き大保原野(今三里原といふなり。)に、今朝卯刻より入り亂れ、終日の軍止まず、宮の軍將菊池肥後守武光、今日の出立には、緋縅の鎧に白綾の幌懸けて、薩摩出の黑き馬に紅の厚總掛けて乘りたり。一族共が討死するを見て、武光が死すべき時刻、早爰なるべしと、少貳が陣へ閑に馬を進む。將軍の宮、是を御覽じ、汝死なば我

宮方の公卿討死の面々

武家方敗北

も死し、汝生きなば我も亦生きむと、御馬を陣頭に進めらる。宮の御風情を見奉り、月卿雲客・源家の輩、名和・兒島の者共、我れ先にと御馬の前に進みて、沼のありしを駈渡し敵陣へ相近づく。少貳・大友・松浦・高木・島津・澁谷・神代以下、是を上將軍よと見知つて、大勢一所に駈集り、千變萬化して相戰ふ。其軍烈しくして、將軍の宮わたがみの迦(はづれ)、御肩先に、太刀疵を負はせられ、既に討たれ給ふかと見えければ、宮の御命に代らむと、春日大納言・洞院權大納言・北畠中納言・日野左少辨・土御門右少辨・坊城三位・北畠三位・花山院四位少將・高辻三位・葉室左衞門督、其外武家には、世良田大膳大夫・桃井右京亮・江田丹後守・岩松相模守・山名播磨守・堀口孫三郎・里見新藏人、敵中へ駈入り〳〵皆討死あり。是迄も菊池武光は、肌撓ます機〔氣カ〕勞れず、少貳が總軍と入亂れ、死狂と見えて相戰ふ。此時少貳勢に、棟(むね)と賴みたる原田・山鹿・宗・松浦悉く討死し、殘黨八方へ散亂しければ、賴尙竟に討負けて、北を指して敗北す。大友・島津の者共は、沼の間の細道を追越し追返され、數箇度戰ひしか、少貳が引くを見て、是も同じく引退く。此體を見、菊池勢の中より城・伊東・星野・黑木・鹿島・白石以下進み

世良親王御負傷

て敵の北ぐるを追ふ。大友氏時は、僅に百騎計りにて、其夜豐前路に懸り本國に歸りぬ。少貳は筑前へ退き寶滿嶽に取登る。然るに菊池は、軍には討勝ちしかども、宮深手を負はせられ、宗徒の人々をも多く討たせ、己が一族も討死し、其身も首に二箇所深手を蒙り、進退叶はざりしかば、續いて敵をも攻めず、大保原より三里南にあたつて草野に陣を移し、宮の御手疵を療養し、手負を扶けて息を休む。

宮方討死

宮方討死
雲客十二人　新田一族七人　菊池一族八人
同家人三十九人　國々武士六十八人　其下甲兵四百七十餘人
歩卒二千九百三十餘人　手負數を知らず
都合三千百三十餘人

武家方討死

武家方討死
少貳一族廿八人　國々武士甲兵三千餘人　歩卒二萬六千人
手負一萬八千人　大友一族十二人　同家人七十人

其下甲兵四百五十八　　步卒五千七十八　　手負數を知らず
都合三萬四千六百四十餘人
雙方討死合三萬八千百七十餘人
延文四年己亥八月六日・七日

右高良山の社僧正行坊善信、九州を廻り、出陣の武士の假名・實名を尋ね記し、且つ討死の人數を過去帳に載せ、菩提を弔ふ所なり。

同月十八日、征西將軍宮二品式部卿太宰帥世良親王、御手疵御療養相叶はず、終に筑後國柳坂に於て薨去せらる。御歳三十七なり。造龍院殿と謚す。草野の千光寺に葬り奉る。菊池は悲歎の涙を押へて八代へ歸陣しけり。

菊池肥前守武安肥前國に來る事

去ぬる延文四年、大保原合戰の後、少貳は太宰府へ引入り、菊池は八代へ歸りて、雙方少時出合はず。然るに同五年庚子正月、菊地肥前守武安といふ者、筑後國を經て

肥前へ攻め入り、神崎仁比山城に城郭を構へ、是を居城とし、其外本告・姉川・牟田・神田江・横大路・松崎・菩提寺等の城々へ人數を入置き、己は軍兵を引具して、佐嘉・小城・松浦へ討ち入りて、江上・高木・龍造寺・千葉介・松浦黨以下の武家方共と相戰ひ、同二月に、高木肥前守家直が春日甘南備城を攻め落す。玆に因つて武安退治の爲め、六月十九日、少貳の代官宗刑部丞經茂肥前に來り、先づ菊池が一族同名次郎良武があ

菊池武安肥前に出陣合戰

りつる横大路松崎の城に向ふの處に、菊池肥前又次郎武興、仁比山の城より討つて出で、經茂と其間十四五町を隔て陣を取る。斯くて經茂、七月七日、佐嘉・小城・彼杵等の味方へ廻文を以て人數を催すに、龍造寺左近將監家經・深堀高木左近將監貞房等の武家方馳せ加はりて、菊池と合戰す。經茂利あらずして太宰府へ引歸る。又六月廿九日、彼杵一揆中相集まりて、菊池勢の籠りたる本告・牟田・松崎の兩城を攻めて合戰し、其後姉川・牟田の城を攻め、日々野伏と打戰ふ。〔相カ〕斯くて肥前守武安は、當國の軍を先づ差置き、所々の要害に良武・武興以下の一族を殘して、肥後國へ打歸りぬ。

菊池武安肥後に歸陣

新征西將軍の宮太宰府御發向の事

島津師久氏久菊池に降る

懷良親王太宰府へ御發向

延文六年辛丑、改元ありて康安と號す。今年八代の新將軍の宮懷良親王、既に御年十六歲。故宮の第三年に當りぬ。然るに菊池一族集りて亡君の御孝養に、今年の秋は是非に付きて太宰府へ押寄せ、少貳の者共と十死一生の合戰すべしと談合す。名和・兒島・宇都宮ともに尤と同ず。武光申しけるは、さらば先づ薩州島津の一族半ば宮方にて、半ばは武家に從ひしを退治し、後を心易くし國を打出つべしと、四月下旬薩摩へ討ち入り、島津上總介師久・同陸奥守氏久と相戰ふに、島津兄弟打負けて菊池へ降參す。武光、案の中に薩州を平治し、日州に赴き伊東大和守・土持十郞・宮崎掃部允に參會し、同名肥前守武安を日州へ殘置き、薩摩・日向・大隅を押へて、其身は急ぎ肥後へ歸る。扨同七月初旬、武光を初め兒島備後入道義清・名和伯耆守判官長生兄弟・宇都宮壹岐守・河上・伊東・城野・八代・城・赤星以下、新將軍宮の御供し、少貳頼尙が一類追討の爲め太宰府に向ふ。肥後・薩摩・日向・大隅四箇國の兵都合三萬餘騎

なり。又菊池右衞門大夫武勝は、軍兵を分けて八千餘騎、大友を退治の爲め豐後へ發向す。斯くて宮の御勢、筑後を打通り太宰府に攻め近づく。少貳を是を防がむと、其身は宰府にありて、寶滿嶽を要害に構へ、天拜嶽に出城を構へ、一の瀨・岩門・飯盛・細峯・荒平五箇所の城に軍兵を籠め置き、太宰府の援と定めて宮の御勢を待懸くる。

少貳賴尙敗北

大友刑部大輔氏時も太宰府に來り、少貳と一つになる。斯くて宮の先陣菊池武光・名和長生進んで、筑前國長鳥山に陣を取る。時に少貳次郞賴國・松浦黨の者共、飯盛・細峯の城より出で、名和・菊池を防戰しけるが、一戰に打負け、本陣へ引退き油山に取登る。八月六日、菊池續いて是を追拂ひ、同七日、將軍宮靑柳に御陣を移さる。菊池・名和・宇都宮・城・赤星・城野・八代を以て、大友刑部大夫氏時・太宰源孫次郞冬資・宗像大宮司氏直・城井常陸介・山鹿筑前守等と合戰し、不日に追落され、同八日、氏時・氏直・冬資以下が北くるを追うて、同國西鄕へ御發向。時に宗像大宮司は、己が蔦岳城へ逃籠り、大友は豐後へ歸國しけり。或はいふ、此時菊池、宗像が城を攻め落し大宮司を捕へ、多年の朝敵なりと罪を鳴して首を刎れけるとも、未だ詳ならず。同十六日、凶徒の殘黨城井・山鹿夫より宮の御勢、蘆屋鬼津に到り小野御在陣あり。

少武頼尙敗走

御退治の爲め、豊前國規矩郡へ守護代を差向けらる。此時肥前國彼杵一揆深堀五郎左衞門時勝等、守護代の手に相屬す。同十七日、將軍宮、長島山へ御陣を居ゑらる。時に菊池武光、勢を分けて城越前守武顯を大將とし、少貳の本城太宰府へ差向け、頼尙を攻めさす。彼の越前守は智謀深き者にて、博多の津に出家し居けるを、方便り賺し、財寶を與へて謀の旨をいふ含め、太宰府の城中へ入れ、樣々の惡說をいはする程に、少貳の家人等、互に心を置きあひ一和せず。越前守、忍を以て其樣子を窺ひ知り、宰府の民家へ火を掛けたり。少貳が城中大に騷ぎ、我れ先にと落ち失せぬ。越前守押寄せ是を攻めけるに、不日に落去して、太宰少貳輔頼尙、城を去つて寶滿嶽へ取登り、後には豊後へ落行き、大友と一所に居けり。此時頼尙が舍弟武藤孫三郎頼賢は、肥後國の住人城野九郎に討たれ、同名越前守頼充は、城が家人に首を授けけり。是等を初めて少貳が侍六十餘人・雜兵六百餘人討死す。斯くて菊池は城越前守が計略にて、容易く少貳が太宰府の城を攻め落し、天拜嶽・飯盛等の殘黨をも退治して、博多・馬飼を過ぎて姪の濱に陣を取り、武家方の殘黨を誅伐するに、少貳一家山鹿・麻

生・原田・秋月・松浦黨、或は深山へ逃隱れ、或は海岸に身を寄せて、面を出す者もなく、筑前一國既に平均す。豐前へ差向けられし御勢も、城井・長野等を打從へ・規矩・田河兩郡靜謐す。又豐後へ向ひし菊池右衞門大夫武勝も、府内へ討ち入りしに、大友は其頃太宰府へ出陣しければ、其留主を征伐して、豐前國へ馳通り所々を切從へ、太宰府に來りて宮の御陣へ參る。此時武勝が軍功莫大なりとて、豐前守になさる。斯くて九州大半靜謐す。征西將軍宮は、其儘太宰府に御座を居ゑられぬ。今年も已に暮れて、翌くれば貞治と改元す。

九州大半靜謐す

探題氏經下向附長者原軍の事

少貳・大友、度々菊池に打負けて、宮方鎭西に蔓る由、京都へ聞え、將軍義詮公より足利修理大夫高經の次男斯波左京大夫氏經を、九州の探題になして差下さる。貞治元年壬寅九月、豐後國鶴崎の津に著船あり。折節菊池は、此頃少貳賴尙が豐後へ落去つて、大友と一所に居たるを退治すべしと、豐州に討ち入り、萬壽寺に陣してあ

斯波氏經九州探題に任ぜらる

りけるが、探題の下向を聞き、太宰府の宮の御座所心許なしとて、探題未だ著船なき前、九月十四日、萬壽寺の陣を拂うて筑前へ赴きぬ。斯くて氏經、鶴崎に著船の由、少貳・大友聞付けて大に悅び、急ぎ出向ひて面謁しけり。兩人ともに其頃入道して、少貳は梅溪と號し、大友は天祐と稱す。氏經下向の勢に乘じ、宮方の城を攻め落す事六箇所なり。扨氏經、軍兵を率し宮の御所太宰所へ押寄せらる。少貳入道梅溪・同子息源孫次郎冬資・大友孫太郎氏經以下探題に相屬し、山鹿・麻生・松浦（黨カ）等・宗像大宮司、爰かしこより馳集まりて、其勢都合一萬八千餘騎、筑前國へ討ち入りて、大日嶽・今出・上原・三井野等の所々に陣を取る。大友入道天祐も、探題の子息松王丸を介錯し、次男式部大輔親世・戸次右京進賴達等、其勢三千餘騎にて筑後國まで出張し、敵の通路を相遮る。斯くて菊池は、探題以下大勢攻め來る由を聞き、さらば中途に出向ひて戰ふべしと、宮の御供申して太宰府を打出づ。供奉の雲客には竹林院中納言・中院中將、武家には田中彈正少弼・岩松相模守・宇都宮三河守・名和伯耆判官・兒島備後入道・原田・秋月・千葉・大村・高木・後藤・有馬・安富、其外近國の宮方相集まり

長者原合戰

て都合六萬餘騎なり。菊池は先陣にて、同名豐前守・城越前守以下松浦の波多・福井合せて一萬四千餘騎、九月廿一日、或は九月廿七日、十月三日とも。長者原に陣を取る。探題左京大夫氏經も、太宰源孫次郎冬資・宗像大宮司・松浦黨の者共を先陣として、長者原へ討ち出でたり。中にも冬資・氏直・松浦黨等進んで一戰を相始む。菊池が前驅豐前守武勝・秋月・原田・波多・福井・鹿子木討負けて引退く。二陣の肥後守武光大に腹を立て、いひ甲斐なき先陣かな。いでさらば某代らむと、城越前守・八代左衞門佐を左右とし、其勢二千五百餘騎、一度に切懸り入亂れて相戰ふ。肥前國高來一揆、武光に屬して戰功を抽んで、安富民部大輔泰重分捕す。探題の方には、舍弟尾張六郎氏重を初め、藤田六郎・長野掃部允・新關荒五郎・山鹿・麻生・松浦黨・少貳の一族、命を際に戰ひしが、武藤對馬與次郎賓後・同對馬孫次郎・同筑後次郎以下二百餘人討たれて、合戰終に利を失ひ、探題氏經・大友・少貳立足もなく敗軍して、豐後國へ引退く。筑後に陣したる松王丸・大友入道も同陣を引きけり。斯くて菊池は、軍に討ち勝ちて大日嶽に陣を取り、宮の仰を承りて、九國・二島の兵を召し、豐後へ發向して、探題幷に大友・少

氏經敗軍

探題氏經等敗走

貳を誅伐せむと議す。斯かる處に、上松浦の敵蜂起する由、在國司筑前守が方より觸廻すに依りて、肥前國宮方共、同月廿五日、國司のありつる上松浦福井へ馳向ひ合力するの處、彼の逆徒退散の由風聞しければ、皆菊池が陣へ相集まる。然るに又松浦の者共蜂起して、鏡濱崎へ打寄する由相聞ゆるに依りて、十月五日、諸勢重ねて福井へ發向し、在國司と同心せしめ、一貴寺高嶽に相戰ひ敵を追拂ふ。其後、太宰孫次郎冬資・宗像大宮司以下の殘黨討ち出づるに依りて、十一月三日、菊池自ら香椎・大隈へ馳向ひ、同廿一日筵打へ發向して、逆徒を悉く追拂ひぬ。斯くて菊池は筑前の敵を討ち治めて、探題退治として同月廿四日、五萬五千餘騎を率し、筑前國を立つて、上筑後生葉を過ぎ豐後へ討ち入り、先づ玖珠城に入りて、同名豐前守・城越前守・赤星遠江守・八代左衛門佐を府內へ差向く。又肥後にありつる一族菊池對馬入道義順も、武光に力を合せむと、島津・伊東・左森・大嶽・山形・牛糞士持以下一萬三千人を相催し、日州梓越を歷て、是も豐後へ亂入す。斯かりし程に、探題氏經・大友・少貳、一戰にも及ばず府內を落ちて、探題と大友父子は高崎の城に取籠り、少貳入道は松岡

の城へ入り、其餘の者共は悉く臼杵の城へ北げ籠りけり。菊池、此の三つの城を攻めて、今年は爰に歳を越えぬ。

探題氏經沒落の事

翌くる貞治二年癸卯春に至り、菊池が軍兵共、高崎・松岡・臼杵三つの城を攻めて、日夜相戰ふ。然れども皆堅城にて容易く攻め落すべき樣もなし。斯かる處に菊池が嫡男左京亮武政、計略を以て少貳入道が籠りし松岡の城を一番に攻め潰し、首を斬る事若干なり。少貳入道梅溪は、城を去つて土佐國へ押渡る。斯かりし程に、同五月に菊池豊前守・赤星・城・八代以下、高崎の城を攻め落す。時に探題氏經は、城を去つて四國へ落ちられ、大友入道は生捕となり、其子氏經は探題と同じく四國へ渡りぬ。然るに菊池は大友入道天祐を捕へて、年來の朝敵なり。不便ながら首を刎ぬべしとて、則ち誅伐しけり。斯くて同六月、島津・伊東以下の輩、臼杵の城をも攻め落して、城兵廿四人が首を斬る。斯くて三つの城、皆落城に及び、大友・少貳或は誅せ

少貳梅溪土佐に逃る

探題氏經四國に沒落

大友天祐誅せらる

られ、或は落失す。探題斯波左京大夫氏經、賴む方なくなり果てゝ、其儘にて歸洛せむも、流石面目なしと四國にて遁世し、剃髮黑衣の身となりて、行方知れずなりにけり。菊池は頓て太宰府に馬を歸しぬ。是より鎭西十一州、悉く宮方に屬し、武家方の輩は息をつく者もなし。

義滿將軍に任ず

征西將軍宮海上軍の事

征西將軍宮海上御合戰

貞治六年丁未十二月七日、京都の將軍義詮公薨逝せられ、御子息春王丸殿、今年十歳にて征夷將軍の宣旨を蒙らせ給ひ、義滿と號せらる。斯樣の變に應じ、翌くる應安元年戊申正月、太宰府の征西將軍宮、上方の朝敵御退治の爲め、九州の軍兵七萬餘騎を召具せられ、太宰府を進發せられ御上洛まします。菊池・島津・伊東・原田・秋月・星野・草野・松浦黨千葉・大村以下御供す。中にも菊池肥後守は、豐後を打通り一族を殘置き、大友の一家を押へて、鶴崎の津より纜を解き、宮の御船を押出す。大友が長男利根孫太郎氏經是を聞付け、姫島・荒島に兵船を浮べ、菊池が船を待請けて散々

に射る。武光是を物ともせず長府へ押通り、厚東駿河守に會し談合して、海上を心易く乘らむと志しけるに、大内介義弘が家の子陶越前守、兵船五百餘艘を以て彥島に待懸け、菊池が船に取懸る。菊池・島津・伊東・松浦、是を防いで戰ひしかども、越前守が軍兵共、船軍に得たる者共なれば、宮方終に打負けて、兵船數十艘目の前に乘沈め、軍兵多く滄中に沒しぬ。斯かりし程に、宮の御上洛事叶はず、豐前國へ引返さる。然る處に大内介義弘、大軍にて攻來る由聞えしかば、負軍を仕つる味方の勝負、よも墓々しからじと、菊池下知を加へ、宮、太宰府へ引返さる。其後は大友兄弟、豐後に旗を揚げ、少貳入道、四國より肥後國へ歸り入りて、武家方又蔓りけり。

探題今川入道了俊下向の事

今川了俊九州探題に任ぜらる

應安四年辛亥の冬、新將軍義滿公より、今川伊豫守貞世入道了俊を九州の探題になして差下さる。十一月初旬、京を出で赤間ヶ關へ著船あり。然るに頃日、宮方の武士、豐・筑の津々浦々を知行して、武家方の者を陸に揚げず、一向往來を差塞ぎしに依り

探題今川了俊下向

少貳頼尚死去

て、了俊は船を廻し、十一月十九日、松浦の津に著船あり。下松浦丹後權守勝・平戸肥前守直急ぎ了俊を迎へ請ず。同廿二日、伊萬里中務大輔貞・山代遠江守榮・高木肥前守家直・多久上野守宗國・馬渡美濃守經俊・後藤治部少輔資明・龍造寺若狹守家治・深堀掃部助時廣・安富下總權守直安・綾部新次郎・江上四郎・於保彌五郎を始め、近郭〔郊カ〕遠境をいはず、肥前國の御家人等、或は呼子の湊へ相集り、或は金屋・相知・小侍女山へ打群り、了俊の下知を承る。時に太宰孫次郎冬資來りて、了俊入道に參會す。了俊、則ち冬資と共に西肥前の輩を相催し、十二月十五日、松浦より杵島へ打入り白米嶽に陣し、同廿一日椿村へ移られ、同廿七日後藤兵庫允光明が塚崎の庄武雄・牟留非の兩城を攻めて合戰し、夫より柏嶽へ陣を移し、了俊猶杵島郡に在陣して、冬資と議し、宮方の輩を追罰せむとせられし處に、冬資の父頼尚入道梅溪、今月廿四日行年七十八にて死去せしに依りて、冬資、其經營に滯り、年內は軍を止めけり。

北肥戰誌 卷之三 終

北肥戰誌　卷之四

探題了俊入道所々軍の事

已に應安四年の冬、新探題今川了俊下向あり。翌くれば同五年壬子二月十三日、了俊入道、先づ肥前國の宮方退治の爲め、杵島郡烏帽子嶽に陣を取らる。時に近隣の敵、了俊の陣へ押寄せ相戰ふ。了俊、是を追拂ひ長島の庄へ發向あり。夫より柏嶽高宮佐野に到りて合戰し、蜷打に於て防戰あり。此時、彼杵一揆の中に、深堀掃部助時廣軍功を抽んづ。同四月、了俊、府中に來陣あり。少貳の一族太宰右衞門佐賴泰に參會し、同月廿六日、了俊舍弟中金右衞門佐仲秋と同じく府中を立つて、神崎郡横大路・本告・松崎へ發向し、菊池肥前守武安と合戰あるも、勝負兩陣にありて決し難く、了俊は綾部に陣を取り、賴泰は西島に屯す。斯くて了俊、同五月、筑後國へ出

張し、先づ右衞門佐仲秋を豐後へ差遣し、大友と引合せ、扨一族山名兵部少輔を以て、筑後の御家人を相催し、檜林本郷に於て宮方と相戰ふ。山名、軍に利を得、七月十日に、同國酒見に城を構へて人數を差籠む。斯かる處に八月四日、菊池肥前守押寄せて、日々夜々山名と合戰す。時に了俊軍兵を以て、菊池が後を撃ちしかば、武安、利を失ひ筑前の方へ引退く。この時、深堀の一族若黨、多く山名が手に屬して疵を蒙る。斯くて了俊、所々の軍に打勝ち、其利に乘りて筑前國へ討入り、宮方の籠りし有智山の城を攻め落し、太宰府へ攻め入り相戰ふに、宰府不日に落去す。夫より了俊は、大友に對面の爲め、少時豐後に赴き、太宰右衞門佐賴泰は、肥前の府中にありて、彼の國の味方を相催し、彼杵・高來の宮方を攻めむとす。

應安六年癸丑三日、初、探題今川入道了俊・太宰右衞門佐賴泰、彼杵郡へ發向し、伊佐早・宇木の兩城を攻めけるに、城主伊佐早右近五郎・西郷藤三郎やがて降參す。了俊・賴泰、其後高來へ打越え、七月七日、神代・大隈を攻め、九月六日、千々岩に到り濱手に於て、宮方の輩と打戰ひ、一戰に利を得柏崎に陣す。

将軍義満九州に出陣

應安七年甲寅の春、新將軍源義滿公、九州の御敵御退治あるべしと、既に三月廿二日、洛室町の御所を進發せらる。國々の大名八十餘人、東は伊豆、北は越後を限りて、五畿七道の軍兵都合拾萬餘騎なり。此事、先達て聞えしかば、菊池肥後守武政〔前の肥後守武光の子なり。〕以下の宮方共、其路々へ出向ひて是を防がむとす。先づ將軍宮は、自ら肥・筑の武士を召具せられ、豐前國まで御出陣あり。菊池肥後守は、四萬餘騎にて宮の御先に進み、長門國へ打越え、京勢を待懸け陣を取る。同名豐前守武勝は、薩摩・日向・豐後・大隅の兵を引いて高崎に陣を張り、四國の細川が船より上るを待つ。同名肥前守武安・城・赤星・八代は、筑後の國下蒲池に在陣して、探題以下武家方の地〔カの脫〕兵を押へて居たり。斯くて京勢の先陣山名・赤松其勢四萬餘騎、山陽道を歷て攻め來る。

關戸合戰

仍りて菊池肥後守・厚東駿河守・宇都宮・山鹿・麻生・原田・秋月、四月廿六日關戸に相支へ、山名・赤松が四萬餘騎と相戰ふに、京勢打負けて防州へ引退く。宮方の軍、手合の一戰に利を得て悅びけるに、豐後國高崎へ向ひし者共、島津・伊東俄に敵となりし程に、菊池豐前守、府內の合戰に細川左近將監詮春が爲め忽ち討たれ、此口よ

宮方敗軍高良山に退却

義満宰府に入る

り破れて、敵、宮の御留主に入り亂れ、所々に火を懸け亂妨しければ、筑後に在陣せし菊池肥前守以下、太宰府へ馳せ來りて〔相カ〕打戰ふと雖も、細川・島津・伊東が軍兵、雲霞如くにて、菊池肥前守・城・赤星打負けて引退き、宮の豐前の御陣へ急を告ぐ。菊池武政、此事を聞き、さらば先づ太宰府へ歸りて、細川が勢を追拂はむと評定し、宮の御供申して、五月二日に筑前へ引返し、宗像の要害に楯籠りけり。斯かる處に、當國の味方山鹿・原田・秋月も、武家方に心を變じ、却つて宮の御座所を相謀り、少貳一家も國中に充ち〳〵て、初終の御合戰難儀に相見えしかば、菊池を初め、城・赤星以下、宮の御供申し、宗像の城を出で筑後國へ退き、高良山に取登り、要害を構へて御座所とす。斯かりし程に、京勢段々競來り、將軍、太宰府へ入替らる。斯くて細川陣して、六月初より十月に至り宮方と相戰ふ。其頃探題今川了俊は、肥前國の敵を押へて高來郡に在陣し、舍弟仲秋は綾部の城にあり。然るに了俊、彼杵郡の一揆退治の爲め、今年三月廿九日、彼所へ打越え、先づ宇木の城を攻め、野伏と晝夜防戰し、

四月廿八日、宮浦に陣を移し、七月廿三日、又伊佐早へ赴き、同廿五日、永野の城を攻め落して〔在カ〕地家を放火し、船越城に入り、同廿八日、重ねて宇木の城を攻め、日々相戰ひ、八月二日には高來の陣を返さる。然る處に有馬・深堀・多比良・深町、其外の宮方共、同月廿五日、有家に出向ひて了俊と〔相カ〕打戰ふに、了俊の軍、利を得て一揆等皆降參し、高來郡靜謐す。斯かりし間、了俊、又伊佐早へ赴かれ、彼杵郡を大半討ち治め、

宮方敗れ
て勢と相
平し肥後
に歸る

東肥前へ赴き、千年川を境ひて宮方と對陣し、同十一月十二日、川を駈渡し筑後國へ討ち入り、石垣・麥生・黑木・藤山等所々に於て、宮の御勢と合戰す。斯くて菊池は、今年の冬に至り宮を守護して、高良山の上宮に陣を構へ、京勢と相戰ひしに、早兵糧も盡き援兵もなかりしかば、宮へも御自害を勸め、其身も腹を切らむとせし處に、

宮方將軍
方和平

將軍より和宥の御使あり。高良山の圍を解かれし故、何れも自害を止め、武政が子松王丸が十三になりしを、將軍の御陣へ進らせ、和平の御禮を遂げ、菊池以下の輩、宮の御供申して肥後國へ歸り、星霜四十餘年にして九州一統す。斯くて將軍御歸洛

九州一統
す

に及び、鎮西の武士に恩賞の地を給はる。先づ大友孫太郎氏繼に、本領豐後一國の

義滿勳功の士に恩賞を授く

義滿歸洛

上に筑後の內を加へ給はり、少貳冬資に筑後・肥前兩國の內を下され、島津陸奧守氏久に薩摩・大隅を宛行はれ、伊東大和守祐熙に日向國を給はり、大內介義弘に、本領の上豐前國の守護職を下され、探題伊豫入道了俊舍弟中金右衞門佐仲秋に、肥前國佐嘉・杵島・高來三郡の內を給はり、千葉介胤泰に小城郡を宛行はれ、其外の御家人共、皆恩賞を給はりて、將軍は程なく御歸洛ましましけり。

太宰少貳冬資宮方となる事

少貳冬資宮方となる

太宰孫次郎冬資、大に立腹して申しけるは、我等が先祖資頼、九州下向の後、代々鎭西の大職にあり。去る建武の亂には、等持院殿の御爲、祖父妙惠入道を初め親族被官等、悉く有智山の城に於て一命を蹙め、其後四十年に及び、將軍家に對し、忠功他に抽んで畢んぬ。義滿公、其忠貞を思召さるれば、新恩の地をこそ給はらざらめ。本領の內肥前國を削り取られ、豐前國の守護職をも召放さる。十目の視る所口惜しき次第なり。所詮宮方に繇つて將軍に思知らせ申すべしと、肥後國へ使を

立て、菊池が許へ所存の程をいひ送りしかば、武政領掌し、頓て宮の令旨を冬資にぞ申賜はりける。斯くて冬資、筑後國に旗を揚げ、宮方の者共と一味同心して、探題今川幷に大内介を追罰せむと相謀りし程に、九州復騷動す。翌くれば應安八年に、永和と改元あり。

少貳家の由來

少貳家由來の事

抑〻彼の武藤少貳と申すは、天兒屋根命の御苗裔大織冠の御子孫御堂關白道長公の御末なり。道長の三男を御子大納言長家と申す。此人の次男に、左中將兼尾張守長賴といふ人あり。後朱雀院に仕へ、武州戶塚鄉は相傳の知行にて、彼所へ下り居住ありけり。時に武州の藤原氏とて、始めて武藤と稱し、武藤中將とぞ名乘られける。其息賴氏、往昔康平年中に、八幡太郎義家、陸奥凶徒誅伐の爲め發向ありし時、傔仗にて屬從ひ、寄懸の紋の旗を給はり、數度の軍功あり。夫より後、源氏の家人と成りぬ。然るに保元・平治兩度の亂に、源氏亡び平家の世となりて、平中納言

知盛卿武藏の國の補任たりし時、彼の武藤傔仗賴氏に三代の孫藤原賴兼、知盛を壻に取り、其女の腹に武藏守知章を儲く。此等の所緣にて賴兼が子供監物太郞賴方、在京して知盛に仕へ、其弟大藏大輔賴平は武藏國にありて代官たり。斯かる處に、壽永の逆亂出來り、平家悉く洛を去つて西海に漂ひし時、盛物太郞は元曆元年二月、播州明石浦にて武藏守知章と一所に討死す。賴平の子武藤小次資賴は、一の谷に籠りし處に、梶原平三景時が申すに依りて、源家の御陣へ初めて來り降參す。然る間九郞判官義經、是を赦免せられ、則ち景時に召預けられけり。梶原、鎌倉へ歸陣後、彼の資賴が器量を見、囚人ながら壻に取り、時々賴朝公へ歎き訴へしかば、彼等が先祖の忠功を以て、竟に平家從屬の科を御免あり。然るに程なく文治三年丁未、奧州の合戰出來りしに、資賴先祖賴武が先例を以て、陸奧の御供を御免許あり。御馬鎧を給はりて平泉へ御供し、累代相傳の寄懸の旗を靡し戰功を抽んで、賊徒の大將錦戸太郞國衡を討ち、其首を取つて見參に入る。時に歲廿八なり。此賞として陸奧大泉庄を下し給はりぬ。其後建久二年辛亥、岩門の少鄕原田大夫·大藏種直が闕

所三千七百町を給はり、鎭西の監代として太宰府へ下向し、寶祿元年乙酉、宇佐八幡の遷宮に太宰少貳に任じけり。是より以來、武藤少貳の家始まりて、九州には肩を雙ぶる者もなく、子孫次第に繁榮し、朝日・窪・出雲・平井・馬場・山井・志賀・大塚・加茂・吉田と名字を分る。一門各〻肥・筑の間にはびこつて大勢の者なりしかば、今冬資が宮方になりしを、大内介も今川も、興醒めてぞ思ひしとなり。今年永和元年乙卯。

太宰少貳の一族

冬資討死今川兄弟所々軍の事

太宰少貳冬資は、將軍家へ恨を含み、懷良親王の令旨を申給はりて、既に宮方となり、筑後國へ討つて出で、味方の輩を相催し、舍弟越後守賴澄を、星野六郎實善が居城生葉の妙見城に差籠め置き、其身は肥後國へ打越え水島の城に楯籠る。茲に因りて、探題今川入道、六月下旬肥前を出で、肥後國へ發向し、目野日岡に陣を取り、七月二日水島へ討ち入りて冬資が城を攻め、又豐後の大友に下知し、妙見の城を攻めさす。冬資、合戰に利を失ひ籠城叶ひ難かりしかば、八月廿六日、生年三十九にて

少貳冬資討死

有智山合戰

竟に腹切つて死す。斯くて今川入道は、水島を攻め落し、十二月初、筑後へ立歸り、大友孫太郎・三原・原田・秋月・麻生以下と勢を合せ、貳島餘騎を以て妙見城を日夜攻めけるに、城中堪へずして、太宰越後守は城を落ち、太宰府の方へ越し、城主星野は逐電し死生知れずになりにけり。斯かりしかば了俊は、頓て肥前へ歸陣す。

今年、肥後國阿蘇上宮より俄に洪水涌出で、本堂忽ち押流され、山上山下壞崩れて大河となる。稀代の珍事なり。

永和二年丙辰、太宰越後守頼澄、有智山の城に楯籠る間、是を攻むべき爲め、大内介義弘、中國より渡海し、大友式部大輔親世、豐後より來り大勢を以て、有智山の城を取圍む。中にも麻生筑前守・宗像左衞門尉・原田・秋月の一族、進んで有智山の大城戸を打破る。少貳の家人等防ぎ戰ふと雖も、大勢の寄手に叶はずして、七百餘人討死しけり。斯かりしかば頼澄籠城なり難く、密に城中を落去りぬ。少時前肥に隱れありとぞ聞えし。

同年の春、今川了俊入道、杵島郡へ討ち入り、二月廿五日塚崎に在陣し、後藤と相戰

探題了俊所々の敵城を攻落す

ひ、夫より長島へ陣を移して、澁江公治が潮見の城を攻め落し、稻佐に到りて白石彌次郎が須古の妻山の城を攻め破り、先づ府中へ歸陣す。

永和三年丁巳二月俊了入道、蜷打千布に陣を取り、同六月下旬、筑後國へ發向して、河崎氏が籠りたる生駒野城を攻めて、八月に同國山門郡蒲池へ陣を移し宇都宮壹岐守貞久が城を攻め落さる。

同年十二月、宮方の輩肥後國に蜂起して、征西將軍宮、染土城に籠らせ給ひ、菊池左京大夫武朝は、山鹿の城に栖籠る。時に太宰が子新少貳貞頼、菊池と引合ひ筑後へ出張す。斯かりし間、九州猶靜まらずして合戰止む時なし。

永和五年己未、康暦と改元す。今年了俊入道、肥後國の敵退治の爲め、舍弟右衞門佐仲秋と共に、七月廿三日に肥前を立ち肥後へ發向あり。先づ山鹿に到り筒嶽に陣を取り、八月四日、高瀨鬼齒山の宮方を攻め落し、同十四日、千田原に陣して、同十六日、平尾の城を攻め破り、其敵を追落し、同十八日、板井原へ陣を移し、翌くれば十九日、菊池と相戰ひ、同廿七日赤星と合戰し、九月五日に城野と相挑み、所々の合戰

隙なく〳〵して、既に十二月に至り肥前に在陣あり。

康暦二年庚申、了俊・仲秋、肥後に在陣し、八月十日、板井原に陣を取り、同廿五日、宗像（肥後）の城を打立ちて、一駄原・丸山・前原等の所々に陣を移し、十月八日、水島の要害へ押寄せて合戰す。城の大將菊池肥前守武純・堤右京亮等、防戰叶ひ難くして落城に及び、兩將出奔しけり、

同三年辛酉、永德と改元す。了俊兄弟、今年猶肥後に在國し、四月廿六日、城野の城を攻め落さる。時に菊池勢討ち出づるに依りて、防戰に及び菊池を追退け、五月十二日、菊池が陣城寺尾を攻めて、六月十八日板井に陣し、夫より熊野松尾へ陣を移して、同廿二日丑の刻、菊池次郎武興（或は武朝。）が籠りたる熊部（或は能耳。）の城へ取懸け攻め戰ふに、武興堪へずして落城す。翌くれば廿三日、了俊の子息五郎御曹司義範、軍兵を率して征西將軍宮の籠らせ給ふ染土の城を攻めけるに、是も堪へず落城して、宮は風雨に紛れ落失せ給ふ。斯くて了俊、同廿六日、南郡立田に陣を移し、同廿九日、木山・津守の兩城を攻めけるに、宮方の輩又打負け、大將龜山三郎降參しけり。時に

了俊大浦有家の城を攻めて破らる

彼杵の一揆頭三浦深堀遠江權守時淸・高來の深江下總入道了心、探題に屬し所々に於て軍忠あり。同年九月、菊池、烏栖六郎武貞・有馬孫五郎泰隆宮方の輩を催して、肥前國高來に蜂起し、大浦或は大垣。の城に楯籠り、溫泉嶽を要害とす。此事肥後に於て探題の陣へ注進ありしかば、了俊・仲秋、さらば先づ當國の敵を閣き、高來へ向ふべしと、肥後國へは五郎義範を殘し置いて、船より高來へ押渡り、十二月廿二日より大浦・有家の兩城を攻むるに、武貞・泰隆が軍烈くして、了俊一戰に打負け、黑坊山へ取登る。宮方勝に乘り續いて是を攻め落す。了俊、軍に打負けしかば、先づ合戰を止め敗軍の士卒を集めて、今年は高來に年を越えらる。

翌くれば永德二年壬戌正月、探題の陣へ新田左京亮といふ者馳せ加はる。了俊是に力を得、同月廿三日、重ねて大浦の城へ押寄せ攻め戰ふ。爰に於て城の大將菊池武貞、城を落ち小松崎へ引退き、有馬泰隆は降人になりて出でぬ。了俊頓て小松崎へ押寄せけるに、閏正月十日、武貞復落失せけり。

永德三年癸亥九月、了俊飯田山に在陣あり。此時高來郡の一揆安富以下、了俊の陣

了俊兄弟肥前に歸陣

に來り加はる。

同四年甲子、改元ありて至德と號す。時に了俊の子今川五郎義範、肥後國龜崎の城にありしを、菊池が伴類大に起りて攻め戰ひ、不日に攻め落す。義範は城を去りて腰尾城に入り、肥前へ羽書を送つて探題の方へ事の仔細を告げらる。玆に因りて仲秋急ぎ軍兵を引いて肥後國へ發向し、九月十五日、菊池と合戰しけるに、仲秋打ち負けて、是も腰尾へ退き、義範と一所に栖籠る。斯かる處に、了俊も發向あり。吉野山に陣し、菊池と相對す。斯くて菊池勢、其後腰尾を攻めむ事度々なりしかども、探題の一族固く守りて城落ちず。然るに今年も旣に暮れ、菊池が軍兵皆退散しければ、了俊・仲秋、肥・筑の間心許なしとて、五郎御曹司を肥後に殘し、宮方を押へて兩將は肥前に歸陣あり。

至德二年乙丑、肥前國の住人御領三河守、探題の下知を背いて赤山の城に栖籠る。仲秋、是を退治として高野嶽に陣し、攻め戰ふに城落ちず、翌年に及びて沒落す。

同三年丙寅六月、仲秋、肥前府中（佐嘉）に在居して、先祖今川五郎國氏（定光寺と號す。）の菩提の

爲に、田地十五町を以て春日山玉林寺へ寄附せらる。

同年八月、仲秋、肥後の天草に發向し志岐城を攻め落す。時に了俊の子息陸奥守貞臣初名五郎義範。も、肥後より高來へ來り、九月十七日、大浦城を攻め破り、夫より上津浦に到る。仲秋、貞臣と一つになり、菊池武貞・有馬泰隆が殘黨と所々にて相戰ふ。折節、菊池左京大夫武朝、宇土・河尻以下を相語らひ、宮の御供申して肥後の南部へ出張してありけるが、上津浦に來り武貞・泰隆を援うて合戰す。時に探題の軍、利を失ひ上津浦を引退く。

至德四年丁卯、嘉慶と改元す。六月四日、今川仲秋、肥後國隈本へ討ち入り、菊池攝津守が城を圍み攻む。菊池兵を出し、夜晝四日四夜相戰ふに、仲秋打負けて退散す。

嘉慶二年戊辰、肥前國尼寺甲斐守・安德大隅守、了俊に屬し、同國杵島郡に到つて、宮方の輩と相戰ふ。

同四年庚午、明德と改元す。今川了俊、頃日肥前に在國しけるが、肥後國の賊徒良(やゝ)も

了俊兄弟宇土城を陷る

すれば蜂起する故、是を退治の爲め、肥前・筑前・豐後・筑〔後脱カ〕の味方凡そ二萬餘騎を相催し、今年七月に肥前を立つて肥後へ打入り、南關に於て舍弟仲秋がありしに參會して、兩勢を合せ征西將軍宮の御坐す宇土の城を圍み攻む。城中には菊池左京大夫武朝・名和・堤・宇〔土〕同・河尻、籠り居て防ぎ戰ひしかども、寄手大勢にて終に落城し、宮は菊池以下御供申し、隈部の城へ落ちさせらる。同九月、探題續いて隈部を攻むるに、亦落城す。菊池・赤星・城野少代官を守護して逐電しけり。斯くて肥後の兇徒、先づ靜謐しければ、了俊肥前に歸陣す。

明德四年癸酉、了俊入道、其身は佐嘉・小城の間にありて、養父郡綾部の白虎山へ城郭を築き、同氏仲秋を居ゑ置き其境を守らせらる。當所地頭綾部兵庫助滿幸則ち補弼たり。其頃又小城郡司千葉介平胤基も、武家方にて威を振ひ松尾城に居住しけり。執權は鑰尼信濃守季高なり。

明德五年甲戌、應永と改元す。頃日肥後の菊池左京大夫武朝、又討つて出で國中を切り從へ、剩へ豐・筑の間に一味同心の者多くして、隈府城に楯籠る。然るに、應永元

年の春、大友式部大輔親世、菊池退治の事を思立ち、隣國を觸廻すに、筑後には蒲池問注所・田尻・草野・西牟田以下、肥前には大村・西郷・千葉介催促に應じ、旣に相圖を定め一度に肥後へ攻入らんと、先陣は肥後・筑後の境竹井原に陣を取る。菊池此事を聞いて、さらば途にて戰ふべしと、合志の六郎宗隆に軍兵を副へて差向く。宗隆則ち竹井城へ進んで、敵の先陣を一戰の中に打散らす。武朝も城・赤星・城野・鹿子木を初め、數千餘騎を引具し、合志に續いて隈府を立ち筑後國へ討ち出づ。然る間、當國の住人田尻彌三郎種顯、要河に於て相挑むと雖も、菊池が大勢に駈け立られ、種顯降人となりて出づ。大友も筑後に來り、味方を援うて菊池と合戰度々に及ぶ。然れども大友、竟に利を失ひ豐後へ引入りしかば、筑後・肥前の大友方も皆退散し、菊池は筑後を初頓て〔脫アラン〕隈府へ歸陣す。斯くて武朝彌〻威を振ふ由、洛へ聞えて、大内介義弘に、菊池誅伐の事を仰付けられけり。斯かりし程に、大内介、筑前へ渡海し、大友と一つになり肥後國へ發向す。菊池是を聞き、薩・隅・日州の軍兵二萬を以て詫磨原へ出向ひ大に戰ひしに、此度も菊池利を得、大内介は疵を蒙りて引退き、大友も豐府へ歸

大内義弘菊池誅伐の仰を蒙る

菊池武朝大友に降參す

る。斯かりに後は、菊池彌〻武威に募りぬ。爰に於て大友が謀に、親世は過ぎし詫磨原の合戰に、深手を負ひ死にたりと世間に披露しけり。されば菊池は武勇は勝れしかども、謀の道には疎き者にて、親世死にたりと聞きしより、世の中心易くなり、日夜酒宴遊興のみにて送りし程に、其門葉若黨に至るまで、一向軍事を忘れたり。大友親世は、父祖に替りて思案深き者なりしかば、內々隈府へ間を入置き、菊池が油斷を聞きすまして、應永元年四月廿六日、大勢を以て急ぎ隈府へ攻め入りしに、菊池武朝立つ足もなく沒落し、八代へ引籠り、大友へ和を乞ひ軍門に降りぬ。菊池是より家衰へ、數度の大功徒に威勢幽になりけるぞ墓なき。

征西將軍宮爰に於て御歸洛か。未だ詳かならず。

菊池家由來の事

抑〻彼の菊池の元祖を尋ぬるに、大織冠の御末中關白道隆公の後胤なり。道隆の息男正三位權中納言隆家の時、花山院御事に付いて長德の頃かとよ。配流せられ太

菊池家の由來

宰帥に遷されて、長久五年正月一日に薨ぜられぬ。其息を大納言經輔と申す。是もさる仔細ありて、遠州波津久良の庄へ左遷せられ、後には太宰帥に移されて、永保元年八月七日卒去せられぬ。配流の時解官ありて後は、文家とぞ申しけり。其孫子に大夫將監則隆といふ人あり。此則隆、後冷泉〔三條〕院の御宇延久壬子年に、始めて肥後國菊池郡河邊に下向ありて後、其子孫長く菊池に居住す。阿蘇宮の御神託に曰く。

　淺くとも深くたのめよ菊池川阿蘇の煙の立たむ限りは

と、又夢中に神馬の鷹の羽を幕の紋に賜はりて之を用ふ。彼の則隆の子太郎經隆が時に始めて菊池と號し、堀河院の御宇寛治年中、蒙古軍の忠賞に肥後守に任ず。則ち隈府三の宮の内若宮社なり。經隆四代の孫を、菊池武者經直といふ。此經直は、肥前國長島の庄鹽見大明神の祭禮に來りて、笠懸を射落馬して死す。舊跡今にあり。其子菊池次郎隆直、元暦の昔源氏に屬して軍功を抽んで肥後守に任ず。其孫子彌四郎能隆、承久の合戰に在鎌倉〔マヽ〕し、宇治川の軍に功を播(ほどこ)し、其子左京大夫隆

泰・其子肥後守武房相續いて、蒙古襲來の時、別して大忠を盡しぬ。夫より以來代代肥後守に任じて、九州に威を振ひけり。

新探題澁河滿頼下向の事

應永二年乙亥の冬、今川伊豫守入道了俊、九州の司職を改補せられ上洛あり。扨其代として、澁河右兵衞佐滿頼を下され、同三年四月十九日、筑前國へ參著ありて、博多の城に入らる。此滿頼は、淸和天皇十八代の後胤澁河武藏守義行の子にて、前將軍義詮公の御臺所には甥なり。さても了俊入道は、此年月九州の探題として、所々の軍功莫大なれば、必ず忠賞重かるべしと、思設けて上洛ありけるに、案に相違し聊か恩賞の沙汰もなかりけり。是は同名左馬助泰範と兼ねて不和の事あり。就中斯波左兵衞佐義將へ談合し、將軍義滿公へ、泰範さま〴〵讒を構へしと相聞え、又大友式部大輔親世、了俊が威勢を妬み、先立ちて上洛し、奉行頭人へ惡樣に申觸らしゝ故とも聞えけり。斯かりしかば了俊、忠賞の沙汰にも及ばず、結句遠江守護職をも程

大内義弘少貳貞頼と戰ふ

なく召放されけり。斯くて澁河滿頼は下向の後、博多の城にありて、大内介義弘と心を合せ鎭西の事を司り、菊池・少貳が餘類を尋ね探り、是を誅戮あり。其威親〔マヽ〕に被下知に隨はずいふ事なし。されども宮方の殘黨、良もすれば起りて合戰所々に止まず。頃日大内介が筑前國へ差置きし代官を、少貳が一族共取集りて周防國へ追歸す。玆に因りて大内介、早速防州山口を立ちて筑前へ渡海し少貳と相戰ふ。少貳の門葉はいふに及ばず、宮方の殘黨馳せ集り、蘆屋・西郷にして、大内が陣を打破り、義弘の末子藏人大夫敎弘を始め雜兵一千餘人、少貳貞頼が手に討取りたり。斯かりし程に、中國勢堪へずして豐前國立石原へ引退く。少貳勝に乘り、應永二年九月二日、星野・秋月・大村以下の宮方共と勢を合せ、立石原へ追詰めて、大内修理大夫盛見と相戰ふに、大内又利を失ひ、大將の盛見既に討たるべかりしに、陶越前守弘房と伊豫河野の一族共追々渡海し、大内方に加はりて散々合戰す。爰に於て少貳以下大に破れ筑前國へ引退き、岩屋・笠木・天拜岳所々の要害に取籠る。大内介が軍兵共續いて是を圍み、陣を張る事五十餘日なり。此事、將軍家の台聽に達し、雙方へ

將軍扱の御教書下さる

御教書をなされ、急ぎ鎮西の動亂を靜め、合戰を止むべき旨仰下されしかば、大内介も太宰少貳も畏まり領掌申し、義弘は則ち防州へ軍を返し、貞頼は太宰府へ安堵し、其上新少貳を大内介聟に約束して、九州暫く靜謐す。然れども大内介、少貳が舅となりてより、彌〻是を蔑にあしらひ、殊更筑前國の少貳が領知をも押領しけり。少貳貞頼是を憤り、再び大内介と矛盾して太宰府を立退き、肥前國へ打越えけり。

菊池武朝出張敗北の事

豐後の大友式部大輔親世は、去る應永元年の夏、剛敵の菊池を挫き、大功他に異なりと思ひしかば、將軍義滿公へ謁せむ爲め、同年七月廿五日上洛し、公方の御前斜ならず、恩賞厚く給はりて、翌年の正月十日、豐府へ歸りぬ。斯くて菊池は、大友へ降參せしを無念に思ひ、應永三年、譜代の家人一族等を相催し、筑後國へ討つて出で溝口に於て相戰ひ、同四年の秋、肥後高瀬の城に楯籠る。　大友此事を聞いて、探題澁河滿頼と同じく高瀬へ馳せ向ひ、菊池を攻めて相戰ふ。時に肥前國の御家人安富深江

菊池武朝出張幷敗北の事

修理亮泰行以下、高來郡の一揆共、探題の手に馳參ず。斯くて菊池武朝、九月廿九日、終に落城して筑後國へ落行きけり。其後、武朝彌〻衰微になりて筑後にありしが、又少貳貞頼と力を合せ、同五年の冬、筑後國へ打越え江辻と云ふ所に旗を揚ぐ。武家方の者共、探題の手に屬して菊池・少貳と相戰ふに、十一月十九日・同廿日の合戰に、菊池散々利を失ひ、少貳は跡を闇(くらま)し、菊池は薩州へ落行きて、島津の一族を賴みありけるが、同七年の頃、島津が合力にて、本國へ歸り入りしとぞ聞えし。

北肥戰誌巻之四終

北肥戰誌 卷之五

探題澁河滿賴小城發向の事

探題澁河滿賴小城發向

合戰

應永五年戊寅、探題澁河右兵衛佐滿賴、肥前國の凶黨退治の爲め、二月初旬、博多を立ちて旗を進めらる。同八月十日、上松浦・下松浦・千葉・後藤以下の輩、多久・小城の間に陣を取り、桐野に於て合戰し、松川長門守達討死す。此時、探題は牛原に陣を取る。時に江利近江守氏利軍忠あり。斯くて同八月、松浦兩黨の者共、彥島河原に於て相戰ひ、千葉介が手の者には、仁戸田胤庶・金原三郎父子七人。塚崎勢には後藤馬庭隼人。松浦黨には波多下野守武・同三郎直・同太郎勤・黑岩長門守直・相知日向守・猪山入道覺宗・同駿河守照八並に民部少輔・瀨戸入道祐存・下松浦丹後守賴同・船原入道宗玖・同備中守・同左衞門太郎を初め貳百餘人討死しけり。其後、大原の合戰

に、千葉が若黨平田伊賀守討たれ、探題の方に吉見・小木討死す。同六年己卯三月廿日、小城の千葉、神崎・倉戸の城に押寄せ、探題と相戰ふ。探題の軍、利を得て寄手の中に、宗徒の輩原出羽守・仁戸田三郎・大楊伊賀入道見存・赤月出雲守・原七郎・安部孫四郎父子・一河孫三郎・佐留志庄山次郎・加須何其（マヽ）六路專道討死す。其後、探題は綾部の城へ移らる。同九年壬午、菊池の一族赤星遠江守といふ者、肥前國に討ち入り所々の軍に打勝ち、三根郡に在陣し、六月廿四日、探題の綾部の城を攻む。同十一月廿四日には、探題城を出で坊所に陣して、赤星と合戰あり。赤星急に鬪ひて、探題の軍兵に綾部愛鶴丸・豆谷掃部助・末安兵部丞兼久討たれぬ。斯かりし程に、探題は綾部に陣を引かれ、赤星は三根郡の本陣へ歸りぬ。此赤星、應永十二年の頃まで三根郡を知行して、威を振ひしとぞ聞えし。此時、探題・千葉・赤星鼎の如く分れて挑戰止む時なし。今年八月三日唐船著す。大唐の永樂元年なり。同十一年甲申正月初旬、千葉介胤基の家人鑰尼刑部大輔泰高、忽緒胤基と合戰を致すの間、探題より度々成敗を加へられしかども承引せず、結句少貳貞頼入道本惠與力せしめ、彌々

騷動に及ぶ。此時探題、少貳退治の爲め、武家方の輩共催促ありし狀にいはく、

改年の吉兆□□□□(原本闕ク)幸甚々々

抑千葉胤基之家人鑰尼刑部大輔泰高、忽緒胤基致合戰之間、雖度々加成敗、不承引及難儀候。依而馳塞之處、結句少貳入道本惠令與力、泰高所々居開押隔當手之仁等對滿賴致合戰候。凡本惠之陰謀連々雖其聞不許容候處、既に現刑(形カ)之上は無是非候。仍而可加退治候。早々有御出御合力候者可爲大忠候。且京都へ者可注進候。尙々御本忠事之間、彌被致忠節候者可然候。賴入候。委細之旨彙經可申候。恐々謹言。

正月五日　　　　　　滿　賴判

深江修理亮殿

斯くて探題澁河右兵衞佐滿賴、少貳入道本惠幷に千葉一家退治の爲め軍兵を催し、國府へ發向あり。此時、千葉の一族等河上に出合ひ、四月十二日未刻。兩陣入亂れ相戰ふに、國府勢小城利を失ひ、千葉介の從兵に原東武與・今川九郎、其外中村遠江守・同圖

書助・岩部伊豆守・同千代鶴丸・垂井因幡守・飯篠父子・飯盛小太郎・同又三郎・簗瀨行益・石田五郎・源小三郎・東郷將監・晴氣の光武山城守・同德武勘解由・大村・益田・納所・中島・平方・同弟彌九郎以下若干討死す。爰に於て一揆の棟梁鑰尼刑部大輔泰高・同小太郎基高・同備州・同六郎・法成寺入道・千布父子討死して、殘黨怺へず敗軍す。斯くて探題は、しばらく小城に在陣あり。同五月十九日に、高來郡の輩深江修理亮以下、探題の陣へ馳參ず。其後、長島の庄に移られ、吉見兵部少輔を以て、澁江氏が鹽見城を攻めさせらる。此時澁江降參、探題先づ綾部へ歸城あり。

同十二年乙酉三月、赤星遠江入道、綾部へ押寄せ探題の白虎城を攻めて相戰ふ。探題打負け防ぐ事を得ず、城を落ちて筑前へ赴き博多の城へ入らる。此時、赤星威勢に募り、東肥前の內三根・神崎を知行して、當國の守護と稱す。其頃赤星、寺社へ附する所の免狀に曰く、

肥前國三根郡矢俣保內蓮町二丁六反、爲二光淨寺領一間、御知行不レ可レ有二相違一之狀如レ件。

應永十二年五月十日　　赤星遠江入道判

光淨寺侍衣禪師

滿頼剃髮して道鎭と號す

此時、探題滿頼は筑前國博多城にありて、翌くる應永十三年丙戌八月三日、剃髮あり。法名道鎭と申す。

同十七年庚寅、菊池が肥後國板井城落去す。同十八年辛卯正月廿九日、千葉右京大夫胤基、杵島郡白石に於て、大村中務大輔家有と合戰あり。打負け藤津へ引退く。千葉勢、是を追懸け攻め戰ふに、家有叶はずして討死す。

同年九月十九日、菊池兼朝、（武朝の子。）肥後の日野に於て合戰しけるが、大に利を失ひ、在國叶ひ難くして、同十二月二日、兼朝竟に出津しけり。同十九年壬辰十一月、澁河入道々鎭上京せらる。三男敎安、其留主を守り、肥・筑の武士博多の城を警衞す。

滿頼卒去

道鎭其後下向、探題職兩度なり。應永卅三年に再び上洛、文安三年卒去。歳七十五。同廿一年甲午六月九日大雪降る。

澁河義俊探題となる

明使呂淵來る

天變地妖の出現

澁河義俊新探題に任ず附沒落の事

應永廿五年戊戌、澁河入道々鎭の嫡男左近大夫將監義俊、當將軍義持公より御敎書を給はり、父に代りて探題たるべき旨仰下されけり。其翌年六月廿日、大明國の使呂淵、博多冷泉津袖の湊に來著し、新探題義俊に謁し、明帝の勅意を述ぶ。其仔細は、近年日本の賊船、度々大明へ渡海せしめ諸所に亂妨し、或は財寶を奪取り、或は民家を放火す。仍りて明國の煩となり、貴賤魂を消す所なり。早く下知を加へられ、其違亂を止めらるべき旨と云ふ。義俊、呂淵を奔走あり、旅驛を結構して、少時太宰府に逗留させられ、相應の賴〔勅カ〕答ありて呂淵を歸さる。されば此頃天下樣々の天變あり。應永廿九年壬寅七月十二日に、東西へ日輪現れ、日光同じく耀く。同卅年癸卯五月、太宰新少貳滿貞（本惠の子。）と千葉介胤鎭軍兵を合せて、探題澁河義俊の博多城を攻む。探題の家人板倉上總介滿藤・碧海長門入道正俊、其外足助・森戸・加賀・齋藤以下の者共防ぎ戰ひしかども、打負けて義俊を始め城兵悉く落去りて、或は鳥飼（福）岡。

の方へ赴き、或は山浦・綾部へ落行きけり。此時義俊は、東肥前へ赴かれ、山浦勝尾城を取構へて居城とせられけり。然るに義俊、翌くる應永卅一年甲辰、少貳の一族筑紫教門が爲め、當城をも攻め落され、筑後國へ落ちられけり。翌くる同卅二年乙巳、少貳猶探題を攻めむと筑後へ向ふ由聞えしかば、義俊微勢に依りて中國へ使を馳せ、大内介持世に援兵を乞はる。持世、早速同名修理入道德雄に軍兵を相副へ、筑後國へ差遣し義俊に加勢す。斯くて少貳が軍兵共、筑後に討ち入りて、探題の手の者大内の加勢等しく防戰し、少貳勢を肥前へ追退け、續いて府中（佐嘉の事）へ攻め來る。少貳の一族馬場・出雲・窪・筑紫・朝日以下。爰かしこに於て相戰ふに、勝負兩陣にありて日を送りしかば、大内入道も探題の兵も、長陣堪へ難くして筑後へ引返し、左近將監義俊は是より職を辭し、三瀦郡酒見といふ所に蟄居せられけり。大内入道德雄は、其の後筑前へ赴き在國す。

大友親著子息孝親の爲に討たるゝ事

應永卅三年丙午十一月廿九日、古年代記、同九月十三日と。豐後國の守護大友刑部大輔親著、養子大膳大夫孝親と不和にして合戰に及び、親著既に討たれぬ。其根元を尋ぬるに、前守護式部大輔親世は、具簡入道には孫、刑部大輔氏時には二男なり。されども器量兄氏繼に超えたる故、父氏時、此親世に總領を讓る。親世其家を續いで國の成敗穩に、子供餘多ありしかども、筋目を思ひし故、我が子に家を讓らず、兄氏繼の子左京亮親著を取立てゝ家督を繼がせ、式部大輔と改む。然るに親著、又我が子二人を差置き、伯父親世の長男大膳大夫孝親を養ひて、家を繼がせむとしける處に、彼の孝親生得不仁の者にて其器量にあらず。玆に因りて親著、是非なく實子花市丸を以て家督にすべしとぞ思ひける。孝親、其色を了りて大に恨を含み、彌〻あぶれ者となり、ある時は路頭に喧嘩を好み、或は土民の耕地を損じ、中々言語道斷の行粧なり。剩へ孝親、父に對し逆意を含み、應永卅三年六月廿日、兵を引率して打ち出でけるを、譜代の家人等、兎角宥めて穩便に相計らひけり。されども孝親、惡逆日々に疊過しければ、大友耳目の郞徒に戶次采女といふ者、是を諫言せばやと思ひて、九月

十三日、孝親の屋形へ伺候し、禮儀正しく泪を流し、樣々敎訓をぞ加へける。至極の道理なりしかば、孝親一言の答に及ばず、赤面の體にて奥へ入りぬ。釆女は重ねて去るべき便もなく則ち退出し、門前より馬引寄せ打乘りて、我が館へ歸りしを、金言耳に逆ふは世の習、孝親腹をすゑかね、遠侍に躍出で有合ふ者共數十人を召具し、釆女を追駈け、遁すまじと呼懸く。釆女元より思儲けし事なれば、心得たりといふ程こそあれ。三隅畠といふ所にて返し合せ、火を散らして切合ひ、主從十四五人同じ枕に切死しけり。太守親著是を聞付け、此上は力なし。孝親遁すな討取れとて、當番の侍を引率し、三隅畠に駈著けたり。孝親〔之を脫カ〕見て望む所なり。父をも討取つて日頃の鬱憤を晴すべしと、近習の者を下知し、終に親著をも討取りけり。斯くて孝親、父を殺せし科遁るまじと思ひけるにや。其場にて自害し果てたりしかば、近習の輩光吉四郎・法眼季忠を初め、皆腹切りて臥しけり。斯かりし程に、國中はいふに及ばず近國に至り、大友家の諸士、こは何としたる天魔の所爲ぞと、家の浮沈を危む處に、親世の末子中務大輔持直といひける人、家を相續し、頓て國中靜謐し

けり。此時、親著の子花市丸は十五歲になりしが、彼の一亂の後は豐肥國月俣（マヽ）といふ所に立忍び居たりしを、持直より呼返し、永享五年の春元服させ、左京亮親綱と號し家督を讓りぬ。親綱頓て佐伯左衞門大夫惟實・戶次但馬守高載を召連れ上洛し、參內を遂げて從五位下侍從に任じ、義敎將軍へ繼目の御禮申し府內へ歸り、拾餘箇年の間國を治め、寶德三年の春、持直の弟出羽守親隆に家を讓る。親隆讓を受けて拾貳箇年を過ぎ、寬正六年に、親綱の舍弟豐後守親繁に家を繼がせしとぞ聞ゆる。（九州記に、孝親の惡逆應永十三年十一月廿九日とあるは非なり。）

大友家由來の事

大友家の由來

抑〻彼の大友の先祖を尋ぬるに、曩祖左近將監能直と申すは、右大將賴朝公の御子なり。母は上野國利根郡主大友波多野四郎大夫經家の女にて、利根局と號す。能直童名は一法師丸とて、九歲の時より賴朝公の御側に仕へ、後には齋院次官親能の猶子となり、母方の名字を名乘りて、大友左近將監藤原能直と改めけり。然るに文

大友臣下の區分

治の頃、豐後國の押領使緒方三郎・大神惟榮、伊豫守義經に屬せし科に依りて遠流せられ、其跡豐州闕國となりしを、此能直に給はり、建久六年六月（或は七年三月十日とも。）始めて豐後へ下向しけり。時に緒方が一族大野九郎泰基、能直の下知に從はず。能直等と合戰し、同月終に泰基を誅しぬ。是よりして國中の輩一圓に附從ひ、九州に威ありて、彼の大野が弟朽網六郎親基・大牟田六郎基定・同秀基を先として、戶次次郎惟澄・臼杵次郎大夫惟隆・佐伯三郎惟康・同子息惟朝・植田次郎三郎有綱・麥生七郎成綱、其外大津留・橋爪・加來・堅田以下緒方の一門、悉く大友に相隨ふ。斯くて能直、貞應二年十一月廿七日、行年五十二にして豐府に卒去す。然るに四代の後胤因幡守親時が代に、異賊數千船〔艘カ〕壹岐島・博多の津へ襲來して、甚だ鎭西の騷なりし時、一番に京・鎌倉へ注進しけるにより、將軍家の御感ありて親時に忠賞を給はり、彌〻九州に威を振ひ、其子孫多く繁昌す。

大友家中に三つの分（わかれ）あり。一は御紋の衆といひ、吉弘・一萬田・田原・清田・田北・立花・志賀・戶次（以上。）大友の一門藤原氏にて、皆紋所は茗荷丸を用ふ。二は下衆と

いひ、能直下向の時、屬して鎌倉より下りし輩なり。三は國衆といひ、彼の日向姨岳の大蛇の子孫大神氏にて、戸次・佐伯・加來・朽網・大津留・堅田・橋爪・光吉等なり。但し此内戸次は、中頃大友より繼ぐ。其外國衆といふは、丹下・宇留島等をいふ。

澁河滿直探題職附筥崎社炎上の事

澁河滿直探題職に補せらる

應永卅五年戊申に改元し、正長と號す。此時、前探題澁河入道々鎮は上洛せられ、子息左近將監義俊は、數度の軍に利を失ひ、職を辭して筑後國に蟄居あり。鎮西の司職既に闕く。大内介持世、是を歎き道鎮入道の兄澁河彌三郎滿行の嫡子御調九三郎公、其頃は元服ありて、中務大輔滿直と號す。筑前國鳥飼城福岡。に居られけるを、將軍義敎公へ訴へ、御敎書を申給はり探題職にぞ補せられける。滿直御敎書を帶して後、武藏守に受領し、頓て鳥飼城に旗を揚げらる。時に、大内介の家の子陶六郎弘仲も、當國にありて滿直に力を合せ博多へ出張す。

正長二年己酉、後花園院御卽位ましまし永享と改元あり。今年肥後國菊池彈正少

弼武興・城越前守蜂起して、筑後國へ出張し、少貳滿貞に牒合はせ、筑前國へ亂入して新探題澁河滿直と相戰ふ。されども雌雄は未だなし。翌くる永享二年六月十八日、菊池・少貳再び探題と合戰す。此時筥崎の社、兵火の爲に回祿しけり。當社は昔、神功皇后三韓征伐終りて、御歸朝ましましける時、先づ此所へ上らせ給ひ、應神天皇を御誕生ありしに、天より八つの幡下りし故、其御跡を祭りて八幡宮と崇められ、戒・定・慧の筥を納めしに依りて、筥崎とは名付けけり。斯かる尊き古跡の忽ち灰燼となりしぞ淺ましき。

大內入道德雄討たるゝ事

周防國大內修理入道德雄は、去る應永の末頃、澁河左近將監義俊加勢の爲め、九國へ渡海しけるが、其後又筑前へ打越え、永享三年辛亥、當國の內に大友の一族立花氏が所領のありけるを押領せむ爲め、上意と僞りて、頃日軍兵を催し立花城を攻む。城主立花何某、未だ幼稚なりしかば、防戰叶ひ難く、頓て城を去り渡しぬ。當家の總領

大友中務大輔持直大に憤り、彼の立花が筑前の所領といふは、先祖重代の知行にもあらず。元弘・建武の軍忠に依りて、尊氏將軍より曩祖愚簡入道の二男左近將監貞載に下し給ひし所なり。然るを何の爲め彼の德雄奪はむや。さりながら私の宿意を以て、彼等と合戰に及ばむは穩便ならず。所詮此事上聞に達し、將軍の御下知に任せむと、軈て公儀へ訴へけり。將軍を初め奉り斯波・細川・畠山・赤松以下有職の人人、皆德雄入道が仕樣を惡まれしかば、入道御勘氣の身となりて、同年六月、終に筑前國を追出され、防州へも歸り得ず、爲方なくて肥前國へぞ赴きける。其頃少貳滿貞の嫡子小法師丸、肥前の佐嘉にありけるが、此事を聞きて大に悅び、大内介が一族に於いては代々の怨敵なるぞ。悉く討殺さむと佐嘉に陣を居ゑ、德雄を待懸け相戰ふ。德雄入道打負けて、上松浦へ落ちて、夫より筑前の國志摩郡荻原に居たりしを少貳追駈け、上松浦の波多・草野・留主・福井以下と勢を合せ、六月廿八日荻原へ取懸けて散々に合戰し、德雄入道を初め妻子眷屬まで、一人も殘さず討取りけり。

大内德雄討たる

此度佐嘉の軍に德雄打負け、家に傳はる唐菱の旗を捨てたる所、今に大内の旗と

いふ。

永享四年壬子、佐嘉小太郎丸にて合戰あり。

大内持世九州に渡海

大内大友合戰

大内介持世九州渡海并少貳父子自殺の事

大内盛見入道德雄討たれし由、中國へ聞え、大内介持世讃憤を含み、いでさらば自ら九國へ押渡り、大友・少貳を一々誅伐し、家の恥を雪め、德雄が追善にも備へむと、永享五年癸丑、大勢を率して豐前國へ押渡る。大友中務大輔持直、豐府にありて是を聞き、急ぎ軍兵を相催し、府内を打立ち豐前國へ出向ひ、二ッ岳へ取登り大内介と對陣し、四月八日、兩陣兵を進めて相戰ふに、豐後勢の中より光吉圖書助直忠討死す。大友家人朽網・吉弘・木付・齋藤以下身命を抛つて相戰ふ。大内介討負けて一先陣を引退き、其後は軍を止め、九州の諸將城井・長野・星野・草野・原田・松浦・千葉介以下探題澁河はいふに及ばず、悉く觸廻して、大友・少貳を退治すべき旨、將軍家の御下知を蒙る由、僞り謀りし程に、九州・二島の武士、皆大内介の陣へ馳集る。斯

少貳父子討死

かりし間、大友持直は一旦公儀を憚り、妻子を具して豐府を立退く。同名豐後守親繁は中にも事の張本人なりしかば、同じく國を退き日向へ赴き、文安元年まで山中しけり。少貳滿貞父子も、所々に於て大内勢と相戰ひしが、叶はずして肥前國へ引退く。大内續いて肥前へ發向す。少貳父子、佐嘉に相支へ中國勢と相戰ひ、蔣崎に於て大内新介を討取りぬ。されども大内の軍兵、雲霞の如くにて少貳終に打負け、滿貞は筑前へ落行き、太宰府の要害に楯籠り、子息小法師資嗣は、鹿子館へ引籠りけり。探題大内の兩勢、同八月十六日、鹿子へ押寄せ相戰ふに、資嗣怺へず沒落して討死す。行年廿一なり。探題大内より滿貞のありける太宰府を圍まむとす。滿貞無勢にて叶ふまじとや思ひけむ。秋月へ落ちて、秋月長門守種忠を賴み岡の城に楯籠る。探題大内、同月十八日秋月へ發向し、秋月領の城々一々、即日に攻め落して、種忠が一類を悉く誅戮せしむ。斯かりし程に、少貳滿貞遁れ難く、同十九日岡の城に於て終に自殺したりけり。歳四十歳。法名千里本勝と號す。斯くて少貳父子秋月の一族討たれて後、猶其門葉集まりて、同九月十六日秋月に於て合戰し、豐

前の規矩にても相戰ふ。されども皆打負け散々に成果て、鎭西靜謐に及びしかば、探題は鳥飼の城へ馬を入れられ、大内介は山口に歸陣す。此時、少貳滿貞の舍弟横岳孫次郎賴房は、東肥前に立忍び、又滿貞の幼息二人ありしは對馬に渡り、彼の島の主宗讃岐守貞盛を賴みて蟄居せり。

宗家由來の事

抑〻彼の宗貞盛が先祖を尋ね聞くに、桓武天皇の御苗裔平相國淸盛公の二男、右大臣宗盛の子孫なり。昔壽永の逆亂に、平家悉く滅亡しける時、宗盛の末子あり。未だ襁褓の內なりしを、乳母の夫是を懷に藏し、壇の浦・赤間ヶ關の憂き浪風を凌ぎ、渺々と對州へ遁れ忍びて、此子を養育し年月を送りし程に、次第に成人し、太郎右馬助惟宗とぞ申しける。此惟宗に子あり。右馬彌次郎右衞門尉と號し、宗を以て始めて名字とす。然るに其頃對州の主を阿比留と名づく。寬元四年の頃、右馬彌次郎謀を囘して、彼の阿比留を討殺し、對州をぞ奪ひ取りける。今の貞盛は、此右馬彌

次郎には、七代の孫とぞ聞えし。

探題滿直討死附子息萬壽丸任職の事

爰に少貳滿貞の弟横岳孫次郎賴房は、頃日肥・筑の際に徘徊し、一門所々に討たれて後、我が家衰亡に及びし事口惜く思ひしかば、當時は澁河・大內が威强くして、世の大事を思立ち難き時節なれば、兎角に日を暮し、永享五年の冬は、東肥前に忍びてありしが、翌くる六年甲寅正月犇々と思立ち、少貳舊好の輩を相語らふに、高木兵部少輔胤秋・千葉介胤鎭・龍造寺又六郎家季・於保因幡守宗親・小田常陸守貞光・馬場肥前守資幸・江上四郎常種、姉河大藏大夫友安、其外宗・出雲・筑紫・朝日以下一味同心す。賴房大に力を得、探題澁河滿直を攻めむと用意しければ、滿直急ぎ神崎へ出向ひ、横岳以下と對陣あり。斯かる處に同月廿日、滿直不慮の戰に討死せらる。然る間、横岳が從兵、勝に乘り探題方の輩を悉く退治し、賴房頓て東肥前を領知し、文安の末に至り、少貳の代官と稱して三根郡に居住しけり。

満直の子敎直探題職に補せらる

去年より國中牛馬犬狂ひて人を喰ふ事、言語道斷なり。前探題澁河武藏守滿直、神崎の軍に討死の後、九州の探題闕職なりし處に、同永享六年十月十六日、義敎將軍より御敎書を以て、滿直の一子萬壽丸とて、今年十三になられし童形に、先例に任せ探題職に補すべき旨仰下されけり。然る間、萬壽丸則ち元服あり。御諱の字を給はりて右衛門佐敎直と改めらる。斯くて新探題敎直綾部の城に居住し、家人碧海・森戸・足助・齋藤を執權と定め、鎭西の司職懈怠なかりけり。其頃從弟左近將監義俊は、筑後國酒見にありけるが、今年十一月十四日に卒去ありけり。或はいふ、十一月廿一日酒見に於て菊池の爲に討死とあり。

今年九月十三日、佐嘉・香田合戰。

千葉介胤鎭浪人の事

永享九年丁巳、小城天山御池の魚死す。頗る當郡の化異なり。今年の冬、千葉介胤鎭の老臣に、中村左衛門五郎胤宣といふ者あり。聊か主を恨むる事ありて逆心を

千葉胤鎭浪人

挿み、胤鎭の弟彌次郎胤紹を大將に取立て、圭の胤鎭と合戰に及び、度々の軍に打勝つて、竟に胤鎭を追出しけり。其後、中村、大內介を賴み公儀へ訴ひしかば、胤紹則ち當家の嫡流に立つて、先祖相傳の知行小城郡を下し給はり、右京大夫に任ず。又彼の中村も御家人に召成され、小城の郡代と稱しけり。斯くて中村が方へ御敎書を下され、千葉介胤鎭事、多年少貳に一味し、公儀に對し不忠の者なり。速に誅伐致すべきの由仰出されしかば、中村、軍兵を催し胤鎭の在所を尋ね求む。此時の御敎書にいふ。

千葉介胤鎭事、尋二究落所一嚴密可レ被レ致二其沙汰一。若有二許容族一者、可レ爲二同罪一之旨觸二催國中一、於レ令二物騷一者、共以不日可レ被レ加二〔退〕對治一之由被二仰下一也。仍執達如レ件。

永享十年閏正月廿一日　　大和守在判

肥前守在判

中村左衞門五郎殿

斯かりし程に、胤鎭は居所を闇(くらま)まし、山賤の柴の菴に身を寄せけり。然る處に、文

安元年の冬、譜代の家人岩部・仁戸・田原・平田・鍋尼以下の者共相集り、斯くては然るべからずと、胤鎮を大將に仰ぎ恩顧輩駈催して、國府の牛頭城（小城の祇園岳。）へ押寄せむと議す。胤紹・中村是を聞きて、勢を率し合戰度々に及びしが、翌くる文安二年乙丑八月十七日、上佐嘉・春日の軍に、胤紹、大に利を失ひ、國府をさして退きしに、天罰寔に遁れ難く、胤紹年三十八、嫡子政胤幷に中村左衞門五郎立所に討たれにけり。其外、故今川仲秋の子孫今川國治・同子息秋弘、當國に殘居たりしが、胤紹の方人にて、此一亂に討たれしとぞ聞えし。斯くて千葉介胤鎮、頓て國府へ移り牛頭城に入り小城郡を案堵する上、前の探題今川の舊領佐嘉・杵島をも押領して、國中に威を振ひ、享德の頃は已に肥前の國主と仰がれけり。

北肥戰誌卷之五 終

北肥戰誌　卷之六

松浦肥前守義赤烏帽子の事

永享十三年辛酉二月十七日、改元ありて嘉吉と號す。同六月二十四日、公方義敎公を、赤松左京大夫滿祐、己が洛三條の館にて討ち奉り、御舍弟大覺寺殿をも、日向國にて殺し申す。然るに滿祐、身の重科遁れ難く思ひしかば、急ぎ分國播州へ馳下り、白旗城に楯籠りけり。斯くて日本國の大小名、赤松退治の爲め播州へ馳せ向はる。中にも鎭西より發向の諸將には、探題澁河右衞門佐敎直・大内新介敎弘・太宰新少貳敎賴・島津修理亮忠國・伊東日向守氏祐・菊池肥前守武房・大友左京亮親綱・戶次次郎氏世・宇都宮豐前守淸綱・同城井式部大輔安綱・麻生次郎元親・宗像三河守重宗・原田五郎弘種、其外蒲池・田尻・三池・草野・星野・河崎・千葉・高木・龍造寺・宇久・日高・有馬・大

赤松父子誅伐せらる

松浦家赤烏帽子の由來

村・上松浦を初とし、八月半に打立つて播州へ押渡り、九月十三日、白旗城を攻め落し、滿祐父子を誅伐し、亡君の靈前に備へ奉りけり。其中に平戸島の地主松浦肥前守義は、近年在京しけるに、義教公の御愛憐深く、雨の夜・雪の朝御前へ召出され、御恩深き者なりしに、今度將軍不慮の御生害ありしかば、悲歎の涙更に乾かず、急ぎ播磨へ馳せ向ひ、忠戰他に抽んで、逆臣赤松の一類を悉く討亡し、軍散じて後、播州より直に上京し、則ち剃髮して天叟入道と號し、洛中の佛閣へ殘なく詣で、彼の御菩提を懇に吊ひ申しけり。さても此肥前守、平生に出仕しける時、赤烏帽子をぞ著しける。其仔細を尋ぬるに、義教公、猿を御自愛ましく〱、御前祇候の諸大名へ御戲ありて放し懸け給ふ。されば皆人周章てゝ興ある事ども多かりけり。然るに肥前守、件の猿を避けむ爲め、兼ねて工夫を回し、朱塗の烏帽子を著しければ、案の如く彼の猿懼れて近づかざりけり。是よりして平戸の松浦、代々赤烏帽子を著しけるとぞ承る。

松浦家由來の事

松浦家の由來

抑〻松浦といふは、人王五十一代嵯峨天皇第十二の皇子從一位河原大臣融の後胤、渡邊源二別當綱が嫡流なり。融の子を右大臣光と號す。此光は子息宮內卿燈の罪科に引かれて、攝州渡邊に流され、配所に於て卒去せらる。綱は光に四代融には五代の孫なり。然るに綱、堂上に仕へて丹後守に受領し、又故ありて攝津守源賴光の家臣となり、武勇萬人に勝れて、ある時は鬼を伐り變化を討つ。一年賴光、肥前守に任じて上松浦の名古屋へ下向ありし時、綱も供して下り、暫く在國せしに依りて、一人の男子を儲く。名古屋にて出生する故、則ち名古屋次郞授と名づく。其子は後三條院に仕へ、北面にありて瀧口を懸け大夫泰といふ。其子五人あり。一は大夫判官久、二は渡邊總官大夫判官傳と號し、白河院の北面にて弓馬の達人なり。此傳が子孫は、皆源三位賴政の家人となる。三は左馬允至と號す。此至が子孫は甲斐國へ下向し、後に武田の家臣となる。四は勝五源十郞引と號す。中にも長男

の源大夫判官久は、久安元年戊辰、初めて肥前の領知下松浦へ下向し、今福の梶谷城に入り、松浦大夫判官とぞ稱しける。其後、彼の子孫次第にはびこり、上松浦・下松浦と分れて、都合四十八黨となりぬ。所謂波多・佐志・有浦・値賀・日高・八並・牟田邊・馬場・畑島・相知・東中山・黑岩・大河野・木島・隈崎・佐里・石志・大野・鴨打・小濱・大板・世戸・波多津・赤木・長崎・庄崎・寺田・神田・飯田・荒久田・梶山・西山・呼子・寒水井・嚴木・隈辻・西浦・船原・平戸・山代・志佐・峯・田平・御厨・公文・鷹島・瀧口・平野・吉野・有田・鶴田・伊萬里・庄山・志自支・松川と各〻名を分つて、上松浦黨の輩は、鬼子嶽の城波多を以て棟梁とし、下松浦黨の輩は、梶谷の城主正嫡の松浦を以て旗頭とす。此一族兼ねて血判を連ね一味同心しけり。武藏の七黨・肥前の松浦黨とて世に隱なし。

新少貳教頼御勘氣の事

今度赤松追討使の中に、太宰新少貳教頼は、兼ねて御勘當の身にてありしかども、頃日漸く御免なりし處に、幾程もなく、此度赤松誅戮の事に付いて、復御勘氣を蒙

新少貳敎頼勘氣の由來

りけり。其謂を尋ぬるに、彼の敎頼は去る永享の頃、秋月にて自害せし前の少貳滿貞の三男なり。父沒落の時は九歳になり、兄弟同じく對馬に隱れて、宗讃岐守貞盛を頼みてぞありける。然るに兄初法師丸元服して嘉頼と名乘りしが、過ぎし三月五日、年廿一にて早世し、此敎頼は松法師丸とて、今年十八歳になりしを、宗貞盛、少貳舊好の者にて、當家の斷絶を歎き、頃日京都の奉行頭人へ樣々諂諛ひ、竟に御赦免を蒙り元服せさせ、御諱字を申給はりて敎頼と改名し、先例に任せて太宰少貳に補任しけり。然るに敎頼、今度京都の騷劇を聞き、取る物も取り敢へず貞盛を軍奉行とし、兵船數十艘に取乘りて對州を出船し、赤松が楯籠りたる播磨國白旗城へ發向す。斯かる處に、海上にて俄に逆風吹き出し、白浪船を覆ひ洪波原を混して、水主・楫取ともに進退度に迷ひ、忽ち沒して海底に沈むかと肝を冷す計りなり。されども兎角して數日を歷、漸く山陽道へ上り、九月下旬、白旗城に著きしかども、早過ぎし十二日に落城して、赤松一類悉く誅伐ありし後なりしかば、少貳は矢一筋をも射ず、空しく歸陣しけり。大内介持世は、兼ねて少貳を惡む者なりしかば、願ふ所

の幸と悦び、新少貳教頼は公儀を輕んじ、今度播州への出勢遲滯せしめ、合戰をも勵まざるの由、京都に惡樣に注進申す。新將軍義勝公は、未だ御幼稚にて何の御差別もましまさず。奉行頭人も大内介の申す所眞實と思はれしかば、教頼科なくして再び御勘氣を蒙りけり。斯くて少貳は、太宰府の本所へも住居叶はず、又今更には對馬へも隱れ難く思ひし故、肥前國へ退いて、京都の奉行斯波治部大輔義淳・細川右京大夫持久・畠山左兵衞佐持國まで、此度播州遲參の事、全く不忠の所存に候はず、海上の風波凌ぎ難きに依りて、力及ばざる所なりと、再三愁訴ありしかども、是を執する人もなく、彌、不忠の罪に沈みけり。斯くて同年の冬、大内介持世、少貳退治の御教書を給はり、大勢を率し防州山口を打立ち、關口へ渡海して筑前國に著陣す。然るに大内の先勢、早肥前へ討入りしかば、千葉介胤鎭、少貳に一味し、同十二月廿七日、小城の下隈に於て大内方と相戰ふに、中村遠江守討死す。されども千葉介の手の者、合戰に打勝つて大内介の軍兵共、東肥前へ引退く。此時、少貳の一族に馬場・横岳・筑紫・朝日・宗・出雲・江上以下一所に相集り、三根郡に於て大内勢と相

戰ふ。中にも出雲・宗進んで挑み戰ふに、大内介持世疵を蒙り引退く。時に如何なる者かしたりけむ。一首の狂歌を高札に書きて立てけり。

北ぐるとて背中に疵を負ふち殿重ねて恥を嘉吉元年

對州の宗貞盛、少貳と一つになり、中にも自ら手を碎き、北ぐる敵を追立つ。其外松浦黨留主・草野・日高以下、貞盛に續いて戰ひしかば、大内介持世、豐前國へ退きけり。斯くて持世は、九州の軍に打負くる由京都へ聞えしかば、明くる嘉吉二年壬戌の夏、大内新介敎弘が其頃在京してありけるを、重ねて少貳退治とて、九州へ差下さる。敎弘上意を蒙り、則ち七千餘騎を引率し、洛を立つて馳せ下る。先陣は杉豐後守重正・陶越前守弘房なり。既に敎弘の軍兵、豐前へ著船しければ、城井長野馳せ加はり、筑前へ打入りけるに、麻生・宗像・千手・秋月以下參陣し、敎弘既に二萬餘騎になりて、勢堂々と宮崎に著陣し、先づ少貳方の城々二三箇所、不日に攻め落しけり。然るに少貳敎賴は、去冬の合戰に打勝ちし後、近國の輩從ひ附きしかば、大内新介が重ねて攻め來る由を聞き、寶滿岳を本城に構へ、肥前・筑後・筑前の軍を催し集

新少貳敎頼以下對馬に沒落

めて、太宰府に陣を取り、大内勢を待懸けけり。斯くて大内の先陣杉重正・陶弘房、同十月初、大軍を以て三笠に著陣し、少貳が太宰府の陣へ押懸け相戰ふ。少貳方朝日越前守・窪能登守・平井・草壁・上松浦・下松浦・對州の宗・壹州の日高、皆身命を抛つて戰ひしかども、大内勢雲霞の如くにて、終に太宰府の陣を討破られ、寶滿の要害をも攻め落されて、敎頼を初め宗貞盛以下、悉く同十月五日、船より對馬へ押渡りけり。此時、大内の家人より肥前國神崎七山の輩共へ差送りし狀に曰く、

面々御同心にて自然之時可ㇾ被ㇾ立二御用一之由、委細承候。可ㇾ然御連狀之趣可ㇾ致二披露一候。次少貳幷對馬者共、一昨日（五日戌刻。）船乘沒落候。無二是非一候。仍松浦衆中に今度少々敵奔走候方々者、一途可ㇾ有二御成敗一由、探題樣被二仰談一候間、近日一陣可ㇾ被ㇾ召候。於二其方一自然御用候者、御奔走肝要候。時過二而可ㇾ申候。恐々謹言。

十月七日　　宗　親判

神崎七山衆中

斯くて大内新介敎弘は、太宰少貳を追落し、猶其殘黨退治の爲め、肥・筑兩國の際に

在陣して悉く討ち平げ、探題澁河右衞門佐敎直を博多姪の濱の城に居ゑ、陶越前守弘房を宮崎に差置き、仁保加賀守弘直を太宰府へ移し、原田彈正少弼弘種・秋月中務大輔種繁を高祖・秋月兩城に籠置きて、少貳の餘類を押へ、大內介敎弘は頓て防州へ歸陣しけり。

北肥戰誌卷之六終

北肥戰誌　卷之七

少貳教頼御勘氣御免附又御勘當の事

少貳教頼勘氣赦免

教頼また勘當せらる

文安三年丙寅の頃、太宰少貳教頼は、大内介の讒言に依りて、對州へ浪人ありしを、宗刑部大輔平貞國上洛し、義政將軍へ謁し奉り、管領細川右京大夫勝元に屬して、少貳家退轉の事を様々歎き訴へしかば、教頼御勘氣御赦免の旨仰出されけり。貞國悦び急ぎ對馬に歸りぬ。斯くて教頼多年の欝懐を開き、再び家を興して對州を出で、太宰府の館へ歸り入らる。然るに文安六年に改元あつて、寶徳と號す。今年内裏炎上す。此時教頼、紫宸正面の柱の用水に、口三尺六寸の沉香の木を進奏あり。希代の名木なりけり。然る處教頼、翌くる寶徳二年庚午に、又大内介が爲め、太宰府を沒落し、肥前國へぞ赴かれける。其頃當國佐嘉郡小津郷に、龍造寺隱岐守

家氏といふ士あり。先祖累代少貳恩顧の者なりしかば、敎賴、彼等が許へ入來り、一向に賴まれける間、家氏仔細なく領掌して、頓て我が館の西與賀の庄に要害の地を撰び、新城を築き敎賴を移し居けり。

龍造寺家由來の事

抑々彼の龍造寺の先祖を尋ね聞くに、大織冠鎌足公の後胤俵藤太下野守秀郷の末葉なり。代々朝家に仕へ、ある時は北面にありて左右の衞府に任じ、ある時は受領して、伊豆・相模の守となる。然るに秀郷八代の孫左衞門尉藤原季善、仁平元年辛未の春、八郞御曹司源爲朝九州下向の時、尾張守家遠と同じく附從ひ、初めは豐後國速水に下著、爲朝時に十三。比類なき猛將にて、肥後國阿蘇平四郞を先驅と定め、三年の中に九州を切從へ、所々に監代を置かるゝの時、季善、肥前に來り小津鄕龍造寺村に居住す。然るに爲朝、久壽元年の九月、筑前國香椎宮の神主が訴に依りて、父爲義より召返され歸京ありしに、季善は猶肥前に殘り居て、後には龍造寺の

龍造寺家由來

執行職となり、則ち名字を龍造寺と號し、小津郷を知行したり。其子龍造寺南次郎季家、治承四年八月、源頼朝卿義兵の初、家人岩松七郎を山伏に作り立て、天台の僧覺圓と倶に關東へ上せ、右兵衞佐殿に通じて御味方に屬し、元暦元年、平氏西海に沒するの時、三百餘騎を以て豐後の日田へ出向ひ、蒲殿の手に馳付きて軍忠を盡す。依りて文治二年九月廿七日、頼朝公より下文を給はり、當國第一の御家人たるべき旨仰下され、且つ肥前の本領の上、筑前國長淵村の地頭職を給はる。又其孫子龍造寺六郎家益、弘安に蒙古來りし時、壹岐の大瀨門・小瀨門・松島等の浦々に於て、賊兵と相戰ひ軍忠を抽んでし故、筑前國比伊郷・筑後國荒木村を給はりぬ。家益の子左衞門尉家親、少貳入道に屬して、元弘の亂に探題平の英時を誅す。其子民部大輔家平、貞和・觀應の軍に戰功あり。又今川了俊・澁河滿賴に屬し、數度の軍忠之ある故、次第に恩賞を給はりて一族繁榮し、今の隱岐守家氏に至り、武名世上に隱れもなし。

少貳敎頼討死の事

太宰少貳敎頼は、大內介が爲に御勘氣の身となり。太宰府を立退き、近年肥前に在國し、龍造寺を頼み與賀庄に居住ありしに、頃日は譜代の家人も、皆散々になり果て幽閉閑疎の有樣なり。其頃本庄村に鍋島三郎兵衞入道道壽といふ人あり。敎頼さるべき緣あつて、彼の道壽の許へも徒然の折には立寄り交りけり。然るに、應仁二年の冬、大內介敎弘、筑前へ渡海し少貳を誅伐すべしと、已に先陣仁保加賀守弘直馳廻つて、深山幽谷まで隈なく尋ね捜す由、風聞しければ、敎頼斯くては叶ひ難しとて、筑前怡土郡へ打出で、舊好の家人を語らはれしに、所々より馳せ集り要害の地に陣を取る。斯かる處に、中國勢の內より陶越前守が兵、怡土へ押寄せ相戰ひしに、敎頼無勢に依りて利を失ひ、志摩郡へ落行き、同十二月六日、終に討死を遂げけり。行年四十四歲。法名國蕃淨鎭とぞ申しける。

鍋島家の由來

鍋島家由來の事

鍋島道壽と申しけるは、父は長岡伊勢入道宗元とて、元來洛陽北野の人。本姓は佐々木氏なり。永德の初頃、さる仔細ありて、父子同道あり。野田周防守を召具し肥前國へ下向し、先づ千葉家に便り、暫く佐賀郡鍋島村に住居あり。時に本名を隱し、鍋島と在名を稱せられけり。下向の時、北野社を勸請あり。今の鍋島村の天神是れなり。其後千葉家を避けて、龍造寺と親しくなり、本庄村に移住ありしに、少貳敎頼、長祿・寬正の頃、時の變を待つて、與賀の館に居し、平生に參會せられしとぞ聞えし。

千葉家由來の事

文安の末の頃、義政將軍の御治世に當りて、肥前國小城郡の地頭を千葉介平胤鎭と稱す。其先祖を尋ね問ふに、桓武天皇の御苗裔下總權介忠常が子孫、關東千葉の分

千葉家の來由

家なり。右大將家の御時、中祖千葉介常胤、鎭西の監職にて、關東の所領の上肥前國小城郡晴氣庄を給はりしより、子孫代々、當郡の地頭となりぬ。常胤六代の孫千葉介賴胤、去ぬる文永年中、蒙古の武備として當國に下りてありけるが、同十一年の冬、蒙古と相戰ひ疵を被り、其手癒えずして翌八月十三日、小城に於て歲三十七にて失せぬ。其子二人、關東にあり。中新介胤宗は、總領を嗣ぎて下總國を領し、太郎宗胤は肥前國小城を知行しけり。此宗胤、永仁三年正月十六日卒去し、其子大隅守胤貞が時、建武元年甲戌、始めて下總國より肥前の小城へ下向しけるとぞ聞えし。

千葉家威勢の事

大隅守胤貞、小城の所領へ下りし後、程なく建武の大亂あつて、尊氏將軍、鎭西へ沈落ましまし〳〵ける時、胤貞附從ひ奉り、多々良濱・和田御崎の軍に戰功を播し、恩賞を厚く給はりて、太宰少貳と倶に九州に威を振ひ、國府の城に居住しけり。然るに胤

貞、建武三年十一月死去して、其子を刑部大輔胤泰といふ。父の家督を續ぎ高田の城にあり。延文四年の秋、筑後國大保原の合戰に軍功を抽んづ。彼の胤泰の子を右京大夫胤基と號す。其子今の胤鎭なり。然るに胤鎭、永享十年の春、舍弟胤紹幷に家人中村五郎胤宣が爲め、浪々の身となりしかども、頓て胤紹、胤宣を誅し本領國府へ歸入りぬ。斯くて胤鎭、前の探題今川家の舊領をも知行して、國中に威を振ひ、既に肥前の國主と仰がれしが、康正元年六月廿三日病死して、其子を新介元胤とぞいひける。此時の執權は、岩部播磨守常樂なり。然るに元胤、平生に犬追物を好み、國府牛頭城(祇園岳の事なり。)の北に當りて、馬場を構へ是を興行す。仁戶田・鑰尼を初め究竟の射手廿餘人。呼次は死次郎太郎、檣見は垂井因幡守なり。又猿樂を好みて、寛正三年の頃、洛より觀世太夫を呼下し、六十三間の舞臺を用意し、日夜舞樂を翫ぶ。斯此時岩藏寺淨土院の僧と、三間山圓通の住侶と棧敷の上下を爭ひ爭論に及ぶ。斯くて國中の貴賤老若、國府へ群集し、千葉家の全盛此時とぞ見えし。斯かる處に、寛正五年十月廿九日、元胤歲廿八にて早世あり。一子教胤十三歲の冬、父の遺跡を

續ぎけり。時に執權は中村越前守胤賴なり。

河上合戰附今河伊豫守討死の事

天變地妖多し

寶德元年己巳、内裏炎上せしに依りて、同三年〔新カ〕親造御成就の上、年號を改められ、享德に移され、一天下德政あり。國々平均す。然れども夥しく大地震し、三月より六月に至り、如何なる事にや、小兒多く死す。同四年乙亥七月廿六日、康正と改元あり。今年猶凶事のみありて、雷所々に落ちて人多く死し、又大地震す。帝都には昔の蘇我入鹿の屍、和州より入洛すと聞ゆ。同二年丙子惡星出で、五月洪水田畠を洗ふ。斯かる凶惡多きに依りて、程なく改元あつて長祿と號す。今年丁丑和州猿澤の池血になる。同二年戊寅正月廿九日、日輪二つ現ず。同閏正月二日の夜滿月、八月廿四日大風梢を碎く。同三年己卯六月二日、日輪二つ出づ。同四年庚辰改元あつて寛正に移る。今年百日間大雨降り、三月に洪水。八月廿四日、諸國夥しく大風吹き又大水出で、郡縣田畠を損じ、九州はいふに及ばず五畿・七道の飢饉古今未聞、十

月より餓人道路に屍を竝べ、翌年の七月まで猶大飢饉。其上天下疾疫流行、人死する事數を知らず、骸骨彌〻街に充ちぬ。同三年壬午には、四月八日に日輪三つ竝びて出現し、翌未の正月朔日にも、朝日三つ現れ、同月六日にも亦日輪二つ東西に出で、同三月に疾病・時花〔化カ〕人多く死す。近年斯くの如きの天變、如何なる世の騒（さわぎ）かあるべきと、諸國の貴賤足を空にしけり。其頃肥前國佐嘉庄に、今河伊豫守源胤秋といふ者あり。前探題今河右衛門佐仲秋の子にて、千葉とは母方に付いて親しかりし故、當國に留り、前千葉介の憐を以て、探題領の内與賀・河副兩鄕を知行しけり。然るに此胤秋、如何なる仔細やありけむ。千葉家の恩を忘れて、探題澁河右衛門佐敎直の綾部に居られしに牒し合せ、當千葉介敎胤を討たむとする由、小城へ聞ゆ。千葉の執權中村越前守胤頼、其實否をも聞分けず、彼の今河を退治すべしと、寛正六年乙酉五月廿日、急に小城・佐嘉兩郡の間を觸廻すに、小城には岩部播磨守常樂・同名備中守・中村彈正少弼胤明・仁戸田阿波守胤範・同左馬助・中村伯耆守・平田將監・山鹿主税助・堀江和泉守・同助三郎・同伊豆守・同常陸介を初として、南里・古川・江口・東鄕・

栗飯原以下、佐嘉には高木・澁谷・神代等馳せ加はつて、都合貳千餘騎、今河が館へ押寄せ、城を圍みて攻むる事、三日三夜なり。されども今河烈しく防ぎ、結句寄手の中より宗徒と賴みたる中村彈正少弼、城中に一味し、却つて味方を討ちしかば、千葉家の軍兵、利を失ひ河上へ陣を引く。

河上合戰

今河一戰に打勝ち力を得て、同月廿四日の酉刻、河上に到りて中村が陣へ押寄せたり。中村越前守、兵を下知し命を輕んじ相戰ひしに、如何したりけむ。大將の越前守、矢に討たれにけり。是を見て子息彌六郎妙胤を初め、同名伯耆守・武雄加賀守・同大藏允・堀江伊豆守・同名常陸介・同彥太郎・同三郎同森太郎・馬郡對馬守・同大膳亮以下の千葉勢五十餘人、馳入り〳〵討死す。斯かりし程に、今河方にも、今河攝津守・同相模守・同近江守、其外究竟の輩十四人討たれて、六十餘人手を負ひ、日既に西に沒する故、兩陣颯と引退く。斯かる半ば、越前守が弟仁戸田中務少輔と、圓城寺淡路守・山口肥前守・石井越後守等談

越前の亂

合して、雙方和平の論を入れしかば、兩陣軍を止め頓て歸陣しけり。此合戰を其頃兒々の唱に、越前亂といふなり。されば今年は大きに旱魃し、六月十八日より雨一

今川胤秋討死

滴も降らず、七月廿九日に大風夥しく吹出して、大潮漲り上り、肥前の南海より三里上は、船を以て往還す。九州是に同じく田畠悉く溺れ減じ、菓穀共に損るに希なり。斯かりしかば、貴賤の困窮いふ計りなし。然るに九月十三夜は、明月とて老若月を眺めしに、西天に大星流れ、東天に浸りて其音偏に迅雷の如く、見聞く者皆地に臥し氣を取失ふ。近年打續き、斯かる天災古今未だ之を聞かずとぞ人申しける。明くれば寛正七年丙戌、改元あつて文正と號す。今年今河伊豫守胤秋と、千葉介教胤重ねて河上にて相戰ひ、其翌くる應仁元年丁亥六月に、猶雙方の遺恨晴れず、今河より探題澁河の方へ加勢を乞ひ、其上佐嘉郡中の士民を相語らひ、同月廿日、新庄の居館を打立ち、小城境へ出張して、先づ民屋を燒拂ふ。千葉介が家人等、是を見て爰かしこより馳せ集り、同廿一日、今河と挑戰しけるに、今河方打負けて、大將伊豫守胤秋を初め、舍弟右衞門大夫・同次郎大夫・江頭攝津守・同又太郎・猶〔楢カ〕富筑前守・高柳周防守以下佐嘉の輩、歷々皆討死す。斯かりしかば澁河の加勢も、悉く散散になりぬ。此後千葉介、今河が領知をも殘らず知行して、彌〻國中に威を振ふ。

賴朝臣今河胤秋、法名日今と號す。新庄村日音寺に葬る。當寺は胤秋の母法名日音女建立。日音は千葉介平胤基の息女。

千葉介敎胤藤津出張附沒死の事

敎胤藤津に陣

應仁三年己丑の夏、千葉介敎胤、小城・佐嘉の軍兵を相催し、大村日向守家親を攻むべしと、藤津へ發向し、六月十五日濱松に著陣しけり。然るに當日は此所の祇園會なりしに、千葉介の軍兵共、押して社内へ亂入し、神事の儀式を妨げ、剩へ魚肉を取喰ふなど、其體殆ど法に過ぎたり。神官等、大に腹を立て是を制すと雖も、大勢なれば力なし。斯かる處に、不思議や晴天俄に搔曇り、雷天地を響かし、寒雨肌を打つ事篠を突くが如く、東西忽ち暗闇となりて、人心更に迷茫たり。千葉介が軍兵共動轉し、こは神雷の爲め摑み殺さるゝぞ。急ぎ歸陣せよやとて、湊にありける船共に取乘り、國府を指して北げ歸る。然るに海上大波天を混し、暴風逆に吹いて、千葉が船、既に大町庄篠島の沖より八丈島の入江に漕ぎ入りける時、牛頭天王の怒猶止まざるにや。大將敎胤の乘船を忽ち打飜し、敎胤を初め宗徒の家人百餘、水手・楫取

敎胤以下沒死

ともに一人も殘らず沒死しけり。敎胤生年十八歲なり。斯くて當家の嫡流斷絕しければ、一族家人力を落し、或は髻を切りて遁世し、或は領知を捨てゝ行脚となり、千葉家の浮沈此時なりしを、斯くては叶ふべからずと各〻詮議して、同氏右京大夫胤紹の次男胤朝とてありしを、同月下旬、敎胤の遺跡に定め國府へ迎へ入れけり。然るに此時の執權は、岩部播磨守常樂・中村彈正少弼胤明なり。兩人ともに先君敎胤に仕へ、父母の如くに思はれしかば、取分主從の愛好深く、先君不慮の落命を朝夕歎き、施佛供養の外又他事なし。されども家の連續を思ひ、止を得ずして相變らず今の胤朝にぞ仕へける。然るに同年の七月、岩部は佐嘉郡靜謐の爲め府中へ赴き尼寺の館に居住しけり。されば兩雄は必ず其威を爭ふとかや。中村彈正岩部を妬み、時々胤朝に讒言しければ、胤朝是を信用あり、早岩部を誅せむと其用意あり。

土一揆合戰の事

斯くて岩部播磨守常樂は、中村が讒言に依りて、無實の罪を蒙る由聞付けしかば、

土一揆合戰

之を謝すべきため一紙の神文を捧げ、科なき旨申開きしかども、胤朝更に心解けず、彌〻誅罰すべきに極まりければ、岩部爲方なく、太宰府へ訴へ、今少府(マヽ)賴忠（少貳教賴の子、中頃政尙後政資。）をぞ賴みける。賴忠、岩部が申す所、實にもと思ひ、千葉介の訴へ使者を以て樣々宥め申されしかば、其儘にて先づ七八月の兩月は靜謐しけり。斯くて今年、改元あつて文明と號す。然るに岩部は、彌〻府中に居住し、當秋佐嘉北鄕の年貢を免許し、土民を撫育する大方ならず。斯かる處に、千葉介胤朝、猶々岩部を誅戮すべしと思立ち、軍兵を率して九月九日、仁戸田近江守を大將として府中へ差向く。仁戸田郎日尼寺に到り、先づ鬨の聲を揚げたり。然るに岩部が兼ねて撫育せし百姓共、今年の年貢を免され、礑と福祐になりて悅の餘り、今日重陽の酒を呑み醉居たりしが、此鬨の聲を聞きて、爰こそ岩部殿の厚恩を報ずる所よと、鄕民の司三人、山伏・惡僧・百姓共一萬餘人取集め、鯨波を合する事二三囘、山川震動して夥し。仁戸田近江守、思ひしに相違し大に驚いて、敵は大勢なるぞ。退くべしと一戰にも及ばず、河上山田水上山へ引退き、夜中に國府へ北げ歸りぬ。岩部播磨守は、主ながら

千葉介の、罪なき我が身を誅せむとせられし事、口惜き次第よと言訇り、頓て太宰府へ注進し、千葉介退治すべしとぞ申し請けゝる。されども少貳是を免されず。斯かりし程に、岩部は主を討たむとせし八逆の罪人よと、世の人惡む事限なし。然るに中村、樣々計策を以て、岩部に與(くみ)したる土一揆共を賺し語らひしかば、土民百姓の淺ましさは、頓て又中村が申すに同心し岩部を追出す。播磨守力及ばず、府中を立退き高木村に到りて、居所を構へ暫くありけるが、何とぞ我が身の不忠を隱し、再び會稽の恥を雪(きよ)めばやと思ひ、翌くる文明二年庚寅十月十九日の夜、胤朝の舍弟妙法院出家してありしを、俄に還俗せさせ千葉次郎胤將と名乘らせ、是を大將として、扨太宰へいひ送り、少貳政尙（時に改名、前名賴忠。）へ加勢を乞ふ。政尙是を領掌して、家人朝日丹後守・窪甲斐守・武藤左近將監・江上肥前守常種以下、宗徒の軍に軍兵を副へて肥前へ差向け、岩部へ加勢せられけり。中村彈正、此由を聞いて主君胤朝に向つて申しけるは、公、某が申す處を御信用ましまし、岩部を捨てられしに依りて、今此亂に及びて候。然るに近日太宰府の軍兵來りて、岩部に加勢する由、定めて大

勢にてぞ候はむ。然る上は、某十死一生の合戰を勵み、叶はずば討死して、君恩を死期に報ずる外候はずと、十一月十四日卯辰の刻、軍兵を引率し岩部が陣へ押寄せたり。時に岩部が手の者・地下の土民等、正法寺の鐘を鳴らし雲霞の如く馳集り、中村を眞中に押取りこめ、火を出して相戰ふに、中村、一戰に利を失ひ、水上山へ引退く。岩部、勝に乘り水上へ追懸け、山田大願寺の邊にて散々合戰す。中村彈正少弼は、いひける口をや恥ぢにけむ。平松といふ所にて、群りたる敵中へ切つて入り、切死にこそ死にけれ。大將の討死を見て、相從ふ輩も大半討死し、殘る兵僅に五十餘人、國府に退き牛頭城へ引籠る。岩部は軍に打勝ち、兼ねて惡しと思ひし中村が首を見て、悅ぶ事大方ならず。頓て大將胤將を具し國府へ押寄せ、城下の町小路、其外村里民屋悉く燒拂ふ。此時、彥島の蓬萊寺・吉田の圓明寺を初め、神社・佛閣一宇も殘らず灰燼となる。斯くて岩部が手の者、宰府の加勢・土一揆の者共彼此合せて、皆彥島岳へ取登り、峯々に陣を取り牛頭城を攻めむとす。彼の牛頭城と彥島は僅に谷一つを隔て、敵味方の間見渡す計りに近かりければ、城中には岩部今朝や寄する

と、持口を油斷せず。彦島の陣中には城兵、今夜や夜討すと備を固うし、數日をぞ送りける。然る處に、太宰府より重ねて岩部へ加勢として、宗刑部大輔貞國一千餘騎にて來り、十一月廿八日府中に著陣し、尼寺に大昌寺と號す。陣を取る。此貞國は、武勇に勝れしのみにあらず、數代對州を領して、無雙の大福長者なり。斯くて彦島の岩部が陣には、貞國加勢に來り、府中の尼寺に著すると聞えしかば、早牛頭へ押寄せて、卽時に攻め落さむよと悅び居たるに、中々案に相違し、貞國させる儀勢もなく、徒に尼寺に在陣し、只〻日數をぞ送りける。如何なる者や仕たりけむ。一首の狂歌を書付けて、貞國が陣所に立てたり。

尼寺に餘多の宗の集りて墜ちむ巧をするとこそ聞け

貞國、是を無念には思ひしかども、或は草野・原田・大村、敵に與して寄せ來るよ。或は澁河・大內・秋月大勢にて跡を遮るなど、樣々の說ありければ、前後に猶豫して進み得ず。或記には、此時城中より貞國に和を乞ひしとあり。舊記に見えず。斯くて二十日餘り押送りし處に、將軍義政公より其頃諸國へ一人の僧を差下され、國々の忩劇を相止め、天下一統すべき旨御下知

あり。其上使、近日肥前へも下向あつて、當國の騷亂を急ぎ靜謐すべき由、國分の城中へも、彥島の寄手共へも下知せられしかば、上意背き難しとて、雙方卽ち和平あり。十二月廿三日、寄手陣屋に火を懸け、府中を指して引拂ふ。然る處に、城方の鄕民共、其仔細を知らずして、彼の陣拂の火を見付け、すはや彥島の寄手退散するぞ。一人も漏すな討殺せやと、東今山口を差塞ぎ、鬨の聲を揚げて押取卷く。寄手の者共漏るゝ方なく取圍まれ、途に迷ひ右往左往に敗走するを、鄕民共、勝に乘り追臥せ追臥せ首を取る。斯かりし程に、寄手の大將岩部播磨守・同備中守を初め、同名の一族三十八人、他家の兵貳百餘人。其外宰府勢に朝日丹後守・窪甲斐守・武藤左近將監・江上肥前守以下百餘人、貞國が兵百餘人、都合討たるゝ者四百餘人なり。城中の輩、不意の事にて多くの敵を討ち、其中の宗徒を勝り五十餘級、彥島岳の麓の路脇に〔々脫カ〕掛竝べたり。彼の岩部、重代の家人として主を討たむと企てける八逆の罪、立所に報いけるよと、是を惡まぬ者はなし。府中の尼寺に陣したる宗貞國、此由を聞き叶はじとや思ひけむ。明くる廿四日の夜、密に陣を拂ひ北を指して退散す。

国分寺以下兵火の爲に炎上

折節小雨交りに雪降りて肌を破り、寒風肉を劇ぎて堪へ難し。一揆の大將千葉次郎胤將は、聞ゆる精兵なりしかども、敗軍の習ひ弓を引くべき力もなく、主從僅になり果てゝ、金立の方へぞ落行きける。貞國が軍兵は來迎寺白水を過ぎ、河窪に到り、夫より杠山へ入りて山野に身を隱し、其後に太宰府へこそ遁れけれ。此等の者共餘りに周章て、馬・物具・太刀・長刀陣中へ捨置く事、足を踏むべき所もなし。陣屋陣屋の火次第に飛散り、府中殘らず燒失し、さしもの大伽籃と聞えし國分寺・大昌寺・善光寺・寶積寺・北禪寺、兵火の爲に炎上しけり。中にも大昌寺の本尊藥師如來は、往昔聖武天皇の御願行基菩薩の建立、九州一の大佛なり。其外善光寺の如來・國分寺の無上尊・北禪寺の觀世音・寶積寺の多聞天、一夜の中に悉く灰燼となる。是れ皆代々の聖主の御願、權者の作なりしに、淺猿しかりし事共なり。此一亂を其頃土一揆合戰とぞ申しける。

〔文明二年〕同年高來の有馬肥前守貴純も、串山を退治す。此時大村家德有馬に打負け、上松浦の草野へ落ちたりしが、彼の所に於て程なく死去せしとぞ聞えし。

今河義秋討死

同三年辛卯七月十九日、今河義秋といふ者。一揆を企て佐嘉の植木に於て相戰ひ、利を得ずして討死しけり。今年一天下赤瘡流行人多く死す。又十月二日朝、大彗星出づる。其長さ一町程なり。

同九年丁酉二月、千葉介胤朝、藤津郡へ出張し、內田何某を以て大村日向守家親が有尾城を攻む。家親防ぐ事を得ずして沒落す。內田、有尾より陣を歸しぬ。

同十年戊戌五月、洪水。肥後國阿蘇山スカルの橋流る。今年九月十八日、菊池左京大夫重朝、筑後へ討ち入りて、國人等を切從へ當國を知行す。

同十二年庚子正月十五日酉刻、流星出で西方へ亘る。其長き事數丈、色赤くして火の如く、其音水の漲るに似て虛空に暫く鳴動し、滅して忽ち白雲となりぬ。稀代の珍事なり。今年三月、千葉介舊臣中村伊豫守現形す。七月二日大潮。

少貳政尙探題澁河萬壽丸の事

今の少貳政尙と申すは、去ぬる應仁の頃、筑前志摩郡にて討死ありし前太宰少貳敎

頼の嫡男なり。初名次郎頼忠と申しけり。大内介の事に依りて、多年對州に蟄居し、宗刑部大輔貞國を頼みて居られしを、過ぎし文明元年正月、貞國様々京都へ諂ひ、將軍義政公へ訴へて、漸く御前を申直し、本府へ歸り入るべき旨、安堵の御教書を下し給はりぬ。彼の貞國が領對馬といふは、高麗國に隣りし故、常に船を渡して、異國の珍器・織物其外寶物等を種々求め得、限なき福貴の者なり。然るに貞國、今度少貳家再興の事を大に悦び、且は我が身の面目と思ひしかば、如何にも其粧を刷ひ、靚船百餘艘を艤し、五十餘里の灘を順風に帆を揚げ、博多津に著船して、則ち頼忠を太宰府へ安堵させけり。少貳、本府に歸城の由聞えて、重代の家人等所々より馳せ集り、其勢龍の水を得たるが如くにて、攻めざるに敵城豐・筑の間、一日の中に廿一城沒落す。斯くて頼忠、同年の五月上洛ありて、義政將軍に謁し御禮を遂げ、諱の字を給はりて政尙と改め國へ下りぬ。然るに政尙、再び家を與し太宰府に居住し、政資と改名して、宗佐渡守盛見・同遠江守貞房兩人を執權と定め、筑前・肥前・豐前・壹岐・對馬五州の太守とぞ仰がれける。然るに政資、次第に權威に募り、樣々

少貳政尙の專恣

の奢ども多かりけり。中にも宗像の大宮司が許に、代々相傳の寶物あり。其内に金の猫のありしを、政資わりなく所望す。大宮司辭し難く是を遣しぬ。少貳重ねて今一匹あるべし。夫をも得させよといひやりけり。大宮司大きに腹を立て、ありしに任せて一匹はさもこそあらめ。なき物を乞ふ事の奇怪さよ。己七代末孫滅亡さすべしと齒嚙をなし、神前へ參り小指を喰切り、流るゝ血にて社壇の扉に、一首の歌を書く。

根を斷たば末は絕えけり藤原を何少貳とて切捨てぞする

と少貳を咒詛し、腹掻破りて臥したり。餘りに責め乞はれてぞ恨みける。是のみならず、政資威勢の餘り、上松浦青山城主留主左衞門大夫を、少しの科に事よせて所領を沒收し追出す。留主大に憤り、急ぎ中國へ立越え、大內介政弘へ事の仔細一々訴へけり。大內介聽て義政公へ言上す。斯かりし程に少貳、又御勘氣を蒙りて太宰府を出で、肥前國へ赴き、亡父敎賴の居られし與賀の庄の舊地を點じ、己が居城とせらる。文明十四年の春の頃なり。此時、同國綾部の城に澁河萬壽丸といふ人あ

澁河萬壽丸没落

り。前探題右衞門佐教直の子なり。父死去の後十二歳にて家を相續し、郎從の森戸・齋藤・足助・碧海を後見とし、今年は十五歳なり。先祖累代鎭西の司職にて、大内介と同心し、少貳と合戰度々に及べり。然るに政資、文明十四年の秋、軍兵を率して綾部城へ押寄せ、澁河と相戰ふ。城兵利を失ひ防ぐ事を得ず、萬壽冠者は筑前國にぞ落ちられける。此事、大内介より公儀へ言上ありしかば、早速澁河へ合力すべき旨、近國の御家人へ御内書下り、少貳叶ふべき樣あらざりければ、何方ともなく落失せけり。此時、澁河に給はりし御教書に曰く、

太宰少貳政資事、發二向綾部城一間、爲二合力一先度被レ成二奉書一訖。所詮於二政資一者可レ加二退治一之旨、被レ仰二付大内左京大夫一之上者、不日尋二捜落所一誅二伐之一、可レ被レ致二忠節一之由、所下被二仰下一候上也、依執達如レ件。

文明十五年十月廿五日

前大和守判

上野介判

澁河萬壽殿代

とぞ仰下されける。されば當世樣々の謳說、自他の耳にあつて、大內介政弘も、萬壽丸に對し異心ありと聞え、此事に付きて大內家の老臣共より連署を以て、澁河の方へ申送りし書に曰く、

就雜說之儀御使之趣驚存候。鎮興寺殿樣任仰置候聊不存緩急候。八幡大菩薩可有照覽候。更非虛言候上者、彼仔細一切當方不存知仕候。以此旨可然之樣可有御披露候。恐々謹言。

十一廿八日　三川前司重隆判

左衞門尉武道同

散位　經房同

左衞門尉弘相同

彈正忠　弘矩同

謹上　森戸　修理進殿

碧海民部少輔殿

斯くて萬壽丸、筑前國岩門の内龜尾城に移住しけるが、長享元年十二月十日、如何なる仔細やありけむ。家人足助森戸が爲め、生年廿歳にて生害ありけり。其頃少貳政資は、太宰府に歸入りて居たりしに、此事を聞き能き變なりと思ひ、宗播磨守を大將とし龜尾城へ押寄せ、不日に攻め落し、森戸修理亮を初め城兵十餘人の首を斬り、夫より筑紫下野守滿門・馬場肥前守經周・大窪伊豫守經康を以て、探題の末子澁河刀禰丸の居たりし綾部の城に取懸る。刀禰王未だ幼稚の大將にて、城中堪へず沒落し、筑後國へぞ落行きける。此時、少貳政資より神崎山の住人杠日向守へ送りし狀に曰く、

去十七日龜尾城切捕候。敵城杜〔主カ〕森戸修理亮爲㆑始十餘人討捕候。宗播磨守爲㆓人體㆒馳㆓越高名㆒候。馬場肥前守・筑紫下野守以下總勢あやべのしろへ、十八日未明差寄候。彼敵城内申談族候間、當日可㆓落著㆒候。至㆓早良・横山・大窪伊豫守㆒爲㆓先勢㆒申付候。此時馳走憑入候。委細經康可㆓申談㆒候。恐惶謹言。

七月廿六日　政資判

紅日向守殿

文明十四年壬寅五月廿七日、周防國山口大內介の城內にて、吉見三河守勝賴と、陶尾張守弘護喧嘩を仕出し、當座に兩人刺違へて死にけり。時に吉見が家人等十八人、營中に切入り卽時に切死す。依りて山口の城下大に騷動しけり。彼の吉見は清和天皇の正統蒲冠者三河守範賴の嫡孫石州津和野の城主なり。陶は大內の庶流にて、百濟國の齋王に廿四代の苗裔、兩家ともに和漢の貴族にてありしが、計らず先祖の高卑をいひ出し、座席の上下を爭論して、喧嘩に及び刺違へけるとぞ聞えし。

同十七年乙巳、千布の住吉大明神の社、頃日の兵亂に破壞に及びしを、神代大和守再興す。同五月二日、肥後國阿蘇大宮司惟忠卒去し、同國久麻の相良討つて出づ。

千葉家繼目少貳の事

文明十八年丙午五月十七日・十八日洪水。豐後・筑後・肥前國の人民牛馬流れ死する

千葉胤攷舎弟胤將に討たる

成松章數討死

事、其數を知らず。然るに今年十月三日の夜、小城千葉介胤朝、舎弟胤將に討たれぬ。彼の胤將は、去ぬる文明二年の軍に敗走して、其後は深山幽谷に隱居けるが、其無念を晴さむと時節を待ち、此度ひし〳〵と思立ち、一味同心の者を相語らひ、急に國府へ取懸け夜討にぞしける。胤朝討たれて家人等途方にくれ、心々に成果てゝ、千葉の本家、既に絶えなむとす。其頃少貳政資は、肥・筑の際を切從へ、宰府の本所へ安堵せしが、胤朝の討たれし事を聞き、本意なき仕合に思ひしかば、彼の惡黨次郎胤將以下の輩誅伐すべしとせられし處に、胤將は逐電に及び、同類皆落失せけり。其中に成松宮内少輔章數といふ者あり。神崎庄に居たりしを、少貳方より討手を差遣し討取らむとす。成松も剛の者にて散々に相戰ひしが、多勢に取籠められ、痛手餘多蒙りしかば、是までとや思ひけむ。櫛田宮へ走り込み腹掻切つて臥したり。斯かりし後は、胤將が與黨も散々になりて靜謐しけり。斯くて少貳は、千葉家の斷絶を歎き、同十二月三日、己が弟を肥前へ差越し、胤朝の女の一人ありしに嫁して、彼の名跡とし、千葉肥前守胤資とぞ號しける。爰に又其頃千葉介與常と

千葉兩家の不和

いふ者あり。其父は胤盛と號して、胤朝の弟胤將には兄なり。胤盛は兄よりいと早く死去しぬ。興常は若年なりしを、家人共撫育し胤棟と號して、大內介義興を賴みて居けり。然るに義興、頭目是を加冠し、興常と改名せしめ、小城郡赤目の城にあり。此興常、嫡家の胤朝今の胤資とも中よからず。其故を聞くに、千葉は元來少貳と睦しく、偏に一族の如し。又大內、少貳は怨敵なり。然るに興常は大內介に從ふ故、本家の千葉とは中惡しく、是より千葉家二つに分れ、敵味方と爭ひて互に刃を礪ぎけるとなり。

少貳政資出張附箱崎八幡社家炎上の事

長享三年改元して延德に移る。今年己酉十一月廿三日、太宰少貳政資筑前を打出で肥前國養父の城山に於て、澁河刀禰王丸と相戰ふ。澁河方には千葉介興常馳せ加はり散々戰ひしが、澁河利を失ひて兩家の軍兵多く討たれ、刀禰王丸は筑後國へ引退き、犬塚の城に籠られけり。夫より政資、豐後の大友政親と牒し合せ、翌れば

延德二年庚戌西肥前を打從へむと、先づ下松浦の伊萬里へ討つて入る。時に松浦黨の輩伊萬里右京大夫・山代豐前守以下皆降參す。政資取つて返し、東肥前を征して筑後國へ發向す。爰に於て大友政親、豐府より來つて少貳と一つになる。是を見て當國の城持草野・星野・蒲池・田尻・黒木・河崎・西牟田・酒見・諸富・鐘ケ江・城島・大木・三池我れ先にと馳せ加はり、其勢雲霞の如くなつて、先づ澁河刀禰王丸の籠られたる犬塚の城を追落す。其外は少貳・大友を背く輩あらざりしかば、大友は頓て豐府へ馬を返し、少貳は宰府へ歸り入りけり。四年壬子七月十七日改元、明應と號す。今年の夏、大内介の家人周防國陶六郎、筑前へ渡海し、五月二日少貳政資と箱崎に於て合戰す。此時當所の社家七町、兵火の爲に燒失し、打殺され燒死する者貳百三十七人なり。去ぬる永享年中より、此所燒失兩度に及びぬ。

少貳政資父子討死の事

太宰少貳政資は、去ぬる延德二年に、下松浦の輩は討ち從へぬ。是よりは上松浦を

少貳政資松浦に出陣

攻むべしと、明應三年甲寅正月、鏡通を過ぎて上松浦へ發向す。舍弟千葉肥前守胤資・龍造寺隱岐守康家・高木兵部少輔家重・於保・澁谷・內田・江上以下肥前の輩馳せ付きて、其勢夥しく松浦へ著陣す。斯かりしかば波多・鶴田・相知・有浦其外の松浦黨共、攻めざる前に附從ふ。政資力を得て、留守左衞門大夫永恒が青山の城に押寄せ、不日に攻め落し、夫より引返し筑前の內に入り、怡土郡に到りて高祖城に押寄せ、原田彈正少弼興種を攻めて相戰ふ。此半ば高來の有馬佐渡守貴純も、少貳へ同心して、安德・多比良・安富以下を相語らひ、下松浦へ討ち入り在陣し、佐々城を攻め破り、平戶の城を取圍む。城主平戶源三郎弘定、四月四日竟に降參す。斯かりしかば、貴純則ち平戶島を知行しけり。此時政資、有馬が軍功を賞して、白石・長島兩庄を充行ふ。大內介義興、政資の振舞を委しく傳へ聞いて、奚少貳御勘氣の身として、公儀を輕しめ、私に弓箭をなす事心得ず。急ぎ吉木御所へ言上申し、少貳が一族悉く誅伐すべしと、將軍義尹公、其頃淡路島へ御下向ありしに、一々披露せしかば、則ち少貳一家の者共退治仕るべき由仰出されけり。斯くて大內介、既に少貳追討の

大内介義興少貳を攻む

大内少貳合戰

上意を蒙りて、明應六年正月初旬、四國・中國を觸廻す。石州に吉見大藏大輔正頼・三隅・成合の一族、藝州に熊谷小次郎膳直、備後に小早川備後守詮平、周防に陶の一類仁保加賀守・杉紀伊守・同豐後守・相良左衞門尉を初めとし軍將十二人、雜兵都合二萬餘騎、早速馳せ付きぬ。扨赤間ヶ關を將軍の御陣と定め、大内介義興自ら渡海して筑前國へ討入り、中にも杉豐後守興正、先陣に進み穗並郡へ押來り、要害を求め陣を取らんとす。斯かる處に、少貳の嫡男新少貳次郎高經、興正が未だ帷幕も打たず、備をも設まぬ所を不意に懸りて擊ち戰ふ。興正、散々利を失ひ忽ち討死しければ、其一列既に敗〔脫アラン〕せんとす。是を見て二陣に續きたる陶尾張守・熊谷小次郎入替りて相戰ふ。爰に於て新少貳、打負けて太宰府へ引退く。大内勢勝に乘り、其勢五萬餘騎、唐菱の旗を進めて箱崎へ攻め來る。時に少貳父子相議して、軍を二つに分け宰府を退き、政資は岩門の城に楯籠り、高經は勝野尾城に入りて大内勢を待懸く。斯くて大内の軍兵、勢龍の水を得て則ち太宰府へ入替り、爰を本陣と定め、陶尾張守興房・同安房守を大將とし、其勢二萬餘騎。勝野尾城へ向ひ、又陶彈正忠を以て是

義興岩門勝野の兩城を落す

も二萬餘騎、岩門の城へ差向けて政資を攻めしむ。城兵、大城戸を持つて破られず。されども寄手、目に餘る大勢にて、少貳の一族十餘人同じ枕に討死し、雜兵大半討たれしかば、終に城を攻め落され、政資は密に城を出でて、舍弟千葉肥前守胤資の小城晴氣の城へぞ入りにける。扨陶尾張守・同安房守は、本山に陣を取り、瓜生野口より勝野尾へ押寄す。頃は正月十一日なり。城中の兵、命を際に防ぎ戰ひしかども、竟に討ち負けて、筑紫下野守滿門・東彈正少弼尙賴が兩勢多く討たれ、滿門・尙賴大内に降參す。高經、今は叶ひ難く勝野尾の城を落ちて、神崎松崎庄勢福寺城（城原といふ。）へぞ入りにける。斯くて大内勢、岩門・勝野兩城を攻め落し、三月下旬、肥前國へ討ち入りて、高經の居たりし勢福寺の城を攻む。高經防ぎ難くして、四月八日城を出で小城へ落行き、晴氣の城に入り、又政資と一つになる。扨中國の軍兵に千葉介興常馳せ加はりて、同月十三日、晴氣の城に押寄せたり。先陣には興常が手の者中村三河守にて、鬨の聲を揚げ夜晝五六日息をも續かず攻め戰ふ。然るに城中、次第に賴なく見えける間、同十八日城主胤資、兄政資に向つて申されしは、城兵日々

に討たれ滅じて、持口危く見えて候。同名興常、敵に加はりて候へば、某が家人とても敵の方へ心を撲し、逆心の者もや候はむ。油斷すべきに候はず。一先當城を御出あつて、山傳に多久へ赴き給ひ、藤兵衞を御頼みあれ。少貳舊好の者なれば、彼の宗時、よも別心は候ふまじ。早御急ぎ候へと申されしかば、政資力及ばず、胤資の諫に任せ忍んで多久へ志し、十八日の夜、晴氣の城を出で山傳に落ちて、多久藤兵衞尉宗時をば頼まれけり。斯かりし程に、新少貳高經・同舍弟頼高も晴氣を出で、翌くる十九日、頼高は松尾にて千葉介興常が者共に討取られ、高經は家人杠平右衞門・三郎次郎淳悅主從四人にて、北の方石臺越に懸り、市の川まで落延びたりしを、敵猶追懸けしかば、是を防がん爲め、杠平右衞門も討死す。高經、今は遁れぬ所よと、同廿一日市の川の山中にて、とある木隱に立寄り、懷中より矢立取出し、辭世と覺しくて、

風吹けば落椎ひろふ松の下あらぬ方にて身をば捨てけり

と首の歌を書付け、鎧脱捨て腹搔破つて臥しけり。生年三十六歲なり。附從ひし

者共も、あそこ爰にて敵に遮られ、主の自害を知らざりけり。高經法名大幢本高と號す。されば文祿の頃とかや。其靈魂、神崎廣瀧山に現れ、樣々の不思議多かりしかば、當國の大守より奏聞を遂げられ、則ち正一位を贈られて大明神と崇められ給ふ。肥前國境原社是なり。舍弟賴高も亦神と現ず。小城松尾明神〔是脫カ〕なり。

或はいふ、高經、此時勢福寺の城より出で、廣瀧山へ入り自殺せられしと、非なり。

神崎山中廣瀧邊は、少貳の領知なる故、其靈現じ神に崇むべき由告げられけるか。

千葉胤資討死

同十九日、千葉肥前守胤資は、少貳父子を落して心易く成り、城戶を開き切つて出で、大內勢に駈合はせ切死にこそ死にけれ。胤資討死しける上は、晴氣忽ち落城す。斯くて大內の軍兵共、政資の多久へ落しを如何にして聞出しけむ。十九日晚、勢を分つて押寄せたり。彼の梶峯城主多久藤兵衞が娘は、政資の妾にて日頃はさしも賴もしく見えたりしに、賴み難きは世の習にて、宗時いつしか心變じ、政資に

少貳政資自害

大內義興山口へ歸陣

近づき早自害あるべき由勸め申す。政資其意を悟られしかば、打頷きながら、一首の辭世に斯く計り、

花ぞ散る思へば風の科ならず時至りぬる春の夕暮

と打ち吟みて、靜に腹をぞ切られける。維時明應六年四月十九日、行年五十七。法名明哲本光とぞ申しける。されば此政資は優艶き人にて、平生に敷島の道に心を寄せ、一年の冬の日の連歌の會に、「朝鳥の霜夜に睡る日影かな」といふ句を出されしより、此人を朝鳥の少貳とぞ申しける。昨日まで五州の大守と仰がれしかども、今日黃泉の旅に赴きしには、屬從ふ奴子一人もなし。〔脫アルカ〕宗時を惡まぬ者はなし。然るに大內介義興は、少貳一家を悉く誅罰し、肥・筑兩國靜謐しければ、今度軍忠ありし輩を各〻賞せらる。先づ千葉介興常を肥前の守護代とし、東彈正少弼尙盛に、千葉胤資の舊領肥前佐嘉郡の內を充行ひ、筑紫下野守滿門に同國三根神崎兩郡を守らしめ、杉越前守興連を太宰府に置き、陶彈正忠を博多へ移して、各〻九州を警衞せさせ、其身は防州山口へ歸陣ありけり。義興聽て從三位太宰大貳に任ぜらる。少

貳追罰鎭西靜謐の賞とぞ聞えし。

北肥戰誌卷之七終

千葉胤繁小城郡に歸入る事

明應七年戊午二月、肥前國千葉胤繁小城郡に歸り入る。此胤繁は、去年四月晴氣の城にて、大內勢に攻められ討死しける千葉肥前守胤資が養子なり。父討たれし後は、爰かしこに立忍び居たりしが、頃日大內勢、豐後へ攻め入り、大友豐前守政親と相戰ひ、立つ足もなく敗れて引退く。其弊に乘じて、胤繁、此度本領に歸り入りけり。此事、肥・筑にありし大內方の輩傳聞き、其儘にて差置くべきにあらずと評議して、筑紫下野守滿門・東彈正少弼尙盛、軍兵を率し小城へ發向す。胤繁、無勢に依りて防ぐ事を得ず、小城を退き下佐嘉の河副に到りて、舊好の武士を相語らひしに、龍造寺豐前守胤家・光益出雲守光廣・大田和泉守・維谷河內守・壬生新左衞門・鏡山平

千葉胤繁大內勢に破らる

右衛門、其外諸富・南里・鹿江・石井以下の者共馳せ集りぬ。斯くて筑紫・東に、千葉介興常一つになり其勢を合せ、二月廿四日河副に取懸け胤繁と相戰ふ。大內勢は雲霞の如くにて、胤繁竟に利を失ひ味方散々に敗走し、其身は漸く遁れ、舍弟胤治・龍造寺胤家と共に、筑前の方へ落行きて山中に隱れ住みけり。此後は千葉嫡流、暫く小城を知行せず。少貳の子孫とても有るか無きかに成果てゝ、肥前國先づ靜謐す。

澁河刀禰王丸探題職に任ずる事

明應八年己未の頃、前探題澁河右衛門佐敎直の末子刀禰王丸は、東肥前園部の城にあり。此人、近年は少貳・大友が爲に側められ、幽なる體なりしを、先祖代々の任職なりとて、大內介義興、是を吹擧し將軍家へ訴へしかば、頓て元服の上、探題に補せらるべき旨上意はありながら、未だ御內書は下らざりけり。然るに翌くる明應九年庚申の春、將軍義尹公、大內介の城下周防國山口へ移らせ給ふ由聞えしかば、刀禰王丸、其御祝儀の爲め、矢俣越前守を防州へ差上せらる。此時、義尹公より澁河へ

澁河刀禰王丸鎭西探題に補せらる

給はる御書に曰く、

至二防州一下向候了。被レ致二忠節一者尤可レ爲二神妙一候。猶大内左京大夫可レ述候也。

四月十日　　御判

澁河刀禰王丸どのへ

又大内介よりの副書に曰く、

將軍家至二於當國一就レ被レ遷二御座一候上賀御申候趣致二披露一候。仍而以二御內書一被二仰出一候。尤御祝著之至候。此等之次第。定而矢俣越前守可レ被二申一候。恐惶謹言。

卯月廿四日　　義興判

探題人々御中

斯くて刀禰王丸、元服あつて義尹公の御諱字を給はり、右兵衛佐尹繁と改め、先例に任せられ、鎭西の探題職に補せらるゝの旨、御敎書を成下されける。其御書に曰く、

鎭西探題職事所二補任一也。彌ゝ任二先例一可レ致二沙汰一之狀如レ件。

明應九年八月十二日　　御判

澁河右兵衞佐殿

尹繁、既に新探題に任じ、其威漸く耀きて父教直の遺跡を續ぎ、彌、園部の城にあり。碧海遠江入道道賀・齋藤中務大輔基久・國木原右京亮蓮淸・香月雅樂助基歳・加賀次郎大夫氏伴等を以て肱股とし、九州の政務を司られけり。

龍造寺家和將軍家へ出仕附剛忠萬部〔修行脫カ〕の事

後柏原天皇即位

去年より九州大に飢饉し、人民多く餓死す。又今年も、三月より五月の下旬に至り、雨一滴も降らず。八月二日大風夥しく、大水山林を洗ひ、十二月除夜明くれば、黑髮山の上宮何なく燒失す。翌明應十年辛酉、改元あつて文龜と號す。四月廿日、大雹降る。大さ栗の如し。今年諸國大に福〔富〕貴す。人皇百五代後柏原院御即位まします。同文龜二年壬戌、肥前國龍造寺隱岐守家和といふ者、千葉介興常の吹擧を以て、將軍義尹公へ御禮を遂ぐ。此家和は、前隱岐守康家の子にて、累代佐嘉の城に居住し、本領は佐嘉郡の內小津鄕龍造寺村八十町・本庄八十町・與賀庄千町六鄕。先祖

龍造寺家和加恩の地を給はる

相傳の地なり。然るに家和、軍忠あるに依りて、今年正月小城郡の内光武分八十町・佐嘉郡の内下賀瀨百町・有重十貳町・法成寺十六町を加恩せられ、同月十六日に御禮を遂げ申しけり。家和に兄弟七人あり。一は豐前守胤家。是は仔細あつて千葉に隨屬し嫡家を繼がす。二は女子にて、內田左京亮に相嫁す。三は今の隱岐守家和、四は寶琳坊の住持澄覺法印、五は大炊助、六は孫九郎家兼、七は水上山の住持天享長老なり。其中に、家兼は專ら佛神を尊崇し、永正二年乙丑の三月に、己が水ケ江の城內に於て百人の僧を請じ、天享長老を以て導師と定め、法華經一萬部を讀誦しけり。子孫の繁榮を祈るなるべし。此家兼、中頃は兵庫頭と號し、後に山城守と改め、老年に及びては入道し、剛忠とぞ申しける。母は太宰府の小鳥井法橋當信元の女なり。隱岐守家和、父の家督を繼ぎ新恩の地を給はりて大身となり、公方へ御禮を遂げて後、當家次第に秀で、一門國中に肩を張りけり。

剛忠入道萬部修行は兩度なり。右永正二年の萬部は、初度の萬部なり。

千葉胤繁歸國

千葉胤繁歸國并少貳資元家を興す事

小城郡千葉介胤繁は、兄弟倶に去る明應七年に、大内義興の爲め河副の軍に利を失ひ、筑前の國へ山中しけるが、時を窺ひ頃日肥前に歸入り、小城の高田の古城を取立て在城しけり。時に龍造寺豐前守も、同じく屬して歸國す。然るに千葉介、東には大内・澁河を敵に受け、南には澁江を敵として、何とも難儀なりしかば、其頃、上松浦の鴨打美濃守秀が勇武の聞ありしを傳聞き、是を蘆刈に招きて領知を與へ、其子筑前守を聟に契約して、西の方の敵を防ぎ給はるべき由深く頼み、其外德島は一族なればいふに及ばず、空閑・前田以下歴々の郷士を味方に語らひ、或は所領を得させ、或は千葉家の平氏を免して、佐留志・蘆刈の間に差置き、鮎川・櫻井等の家人を砥川に居〔置カ〕て各、下知を加へ、西の方の敵澁江公直を押へ、扨龍造寺豐前守を初め、堀江・鹿江・南里・澁谷等の味方を以て、東の敵大内・澁河を守らせけり。爰に又其頃、故少貳政資の末子あり。去る明應年中、父討死の時は僅に九歳なりしを、一族横岳兵庫

頭資貞、是を隱して三根郡西島の城に成長しけり。然るに永正の初頃、宗・横岳・出雲・朝日、此冠者を大將に取立て、大友親治を賴みしかば、大友も內々小貳家斷絕の事を歎き思ひし折節にて、仔細なく肯ひ、頓て公儀へ訴へ御赦免を蒙り、彼の冠者を元服させ、廢れたるを興して、太宰少貳資元と名乘らせけり。斯くて資元、重代の家人幷に大友の加勢を以て、東肥前に旗を揚げ、先づ神崎勢福寺城に、江上興種が近年大內方になりて居たりしを、一戰の中に追落し、其儘入替りて在城とし、扨探題右兵衞佐尹繁の、頃日は綾部の城にありけるを追落さんと、小城へいひ送り、千葉介胤繁と勢を合せ、大手・搦手二つに分れ、少貳は手勢二千餘騎、綾部山白虎城へ押寄せたり。探題の兵是を防ぎ兼ね、攻口既に破れしかば、城兵散々になりて、右兵衞佐尹繁は、筑後國へぞ落ちられける。斯くて資元、探題をも攻め落し大に力を得、馬場肥前守經周を以て當城を守らせ、其身は勢福寺へ歸城ありけり。其後少貳は、此勢福寺を居城と定め、千葉は高田に在城す。斯かる處に永正三年十月、筑紫下野守滿門、急に小城へ攻め來り、十七日の夜より高田の城を攻めて、同十八日の

少貳資元斷絕の家を興す

夜攻め落す。城主胤繁は密に遁れて出奔せり。

大友義長
嫡家を相
續す

大友義長嫡家を繼ぐ事

頃日、豐前國の大守を大友五郎義長といふ。是は嫡家にあらず。前大守豐前守政親の弟、備前守親治の子なり。然るに總領の政親、父親繁の家を繼ぎて後、城井右衞門佐・長野壹岐守等、又敵を討ち從へ、豐前國をも手に入れ、九州に威を振ひしに、如何なる仔細にやありけむ。嫡子修理大夫義右と不和にして、過ぎし明應元年六月十日、筑前國立花城巡見の時、赤間ケ關の船中に於て不慮の横死に及びけり。茲に因りて豐府騷動しける半ば、大内介義興、其弊に乘じて豐府を攻めむと押渡る。義右是を防がむ爲め、豐前國へ出向ひ合戰に及びけるが、父を殺しゝ天罰、なじかは遁るべき。幾程もなく同七月廿七日大内勢に討たれけり。斯かりし間、當家の總領既に〔斷脱カ〕絶しけるを、譜代の家人戸次・臼杵・田原・齋藤以下談合し、今の五郎は庶流にてありしかども、嫡家に立てゝ是を大守と仰ぎ、大膳大夫義長とぞ名乘せける。隣

大友妙見城を攻む

國大友旗下の侍、是に背かず悉く相從ひ、豐府穩なりし處に、筑後國生葉郡妙見城主星野常陸介・調重泰、大友が下知に從はず。剩へ居城に楯籠りて豐府の道を斷ちけり。斯かりし程に、永正四年三月、大友一萬餘騎を率して筑後へ發向す。此時、少貳資元も馬場・横岳・宗・出雲・江上・姉河以下を召具し、大友加勢の爲め、神崎勢福寺の城を發して、筑後生葉に著陣あり。大友、肥前勢を合せ妙見城へ押寄せ、城下を悉く放火して夜晝相戰ひしかども、當城は聞ゆる嶮難の要害して、容易攻め登るべき樣もなく、其上星野の一族黑木・井上・井手・增田以下究竟の者共、城中にありて坂下へ討つて出で防ぎ戰ひしかば、寄手あぐみて日を送りぬ。然る處に、城中に異心の者あつて、大將重泰を殺し、其首を寄手へ送り、降參の旨を申し遣しける程に、大友是を幸に則ち是を免しぬ。されども彼の星野氏は、先祖物加波藏人助能、高倉院に仕へて、德大寺の左府の吹擧を以て、名譽の笛を吹き、世に知られたる者の子孫なれば、其家を絶さむは本意にあらずと、星野の一族の中同名筑後守親實を以て、重泰が一跡にぞ定めける。扨大友も少貳も各々國に歸陣せしに、頓て將軍家より御內書

将軍義尹の内書によりて九州一時平和となる

を以て、九州の諸侯大友・少貳・菊池・伊東・島津・澁河、別しては大内介義興の許へ、急ぎ私の宿意を忘れ、鎭西の弓箭を靜謐すべしと仰下されける程に、台命背くべからずと各〻領掌申し、大内は少貳と合戰を止め、島津は伊東と憤を押へ、澁河は少貳・千葉介に對して中和しければ、九州少時平均の體にて靜なり。此時大友義長、從四位下に任〔敍〕し、少貳資元肥前守になり、菊地義國を肥後守に改め、千葉興常に屋形號を給はりけり。同年二月二日、肥前國には高來の有馬左衞門佐尙鑒が軍兵、横邊田へ攻め來り、千葉衆と相戰ひ、宗徒の者共多く討たる。又大村日向純治も、頃日千葉介・後藤伯耆守が爲め本領に放れ、他郡に徘徊しけるが、是も今年の春秋、長島の澁江右馬頭公勢に加勢を請ひ、有馬と引合出張して、隈口の合戰に千葉勢を切崩し、其勢に乘じて本領に歸り入りけり。されば又今年は様々の凶のみありて、夏秋の間萬民惱み煩ふ事、貴賤老若をいはず。是を名づけてねぢ煩をも又すびき煩ともいひけり。二月八日より三月十日まで大地震止まず。

義尹將軍御歸洛の事

其頃島の御所義尹將軍と申すは、清和天皇廿一世の後胤、足利尊氏卿には六代の御孫、前將軍大納言義視の御子。御母公は裏松內大臣藤重政の御息女。當公方義澄公とは御從弟なり。然るに近年、義澄公の爲め洛を沒落あつて、大內義興を御賴みあり。初は防州へ御下著ましく〳〵、其後四國・中國の間に御座ありし故、島の公方とも申し、又吉木の御所とも申しけり。斯くて今年永正五年戊辰正月、義尹公、大內介の馳走を以て御歸洛あるべしと聞えしかば、大內介はいふに及ばず、九州の大名皆御供申す。（西國太平記には文龜五年二月とあり。非なり。）其人數には、先づ筑前に秋月土佐守種貞・原田彈正少弼興種・麻生右衞門尉元重・高橋參河守親種・立花但馬守親載・宗像掃部助氏重、筑後國に星野筑後守親實・草野長門守親永・蒲池十郎治久・田尻中務大輔種久、肥前に澁河右兵衞佐尹繁・少貳肥前守資元・（名代橫岳右馬頭資誠。）千葉介興常・龍造寺隱岐守家知・同左衞門佐家兼・唐津の波多下野守治・同所の草野中務大輔永信・平戶の松浦肥前守興信・

將軍義尹歸洛

高來の有馬左衞〔門脱カ〕佐尙鑒・彼杵の大村日向守純治、肥後國には菊池肥後守義國・相良宮內少輔義滋、薩州の島津陸奥守忠昌名代子息又八勝久。日向國に伊東修理大夫祐秀、豐後に大友の一族、豐前に城井長門、對州に宗讚岐守義盛以下、悉く順風を待つて相集る。然れども彼此の用意に滯り、漸く五月下旬義尹公、防州の湊を御出船あり。諸將同じく御供にて、兵船數千艘纜を解き、兵庫和田の御崎に到りて著船し、是より陸を御供して、六月初旬尼ケ崎に著き、同八日御入洛なり。宗讚岐守は、先祖代々福祐〔裕〕の者にて、將軍今度御上洛の用意海陸の事まで樣々取繕ひ、特に忠節ありしかば、義尹公深く御感まし〳〵、翌くる永正六年、讚岐守へ屋形號をぞ下されける。

今年筑前國三笠郡の年貢、大內と少貳半納分。

宗讚岐守義盛朝鮮國を攻むる事

永正七年庚午四月、對州の守護宗讚岐守義盛・同能登守盛弘相議して、朝鮮國を攻むべしと、兵船を揃へて押渡り、同四日、釜山浦の湊に著船す。抑〻當家、朝鮮に船を

宗義盛朝鮮を討ち敗れて歸る

渡す事、去ぬる嘉吉年中より以來數十箇度なり。之に依りて彼の國の者、怯弱なる事を能く知り透しければ、大に思ひ侮りて、義盛・盛弘陸へ上ると均く、其武備をもなさず急に貝鉦を鳴らし、鬨の聲を揚げ、民屋に火を懸けて所々へ討ち入り亂妨す。斯かる處に、朝鮮人何十萬とも知らず、十方より馳せ集る事蟻の如く、義盛・盛弘を取圍み、半弓・不盡弓（マヽ）を雨の如くに射懸く。兩人案に相違し、手の者を左右に從へ、前後を下知して打破り〳〵馳せ通らむと働きしかども、異賊雲霞の如くに込重り、十重・廿重に圍みければ、千變萬化すれども力なく、大將義盛干死に入りて一生を得難くぞ見えし。

盛弘討死

同名能登守盛弘は、軍の體を見て是までと思ひけるにや。打物を捨て火縅（緋）の鎧を一淘ゆつて鎧突し數十萬集りたる敵中へ割つて入る。無雙の大力なりしかば、あそこに押付け一手に三人、爰に攻め臥せ一手に五人、ひつ爬み〳〵四角八方へ打散らしけり。其勢に異賊恐れて少し引退くと見えし間に、義盛を遁して船に乘せ、盛弘は防ぎ終に討死しけり。生年三十一なり。斯かりしかば對馬の軍兵、生きて歸るは千に一つもなし。然るに同六月より盛弘、己が居所にある事存生

高崎大明神は宗盛弘を祀る

の時に異ならず。對州の老若男女是を怪み、正しく亡靈ならむと窺ひ見るに、疑もなき生きたる人なり。扨は又實に其人かと見るに、平生に食物をせざりけり。野人村老斯かる稀有の事は前代未聞なりと、怖惶く事大方ならず。斯かりし程に、義盛是を憐み其靈魂を祭り、一社の神にぞ崇めける。今の對州高崎大明神是なり。然る處に朝鮮の兵船數十艘、對馬の豊崎へ著く。義盛大に悅びて一人も生けて歸すな。盛弘が孝養に悉く海底に切〔捨カ〕部よと、自ら眞前に進み、數百人の朝鮮人共、一人も殘らず討殺しけり。其後は互に商船をも渡さずして、暫く海上和與の通略も絕えたりけり。

筑紫滿門馬場賴周の爲に討たるゝ事

永正十八年辛巳、改元あつて大永と號す。後柏原院の御宇義澄將軍の御治〔世カ〕天なり。此時筑前國勝尾城主筑紫下野守滿門といふは、元來少貳の一族にて、少貳恩顧の者なり。尤も本家に對し、何樣二心なく仕へし處、去ぬる明應六年、防州の大內、少貳

筑紫滿門大内に降り主家少貳氏を攻む

滿門諸社を建立修復す

政資退治の爲め筑前へ渡海し所々に於て合戰す。時に新少貳高經、勝野尾に支へて相挑みしに、此滿門と東尙盛、大内へ降參し却つて少貳を攻めける間、高經軍に打負けて肥前へ來り、終に父子一門悉く滅亡しけり。其後大内介、彼の滿門が軍忠を賞し、筑前國の內那珂・三笠・早良、肥前國の內基肆・養父・神崎等の所々を與へしかば、滿門旣に大身となり、偏に少貳家全盛の時に異ならず。ある時は小城へ發向して、千葉胤資の餘類を征伐し、ある時は佐嘉・神崎へ出張して、少貳の殘黨を誅罰す。然るに滿門、今年大永元年、筑前國寶滿の上宮を建立す。去ぬる永正十五年に炎上せしに依りてなり。抑〻彼の寶滿岳と申すは、九州第二番の高山、半腹より頂上は岩石劒の如くにてすさまじく、見上ぐるに巖眼上に打覆ひ、數千丈の屛風に似たり。斯かる嶮岨を厭はず彼の大宮を再興しけり。又同三年癸未閏三月、神崎櫛田宮を修補して、御神體を新造し、寶殿の上葺・庇・緣造替へ御階を新造す。遷宮は同月廿七日なり。時に當社の別當は東妙寺五室全契、宮柱は執行治部大輔伴兼貞・本告新次郎・藤原賴景にて、御遷宮事故なく成就しけり。此御社は往古より稻田姫を崇め奉

滿門馬場賴周の諫を用ひず遂にして討たる

り、異賊退治の御祈願所にておはします。昔は一箇年に七度の御祭あつて、度毎に勅使を立てらる。執行・本告といふも、其勅使下向あり、洛へは歸らずして在國せられし子孫なり。當社修造の事、去る長享三年己酉六月三日、少貳政資の代に造替へられしかども、世の亂に隙なくして、遂に遷宮はましまさず朽果てしを、此度滿門、修補を加へ三十五箇年にして御遷宮ありけり。然るに滿門が聟に、馬場肥前守賴周といふ者あり。是も少貳の一族にて、東肥前綾部の城に居住しけり。彼の賴周、元より少貳股肱の臣にて、忠貞他に異なりしかば、内々滿門が大内方に黨りし故、少貳家滅亡し、其伴類までも浪々しけるを、骨髓に徹して憤りしかども、舅の事なれば胸を押へて年月を送り、時々滿門を賺し、何とぞ元の如く少貳方になさむと計らひけれども、滿門更に承引せず。頃日は嫡子刑部大輔石州に至り參陣せしめ、大内に忠節を勵しければ、賴周今は堪へ兼ね、滿門を我が館へ押寄せ誅せむとぞ工みける。されども滿門もさる古兵にて早推量し、散けて賴周が許へ入り來らず。然る折節、賴周の子供疱瘡をぞ煩ひける。頃は大永四年正月半ばの事なるに、賴周妻

滿門殺さる

女に向つていひけるは、おことが父滿門、我等を異心あるよと疑ひ給ひ、常に見え來り給はず。我等は夢計りも別心なし。當時子供の疱瘡を痛はる事、おことが方より告知らせ申して、祖父子を招き孫共を見給ふ樣に誘ひ候へとぞ申しける。女房は賴周が目打たゝき、〔眞カ〕直顏に云ひ聞かせけるを、僞とは露知らず尤もと思ひて、急ぎ文を認め父滿門へぞ遣しける。滿門披きて見るに、疑もなき我が娘の手跡なれば、さのみはいかで堪ふべき。さらば綾部へ打越し、孫共の氣色をも伺ふべしと、正月十八日父子三人、あり合ふ家人等召具して、綾部にぞ赴きける。寔に屠所の羊の歩(あゆみ)とは是ならむ。程なく賴周が城に著く。滿門父子則ち寢所に入りて孫共の體を見る。其時に臨んで、賴周が風情、何とやらん怪しく心中に邪謀あるよと、女房漸く了(さと)り知りしかば、頻りに泪をぞ流しける。さしもの滿門、是を推量せざるこそ運の極なれ。扨滿門、外の廣間に出でて坐す。此滿門は、隱形の法を行ひて、木の葉隱れの妙を得たりしかば、賴周寸時も油斷せず合圖を定め、易々(やすく)と滿門父子三人、當座を遁さず討取りけり。少貳の家に對しても忠心の致す所とはいひなが

ら、情あらざる振舞なり。さても賴周が妻女の歎きいふ計りなし。頓て夫に暇を乞ひ、綠の髪を剃りこぼし、出離菩提の道に入りけるこそ理なれ。滿門討たれ若黨共に切死し、殘りし者共勝尾に走り歸りて、事の由を告げたりしかば、筑紫の一族家人等數百人、物具犇々と差固め綾部へ馳せ向ふ。されども賴周用心稠しく、半途に大勢を伏置き是を追崩しけり。賴周は多年の鬱胸を一時に晴らし、悅ぶ事限なし。

然るに此折節、千葉介胤勝といふは、少貳の親族橫岳兵庫頭資貞の子、童名は滿童丸。前千葉介胤資の後家日光明胤尼の養子なり。此胤勝、もと少貳骨肉の一家なりしに、如何なる謂やありけむ。是も少貳を背いて頃日大内へ隨ふ由相聞ゆ。斯かりし程に、賴周是をも諫めむと、彼の長臣三人の方へ送りし狀に曰く、

□□□□□今日廿五日到來令披見候。如承當家之事、今度□滿門惡行奉□一家無餘義在々所々牢籠之體□□前代未聞之儀不及言語候。雖然□□勿憚改任先言、此節立還當初、國家再興肝要之由、度々對滿門雖述愚意候□無許容候。剰筑紫刑部大輔至石州令參陣、勵忠節心底無別條之儀候之間、對等者不及力

候條、彼父子三人討取候。爰許輙任所存候次第、併當家御曾祖父樣之御計らひにて歟。天道顯然殊勝之至候。於此上は國中平均令調熟、東西靜謐之儀肝心之由、此前對老中以兩使申述候。就中千葉家之事、如前々當家於和合者、尤專一相存候處、尙以大內御隨逐難被捨思召候而、少貳家可有退治御才覺、方々江之廻文無其隱候。乍恐亂勝之事、輕重義與可被荷擔事筋目相違候、誠に無是非候。然處へ對老中可相渡之由承候。更不及信用候。先度滿門生害の刻茂、賴周一身可及安穩無覺悟候。偏對國家可身命振舞存候。各分別之前に候。生得依正直之思慮、神明之御擁護にて不慮存命候。今以無忘却候。於當城少貳家之望不可有餘義言上、老中へ可申合事、久家通法非分に候。所詮亂勝被懸御意候者、以向可申談候。若又大內御隨可首尾、此等之趣、能々心得才覺可然。兩郡中之事茂、對當家代々忠切之辻無紛候條、眞實國中安全之儀被存候者、無偏頗樣可預異見事無餘義旨、御納得可令祝著候。旁々難盡紙上に付閣筆候。恐々謹言。

二月廿五日　頼周判

副島中務少輔殿

神代兵部少輔殿

龍造寺左衞門佐殿

私にいふ、右此狀を以て見るに、此時までは少貳資元、未だ家を興さゞるか。又舊證文にも、資元永正十四年の頃、藤津の山中に蟄居。時に長臣宗伊賀守氏茂隨身と、決定。是を以て之を考ふるに、此書に載する所永正の初、資元世に出づるとは非なり。然れども九州の諸記尤斯くの如し。

滿門の怨靈

扨も筑紫滿門討たれし後、其怨靈荒びて怖しき事ども多かりけり。されば今の世までも綾部の城の舊跡に、月曇り雨暗き夜は、叫喚の聲啾々と人の心を惱せり。ある時此所の土民、草を刈りて馬に付けて其上に乘り、滿門が墓の邊りを通りしが、忽ち逆に落ちて悶絕しけり。在所の者驚き、山伏を請じて祈りし處に、自ら口走り、我は筑紫滿門といふ者なり。昔此所に命を墜め、多くの年月を歷ると雖も、魂

は猶留まりて、折しも今朝卯の刻より申樂を興行し、自ら舞ひ遊びし所に、下々といひながら馬に乘りて、舞臺の前を通る條奇怪の至なり。然れども之を免し命は助くるぞとて、物付は汗水になり寢入るかと見て又息を出す。二百餘年の星霜は送ると雖も、其魂は猶青苔に殘る事、不思議なりし次第なり。

千葉介胤勝浪人す

同大永四年の夏、小城の千葉介胤勝、馬場が諫を用ひずして、彌〻大内家へ志を通ずる由聞えしかば、加世中佐嘉の龍造寺・蓮池の小田いひ合せ、四月六日より小城へ取懸け、九日より詰陣、胤勝軍に打負けて、五月十二日落城に及び、己は密に落失せけり。時に同名興常・同子息嘉胤小城へ歸入る。彼の父子、頃日は胤勝が爲め出郡して他所にありしとぞ聞えし。其後胤勝、勢を率し、同七年正月七日、加世へ出張して、同名興常と相戰ふ。此時千葉勢に、岩部を初め加世四人の嗜野田・蒲原・中原・貝島以下三百餘人討死しけり。胤勝近年筑前へ浪人す。

少貳冬尙元服の事

少貳冬尙元服

同八年戊子、二亨祿と改元す。此時、少貳松法師丸と申すは、肥前守資元の子なり。父資元は大内介が爲め、過ぎし永正の頃藤津山中に蟄す。附從ふ家人には、宗伊賀守氏茂のみなり。然るに資元、時の管領細川右京大夫高國を賴み、將軍家へ訴へ、今年の夏、彼の松法師冠者を元服させ、興經と名乘らせ、太宰少貳になして屋形號を申し給はり、神崎勢福寺の城に据ゑ、馬場・江上を以て後見とす。此興經、中頃は時尙とも號し、後には冬尙とぞ改めける。斯くて資元、其威漸く耀きて上松浦へ旗を進め、獅子・日割の兩城を初め、所々の松浦黨を皆切隨へ、夫より累代の地太宰府へ打入らむと。先づ西筑前まで出張す。此事、中國へ隱れなし。大内介義興、急ぎ將軍義晴公へ訴へて、少貳父子を退治せむとす。されども御許容なかりけり。此時、大友修理大夫義鑑へ對し、引付衆の内大館左衞門佐より來りし狀に曰く、

就二少貳殿之儀一從二大内左京兆一御下知之事被二申上一候。然者無(共カ)二承引一候。可二御心安一候。爲二御意得一申入候。旁々具充演可レ有二御申一候。恐々謹言。

七月十日　大館右衞門佐晴光判

大友修理大夫殿

北肥戰誌 卷之八 終

北肥戰誌卷之九

肥前國野路宿合戰の事

大內義興逝去

同年の冬、周防國山口の城主大內左京大夫多々良朝臣義興、病惱に迫る。然るに十二月廿日卒去せらる。此人は隨分朝家の輔弼にして、從三位太宰大貳に昇進あり。且つ將軍家の後見鎭西の貫主たりしに、闇夜に火を消したるが如し。斯くて明くる享祿二己丑の春、子息周防介義隆、百六代後奈良院の御宇、公方は足利十三代權大納言義晴公の御治世なり。然るに此度義隆、繼目の祝儀として探題澁河右兵衞佐尹繁の許より、防州へ使者を送られ、義隆幷に長臣陶尾張守興房が方へ一書を用ひらる。義隆よりの返札に曰く、

御札之趣恐悅候。殊爲祝儀御太刀一腰令拜受候。畏入候。仍同一振進覽之候。

猶杉三河守可レ得ニ御意一候。恐惶謹言。

三月廿八日　　周防介義隆判

謹上探題人々御中

大内義隆少貳資元を攻む

斯くて義隆、父の家を繼ぎ、大内介になりて鎭西に威を振ひ、同享祿三年庚寅の春、少貳資元父子退治仕るべきの由、頻りに將軍家に訴へ、既に御免を蒙りしかば、其趣、早速筑前の守護代杉越前守興連が方へ下知を加ふ。斯かりし程に、興連頓て廻文を以て、筑前の軍士を相催す。其頃少貳資元は、西筑前にありけるが、此事を聞き、さらば肥前へ引返し、味方を集めて合戰すべしと、急ぎ神崎勢福寺城に赴き、子息冬尙と一つにならる。斯くて大内勢杉興連を初め、少貳父子の居られたる勢福寺城を攻めむと、四月下旬、先づ東の口基肄・養父・三根三郡へ討ち入りしかば少貳方にてありつる筑紫能登守尙門・朝日左近將監賴貫・横岳讃岐守資貞を初め、東肥前の城持共、悉く城を開いて降參す。是等は皆少貳家股肱の輩なり。千葉介胤勝、其頃筑前に浪人してありけるが、是も實父横岳と同じく大内方に馳せ加はる。杉興連、大

に力を得、此勢を先陣に討たせて三根郡に陣を取る。少貳父子は勢福寺城にありて是を聞き、さらば勢を半途に出して戰ふべしと、軍兵を集めらるゝに、先づ中佐嘉龍造寺山城守家兼・子息右衛門大夫家重・同三郎兵衛家門・同名伯耆守盛家・蓮池小田九郎政光・直鳥犬塚安房守家清・子息山城守尙家、其外少貳譜代の輩には、馬場肥前守賴周・江上石見守元種・宗筑後守秀恒・出雲民部大輔賴通・姉河彈正少輔弼惟安幷に本告左馬允賴景・執行治郎大輔兼貞以下、佐嘉・神崎の軍士參陣す。少貳、此等の輩を下知して、田手繩手・野路宿の邊へ差向けらる。斯くて大內方の軍兵、三根郡を立つて享祿三年八月十五日、勢福寺の城を攻めむと野路宿に打臨む。少貳勢、敵と見るより太鼓を早め、鬨の聲を揚げて亂れ合ひ、暫し戰ふと見えたりしが、大內勢の先陣忽ち打負けて、朝日左近將監賴貫矢庭に討たれ、其一列の軍兵、既に敗せむとす。二陣の大內勢、荒手にて入替り、頻りに進んで相戰ひ、合戰半ばなりける時、少貳勢の內、龍造寺の陣より鍋島平右衛門淸久・子息左近將監義房・次男孫四郎淸房、手勢を引分け、田手繩手の南の方へ回つて、大內勢に切懸らむと時分を見繕ふ。時に

野路宿合戰

大内勢敗北

大内方筑紫横岳・千葉の手の者、一戰に利を得、少貳勢を追立てゝ野路宿の西の繩手に到る。是を見て鍋島の一列中にも、野田河内守清孝が赤熊武者彼此二三百人、一同に噇と南の方より横合に、大内勢に切つて入る。爰に於て大内方の翟、散々打負けて宗(むね)と頼みたる横岳讃岐守資貞・筑紫能登守尙門討たれ、千葉介が手の者にも、仁戸田兎東鄕・秋光長門守父子討死し、大内勢悉く敗北して、千葉介は引退き、杉越前守は漸く遁れて太宰府へ引返しけり。斯くて少貳は合戰に打勝ち、龍造寺一家の軍功を賞せらる。此時又龍造寺山城守家兼、今度鍋島父子の忠戰を感賞し、清久の子供の内を、孫壻にとるべき由所望ありけり。清久是を應諾し、嫡男左近將監は早妻室ありしかば、次男孫四郎を以て、家兼の長男右衛門大夫家重の嫡女に契約あり。家兼悅び中佐嘉の内本庄八十町の所を、孫四郎清房へ聟引出物にぞせられける。

龍造寺山城守家兼、天文七年戊亥法體。法名剛忠。

同子息右衛門大夫家重（時に享祿二年の頃。）同右衛門大夫尙純（時に天文四年の頃。）豐後守家純に改む。

或記にいふ、龍造寺、鍋島を聟にとりし事は、天文五年木原軍の時なりとも。

陶尾張守入道道麒九州渡海所々合戰の事

翌くる享祿四年辛卯の春、豐後の屋形大友修理大夫義鑑、筑後國星野筑後守親忠が生葉妙見城を圍みて攻め戰ふ。親忠籠城する事、既に三箇年に及ぶと雖も、堅固の要害なれば落城せず。結句菊池左京大夫義國、星野に同心し、其上中國に到つて、大内介義隆に加勢を乞ひしかば、義隆頓て太宰府へいひ送り、杉越前守が方へ、急ぎ星野へ加勢すべき由下知せらる。斯かりし程に興運、早速軍兵を用意し筑後へ差遣す。其頃少貳資元は、多久の城にありけるが、此由を聞きて、其義ならば自身筑後へ發向し、大友に力を付けむと三月十四日、多久を打立つて、先づ上松浦通りに筑前の內を過ぎ、上筑後へ入らむと山路に懸られしに、佐嘉の龍造寺山城守・高木右京大夫・松浦の相知・廣瀨以下馳せ加はり、其勢三千餘騎になりて、筑前の岩門に著陣ありしかば、小田部・重松・曲淵追々來り加はりて、既に大勢となり、閏四月岩

陶道麒九州に渡海

門を立ち三笠郡を打通り、上筑後の生葉に著陣あり。斯くて資元、大友義鑑の陣所に入りて對面し、星野初め敵征伐の事を評定あり。則ち帝都へ注進し、管領細川右京大夫高國・引付大館左衞門佐晴光に屬きて、星野以下の逆徒追罰の事、上意を蒙りたきの由、將軍家に訴へ申されし處に、頓て上聞に達し、大友・少貳が申す處に任せられ、御敎書を成下されけり。兩將悅び逆徒退治の上意を蒙る由、隣國に觸廻して、彌〻星野を圍攻む。扨大内介が守護代杉興連を追落さむと、明くれば天文元年壬辰、大友・少貳・千葉介三家軍兵を合せ、杉越前守興連が太宰府岩屋城を攻めたりけり。是れ大内と大友が義絕の初となり　興連、大勢の敵を引受けて防ぎ難く思ひしかば、急ぎ防州へ注進し、義隆の方へ加勢の兵をぞ申請ひける。大内介驚き、延引すべきにあらずとて、同五日陶尾張守興房入道麒を大將にて、周防・長門の軍士を率し、杉が後詰として筑前國へ差遣す。陶入道、旣に兵船を揃へ、大勢筑前へ著くと聞えしかば、岩屋城を攻めたりし三軍の寄手、叶はじとや思ひけむ。一人も殘らず退散す。然るに道麒、一戰にも及ばず宰府に入り、杉に對面して軍の評議を

陶道麒敗軍

極め、其勢を合せ少貳方の者共と、多々良濱に於て散々相戰ふ。少貳勢、利を失ひ立花城に引籠る。中國勢の內、杉が子息十郎隆連、中にも進んで少貳方の追ひ〱博多・筥崎に陣を張る。爰に於て高祖の原田五郎隆種・青山の留守・鏡の草野、其他近隣の武士悉く隆連が陣に馳來る。斯かりし程に、杉・陶が軍兵、雲霞の如く博多・鳥飼・太宰府の邊に群り充滿す。然るに道麒、興連と談じて軍を二つに分け、其身は星野が後詰の爲め、筑後へ打越えむと博多を立ち、那須郡に入りて粥田庄(秋月の事。)を討つて通る。時に少貳の一族に、宗・橫岳・馬場・出雲・筑紫以下の輩、道麒が通るを待懸けて不意に切つて懸る。道麒思寄らざる事にてありしかば、忽ち一戰に利を失ひ、仁保將監以下の者共六百餘人討死し、殘兵悉く敗軍して豐後國へ押通り、玖珠郡に到り息をつぐ。斯くて道麒入道、其後星野の城を援はむとしけれども、或は軍兵を集め或は兵粮を用意しけるに、滯つて急に事成らず。又筑前へ打歸り、今年は徒に年を越しけり。此時大友義鑒は、自身は豐府に先づ歸りしかども、少貳へ合力の爲め、家人臼杵三郎右衞門と眞光寺兩將を、筑前に殘し置きけり。

陶入道道麒肥前へ打入る事

陶道麒肥前に入り敵の諸城を陥る

天文二年癸巳正月、陶尾張守入道道麒、去冬より筑前國に年を送り、味方の輩を催促して軍兵調ひしかば、先づ星野が後詰を差置いて、大友・少貳と戦ふべしと筑前を立ち、筑後國へ討入り、三原を過ぎて所々を亂妨し、當國にありし大友の城々を攻めけるに、一番に久留米・安武の兩城落ちて、城主豊饒美作入道永源は肥前國東津村へ退き、安武安房守鑒教は、何方ともなく逐電す。道麒、夫より千年河を馳渡し、西の方筑前の內へ打越えて、筑紫掃部助正門が少貳に一味し、栖籠りたる武藏の城を不日に攻め落し、肥前國へ討つて入り、少貳が棟と頼みたる宗筑後守秀恒が鏡山の城をも攻め落す。是を見て、筑紫四郎惟門、勝尾城を開いて軍門に降る。斯かりし程に、佐嘉の龍造寺新次郎胤久・小城の千葉介喜胤以下、道麒へ馳付きて彌、大勢となる。中にも原田五郎は、中國の仁保加賀守と勢を合せ、怡土・志摩兩郡の輩を相語らひ、上松［浦カ］前の者共を打ち從へて、道麒に力を合せ、總勢一同に既に佐嘉神

崎へ討ち入り、少貳一家を退治せむと議す。　此時少貳資元は、去年筑前の軍の後、父子共に多久・梶峯城に居られしを、東筑前にありける少貳恩顧の輩馬場肥前守賴周父子・同名大藏允周盛・同右衞門大夫周詮・橫岳右馬頭資誠・舍弟中務大輔政貞・綾部備前守鑒幸・朝日近江守資世・重松中務丞賴幸・同名次郎三郎滿幸・藤崎左馬助盛義・犬塚山城守尙家・內田兵部少輔資兼・姉河彈正弼惟安、其外龍造寺山城守家兼・同三郎兵衞家門を初め、皆一味同心して、資元父子を早速城原へ迎へ、勢福寺城へ入れて、江上石見守元種を以て是を守護し、中野・西島・千葉・蓮池・崎村・直鳥等の城々へ銘々楯籠り、中國勢を防がむとぞ待懸ける。　斯くて陶入道道麒所々の軍に打勝つて、同月神崎郡三津村籾岳に陣を据ゑ、爰彼に於て少貳方の輩と相戰ふ。　馬場・橫岳・宗・出雲・小田・犬塚所々に支へて防ぐと雖も、中國の軍兵目に餘る大勢にて、中々叶ふべしとも見えざりけり。　十二月に入りて道麒、綾部・朝日山の兩城を攻め落す。　この時、探題右兵衞佐尹繁の長男澁河彌五郎義長、大內勢に加はつて討死あり。

今年十月八日の曉、萬星半天に流動し、悉く海陸に落つ。

北肥戰誌 卷之九 終

北肥戰誌　卷之十

龍造寺家兼道麒の陣夜討附觀世音の佛像を得る事

天文十三年甲午、中國の軍將陶尾張入道道麒、去冬は肥前に年を越えて神崎郡三津籾岳に陣を取り、所々へ手遣し、同四月六日、原田五郎隆種を以て、石動村に於て少貳方の者兵と相戰ふ。此時、大內義隆より原田五郎への此狀に曰く、

去六日於肥前國神崎郡石動村合戰之時、被勵戰功之次第、以軍忠狀陶尾張入道注進披見之處、尤感悅之至候。此等之趣猶陶可申候。恐々謹言。

四月十二日　　義　隆判

原田五郎殿

此時道麒、石動但馬守を案內者とし、千栗山の衆徒を攻めて、所々に火を懸け神社

陶道麒龍造寺家兼の居城水ケ江を攻めて利あらず

悉く燒失す。社僧・神官等、是を防ぐと雖も叶はずして、皆兵火の爲に燒死にけり。此故に石動但馬守が子孫、八幡宮の御祟にて、代々亂氣に成り、常に火を燒く事を好む。斯くて道麒、彌ゝ三津山に陣を居ゑ、五月十六日、龍造寺山城守家兼の居城佐嘉の水ケ江をぞ攻めさせける。城中には福地右衞門尉家盈・末次兵部少輔家通・野田安藝守家俊以下、持口を守りて防戰す。大内勢、利あらずして三津山の本陣へ引返す。爰に又、同七月十三日に、有馬晴純の軍兵共、少貳資元の留主を量りて多久城へ取懸る。されども城番龍造寺伯耆守盛家、身命を捨てゝ防ぎし故、有馬勢引退く。然るに其明くる十四日の夕より風吹出し、十五日の朝より大雨降り、大風梢を摧き、南海より大潮漲りて、風に隨ひ渦泝る事高さ一丈、須古・白石・佐嘉・神崎の村里、悉く混溺して死する者一萬餘人なり。此夜龍造寺山城守家兼、水ケ江の居城にあり、彼の有樣を見て、子息三郎兵衞家門に向つて囁き申されけるは、此大風・大水に、敵は三津山の陣にありて、合戰の事はよも思寄らじ。倡や今夜、風雨に紛れて陶が陣を夜討にし、其不意を撃ちて一戰の中に討ち散らむと談合あり。家門尤もと同じ、福地・片田江・野田・下村・石井・金持以下の健兵を

龍造寺家家兼陶道麒の陣に夜襲し敵を鏖にす

引勝り、七月十五日の朧夜に、水ヶ江の城を打立つて、深き所は游ぎ淺き所は渡つて、三津山籾岳へ押寄す。されば家兼の積りの如く、陶が籾岳の陣中には、佐嘉・神崎の民家汐に混り、森林皆梢を隱したる體を遙に遠見し、さても龍造寺の者共が、攻めざるに自滅するよと、笑ひ輷き酒宴して遊びし折節、龍造寺の軍兵三百餘人、犇々と押寄せ鬨の聲を揚げたり。陶が陣中、夢にも思寄らざれば、こは如何にと上を下へ返して、防ぎ戰ふ者は一人もなく、馬・物具・弓・矢・太刀・刀を陣屋々々に取捨て、唯我れ先にと逃迷ひ、悉く東西南北へ敗走す。龍造寺の者共、勝に乘り爰かしこに切捨にし、大勢の敵一人も殘らず追崩しけり。斯くて山城守家兼は、させる軍にも及ばずして、暫時の夜討に大利を得、大きに悅んで勝鬨を揚げ、十六日の曙、水ヶ江の城に歸陣ありしに、潮に連れて流來る物あり。何成らんと取上げ見るに、觀世音の木像なり。家兼不思議に思ひ是を禮拜し、我れ今夜謀らずして大敵を追崩し、歸陣の期に及んで此佛像を得る事、偏に子孫繁榮すべき瑞相なりと、則ち自ら懷中し水ヶ江にこそ歸陣ありけれ。其後家兼、居城の南に當つて新造の堂を建て、彼の佛像

を安置あり。今の水ヶ江慈敎院の觀世音是なり。

七月十五日の夜、家兼の夜討に陶入道敗散せし時、取捨てたる金銀其外陣具等、今に三津山の邊の土中より出づるとなり。

舊書にいはく、天文三年五月十六日、道麒、三津山に陣すとあり。然れば夜前道麒、水ヶ江を攻めしは、五月十六日の事か。月日追つて考ふべし。

大内介義隆來陣少貳資元切腹の事

大内義隆太宰府に出陣

今年七月、陶入道道麒、龍造寺山城守が夜討に散々敗北しける由、中國へ隱なかりしかば、義隆大きに立腹あり。同年十月初旬、自ら大將軍として三萬餘騎を引率し、筑前國へ押渡り、太宰府を本陣と定め、少貳へ討手を差向けらる。陶入道道麒は、去ぬる七月籾岳を敗軍して筑前國へ引退きしが、先度の恥を雪めん爲め、先陣を申し給はり、嫡子尾張守隆房と一つになり肥前國へ亂入る。斯くて少貳父子は、勢福寺城にありて、宗徒の輩を所々の要害へ差籠置き、軍兵を口々に差向けて大内勢を防

がせらる。然る處に、千葉介興常・同丹波守喜胤・波多下野守三人の方より、龍造寺家兼まで申されけるは、今度少貳殿退治として、義隆自ら太宰府へ來陣あり。既に討手の先陣、當國へ亂入す。尤も中國の軍兵雲霞の如し。然るに此度の合戰に於ては、千に一も少貳家利を得らるべきに候はず。所詮私の憤りを押へられ、和平あつて居城を去り渡さるゝに於ては、則ち此亂靜謐し、一には公儀へ至つて忠心、二には敵味方諸人の安堵、三には累代の名家を相續あり。彼此の大幸なるべし。然るに御邊は、當時少貳家の近臣なり。此旨を含まれ宜しく評議あるべしとぞ申送りける。是は義隆の命を受けて、三人の方より申す處とぞ聞えし。頓て此事、資元父子に披露あり。江上・馬場・小田・横岳以下の老臣、龍造寺は申すに及ばず、皆打寄りて談合しけるに、資元申されけるは、さらば彼の大內、當家に對し怨を結ぶ事一朝一旦の事にあらず、御事等が知る如く先祖累代の讎敵、殊には父の敵なり。我れ聞く父の仇は倶に天を戴かずと、然るに義隆、幸に此度來陣す。此上は資元、屍を野徑に曝すとも一戰を勵し、有無の勝負を決する外他事なし。然れ共又案ずるに、一

少貳資元父子居城を去りて大内と和平

人の憤を以て萬人を亡さむも、流石に不便の事なり。如かず平均の求に應ずるにはと、竟に同十月和睦調ひ、資元・冬尙勢福寺城を下りて、大内方へぞ去り渡されける。寔に是ぞ資元の極運の至る所なれ。斯くて少貳家、大内へ和を乞ひ城を去りしと聞えしかば、豐後の大友も大内介と和平して、九州大半靜謐し、義隆は防州に歸陣せられ、陶入道道麒・同尾張守隆房、肥前の陣を拂つて太宰府に打歸りけり。

斯くて少貳家・大内和平あり。佐嘉・小城・三根・神崎の萬民等安堵の思をなしける處に、翌くる天文四年に義隆、陶入道が太宰府にありしに下知して、少貳家の所領東肥前の內、三根・神崎・佐嘉の采地尺寸も殘さす沒收しけり。斯かりし程に、少貳父子爲方なくして、同十二月晦日、資元は密に多久へ赴き、子息冬尙は蓮池に到りて、小田覺派入道をぞ賴まれける。斯くて大内介は、少貳を思ふ圖に陷れて、今は心易く誅伐すべしと、翌くる天文五年丙申の秋、資元梟首の爲め陶入道を多久へ差向けらる。陶道麒、筑前を立つて肥前の小城に著陣し、千葉興常を相語らひ多久へ發向す。是を聞いて塚崎の後藤・上松浦の波多・草野馳せ加はり、大勢となつて同九月初、多久へ

押寄せけり。少貳資元は、僅手廻り計り幽なる體にて居られしかば、防ぎ戰ふべき樣もなく、今は早自害すべしと思ひて、同月四日專稱寺といへる道場に忍び、譜代の家人今泉播磨守朝覺・窪・平原、此三人の者を呼出し申聞けられけるは、我等智慮なくして去々年敵に怖れ、城原の居城を去りて後、附從ひし輩にも捨てられ、勢微々に成果て此所に來り、今斯かる是非なき害に逢ふ事、世の宿業とはいひながら、口惜き次第なり。然れ共悔いても益なし。唯〻自害を急ぐべし。さても汝等三人の者は、多くの家人の中に今まで心を變ぜず附索ひて、資元が先途を見る事の嬉しさよ。必ず黃泉の下まで忘るべきにあらず。されば此期に及びては、定めて死を倶にせむと思ふべし。然れども子息冬尙、蓮池に忍んであり。其外幼稚の子供、佐嘉の傍に隱し置きたり。汝等三人の事は、とても忠節に此場を遁れ、彼所に赴きて子供を撫育して得さよと、搔口說き申されける中にも、今泉、泪の中に答へけるは、御諚の如く御運旣に傾き、此期に及びては悔いても甲斐なし。其中に我々に落ち候へとの仰こそ心得ね。御父政資公御生害の時は、公九歲にならせられ、西嶋の橫

少貳資元自害

岳が許に忍んで御成長あり。其後藤津へ御蟄居の時は、某が父宗春入道と、宗伊賀守計りこそ附添ひまゐらせて候へ。某身不肖に候へども、其子として唯今御最期を見捨て、いづくに逃げ行きて、誰をか頼み申すべき。一向死出山の御供とこそ存じ候へと、左右を見ければ、窪・平原も共に涙に咽びて、我々も同意に候と、頭を垂れて居たり。資元重ねて申されけるは、疎や汝、死は近くして易く生は遠くして難し。幼稚の者共が事こそ心許なけれ。枉げて命を全うし、彼等を養育して得させよ。さなくば力なし。七生迄の勘當也と大に立腹ありしかば、三人の者共、主命今は默止難く、兎に角と申して涙と共に退出しけり。唯今死に赴く主の勘當といひしを、痛み思ける三人が心底こそ頼母しけれ。斯くて資元、今は心易く思はれしかば、專稱寺の佛前に鎧切捨て押肌脫ぎ、生年四十八にして腹十文字に掻破り、桐葉落つる夕風や、九月四日、一生は夢とぞなられける。法名心月本了と申すは、此の資元の事なり。然るに今泉・窪・平原は、泣く〳〵佐嘉へ赴き、河副の内に亡君の稚き人人のおはせしを或寺へ立忍ばせ、住持を賴みて年月をぞ送りける。三人の中

にも、今泉は頓て發心を起し髻を切つて、六十六箇國を巡禮し、後には洛に上り、竹苑椒房・攝家・淸華の方へ便りけるとぞ聞えし。是れ再び少貳家を興すべき緣を求むる爲めなりけり。

木原軍并新少貳冬尙の事

陶道麒防州に歸國

斯くて陶入道道麒は、少貳資元に腹切らせ、思ふ事なく肥・筑兩國を打從へ、九州の支配等相整へて、同年十月廿九日、防州にこそ歸國しけれ。然るに豐後の大友義鑑は、兼ねて少貳と親しかりしかば、今度資元生害の事を聞いて大に悔み、何とぞして其子松法師丸冬尙を世に出さむと計りて、內々龍造寺民部大輔胤久へ談合ありけり。此胤久と申すは、龍造寺の嫡流にて、加世・新庄・與賀本庄、其外小津鄕八十町は先祖相傳の知行幷に佐嘉の內尻田分六十町・千住十貳町・諸富十貳町、小城の內大寺三十六町・同別府百二十町は新恩の知行、凡そ合せて貳千五百町の地頭なり。爰に又其頃蓮池の城主小田駿河入道覺派といひけるも、元より少貳家荷擔の者にて、是も

豐後へ通じ、大友と談合して冬尙を世に出さむと思ひし故、忍んで冬尙を我が城にぞ隱し置きける。此小田が先祖は、元來關東の者にて、常陸守直光が時、應永年中に初めて肥前國へ來り、蓮池に城を取構へて居城とし、代々爰に住す。されば頃日は旣に大身と成り、佐嘉・神崎の內幷に筑後の三潴郡の內凡そ六千餘町を知行しけり。然るに覺派つく〴〵打案じて、斷金の朋友共へ語りしは、此度資元公生害の根元は、龍造寺山城守が密に大內介の語らひを得、心中に隱謀あつて勢福寺下城の事を申し勸め、少貳家を衰微させし故なり、一つは其心底も惡し。又は先君孝養の爲めにてもあり。必ず水ケ江に取懸け一軍すべしといひけるが、果して同年天文五の冬、江口・深町・朽井・內田・吉嶋以下の家人を引率し、龍造寺山城守家兼が水ケ江の城へ押寄す。家兼早此事を聞付けて、さらば中途に出向ひて戰ふべしと、嫡子右衞門大夫尙純・二男三郞兵衞家門・嫡孫六郞次郞周家・同名伊豆守常家・鍋島の一族、其外野田兄弟・福地・石井・片田江・金持・末次・百武・下村の輩を急に相催し、追々に水ケ江を打出で木原村を過ぎける時、早蓮池勢競來り、村陰より突いて出で、小田隱岐入道

覺一・同名大膳入道聲〔脫アルカ〕以下、一同に噇と懸る。水ケ江勢、敵爰まで來るべしとは知らざりしかば、忽ち一戰に打負けて既に敗れむとす。時に水ケ江の老臣福地右衛門齒噛をなし、蓬し味方引くなと呼んで、眞前に進み相戰ふ。是を見て旗本より六郎次郎周家兄弟、福地を援けて相進む。されども小田方勝に乘り、龍造寺の者共を追立てゝ散々に驅けなやます。其時鍋島平右衛〔門脫カ〕尉清久・同子息左近將監・同孫四郎幷に野田が赤熊武者貳百餘人、勝に乘つたる小田が陣へ、前後を見ず切つて入り、先手の一將を討取りたり。時に小田勢色めき立ち、我れ先にと崩れて蓮池へ引退く。水ケ江の軍士、利を得て鬨を作つて北ぐるを追ふ。其中にも龍造寺六郎次郎周家と、鍋島孫四郎清房二騎、眞先に驅けて逃ぐる敵を追懸け、蓮池の城へ押寄せ、馬を混々と城堀へ乘入る。鍋島平右衛門續いて來り、兩人が體を見て、物に狂ふか方々と、頻に是を制して皆水ケ江にぞ歸陣しける。

一、天文七年戊戌二月中旬、龍造寺山城守家兼、重ねて法華〔經脫カ〕一萬部を執行すべしと思立ち、春日山高城寺の住持登岳和尚を請じて導師と定め、先づ一千部を讀

千葉興常卒去

龍造寺家兼冬尙に對面少貳家を輔佐す

誦して、其身は此時法體し法名を剛忠と號す。

一、同八年己亥年中に、大風三十七度吹き、米穀の類一粒もあらず、天下大に飢饉し、秋八月より萬民餓死して、其骸道路に横はりぬ。

一、同九年庚子六月四日、千葉屋形平朝臣興常卒す。小城平井の本光寺に葬る。法名日慶と號す。此興常、始中終中國の大内家に屬して、中頃は肥前國の守護代たり。時に牛頭城に居住す。子息丹波守喜胤、父の家を續いで平井の館にあり。親に不孝の人にて、興常と度々軍に及ぶとなり。

一、同十年辛丑、太宰新少貳冬尙、自ら龍造寺山城守入道剛忠の水ケ江の城へ來り、對面すべき由申されしかば、剛忠出合ひ少時會釋ありけるに、冬尙の申されしは、亡父資元の時に相變らず、龍造寺一家の輩何とぞ力を添へられ、當時廢れたる少貳の家を取立て給はりたき由、深く賴み申されけり。剛忠承り、去りし頃、小田覺派入道が水ケ江を攻めし事は、偏に冬尙の下知と其心底を疎み思はれしかば、寵と領掌なかりけり。されども冬尙樣々に掻口說き申されし程に、剛忠心服あつ

て、冬尙は歸られけり。斯くて剛忠、夫より少貳家の輩と心を合せ、以前の如く少貳冬尙を、神崎勢福寺城に据ゑ、龍造寺三郎兵衞家門を執權とし、江上岩見守元種・馬場肥前守賴周を輔佐と定め、再び傅き申されけり。

鍋島彥法師丸千葉介胤連養子の事

其頃高來の有馬修理大夫晴純、名を改めて越前守義貞と號し、入道して隨意齋仙岩と稱す。其子左衞門佐義純、ともに武威を振ひ、西肥前の內彼杵・藤津の兩郡幷に杵島郡の內凡そ三郡を切取り、先祖代々の領知高來郡に倂せ、旣に半國を知行して、猶肥前一國を掌握せむと志しけり。然るに此時、小城の千葉丹波守喜胤、父に變らず中國の大內義隆に屬して、少貳家に隨はず。又同名胤勝・其子胤連とも不和にして、動もすれば佐嘉・神崎・小城の際騷動に及びぬ。有馬父子、此事を聞いて大に悅び、さらば其弊に乘じて、先づ小城を攻潰し、夫より佐嘉・神崎へ討ち入り、龍造寺の者共・少貳冬尙をも攻め干すべしと評定しけり。斯くて有馬父子天文十年の春、

千葉少貳龍造寺の三家和平

鍋島彦法師丸千葉胤連の養子となる

須古の平井頼庶・佐留志の前田志摩守・山口の井元左近大夫等に下知をなし、先づ千葉の領内杵島の東郡横邊田へ討つて入り、民屋に放火し所々を亂妨して、既に小城に攻め入らむとす。斯くて千葉喜胤、東には少貳の門葉あつて弓斷なく、西よりは有馬勢攻め來つて是を防がむとし、東西の敵に對して軍を持たむ事、中々難儀にぞ見えたりける。此時、少貳の長臣龍造寺三郎兵衛智慮ある者にて、倩〻思ひけるは、今度有馬勢、須古・杵島の軍兵を引率し、小城に攻め入りなば、千葉一手を以て防ぎ戰はむ事叶ひ難かるべし。さあらば有馬、頓て千葉を攻め潰し、佐嘉へ攻め來らむ。然らば則ち合戰の勝負何とも計り難し。所詮千葉・少貳・龍造寺一和せしめ、三家の人數を一つに合せ、心易く有馬勢を防がむに如かずと思案して、家門自身小城に赴き、心底を殘さず談合しければ、兩千葉ともに尤もと同意し、則ち少貳冬尙の舍弟の今年九つに成りしを、千葉丹波守喜胤の養子婿と定め、小城の平井の館に送りて、千葉胤賴と號し、又龍造寺の壻鍋島駿河守淸房（初名ハ孫四郎。）の次男の彦法師丸とて、今年四歳と聞えしを、千葉介胤勝の息胤連の養子として、晴氣の館に遣しけり。斯

千葉喜胤死す

彥法師丸本姓に復す

かりし程に、兩千葉が私軍も止み、冬尙喜胤も中和して、佐嘉・小城・神崎の間忽ち靜謐し、少貳・千葉・龍造寺三家の勢を以て、有馬が軍兵を討ち散らさむとぞ談合しける。横邊田に陣取つたる有馬勢、此事を聞いて、今度の合戰勝利あるべからずとて、頓て軍兵をぞ打入れける。寔に三郎兵衞家門の智慮の如しとぞ聞えし。然るに平井の千葉喜胤、兼ねて惡瘡を煩ひしが、其病惱に迫り、翌くる天文十一年壬寅三月廿九日、歲三十四にして自殺し失せぬ。彼の養子胤賴、幼少ながらに家督を繼ぎ、本城牛頭城に直りて、喜胤の息女に嫁しけり。又晴氣の千葉胤連は、後に實子の出來しにより、其身は養子の彥法師丸を具して牛尾に隱居し、隱居分の地小城郡の內美奈岐八十町を、彥法師冠者に讓り、其上千葉譜代の侍十貳人を、右知行に副へて附屬しけり。其人數には、平田・鍋尼・野邊田・金原・仁戶田・堀江・小出・陣內・巨勢・田中・濱野・井手等なり。然るに彼の冠者、其後千葉家を辭して佐嘉に歸り、本名を稱して鍋島左衞門大夫と改む。然るに太閤豐臣秀吉公、文祿・慶長の頃朝鮮國を征伐ありし時、加藤主計頭淸正とともに七箇年の在陣に、其武名和異に隱れなかりし鍋島

加賀守直茂は、此左衛門大夫なり。

一、有馬勢退散の後、佐嘉・小城・神崎暫く靜謐す。此頃肥前國養父郡（今は三根。）千葉八幡宮の鐘の銘に曰く。

願主　太宰少貳藤原冬尚朝臣

馬場六郎　政員
同　前肥前守賴周
筑紫四郎　惟門
宗　筑後入道本盛
馬場右衛門大夫周詮
馬場大藏丞　周盛
江上石見守　元種
龍造寺山城入道剛忠

檀那　東彈正少弼盛親

同　　新次郎胤榮
龍造寺伯耆入道日勇
龍造寺三郎兵衞家門
小田　九郎　政光

天文十一寅年二月四日

一、天文十二年癸卯の春、高來の有馬と筑後の星野伯耆守、西肥前へ來陣し、上松浦獅子城を攻め取らむと、多久へ旗を進めて堂の原に陣を取る。時に德島鑑家・今泉兵庫允等押寄せて合戰し、卽時に是を切崩す。此時今泉新三郎討死し、有馬勢にも有江左衞門を討取りぬ。仍りて今泉兵庫へ千葉胤勝よりの感狀に曰く、

去廿九日有馬肥前守貴純、當國爲押領星野伯耆守以合力長島村に數日令滯留、於上松浦獅子城可押寄企之旨、以方便當城押領之計策被見聞、德島鑑家以同意多久於堂之原則時切崩、貴純敗北、番頭之者數人被討捕候。其時刻同姓新三郎討死之砌、時を不違有江左衞門其方鑓下に而被討捕候働、末孫に至

るも不レ可レ忘却一候。依レ之藤瀬村三拾七町永代令二加扶一状如レ件。

天文十二年卯三月二日　　　平　胤勝判

今泉兵庫殿

頃日獅子城は、千葉の支配と見えたり。番人堀江與三兵衞・大江匡房（後名を大藏允と改む。）千葉胤勝家人なり。

右有馬が來陣幷に感狀の趣、舊書たりと雖も信用し難し。有馬肥前守貴純、去る明應四年十二月三日に卒去す。天文以前の人なり。追つて考ふべし。

初めて肥前に鐵砲渡來す

一、今年肥前國へ鐵炮初めて來る。其以前、南蠻國より薩州種子島へ鐵炮渡りし事は、大永年中と云々。時に彼島の地主、種子島兵部大輔時堯と號す。

馬場賴周龍造寺を謀る事

爰に東肥前綾部の城主馬場肥前守賴周は、少貳股肱の者なりしが、倩、思ひけるは、前少貳資元、多久に於て討たれ給ひ、當家中頃衰微しける事は、偏に彼の龍造寺

馬場頼周龍造寺をはかる

剛忠入道が大内家の内通を得て、貧元をたばかり勢福寺城を出し申しゝ故なり。然るに夫にも懲りずして今又、剛忠が子や孫や、當屋形冬尚公に昵近させなば、必ず惡事の根元なるべし。所詮龍造寺の一家に於ては、計略を以て悉く滅亡さするに如かずとぞ思立ちける。斯くて頼周、時々冬尚へ近づき、龍造寺誅伐の事を囁きし程に、冬尚も是に同意し、密々に其用意あり。既に天文十三甲辰の冬、事決定して、先づ冬尚より竊に高來の有馬仙岩父子へ、謀の旨を含めていひ送られけり。有馬頓て其意を得、少貳家へ對し弓箭の色を立て、自身は則ち杵島郡長島に出張し、扨上松浦の波多下野守・鶴田兵部大輔・同名越前守・馬渡甲斐守・田代因幡守、其外多久の多久上野守等が方へ、事の仔細を觸廻しければ、皆一味同心して、上野守は則ち居城梶峯に引籠り、上松浦の波多・鶴田・馬渡・田代は日鼓岳へ出張し、少貳家への異心と稱し大に騷動す。是は馬渡頼周が冬尚へ密談し、彼の輩共へ僞りて敵をなさせ、龍造寺一門を、其討手として所々へ分遣し、勢を透して後、易々と誅戮せむとの工（たくみ）なり。斯くて冬尚、元より工みし如く、龍造寺剛忠入道を勢福寺城へ招き、此度

有馬・松浦・多久の者共、當家へ至つて逆意を顯し所々に出張す。急ぎ一族を相催し罷向はれ、彼の惡黨等を退治あるべしとぞ申されける。剛忠、是を謀計とは夢にも知らず、則ち領掌あり。水ヶ江に歸りて、龍造寺の一家を集めて、諸方への手分を評定し、其身は今年九十一歳なれば乘陣に及ばず、子や孫や其外親類、數を盡して人數を三に分け、方々へ差向けけり。先づ一手は龍造寺伯耆守盛家入道日勇・同子息日向守家重・同次男三郎四郎・同名伊賀守家直以下、上松浦へ發向す。一手は龍造寺豐後守家純・同子息六郎次郎周家・同名左馬助胤門・同子息新左衞門胤直以下多久へ向ひ、梶峯城の大手長尾口より押寄す。又龍造寺新五郎胤明・於保備前守胤宗入道律剛以下は、同じく搦手へ廻り、横邊田を西へ打通りて南の方より差寄る。一手は龍造寺和泉守家門（前名三郎兵衞）・同名孫八郎賴純・同右京亮胤直・同伊豆守常家・同播磨守家宗以下、有馬勢を追拂はむと長崎家に馳せ向ふ。頃は天文十三年十一月廿一日、各、同時に佐嘉を打立ちけり。中にも龍造寺豐後守の一列は、多久の城へ押寄せけるに、城主上野守宗利、兵を中途に出して相戰ふ。されども寄手の先陣六郎次郎周

家、是を物ともせず、悉く一戰の中に駈け散らして、本城梶峯へ取詰め、身命を捨てて攻め戰ふ。　扨龍造寺伯耆入道の一勢は、上松浦へ討ち入りけるに、此所の住人相知入道寶秀・廣瀨・中島馳せ加はりぬ。　則ち是を案內者として、先づ鶴田越前守が居城獅子城に押寄せたり。　然れども、此城萬仞の靑岩峯を遶り、茸々たる荊蕀谷を閉ぢ、攻口唯、一筋あつて無雙の要害なりししかば、急に攻め落すべき樣もなし。伯耆入道日勇、是を量り軍兵を分けて當城を押へ置き、波多下野守が鬼子嶽の城・鶴田兵部大輔が日割の城、此等を攻むべしと、翌廿二日の早朝に、日勇入道、士卒を率ゐて奧の方に討ち入りて龍川に著陣す。　時に鶴田が一族馬場・德末・山口以下の松浦黨共、大勢にて出合せ鬨の聲を發し、日勇を押取籠め遁さじと相戰ふ。　龍造寺は元より案內を知らず、松浦黨は住人にて案內を能く知りしかば、或は松柏の蔭より散々に射、或は岩窟の狹間より切つて出で、竪横十文字に駈立てし間、

龍造寺勢敗北

龍造寺勢打負けて四角八方へ敗走す。　日勇、齒嚙をなし士卒を下知し、父子眞前に進み打戰ひし處に、鶴田が家人峯刑部、三百計りの兵を一同に進ませ、日勇父子を取籠めた

り。日勇入道是を見て、今は遁れぬ所なりと、子息三郎四郎とともに二騎、敵中に駈入り忽ち討死したりけり。成富刑部大輔も日勇に續いて討死す。其外相知入道・廣瀬・中島以下悉く討たれ、佐嘉勢力を失ひて嚴木の方へ引退く。斯くて龍造寺の輩、龍川の合戰には打負けしかども、獅子・梶峯の兩城は彌〻圍みて攻め戰ひ、今年の冬は歳を越しけり。

龍造寺伯耆守盛家入道日勇討死の舊跡、上松浦大河野の内立川に大松あり。是を則ち盛家松といふ。百五十年を過ぎて元祿の頃、土井防州、唐津領知の時、用木に之を伐られ今に於ては無し。日勇實は高木右京大夫滿兼の子、龍造寺豐前守胤家の養子なり。

龍造寺一家所々討死の事

翌くれば天文十四年乙巳正月初旬、龍造寺の一族、鶴田越前守が獅子城を攻めて、同七日に攻め落し、則ち城警衛の爲め馬渡主殿助俊信を入置きけり。然る處に、鶴田

龍造寺胤直等討死

が兵、同十二日急に取懸け主殿助と相戰ふ。俊信、手の者を下知して防戰し、鶴田勢を悉く坂下へ追下す。越前守が軍兵、一戰に打負け退きけるが、其夜、城の後の方へ廻り、案內は知りたり。嶮岨を攀登りて、密に城中に近づき鯨波を揚げて、夜討にぞしたりける。時に馬渡が軍士利を失ひ、主殿助主從六十餘人討死し、鶴田は居城を取返して、本の如く入替りけり。斯くて龍造寺豐後守家純以下は、去冬より多久の城を攻めて、終に今月十八日當城を攻め落しぬ。されども其搦手に向ひたる龍造寺新五郎・於保備前入道徤則・副島五郎左衛門尉・同名右馬助猶房以下、今月十四日志久峠に於て、平井・前田・井元に討負け悉く討たれ、又長島表へ向ひたる龍造寺の軍兵も、同十五日藤津冬野原の軍に、有馬勢に戰負け、龍造寺右京亮胤直討死す。斯かりし程に、此度所々へ發向せし龍造寺の輩怺へずして、皆々佐嘉に引退く。

一、同正月廿一日、蘆刈の德島左所へ、龍造寺より取懸け防戰の上破却す。此時德島同名の輩七人、其外多く鬪ひ死にけり。彼の德島は、龍造寺には內緣ありし者

なり。然れども當時千葉胤勝に屬して、佐嘉の支配に從はず。仍りて佐嘉より攻めけるか。

一、斯くて有馬・松浦の者共、龍造寺衆の引くに付いて、早速佐嘉へ攻め來り、國中十九人の少貳方と同じく龍造寺剛忠入道の水ケ江の城を取圍む。其勢凡そ二三萬とぞ見えける。龍造寺の一族、案に相違の事なりしかば、皆々一所に集まりて、唯、唉れて居たり。然るに馬場肥前守頼周は、剛忠の一門を思ふ圖に墮して、大半所々にて討取り、其上、城を取圍み、心中には大きに悦び、外面は眉を顰め水ケ江に來りて、剛忠入道に對面し、小聲にて申しけるは、愚老が子の政員は、眼前貴公の孫壻にて、聊か疎に存ぜぬ故心底の通を申すなり。されば唯今有馬を初め十九人の面々、當城を圍む事は、更に冬尙公に對しての逆意に候はず。實は貴公の一門、內々大內家へ通じ屋形へ到つて、二心ある由、時々讒言する者あつて、冬尙立腹せられ、龍造寺一家を退治あるべき爲にて候ぞや。然るに寄手は其勢三萬に餘り、城中は僅の小勢にて、當城唯今の體は、偏に弩弓に係る片糸に異ならず。

倩々此賴周が案ずるには、當家無實の罪に沈みて、忽ち累代の家名を失ひ給はむより、一先づ此城を開かれ、有馬衆と十九人の面々を歸陣させ、其上にて冬尙公へ參り、科なき由を一々申開かれなば、則ち御赦免あつて、永く子孫の後榮を期せらるべし。穴賢(あなかしこ)。此賴周、御邊に對して惡樣(あしざま)の事は申すまじと、まことし顏にぞ申しける。剛忠入道は天性正直なる人なりしかば、賴周が方便とは夢にも思寄らず、仰尤もの事なり。我等が一家、少貳殿へ對して聊か逆心はなけれども、讒人傍にあるは力なし。所詮御邊の申さるゝ通、一旦城を去り渡して、時節を窺ひ科なき由を申し開く外、餘儀候ふまじと會釋あつて、賴周をば歸されけり。

時に鍋島駿河守、未だ刑部少輔と申しけるが、龍造寺孫三郎と同音に、剛忠に向つて申されけるは、彼の賴周兼ねて當家に對し、さしたる志の者にも候はぬに、唯今當城に入來り、睦しやかに申す條、何とやらん不審(いぶかし)く候なり。然るに彼等が申すに任せ、此城を去り渡し、一門所々に牢籠して、若し不慮の仕合も候ひなば悔いても益なく、殆んど口惜き事なるべし。能く〳〵御思慮あるべしとぞ諫め

水ケ江城没落

馬場頼周龍造寺家純等を淀姫社に圍む

申されける。されども剛忠承引なく、終に正月廿二日、居城水ケ江を去つて寄手の面々へぞ明渡されける。寔にはかなき次第なり。斯くて明くれば正月廿三日、龍造寺の一門、悉く所々へ分散ありけり。先づ剛忠入道は、孫子の孫九郎鑑兼を具して、筑後國へ赴かれ、豐後守家純・和泉守家門・孫三郎澄家は筑前に志し、六郎次郎周家・三郎家泰・孫八郎賴純は、馬場が申すに任せて、神崎勢福寺城に參り、冬尙へ科なき由をも申開き、又は下城赦免の一禮をも遂ぐべしと、城原へぞ赴かれける。其中にも家純・家門・澄家は、筑前の方を志し北山を越えむと、河上といふ所に著きけるに、廿三日の日、早西山に沒しければ、明日こそ山路をば越すべけれとて、其夜は此所の淀姫社を假寢の宿と定め、主從三四十八一夜の程をぞ明されける。斯かる處に、馬場賴周、神代大和守勝利と示し合せ、賴周が嫡子六郎政員を大將にて、少貳衆三百餘人、龍造寺の輩を追懸け、淀姫社を取卷いて鬨の聲をぞ揚げける。家純を初め思寄らざる事にてはあり。暗さは暗し。上下皆茫然として居たり。されども和泉守家門主從三十餘人、南門に駈出で呼ばはれける樣は、

唯今爰に押寄せしは、定めて馬場賴周にてぞ有るらむ。己れ惡行不道の振舞して、我々を斯樣に忻り討果すとも、因果は寔に車輪の如し。よし〳〵此一門の頸取つて、主の冬們に見せよ。いでさらば龍造寺和泉守が手並の程を見すべしと、當るを幸に切つて廻らる。其勢に辟易して、馬場六郎政員、一陣に進んでありけるが、門外へ引退く。斯かる處に、東より神代勢雲霞の如く都渡岐を渡して押寄せたり。家門猶も退かず、前彼の敵に渡り合ひ、爰に攻め伏せ、かしこに追付き戰ひしが、終に家門を初め家人堀江大膳亮・片田江七郎兵衞・同五郎太郎・同新次郎・新鄕伊豫守・蒲原・西村を先として、悉く枕を竝べて討死しけり。暗夜の軍なりしかば、家門討たれしを人知らず、豐後守家純・孫三郎澄家は、淀姬の社壇に循籠り、駈出で〳〵相戰ふ。彼の孫三郎は幼少より、勤學の窓の前に螢を拾ひ雪を集めて、或は李白・樂天が跡を追ひ、或は人丸・赤人が家風を慕ひ、手跡は小野道風にも恥ぢず、力量・早業ともに勝れし男なりしが、敵已に南門を打破り、社內に入込みしを見て、軍は早是までなりといひ捨てゝ、無き跡の形見とや思ひけむ。小指

龍造寺家門以下討死

龍造寺澄家戰死

を喰切り流るゝ血を以て、古き昔を思出で、「山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢」と、社壇の扉に書付置き、大庭に躍り出で、とある石を小楯に取つて、近づく者をば礑と切り、駈け出でては丁と討ち、敵に相當る事千變萬化す。馬場・神代の軍兵共、是に恐れて更にあたりに近づかず。されども馬場が家人、走懸りてむずと組む。家澄物の數ともせず、取引寄せ押伏せて首を掻かむとしける處に、敵大勢折重り、竟に澄家をぞ討留めける。豐後守家純も、社壇より軍の體を見聞し、今はかうよと思はれしかば、腹十文字に搔破り腸を繰出し、社壇の腰板に投付け、眼をくわつと開き惡相を現し落命あり。淺猿かりし有樣なり、澄家此時、小楯に取られし石、今に河上の社内に之あり。屛風石といふ。

又いふ、澄家此時、神代の家人と刺違へて死すとも。

舊書いふ、當所の寺社、此時先づ破壞すと。

斯くて龍造寺六郎次郎周家・同名三郎家泰・同孫八郎賴純は、少貳屋形冬尙へ一禮の爲め、是も同廿三日の晩景、佐嘉を出で城原勢福寺城へと急がれしかども、日黃

龍造寺周家等戰死

昏に及びし故、其夜は半途に滯り、和泉村の玉泉坊に立寄り一夜を明し、明くれば廿四日の曙、彼の山伏を案内にて城原に赴かれしに、尾崎村祇園原に、馬場賴周の家人藥王寺隼人允・神代豐前守兩大將にて軍兵を伏せ置き、龍造寺の輩に懸りて前後より押取包み、鬨の聲を揚げて切懸る。時に六郎次郎周家は生年卅六。勇氣無雙の男にて少しも動轉せず、味方の者共よ。とても遁れぬ所なるぞ。清く皆討死せよと、自身眞前に立つて戰ひしが、敵數人切臥せ、其身も終に馬場四郎左衞門（神代家人。）土肥新五郎（馬場與力。）に討たれにけり。是を見て龍造寺の家人福地右衞門尉家盈・同名新右衞門・同善八郎・百武藤次左衞門・野田河内守・同謙書記・江副又八郎・西山小三郎・下村源八郎・大塚左兵衞・同市之丞・石井左衞門・多比良大炊助以下敵中に駈入り〳〵、一人も殘らず討死す。斯かりし程に、三郎家泰・孫八郎賴純は、人手に懸らむよりはと、とある所に立退き、腹搔切つて臥しけり。爰に多比良大炊助が子に、犬房丸とて童のありけるが、敵中を紛れ出で南の方へ落行きしに、龍造寺の大將三人ともに討たれ給ふと、敵の訇る聲（腕アラン）引くまじとや思ひ

けむ。尾崎村大明神の北の邊にて、自害して失せにけり。然るに鍋島平左衞門尉清久は、龍造寺の面々の行方、覺束なく思はれしかば、野田越前守を招き、急ぎ見て參れとて遣しけるに、祇園原の軍早過ぎがら〔マヽ〕に駈付けたり。越前守是を見て、下人小三郎を近づけ、此樣子を清久に委く申すべしとて、小三郎を佐嘉へ歸し、其身は敵中に駈入りて、向ふ者四人切臥せ矢庭に討死しけり。此軍、正月廿四日の朝卯の刻に始まり辰の刻に終りぬ。

犬房丸が舊跡、尾崎村の北、田の畔に印の松あり。是を則ち犬房松といふ 近年大風に摧かれ今は無し。

北肥戰誌卷之十 終

北肥戰誌卷之十一

少貳冬尙龍造寺の所領ヲ沒收す

龍造寺剛忠入道歸國附馬場賴周父子討たるゝ事

馬場肥前守賴周は、兼ねて惡かりし龍造寺の一門六人、己が計略を以て容易く討取り悅ぶ事限なく、其首共を桶に入れて、城原勢福寺城へ取持たせ、少貳屋形の實檢に入れけり。冬尙、頓て剛忠一家の所領る沒收し、水ケ江の城には、馬場・神代・小田等の家人を入置き、替る／＼番をさせけり。然るに其頃千葉介胤勝も、同名胤賴が爲に、小城を退き居たりしが、兎角して今年正月廿三日當郡に歸り。同廿五日晴氣の城に入りけり。斯くて冬尙是を退治すべしとて、二月廿七日、城原より軍兵を差遣し、先づ小城町を燒拂ふ。時に千葉胤賴牛頭城にあり。少貳への加勢として人數を差出す。依りて千葉介胤勝が手の者、同廿八日小城の三津宮の邊に於て、胤賴

千葉介胤勝杵島に退却す

の軍士と戰ひしに、利を失ひて引退く。斯かりし程に、少貳方勝に乘り、明くる廿九日、冬尙・胤賴の兩家人等、小城郡所々へ打入りて、胤勝が領知を亂妨狼藉す。然る間、胤勝晴氣に怺へ兼ね、杵島の白石へぞ退きける。斯くて三月十六日、馬場肥前守賴周・同嫡子六郎政員・江上石見守元種、城原より小城に來り、胤賴の居城祇園岳牛頭城に登りて、胤賴に謁し談合を堅め、千葉胤勝の晴氣の城へは、少貳冬尙を居ゑむと、頓て普請を申付けけり。扨も龍造寺剛忠入道は、去ぬる正月、水ケ江の城を開いて筑後國へ落行き、一木といふ所にありけるが、長男の家純を初め孫子皆、馬場賴周が爲に討たれける由を傳へ聞き、賴周が心底を恨み、臍を嚙めども益なし。然るに鍋島平右衞門父子は、剛忠一家既に斷絕あるべき事を歎きて、竊に與賀・本庄の輩を相催し、彼是三百計りの人數を以て、三月下旬筑後の一木に赴き、剛忠入道に對面あり、早々御歸國候べし。何とぞ計略を廻し、賴周が首を切り御惡心をも休め、再び水ケ江の家を立て申すべし。疾く〳〵と勸め申されけり。時に剛忠、打案じ返答ありけるは、御邊の志、誠に海よりも深く山よりも高し。さりながら唯今

龍造寺剛忠歸國水ヶ江城に入る

催し來る處の軍兵、何程あるべきやと、鍋島父子答へて雜兵凡そ三百計りと申す。剛忠申されけるは、夫は餘りに無勢なり。先づ此度は立歸り、當家に好ある輩を猶猶催集め、重ねて迎を給はるべしとありしかば、鍋島父子心得て、急ぎ肥前へ歸り、重ねて與賀・河副の鄕士を語らひしに、鹿江遠江守兼明・久布白越前守兼基・南里左衞門大夫國有・立河兵部少輔家親・内田美作守兼智・石井兄弟・古賀・横尾・金持・末次・久米・村岡・大田・水町・增田・飯盛・副島・石丸、其外鄕民の頭々皆同心して、都合貳千餘人、兵船數十艘に取乘り、寺井江を押渡りて筑後の一木に著きけり。剛忠悅限なく、さらば歸國を急ぐべしと、一木の旅宿を立ち海上異儀なく先づ河副に上り、爰にて評定を極め、各〻備を分けて舊地水ヶ江に亂入る。當城には少貳屋形の下知として、蓮池より小田駿河守政光の家人共、此頃城番しけるが、敢へて一戰にも及ばず、おめおめと城を明渡しけり。斯くて剛忠、則ち水ヶ江の城に入り替られ、扨本丸に移りて其體を見らるゝに、籬の草蓁々として、昵みありける孫子もなくなり。平生に仕へし家人も失せ果て、城内寔に寂寞たり。老入道の歎、いふ計りなし。剛

龍造寺剛忠千葉胤勝馬場賴周を祇園岳に攻む

忠今年九十二歳とぞ聞えし。然るに其頃馬場肥前守賴周は、主の少貳冬尙を牛頭城に移さむと、みづから子息政員と同じく祇園岳に登り居て、雜人を集め普請させてありける。斯かる處に千葉介胤勝、白石より起りて、佐嘉へ其旨いひ送りしかば、剛忠大に悅び、俄に軍兵を駈催し、千葉衆といひ合せて、四月二日急に祇園岳へ押寄す。胤勝に從ふ輩には、鴨打陸奥守胤忠・德島土佐守胤順・同孫八郎盛秀・堀江與三兵衞匡房・窪田民部少輔胤秀・古河豐前守親貞・同修理亮盛貞・持永治部丞盛秀を初とし、空閑・陣內・彌頭司・大塚・粟飯原・江口・江頭・福田・東江以下小城郡の鄕士、山伏には圓實坊・西持院其外土民等相加はりて都合五六千人、祇園岳に押寄せ、旣に大構を打破つて本城へ攻め近づく。馬場が家人等、思寄らざる事なりしかば、大に動轉し、東西に逃げ迷ひ南北に馳せ散りて、周章騷ぐ事限なし。されども賴周・同嫡子政員、手の者を下知して防戰す。然る處に千葉胤勝の家人矢作左近將監・江原石見守兼ねて案內を知りしかば、水の手より忍び入り、城に火を懸け燒立つ。堀江與三兵衞尉進み戰ひ、攻口に於て分捕す。然るに此時、城內にありて普請しける土民等は、

賴周父子亂兵に殺さる

皆小城郡の者共なれば、胤勝に心を通じ、悉く一所に取集り。鍬・鎌等の農具を持ちて打つて廻り、城方へ敵對しける程に、賴周父子内外を防ぎ兼ね、叶はじとや思ひけむ。裏道より忍んで乘出し、居城綾部へ志しけるにや。東をさして山傳に鞭を揚げて落行きしが、運命盡きてやありけむ。黑岩峠といふ所にて道を迷ひ、大願寺野へ出でけり。寄手の中より是を見付け、遁さじと追懸る。賴周父子、頻に馬を早め山田村を過ぎて河上に到り川を越えむと、二人ともに馬を河水に駈入る。然る處に、龍造寺の軍兵追駈け來り、雨の如くに矢を射懸く。中にも野田安藝守家倰が放つ矢、六郎政員が馬に中り、打てども〳〵進み得ず。安藝守得たりと走り懸つて、政員を馬より曳下し、軈て首をぞ搔落しける。賴周是を見て、遁れ難くや思ひけむ川中より馬を引返し。淀姫大明神の社家のありしに走り込み、無體に賴みし間、土民の用意したる芋釜とて、穴のありけるにぞ竄しける。斯かる處に、龍造寺勢の内より加茂彈正といふ者、遁さじと追駈け來り、彼の穴の中より引出し、搔首にこそしたりけれ。又賴周を藏したる社人も切害せられしぞ不便なる。是は神代家人

剛忠頼周等の首を實檢す

に由緣ありし社人なり。倩〻思ふに彼の馬場賴周父子、過ぎし正月廿四日、人を祇園原に殺して、今の四月二日、己れ祇園岳の城を破られ、又人を河上の社に討つて、我も忽ち河上の社中に亡ぶ。因果歴然の道理寔に車輪の如しと、龍造寺家門の死期にいひしは爰なるべし。斯くて剛忠の軍兵、先手は早森川を過ぎて祇園岳に押詰め、後陣は北佐嘉に差廻す。是は賴周父子戰負けなば、定めて綾部へ落行くべし。其落足を討取るべしとの事なり。扨剛忠自身は、旗本を以て高木村の北迦まで馬を出されし處に、早祇園岳落城して、一本松といふ所にて、政員が首を持來る。是を實檢ありけるに、又賴周が首を持來れり。剛忠入道、二つの首に向ひ、生きたる者にいふ如く、涙を流し申されけるは、如何に賴周黃泉の下にても能く是を聞け。愚老が嫡子家純は、御事の子政員が舅にて眼前親しき緣ならずや。然るに家純を初め、一門悉く御事の所業にて討ち殺せしは如何に、寔に暴惡の甚しき事、御邊に過ぎたるはあるべからず。されば其因果忽ちに回り來つて、將に百日をも過ぎずして、父子ながら骸を弓箭の巷に曝せりと、恨み怒られけるこそ理なれ。時に野田石

見守、或はいふ兵部と。剛忠に向つて申しけるは、此賴周め、去る正月御一門の首を蹈みけると承る。然ればきやつらが首を、水ヶ江の城門の下に埋め、出入の者に踏ませ申すべしといふ。剛忠頭を振つて、いや〳〵其は狂人を眞似る不狂人なり。左樣の情なき事、努々あるべからずとて、賴周子の頸に鵝眼を副へ、萬壽寺・高城寺兩所に送り、葬禮形の如く取營まれけり。賴周、此時一用齋と稱す。

或はいふ、此時賴周、河上の寺家光明院に走り込み、湯殿に隱れし處を、加茂彈正追駈け來り、搜出して殺害しけるとも。

或はいふ、此時政員、龍造寺の兵に誘出され、森川に於て相戰ひ打負けて、大戸ヶ里といふ所へ落行き、土民の家に走入り、簀の子の下に隱れしを、野田三河守槍を以て突殺しけるとも。

政員時に廿九歲なり。其一子馬場六郎政家、初の名は太郎四郎。此時幼稚なりしを、家人牟田平右衞門、是を抱いて筑前の方へ立退き、年を經て東肥前へ歸入り、故馬場肥前守鑑周が舊領の內、七百町を安堵して三根郡中野の城に住し、後龍造寺家に屬

し子孫あり。

又いふ、頼周此書に載する所甚だ佞奸の者なり。然れどもさにあらず、博學にして才智あり。忠心深く又下賤を憐れみし者なり。龍造寺の一家を討取りし事は、主君に對して謂ある事なり。

一、爰に其頃、馬場が家人に藥王寺隼人允といふ者あり。今度祇園岳牛頭城合戰の前廉より、遠所へ使節に行きて、主の先途に逢はず、歸りて後大に悔み、急ぎ龍造寺に赴き、某は馬場頼周家人何某と申す者にて候。主にて候頼周、兼ねて懇に召仕ひし者なり。然るに此度頼周討たれし砌、其場に居ずして死を倶にせず、千萬是非なき事なり。唯今切腹申すべきの由申乞ひけり。其旨、剛忠へ披露ありしかば、主に忠ある者なり。助命然るべき由申されしかども、隼人承引せず達て申乞ひ、竟に高〔城脫カ〕寺に於て切腹しけり。其子あり。藥王寺市之允と號し、後に馬場肥前守鑑周に奉公す。

一、同天文十四年四月十六日の夜、龍造寺宮內大輔胤榮、急に軍兵を催して、頃日少

龍造寺胤榮代の千布城を陷る

貳方にて神代の一族が籠りたる上佐嘉千布の城を攻めたりけり。彼の胤榮は、龍造寺の正嫡にして剛忠の甥なりしが、此度馬場が企に依りて、少貳家に鬱憤を含み、剛忠と共に軍を起して打出でけり。然るに今夜、千布の城には福島周防守利高・千布次郎家利を先として、城原の江上衆楯籠りて中佐嘉衆と相戰ふ。されども不意の事なりしかば、當城忽ち落城して、皆山内へ引退く。此時龍造寺の軍士にも、中島主水允其外江副・河副以下討死數十人なり。城は則ち燒失す。

剛忠入道法華萬部修行

龍造寺入道剛忠後の萬部成就の事

同年龍造寺剛忠法華妙典一萬部を、水ケ江の城内に於て修行せらる。其奉行は堀江筑前守なり。九千部は去る天文七年より轉讀あり。今年一千部を修行あつて、總べて一萬部成就の處とぞ聞えし。導師は春日山高城寺の長老登岳和尙にて、高〔城脫カ〕寺・慶雲院・泰長院等の智識を請じ、剛忠自身も精進潔齋し、每日硏水を灑いで燒香禮拜し、則ち城内に假屋を打ち道場とし、大衆の休息所百間・饗應所三十間を儲け、

又休息所と道場の間の路の左右に、俵米を積む事高さ六尺、其體壁の如くにす。布施は長老中に鵝目五十貫宛、平僧には十貫宛なり。扨野田石見守に下知あつて、兼ねて貯置きたる財寶を悉く藏より取出し、辻々に高札を立て、非人乞食共へ是を施行し、其上水ヶ江領の土民等の拜借したる銀・米の類、皆免許あり。今度萬部成就に付いて入りたる所の金銀米錢勘定の究なし。又僧衆の夜の宿直物、新しく此度用意あつて、成就の後皆以之を與へらる。凡そ其體、德世〔政カ〕に同じくして人の耳目を悦ばせり。斯くて萬部事故なく成就の上供養を遂げられ、又百部を書き、城の北に當り其經卷を奉納あり。今の萬部島是なり。されば剛忠、萬部を修せらるゝ事兩度、去ぬる永正二辛巳年にも百人の僧を請じ、導師は水上山の天亨長老にて、口〔自〕下同ジ別に百部宛轉讀あり。其年中に成就せらる。夫より又過ぎし天文七戊戌年より開闢あり。今年天文十四乙巳年に八箇年にして成就せらる。是れ併當家の繁榮國土の安全を祈られたる爲とぞ聞えし。

或はいふ、剛忠萬部修行の事、兩度にあらず一箇度なり。永正二辛巳年に始り、

天文七戊戌年に成就、開辟の導師は水上山の天亨長老、結願の導師は春日山の登岳和尙にて、百人の僧を以て口別に百部宛讀誦すとあり。其年間三十三箇年に及ぶ。此段追つて考ふべし。

一、天文十五年丙午正月十八日、少貳冬尙、城原勢福寺より有馬と軍兵を合せ、龍造寺胤榮・千葉胤勝の居城小城・佐嘉兩城を攻む。胤榮・胤勝防ぐ事を得ずして、千葉は降參し龍造寺は落失せけり。時に有馬の者共、同月廿二日小城に晴氣・松尾・岩藏・三間寺等の所々に打入り亂妨する事、法に過ぎたり。爰に於て千葉胤勝の家人共、堪へずして爰かしこへ出合せ打戰ひ、有馬の軍兵多く討たる。是より有馬暫く亂入せざりけり。

龍造寺剛忠入道卒去附隆信家相續の事

龍造寺剛忠卒去

同年三月十日、龍造寺山城入道剛忠、水ケ江の居城に於て卒去せらる。行年九十三歳なり。家を續ぐべき子孫なかりしかば、一族の龍造寺播磨守家宗、是を歎き一門

隆信剛忠の跡を繼ぐ

他家の家僕を集めて談合しけるは、今當家を繼ぐべき人を案ずるに、故六郎次郎殿の嫡子、頃日寶琳坊に坐す中納言律師（或は中將）。圓月に優るはあるべからず。元より老公の嫡孫といひ、其上器量の人なり。此人に還俗を勸め、急ぎ水ヶ江の城へ入れ申すべし。各、如何といふ。又或者申しけるは、最も然るべし。さりながら新次郎家就は、當家正統の分にて、水ヶ江の相續似合はしき人なり。一是をや招くべしといひ、衆議區々にして決せざりけり。時に一座の中より、兎角斯樣の事は神慮に任せて宜しき物なり。所詮鬮を取つて其善惡を知れと申す。何れも尤もと同じて、則ち龍造寺八幡宮に向つて御鬮を下しけるに、中納言圓月にぞ極はりける。扨龍造寺播磨守・野田安藝守以下の宿老共集りて、律師圓月を先づ石井尾張守兼清（或は忠房）が宅に請じ、子息大隅守が寢間を休所に取構へ、先づ鰹を進らせ、加瀨町より彥壽と申す女を宿直に召置き、還俗させ申して、夫より水ヶ江の城へ移しけり。圓月生年十八歲、伯父寶琳坊豪覺法印の弟子、小字長法師丸。此時忍辱の法衣を脫ぎて、龍造寺民部大輔胤信と改名ありけり。斯くて胤信則ち水ヶ江龍造寺の家を相續し、剛

忠一世に少貳家よりの新恩の地河副鄉一千町、幷に重代の所領小津鄉八十町を知行あり。後に中國の大內介義隆に屬し、天文十七年に諱字を受けて胤隆と號し、同十九日年重ねて隆信と改めらる。隆信とは義隆最物の名にてぞありける。

龍造寺胤榮本領に歸る附少貳冬尙沒落の事

爰に龍造寺の總領宮內大輔胤榮は、今年正月十八日少貳冬尙の爲に、佐嘉の城を退き浪人の體にて、頃日は筑前國へありけるが、如何にもして本領へ歸り入らむと思立ち、大內介より太宰府へ据ゑ置きし守護代杉十郎隆滿に據りて、中國に於て大內介義隆をぞ賴まれける。義隆領掌あり。龍造寺胤榮へ送られし狀にいはく、

至筑前上國之由可然候。本意不可回踵候。猶隆滿宗長可申候也。

三月二日　義　隆判

龍造寺宮內大輔殿

斯くて宮內大輔胤榮、大內介の加勢に依りて少貳方の輩と相戰ひ、合戰に打勝つて、

龍造寺胤榮少貳と戰つて勝つ

事の次第を中國義隆へ註進す。時に大内介よりの狀に曰く、

合戰勝利之由神妙也。依二所望之地一、肥前國佐嘉郡之内五千町、神崎郡之内西鄕五百町、三根郡之内下村貳百町、防所三百町之事所二宛行一也。猶以可レ被レ抽二忠節一之狀如レ件。

卯月廿二日　　　　義隆判

龍造寺宮内大輔殿

龍造寺胤榮本領に歸る

斯くて龍造寺宮内大輔胤榮、翌くる天文十六年丁未、自ら中國へ赴き、義隆の方へ少貳冬尙の擧動を樣々訴へ申されしかば、其旨帝都に於て將軍義晴公へ、義隆より委しく言上ありしに依りて、其儀ならば、冬尙事早速誅伐すべきの由仰出されけり。玆に因りて同年六月、義隆、筑前の守護代杉十郎隆滿が方へ、右上意の旨下知せられ、其上龍造寺宮内大輔胤榮を豐前守になし、肥前の守護代として、少貳退治の事を下知せらる。斯かりし程に、龍造寺胤榮、則ち安堵を蒙り、豐前守に任じて、同七月下旬、肥前の本領に歸入り、頓て同名民部大輔胤信（中頃隆胤。後隆信と名づく。）と談合し、軍

龍造寺少貳合戰

兵を合せて少貳冬尙追罰の爲め、東肥前へ出張あり。時に胤信、大內家に屬して出馬初なり。斯くて少貳方の輩、爰かしこに打出で是を防がむとし、又冬尙の舍弟千葉介胤賴、小城の牛尾の麓普賢寺と松尾に兩城を取構へ、人數を籠置き、兄冬尙に力を合せて大內勢を待懸けけり。然るに龍造寺豐前守、閏七月杉十郎へいひ送り、筑前の軍士を麾き、同名民部大輔と一つになり、冬尙の居城神崎郡勢福寺城へ押寄す。時に少貳の老臣江上石見守元種・宗筑後入道本盛・馬場右衞門大夫周詮以下、三根・神崎の間所々にて防戰しけれども、度々軍に利を失ひ、其上八月五日、米田原の合戰に、冬尙の股肱と賴まれたる宗筑後入道本盛、苔野口に於て討死しければ、少貳方の軍士彌力を落しぬ。彼の筑後守秀恒入道は、冬尙若年の時より附添ひし者なりし故、甚だ歎き申されけり。此時冬尙より土肥但馬守への狀に云く、

先剋苔野口防戰之砌、本盛〔討脫カ〕死之由不及是非次第に候。悲歎令察候。左馬助若輩之條、晴愁霽之思彼所取育之儀。別而賴入存候。旁爲可申染筆候。恐々謹言。

八月五日　　冬　尙判

土肥但馬守殿

冬尙敗北居城を去る

斯くて少貳衆始終の合戰に打負けしかば、冬尙竟に十月十六日、勢福寺城を下城あり。筑後國へぞ赴かれける。然るに大内介は、容易く冬尙を追落し、肥前の内三根・神崎等の少貳領一圓に押取り、龍造寺一家を以て、其境を守らせけり。

一、今年初めて肥前國檢地之あり。

龍造寺隆信兩家相續附小河筑後守武純忠心の事

胤榮逝去

天文十七年戊申三月廿二日、肥前國佐嘉の城主龍造寺豐前守胤榮、兼ねて病惱に迫り卒去あり。此人は當家の正嫡にて、前大和守從五位下胤久の子なり。未だ壯年に早世ありしかば、息女一人ありて男子あらず。玆に因りて龍造寺の嫡家、既に斷絕に及ばむとしけり。斯かりし程に、老臣小河筑後守武純・納富石見入道道周・江副安藝守久吉、其外龍造寺伊賀守家直等詮義を遂げ、鍋島駿河守淸房と談合して、水

胤信胤榮の嫡家を繼ぎ隆信と改名す

ヶ江の城主民部大輔胤信を以て、胤榮の後室に娶せ、當家と水ヶ江兩家を一つに合せて相續然るべきの由、衆議決定あり。頓て民部大輔を佐嘉村中の城へ請じて、彼の後室に婚禮を調へ、則ち胤榮の遺跡をも相續あり。龍造寺の總領とぞ傳きける。然るに胤信、當家庶子・總領の兩家ともに連續あつて、先祖相傳の所領八千餘町を知行し、程なく大内介義隆に卽いて諱字を受け隆胤と改め、後に又改名して隆信とぞ申しける。

龍造寺に兩流あり。總領を村中龍造寺と稱す。胤榮の一家なり。庶子を水ヶ江龍造寺といふ。剛忠の一家なり。

さても此時村中の老臣に、土橋加賀守榮益或は和貞。とて、故胤榮に仕へて隨分忠を盡し者なり。故主胤榮、早世ありしを明暮に歎きて、一向世事を諦めず居たりしが、更々隆信を肯せず、如何にもして前和泉守家門の子龍造寺左衞門佐鑑兼を以て、家を立てむと思立ち、竊に豐後へ通じて、大友屋形修理大夫義鑑へ内談しけり。彼の鑑兼は元來義鑑の烏帽子子にて、去ぬる天文二年に加冠して、一字を受け孫九郎鑑兼

老臣小河武純胤榮の後室を苦諫す

と號せし人なり。然る間、兼ねて義鑑、是を懇意に思はれけり。其上、頃（日脱カ）大內介と大友武威を爭ふ半ばなりしかば、義鑑彌ゝ、幸なるかな。彼の鑒兼を我手に入れ、大內一味の隆信を退くべしと思案して、頓て土橋と同意あり。其計略專なり。扨又隆信の妻室は、鑒兼の妹なりしかば、是も土橋と同意にて、隆信と交り睦しからず。斯かりし程に、龍造寺の一族家人等、悉く當家の浮沈を危んで雙方に別れ、何となく佐嘉騷動し、既に龍造寺の家、廢亡とぞ見えたりける。然るにある日、老臣小河筑後守登城して直に簾中へ推參す。少時あつて內室立出で武純（或は榮純。）に對面ありけるに、筑後守畏まつて申しけるは、寔に先君胤榮公、計らず御逝去に付いて、御家人悉く力を落し、悲歎の涙に袖を干し得ず候。さりながら御形見の姫君渡らせ給ふこそ、歎の中の悅にて候へ。定めて御成人あるべし。恐ながら一目見奉りたく候と申す。內室、武純が望に任せ、則ち姫君を當座に召す。筑後守、姫を搔抱き目も離さず、良ゝ打ち守り泪を浮べて申しけるは、さても果報なき姫君や。御幼稚にて父上に後れ給ひ、未だ十歲にも成り給はで、唯今某が手に懸り、刃の上にて御命を失

ひ給ふ痛はしさよと、いひも果てず脇差をずばと拔き、姬君を刺殺さむとす。母上を初め女房達、周章ふためき走り寄り、筑後守が手に縋り、是は如何なる事ぞや。物に狂ふか小河殿と、上を下へと返す。武純申しけるは、何ぞや物に狂ふべき。此の姬の御命は、偏に母上の御心より失ひ給ふなり。夫を如何にと申すに、先君御死去の後、御家を續ぐべき人もなく、當家忽ち絕えむとす。然る間、御一門の歷々、其外納富・江副を初め、物の數ならぬ此筑後守打寄りて詮議決定の上、胤信公を還俗させ、御前に娶せ奉り、龍造寺の名跡を立て、心安く能在り候處に、如何なる天魔の勸め進らせけるにや。御夫婦の御中睦しからず、御家の浮沈此時に極り、御家人二つに分れ、龍造寺の家滅亡忽ち遠きに候はず。されば其危きを見て、近國の諸將佐嘉を攻めむとする由風聞あり。今此體ならば、此期に及んで、よも防ぐ味方は候まじ。然らむ時は、此姬君の敵虜となり給ひ、是こそ龍造寺胤榮の娘よとて、凡下野人の手に懸り、名字の恥をかき給はむが口惜さに、唯今某刺殺し申すなりと、更に刀を納めず。時に母上宣ひけるは、尤なり、筑後守。御事が申す處、一々承引す。

今よりは自らが心を改め、胤信公と睦しかるべし。其子を免して給はれと、泣く泣く手を合せられしかば、武純も泪に暮れ、則ち姫を渡し申し、左樣に候はゞ偏に御家長久の基、我々の悅び是に過ぎず。彌〻唯今の御言葉、少しも違はせ給ふなと、返すぐ〜敎訓し、奧を退出しけり。是よりして隆信夫婦親くなり給ひ、男女の公達多く儲けられ、龍造寺の家長久しけり。

右姫君、此時七歲。小字於安。成仁の後蓮池の城主小田彈正少弼鎭光に嫁す。鎭光切害の後、唐津の城主波多三河守親に嫁す。親遠流の後、佐嘉に歸りて尼になられ、靜室妙安といふ。

少貳冬尙歸城の事

太宰少貳冬尙は、頃日筑後國に居られしが、去る頃龍造寺胤榮卒去し、佐嘉の城下騷動する由傳へ聞き、さらば其變に乘じて、此度歸國すべしと思立たれ、伯母埓對州の宗讃岐守義調入道一鷗の方へ加勢を乞はれし間、一鷗頓て健兵三百餘騎を差

越しけり。冬尙、是に力を得、則ち筑後を立ちて川を越え、東肥前に打入り舊城神崎郡勢福寺城へ入らむとす。當城には此時、大內家より城番として、江上隆種といふ者を入れ置きけり。彼の隆種は、元來少貳の家人にて、江上元種が一族なりしかども、去年の合戰に冬尙沒落ありし時、止む事を得ず大內勢に向つて降參し、當時は此城の番人となり、代る〳〵番衆を置きけり。斯かる處に一騶の加勢三百餘人、ある夜勢福寺の城に忍び入る。然るに今夜の番人は、光安忠三郞にて主從僅に十人計り、當番の侍爰にありと、名乘懸け〳〵大に勵み戰ひ、忠三郞自身手柄を現し、竟に城門を破られず。結句三百餘人の夜討共、光安に防がれ辟易して引退きけり。

少貳冬尙歸城

此時忠三郞、江上隆種より感狀を得て、當座に刑部丞になさる。斯くて當城暫しは差恢へて見えしかども、番頭の隆種、素より少貳譜代の者なりし故、頓て城を去り冬尙へぞ明渡しける。斯かりし間、冬尙則ち勢福寺城に入り、江上左馬助尙種を以て執權と定め、再び三根・神崎の兩郡を知行して威を振はれけり。

或はいふ、宗一騶入道を、豐後侍宗一勝とも。

田尻家の由來

田尻親種鷹尾に城を築く

田尻伯耆守親種筑後國鷹尾に城を築く事

爰に其頃筑後國に田尻伯耆守大藏親種といふ者あり。漢高祖の子孫にして、原田・秋月・江上・高橋とは、同姓の一族なり。先祖原田大夫種成が三男三郎實種が時、筑前國より始めて筑後の三池田尻村に移住せしより田尻と號し、彼の親種が曾祖父田尻左衞門大夫恒種以來、豐後府內の大友家に從屬す。然るに親種が父遠江守治種、去ぬる永正年中、筑後國の住人黑木筑後守・蒲池民部少輔・杤綱兵庫頭・石泉菴反逆を企て、計策の廻文を差廻しける時、大友家に對して忠節ありしより、今の親種に至つて彌々府內に馬を繫ぎ、筑後國の內三池・三潴・山門三郡にて數千町を知行しけり。されば親種、先祖代々田尻村に在城すと雖も、近年府內へ訴へ、櫟崎へ居城を變へぬ。然れども又彼の在所洪水度々に及び、水の手相損ずるに依りて、重ねて府內へ訴へ、領內鷹尾に新城を構へたきの旨、大友屋形義鑑に相願ふ。當國は大友支配の國に依りてなり。此時義鑑幷に家臣入田丹後守親廉より、田尻伯耆守親種

へ新城免許の狀に云く、

就近年覺悟之要害水手相損候、至領內高尾可被取移之由〔衍カ〕候。肝要に候。爲直城倍々堅固之才覺專要之段、猶入田丹後守可申候。恐々謹言。

九月三日　　義鑑判

田尻伯耆守殿

就先年要害之儀言上之旨候條、令披露候之處、雖被成御分別被取誘候、彼在所依洪水損水手候て、於領內高尾之村有一壘覺悟度之由、內々示給候之趣、達上聞候之條、爲直城可被取構之由被成御書候。御面目至珍重候。彌々於相應之儀者、何時茂不可有無沙汰候。猶期來喜〔春カ〕先令省略候。恐々謹言。

九月六日　　入田親廉判

田尻伯耆守殿　御報

親種、鷹尾に彌々新城を築き取移りぬ。其後享祿二年己丑の春、江浦・津留・濱田・堀切に四箇所の端城を構へ、本城と共に五箇城とす。

豐後國黑嶽に鬼馬出づる事

其頃豐後國に奇異の事あり。直入郡の內に、昔より嵯峨天皇の御廟を祭りて、一社を建立し、每年此國の太守より神事を執行はれけり。然るに大友豐前守政親の時、先例に任せられ當社へ神馬を置かれし處に、過ぎし明應の頃、彼の神馬搔消す如く失せにけり。是は何樣、太守の身の上の凶事にやありけむ。豐前守政親、幾程もなく赤間ケ關の海上にて、不慮の生害に遭ひ給へり。斯くて件の神馬、今年天文十八年に、凡そ星霜六十年を歷て現れぬ。されども以前見たりし馬の形にあらず。先づ葦毛が黑鹿毛になり、尾髮は森の如く、白き角を戴き、口は耳の根に裂けて兩眼火焰に異ならず。偏に鬼とや云ふべきなれば、見る者忽ちに逃隱れぬ。是は以前の神馬にはあらじといふに、則ち太守政親の銀の札を下げたり。老若男女惶(おそ)るゝ事限なし。此馬早晩黑嶽の上より駈下るに、其足音雷の如く、人馬六畜ともに取喰ふ事、其數を知らず。斯かりし間、既に國中の騷(さわぎ)となり、府內の城許へも注進あつて、

當國守義鑑へ披露ありけり。是に依りて彼の馬退治すべき由、樣々詮議せられし處に、大友の家中に隱もなき荒者城後因幡守・大窪藏人助兩人、頻に申乞ひけり。大事の手合物なりしかば、小人數にての退治如何あるべきと、義鑑思案ありしかども、達つて望み申すに付て発されけり。兩人大に慶び、ある夜人をも具せず、唯〻二人黑嶽山の麓今水越火草馬場といふ所に出向ふ。後難を思ひしかば、仕損じては叶ふまじと兩人談合し、城後は三尺六寸の大長刀を陽に構へ、大窪は八寸餘の大鴈股を白木の弓の架延べたるに打番ひ、長八尺計りに見えける立石のありしを楯に取りて、件の鬼馬遲しとぞ待懸けたる。案の如く彼の馬黑嶽の頂上より鳴りはためきて駈下り、城後・大窪がありしを疾く知りて一文字に飛來る。時に大窪、えいやつと切つて放つ。如何したりけむ。一の矢を射損じ、二の矢を番ふ時、鬼馬雄(たけ)つて件の立石を飛越えけるを、城後因幡守、得たりと聲を掛け長刀を以て突き貫き、石の際にぞ押臥せける。扨其夜も明けて、火草馬場には鬼を平げたりと云ひ周章てしを、朽網右京亮親光、搔揚山の城より聞付けて、急ぎ馳せ行き是を見けるに、其體曾て常

の馬にあらず、長七尺に餘り、毛は鐵の針に異ならず。此事、早速府内へ注進しければ、太守義鑒急ぎ城後・大窪兩人を召出し、比類なき手柄仕たりと大に褒美ありけり。今度彼の馬現れしも、又太守の上の凶事にやありけむ。明くる天文十九年庚戌二月十二日、大友義鑑不慮の切害に遭はれしなり。

北肥戰誌 卷之十一 終

北肥戰誌　巻之十二

大友義鑑横死の原因

大友義鑑横死の事

爰に豐後の屋形大友修理大夫從四位下義鑑、天文十九年庚戌二月十二日、家臣の爲め不慮に横死せられけり。其濫觴を尋ね聞くに、義鑑に子息餘多あり。中にも嫡男の當屋形を五郎義鎭と申す。其次を八郎と號す。是は今の簾中の腹にあらず、先腹の子息なり。又當腹の子を細御曹司藤妙公といひけり。されば世の中の習、繼母の讒口時々にて、義鑑と義鎭の中快からず、夫婦密談の上、寵臣入田丹後守親誠へ内談あり。大友廿代の家督を、彼の當腹の細御曹司に讓らむと思立たれ、ある時、老臣齋藤播磨守・小佐井大和守・津久見美作守・田口玄蕃允（或は彈正。）を召して、爾々（しかじか）の事を申聞けられけるに、四人一同に申しけるは、唯今の上意我々更に感心せず。御成仁

義鑑の横死

の當屋形を閣かれて、未だ幼稚の藤妙殿に御家を讓らるゝ事、全く御本意にあらず。自他の聞、是に過ぎたる惡事候まじ。此儀、一向に思召止められ然るべしと申切つて居たり。義鑑、案に相違し重ねての言葉もなく、艴然として奥に入らる。其後義鑑、猶も入田親誠を竊に語らはれ、當屋形義鎮を殺さるべき企ありけり。其事、如何にして世間に洩れ聞えけむ。義鎮早速、齋藤・小佐井が子共を供として、立石村に居所を替へられけり。斯かりし程に、父義鑑、是は偏に彼の四人の所爲よと思はれしかば、先づ齋藤播磨守・小佐井大和守を召寄せ、城の門外にて切害せられ、扨義鑑夫婦・藤妙殿御料人、其外二階の上に居られしに、津久見美作守・田口玄蕃允は、義鑑の前にありけるが、我が身の上と思ひしかば、田口は先づ義鑑を切殺し、津久見は簾中・御料人藤妙公を切害し、其外局女房達悉く切捨て、津久見は當座に腹十文字に掻破つて臥し、田口は近習の侍城後左近に討たれにけり。寔に前代未聞の振舞、國中騷動大方ならず。大友家中の士上下をいはず、皆足を空にして馳違ふ。斯くて臼杵安房守を初め南郡衆は、入田親誠に一味し、皆々入田へ引籠り、一行の

入田父子自害

企ありしかども、當屋形義鎭、頓て立石村より府内に歸館あり。城下彌〻靜謐なりしに依りて、入田に一味の輩、何れも義鎭へ降參し、入田親誠・同父親廉・同子十郞、其外一類中は豐後に溜り兼ね、肥後國へ退き舅阿蘇大宮司惟豐をぞ賴みける。されども大宮司、彼の親誠が凶惡の程を惡みしかば、是を介抱せず。斯かりし間、入田一門すべき樣なく、四月四日、親廉・親誠・同子息十郞以下、其門葉悉く阿蘇に於て切腹しけり。是よりして府内彌〻平均し、五郞義鎭、父義鑑の遺跡を安堵ありけり。後に宗麟入道と申しゝは、此五郞義鎭の事なり。

或はいふ、義鑑生害、二月九日の事なりとも。

又いふ、九月二日とも。

或書にいふ、義鑑、先づ齋藤・小佐井を呼寄せ是を誅し、扨津久見美作・田口玄蕃を呼ばれしに參らず。使再三に及びしかば、兩人今は遁れぬ所よと思ひ、是を最期と出立ち、城の裏門より入りて、津久見は、直に簾中へ走り込み、奥方・藤妙を切害し、田口は義鑑の居間へ切つて入り、則ち義鑑を刃傷しけりとも。

或書にいふ、入田親誠、阿蘇に落行き、舅大宮司を頼みしかども、大宮司是を惡み、搦捕りて首を刎ねけるとも。

一、今度府內の騷動靜謐しければ、大友旗下の諸將、皆義鎭へ參禮す。其中にも筑後國田尻伯耆守親種より使節を以て、府內靜謐の祝詞を述べ、其上彌〻別心なきの旨、神文を差送りしに、義鎭よりの狀にいはく、

爲二愛元靜謐祝儀一太刀一腰・鷹に送給候。祝著候。猶豐饒美濃守可レ申候。恐々謹言。

二月廿六日　義　鎭判

田尻伯耆守殿

對二義鎭一倍可レ被レ勵二忠貞一之段、以二寶印眞一始中終承候。誠御懇敷祝著候。其堺堅固才覺、可レ爲二其方代々勞功之首尾一候。猶豐饒美濃守可レ申候。恐々謹言。

二月廿八日　義　鎭判

田尻伯耆守殿

菊池義武蜂起附下筑後所々軍の事

菊池義武蜂起隈本城に籠る

爰に菊池左京大夫義武は、其頃筑後國へ蟄居し、三池・溝口・西牟田の一族を頼みてありけるが、今度府內の騷動を聞いて大に悅び、急ぎ舊領肥後へ打越え、菊池譜代の輩を相催し、府內を攻め落して年來の宿意を晴さむと思ひ立ち、三月中旬に旗を揚げ、頓て肥後國へ渡海し、田島伊勢入道・鹿子木三河守を差語らひ、隈本の城に楯籠りけり。斯かりし程に、筑後國にも西牟田彌次郎親氏、其一族に田河兄弟・小山山城守、其外三池上總介親員・溝口丹後守鑑賓・安武安房守鑑敎以下、菊池に同心して各〻相圖を定め、下筑後へ討つて出で、今福の要害に取籠り、大友へ向つて相戰はむとす。此事早速、府內へ聞えしかば、新屋形大友左衞門督義鎮、急ぎ於(マヽ)筑後高良山の座主、其外蒲池近江守鑑廣・田尻伯耆守親種・安武安房守が方へ、彼の徒黨退治の事を下知せらる。右人數の內、安武は最前逆意を挿み、西牟田以下と一味しけるが、如何思ひ反しけむ。懸望を以て疾く降參しけり。

三池上總介等鷹尾城を攻む

一、田尻伯耆守は、至つて大友無二の志ありしかば、四月二日より居城鷹尾に栖籠りて、彼の徒黨等と戰はむとす。斯くて明くる三日、三池上總介・溝口丹後守・西牟田以下現形して、田尻が在所へ取懸る。中にも肥後の大津山來り加はりて、三池衆と一つになり、鷹尾の城邊相絡む。時に田尻は僞の籠城なりし故、城中無勢に依りて防戰難儀に見えしかども、山下の蒲池近江守に申談じ、城内堅固に恢へけり。其半、田尻が弟山城守鑑乘、軍兵を率して溝口薩摩守が居所へ取懸け打崩し、則ち引返しける處に、肥後の和仁・邊春・本告以下横合に懸りて、鑑乘が勢を撃つ。鑑乘數度防戰を遂げしかども、既に難儀に及びけるを、蒲池因幡入道・同子息石見守馳付けて敵を追崩し、田尻勢恙なく鷹尾の城に引入りぬ。

一、同四月十九日、彼の徒黨の內、西牟田彌次郎が名代田河中務少輔兄弟、聊か軍用ありて溝口鑑資が城へ赴き、夫より三池へ打通りしを、田尻伯耆守、伏草を以て田河中務・同民部以下敵數人討取りぬ。田尻勢にも同名但馬守鑑忠・同大和守鑑房以下、高名手負數十八なり。

一、此時同國酒見下野守も、豐饒美濃守一所を以て、三池・溝口・西牟田と所々虎口にて相戰ふ。時に義鎮より酒見下野守への狀にいはく、

今度三池上總介・溝口丹後守以下、以西牟田彌二郎同心相絡候之刻、以豐饒美濃守一所、於所々虎口粉骨忠貞感悅無極候。然者其方當知行酒見北分六町分之事乍勿論、聊不可有相違候。加恩之事於筑後之間可加扶助候。益々忠儀肝要候。恐々謹言。

卯月廿三日　　義　鎮判

酒見下野守殿

一、同月廿八日、田尻勢三池に到り取懸け合戰す。終日の軍にて城兵引入り、一兩人討死しけり。

一、五月十五日、蒲池武藏守鑑盛、自身軍兵を率ゐて田尻と勢を合せ、西牟田殘黨隱住むの在所へ取懸け防戰せしめ、敵數輩討取る。時に田尻山城守・同名又四郎、同じ口に於て分捕す。

一、同月廿八日、肥後國小代實忠が大友方にてありけるに、隈本衆大津山・大野・和仁・邊春に、三池親員相加はり、小代が在所梅尾へ取懸け、中にも三池の軍士等、小代勢と相戰ふ。時に小代大和守高名を現はし、三池の家人に小山以下數十人討死しけり。隈本衆引退く。

一、閏五月五日、府内より筑後の逆徒檢使として、興導寺・佐藤刑部少輔を差遣し、田尻伯耆守が鷹尾の城に差籠る。又肥後へも菊池義武・田島・鹿子木以下、其外の徒黨誅伐として、府内より吉岡越前守長增・志賀安房守親泰・小原遠江守親元を差遣すに、此三老、今月三日府内を打立ち、諸勢皆肥後へ打入り、小國に到つて著陣し、近々小嶽二重口に差寄らむとす。時に國侍には、城・赤星・內空閑・長野・小森田・阿蘇・高知尾・小代以下、筑後には兩津江・五條無二の大友方にて、菊池義武其外の徒黨退治の事を評定す。

一、同月下旬、府內よりの兩檢使興導寺・佐藤刑部少輔、田尻伯耆守上筑後の輩と相談を以て、溝口鑑資が要害へ押寄せ攻め戰ふに、鑑資怺へずして則ち落城しけ

り此時、大友屋形より田尻への狀にいはく、

溝口要害之事、以二軍勞之辻一輙去候外聞實儀祝著無レ極候。然者三池爭者相支候。自他之覺無レ曲候。乍二辛勞一急度取詰可レ被二打崩一事賴存候。委細與導寺・佐藤刑部丞可レ申之旨、年寄共可レ申候。恐々謹言。

閏五月廿六日　　義　鎭判

田尻伯耆守殿

一、七月十三日、田尻伯耆守竹井原に於て相戰ふ。弟山城守を初め家人砥上新兵衞・眞弓助八郎・東林寺瀨戸仁三郎・三峯小四郎・古賀九郎三郎、其外中間三人疵を蒙りぬ。

今福合戰

一、同月廿三日、蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種軍兵を一つに合せ、三池の家人小山淨榮入道が籠りたる三池外郡今福の要害新開陣所に押寄せ、蒲池勢、安危思惟なく切懸り、終日合戰し敵數百人討捕りぬ。時に淨榮、防ぐことを得ずして三池の城へ逃退く。されども其殘黨、小山山城守を大將として數輩切つて出づ。寄

手各、最前より構に著き、刀打を以て相戰ふ。寄手其日の頭人は田尻山城守鑑種にて粉骨を抽んで、同名兵庫入道・野田土佐守・塚本太郎兵衛・金栗八郎次郎以下、手を碎き合戰す。中にも田尻尾張守種任、比類なく相働き、敵の大將小山山城守を檜下にて討取りたり。斯かり間、城兵小山對馬守を初め宗徒の者數十人、防ぎ戰うて討死す。田尻勢にも討死手負若干なり。既に今福の要害破れしかば、夫より蒲池武藏守・田尻伯耆守、則ち三池の城へ取懸け攻め戰ふ。時に蒲池三郎兵衞尉進んで城を攻め、城中に宗と賴みたる三池右衞門大夫を討取り。其外分捕高名樣々なり。斯かりし程に、城主三池上總介親員、怺へず城を遁れ出で肥後國へ落行きしかば、當城不日に落去しけり。斯くて寄手の輩、城の麓にて凱歌を揚げ、則ち三池の一族同名親隆入郡して當城に移り、諸勢皆開陣し、筑後國の一揆は爰に於て靜謐す。

一。右一亂に依りて、肥前國西島の横岳讚岐守資誠・蓮池の小田彈正少弼鎭光・幷に服部常陸介方へも、大友義鎭より賴み思ふの由、三原和泉守を以て申し來りし故、

各〻境目へ出張して、西牟田の殘黨と相戰ふ。

一、近年大友より筑後國へ守護代を置く。其人數には豐饒美作入道永源・河内太夫・齋藤伊賀守・以上大永八年の頃。豐饒美作入道・三原和泉守・以上天文五年の頃。豐饒美濃守鑑述・小田若狹守鑑言・森越前入道宗智。以上天文廿年の頃。

龍造寺隆信受領

一、今年天文十九年庚戌七月朔日、肥前國佐嘉の城主龍造寺民部大輔隆信、中國大內介義隆の吹擧を以て山城守に受領す。

一、天文二十年辛亥三月、筑後國草野鎭眞、大友義鎭の下知を以て、發心嶽の城を去り、同名左衞門尉鑑員、去年より出城して簗河に在宅しけるが、則ち草野へ歸り當城へ還住す。

隈本落城菊池義武自害

一、去年筑後國の逆徒は平均しけれど、同時に菊池左京大夫義武が籠りたる肥後國隈本の城は落去せず。依りて今年天文二十年の秋、大友館義鎭、大軍を以て自ら隈本を攻むべしと、肥後へ來陣ありけるに、御船城主甲斐民部入道宗運、急ぎ出向ひ是を案內し、菊池一味の輩一々に攻め落して、同九月五日、終に隈本の城をも

攻め干しければ、菊池義武遁るゝ方なく切腹、（或は生捕り首を切るとも。）肥後國已に靜謐す。

大内介義隆滅亡附龍造寺隆信沒落の事

大内義隆老臣陶の爲に害せらる

同天文二十年九月朔日、周防國大内介多々良朝臣義隆、其老臣陶尾張守隆房が爲に生害せられ、百濟國の琳聖太子より以來、當家廿八代にして正に絶えけるこそ淺猿けれ。

其原因

彼の事の起を尋ね聞くに、義隆過ぎし享祿元年十二月廿日、父義興逝去の遺跡を續がれしより、頻に朝廷に昵近し、次第に昇進あつて、大納言二品兵部卿太宰大貳に歴昇り、西三十三箇國の貫主として、偏に上見ぬ鷲に異ならず。然るに義隆、去(いに)し頃御臺所に後れ給ひ、悲歎の涙の中に、又持明院前左中將基親入道一忍軒の息女を京より迎へ、甚だ最愛し給ふ。されども此御臺、素より九重の翠帳紅閨に仁(ひと)となり給ひ、目馴れぬ田舍へ初めて下向ありしかば、霞立つ春の空には、寂莫として故郷の花を戀ひ、紅葉する秋の庭には、冏寥として昔の月を忍び、其片端も思ひ慰み給ふ色なし。義隆、是を痛ましく思はれしかば、花洛へ申送り、月卿雲客の中に數

島・絲竹の道に叶ひし人々を、居城山口へ招居ゑ、雪搔きこぼす朝・雨添ふる夕、詩歌管絃の外又他事もなく、御臺所の心を慰めらる。されば大内家の風俗、是よりして何となく京家を眞似ね、烏帽子のため樣・直衣の著樣まで、皆花車（きやしや）を好み、一向武士の本意を失へり。玆に因りて老臣陶尾張守、此事を深く歎き、樣々諫言を加へしかども、義隆敢て許容なく、結句尾張守を避け給ふ。爰に於て隆房、恨を含んで忽ち逆心を挾み、中國は申すに及ばず、九州を觸廻し一味の輩を語らひけるに、豐後の大友・豐前の城井・長野、筑前の麻生・原田、肥前の少貳、筑後の蒲池、肥後の阿蘇、其外悉く尾張守に同心す。斯くて隆房一味の輩を差招き、急に軍を起して八月下旬、山口の館へ押寄せしかば、不意の事にて城中周章ふためき、冷泉判官一人敵を防いで、義隆は長門國へ沒落あり。九月朔日、御臺・公達・舅一忍軒ともに皆生害せられけり。　寔に唐天寶の古、玄宗位を失ひ給ひし事は、楊貴妃華清宮に入りてより、其政を怠る所にあらずや。義隆是を思當られざるこそ柢〔集カ〕けれ。斯かりし程に、中國より太宰府へ居ゑ置かれし守護代杉越前守興連も、敵の爲め自害して失せたりしか

ば、鎭西にある大内旗下の諸將皆力を落し、少貳・大友方の輩、大に力を得て九州動搖に及びぬ。

一、爰に肥後國龍造寺の家臣土橋加賀守榮益、前名主水和貞。今度義隆滅亡の事を聞いて大に悅び、己天の時を得たり、兼ねて肯はず隆信の大内に屬してありしこそ幸なれ。此動搖に追出して、鑒兼に家を續がせ申し、我が身も榮華に誇らむと、密に同類共へ内談し、其旨少貳・大友の許へいひ送り、扨頃日隆信を惡む國中十九人の城持、神代大和守勝利・高木能登守鑒房・同名肥前守胤秀・小田駿河守政光・八戶下野守宗陽・江上左馬大夫武種・横岳讃岐守資誠・馬場肥前守鑑周・筑紫右馬頭惟門・姉河彈正忠惟安・本告左馬助賴景・宗兵部少輔尙夏・藤崎筑前守盛義・出雲民部大輔氏忠・三人の犬塚・綾部備前守鎭幸・朝日近江入道宗賛、其外有馬・後藤・多久の輩まで皆相語らひしに、大卒土橋が申すに同意しけり、斯くて此輩、頓て龍造寺の居城佐嘉を攻めむとす。

一、此時小城郡蘆刈に德島左衞門大夫信安といふ者あり。德島には養子にて、實は

小田政光の子なり。小田は元より少貳方の者なりしかば、此も騷動に佐嘉を攻めむと思立ち、少貳冬尙の舍弟晴氣の千葉介胤賴を大將に取立て、軍兵を用意しけり。然るに彼の德島が近邊に、鴨打陸奧守胤忠とて大勢の者あり。無雙の勇士なりし故、德島左衞門先づ彼等を語らひなんと思案して、陸奧守が館へ赴き心底の程を密談す。されども鴨打は、兼ねて龍造寺に志を通せし者にて、敢て德島に一味せず。兎角答へて左衞門大夫を歸し、扨此事を、隆信へ告げむと思ひ、急ぎ佐嘉へ赴きしが、道にて屹と思ひ出し、窪田民部大輔胤豐に知らせて、是をも同道すべしと、先づ窪田が館へ立寄りけり。然るに德島、彼の鴨打が風情早推量しければ、遁さじと思ひ其勢六百餘人、犇々と出立ち、鴨打が先へ廻つて半途を遮り、鬨を咄と作る。陸奧守動轉せず、家人共を下知して、德島が軍兵と入亂れ、火を散らし相戰ふに、左衞門大夫討負けて、手の者多く討たせ己が館へ引退く。陸奧守が家人江口若狹守・南里佐渡守・古賀因幡守、其外の者共、牛津江まで追討にし、鴨打も先づ歸宅して、事の次第一々佐嘉に於て隆信へ注進す。

鴨打胤忠の仁俠

一、斯くて土橋が徒黨、大勢を催して龍造寺の城を取圍み、口々を差塞ぎて所々の通路を止めけり。　城中には龍造寺同名の一族・鍋島を初め、納富・小川・福地・江副・安住以下、譜代の輩相集りて取籠りしかども、中々無勢なりしかば、防ぎ戰ふべき行もなく、討ち破りて通ることも叶難く、唯、網に懸りし魚の如くなり。　斯かりし程に、今は早隆信を初め、城中の老若男女、皆自害あるべきにぞ極まりける。然る處に十月廿五日の夕方、蓮池小田政光の老臣深町理忠入道、城の大手の城戶へ來り案內を乞ひて、納富左馬助・福地長門守を呼出し、對面して申しけるは、隆信公今度の御籠城、至極御難儀の體愚老見及び申し、今日は敵と雖も明日は味方となるも侍の慣、痛はしく存ずるに依りて、主の政光へ談合し、寄手の面々へ隆信公御安穩の事を、色々相談を致し、如何にも無事に申調へて候間、御上下ともに御心安く、今夜當城を御開きあつて、急ぎ何方へも先づ立忍ばれ候へ。　疾く〳〵とぞ勸めける。　納富・福地、則ち隆信へ斯くと披露しけるに、隆信是を信用あらず、兩人へ申されけるは、夫は彼の深町が計略を以て我等を下城させ、城外にて易々と

龍造寺隆信沒落

菊池鑑盛の義俠

計取るべしとの工なるべし。先年剛忠、水ヶ江を下城あつて、一門悉く所々にて討たれぬ。夫にも懲りずして、此度隆信、其行に喩され戸を野徑に曝さむより、當城に於て淸く腹を切らむと申されけるを、理忠聞いて、重ねて申し入れけるは、弓矢の神も照覽あれ。全く僞に候はず。猶御疑あるべくば則ち愚老人質となりて、城中へ入り申すべしと、太刀・刀を渡して自ら城中にこそ入りにけれ。斯かりし間、隆信心服あつて、然あらば理忠が申すに任せて、先づ當城を去らむと、隆信を初め城中の上下老若男女二百餘人、佐嘉の城を出でられけり。時に天文二十年十月廿五日の夜なり。斯くて女童まで皆槍の柄を短く切つて手々に提げ、數萬の敵の圍の中を押通る。偏に虎の尾を蹈むに異ならず。南の方井尾村に到り、夫より先づ寺井の堤津といふ所に落著きぬ。されどもいづくに身を寄せて、誰を賴まる便もなく、暫は上下呆れて居たり。此度、筑後簗河の城主蒲池武藏守鑑盛聞付けて、侍は互の事なりと、急ぎ堤津へ使を遣し、隆信の上下男女百餘人を簗河領三瀦郡へ迎取りけり。此時佐嘉の侍、國に殘れるもあり。他國へ浪人する

もあり。隆信に従ひて筑後へ赴くもあり。心々にぞ成り行きけり。斯くて隆信は、鑑盛の情にて先年剛忠入道の住まはれたる一木村に移り、原十郎惠俊が家にぞ住居ありける。扨佐嘉の城には、彼の土橋加賀守威を振ひ、已が所存の儘に、龍造寺左衞門佐鑒兼を城主として、其身則ち後見にありて佐嘉領を支配し、小田政光・八戸宗暘・高木鑑房・神代勝利の家人を以て、代る〲當城を警衞し、稠しく用心しけり。

鍋島彦法師丸本姓に復す

一、今年鍋島駿河守清房の次男彦法師丸、千葉介胤連の養子を辭し、本庄の館に歸らる。去ぬる天文十年二、歳四歳にて胤連の養子となり小城へ赴き、今年は既に十四歳なり。近年養父胤連に倶して牛尾の館にありけるが、聊か思慮あつて、此度舊姓に復(かへ)られけり。斯くて彼の冠者、梅林菴にて手習あり、鍋島家人の内太田伊豫守常に扈從す。

鴨打奧陸守胤忠隆信へ忠心の事

翌天文廿一年壬子、春より夏に至り草木蝗災、九州大に飢饉して、萬民貧苦に迫り、老いたる親を育み得ず、稚き兒を道路に捨て、上勞し下窮し、餓死する者十に八、既に人種盡くる程なり。然るに今年の秋七月九日の夜、有馬方の者共、小城へ亂入し、千葉領を侵し狼藉す。依りて千葉の家人等、出合ひて有馬衆を追返すに、仁戸田刑部大輔波佐間村にて討死しけり。

一、今年佐嘉本庄の地主鍋島平右衛門尉淸久、當所大明神より夢想を蒙り、子息駿河守と談合あり、高陽菴の地を點じ、一寺を建立して菩提所とす。惠日山高傳寺是なり。

福地信重の奔走

一、龍造寺隆信、去年より筑後國三潴郡一木村に蟄居あり。蒲池武藏守鑑盛の哀憐を以て、一木村・小坊村より諸色を調し、上下百餘人月日を送らる、然れども早朝三暮四の營も次第に乏くなりぬ。斯かりし間、福地長門守信重、斯くては叶ふべからずと、己が與力同名太郎左衛門と小林播磨守を召具し、小船にて竊に肥前へ渡海し、龍造寺の舊領與賀・船津へ上りて、鄕長村岡藤七兵衛が宅に來り、對面

すべき由を申す。村岡推量して急ぎ外へ出合ひ面談しけり。長門守囁きけるは、公私の難儀此時なり。兵粮を加勢あれと申す。藤七兵衛打聞きて、尤もの事なり。さぞ候はむ。急ぎ鹿江・南里・堀江以下舊好の輩に内談して、能きに計らひ申すべし。されば此邊は公の御住所近く候に付いて、頃日は高木鑑房夜廻にて、中々用心稠しく候。御邊と斯樣に申す事、夢程も露顯申さば能き事は候まじ。構へて聲し給ふな。さりながら今宵は大雨なれば、敵よも窺ひ申すまじと、福地・小林三人の者を連れて女房の閨へ入れ、やをら少時隱し置きけり。扨藤七兵衛、與賀鄉中を馳廻り、實久の内上町の副島新右衞門・同所本村の村岡次右衞門・鹿子村の御厨安藝守・同所の副島式部少輔・下飯盛の吉富主水允等の村長共へ談合しければ、五人ながら皆同心す。其外鹿江遠江守・南里左衞門大夫・堀江右衞門大夫・古賀民部丞・德久主馬允・村岡與三左衞門・久米長門守・飯盛備前守以下の郷士共も心を合せ、隆信上下百餘人の料米諸色を用意して、福地に引渡し、則ち藤七兵衛が船を商賣船に作り立て、世間には天草へ行くと言觸れて、筑後の一木へぞ差送りけ

鴨打胤忠の忠心

る。此扶を以て、隆信少時筑後國に逗留あり、然る處に、鴨打陸奥守胤忠、如何にもして隆信を、先づ我が領內蘆刈まで迎へたく思ひて、家人古賀因幡守に人數少々差副へ、一本に到りて迎船をぞ遣しける。隆信大に悅あり、福池を先づ蘆刈へ差遣し、時分を見計り相圖の火を揚ぐべしといひ含め、其身は夫より一家の面面・家中の男女皆相共に數艘の船に乘り、蘆刈の方へ漕ぎ向はれし處、天運未だ至らざるにや。俄に暴風強くして、供船共を悉く行方も知らず吹散らし、隆信の乘船計り、辛々（からく）柳津留の入江に漕ぎ入らむとす。爰に鴨打が別腹の兄に、新左衞門胤賢といふ者あり。兄弟中惡しく、是は有馬へ從ひけり。然るに此胤賢、隆信の船、追付（おつつけ）蘆刈へ著く由聞付けしかば、急ぎ佐嘉蓮池の輩へ注進す。斯かりし程に、小田政光の家人山田河內守一騎驅に馳せ來り、新左衞門と一つになり、扨有馬より佐留志へ居ゑ置きし代官高庭左馬助・本田源次郎・矢河何某三人の者共へもいひ合せ、彼是數百騎集りて、柳津留に待懸け、隆信唯今著船あらば、討取らむと我れ先をぞ諍ひける。陸奥守是を見て、事成らずと思ひしかば、早速隆信の船に打

向ひて、事の仔細を告遣し、古賀因幡守を船揖吏(マヽ)にて本の如く筑後へ漕返す。鴨打新左衞門・山田河内守是を聞き、手の裏の敵を討洩しけりと大に齒を嚙み、聽て陸奥守を討たむとす。奥州疾くに推量しければ、此者共と合戰して詮なき事なりとつぶやき、塚崎の方へぞ退きける。又福地も鹿子村に到り、御厨安藝守を頼み、下船津の村岡藤次左衞門が船を借り、隆信を慕ひて筑後の方へ渡海しけり。

隆信歸國の事

既に今年の冬も暮れ、明くる天文廿二年癸丑七月下旬、龍造寺隆信、筑後の蟄所に於て老臣共を集め申されけるは、斯く何となく月日を累ね、既に三年に及び、他國にありて恥を曝さむもいひ甲斐なし。何とぞ當家恩顧の者共を相語らひ、肥前に歸入り運を天に任せ、敵と勝負を決し、叶はずば腹を切らむと思ふなり。面々は如何に思ふと申されしかば、石井藤兵衞兼淸申しけるは、御諚の如く斯樣に流浪の身

隆信使者を古賀民部丞に送る

と罷成り、年月を送らん事、自他の覩る目、誠に口惜しき次第にて御座候。されば與賀・河副の郷司共は、兼ねて當家に對し二心なき者にて候。其中にも古賀民部丞は、父越後が時より剛忠公の御計らひにて、鹿子村の庄官にて御座候。其御懇意を忘れざる故、去年も忠心を現し候。然れば今度御歸國の事、彼の民部が方へ仰下さるべきやと申す。隆信を初め皆同意にて、さらば使を越すべしと、隆信よりは吉岡藏人、舍弟長信よりは早田次郎右衛門を、古賀民部丞が許へ差遣し、頼み思はるゝの旨談合あり。折節古賀が宅には、村岡與三左衛門・徳久主馬允・久米長門守・副島右衛門允來り集り、近邊の天神の社に於て連歌の會あり。民部も同じく一座しけり。兩使此所へ入りて、民部を初め五人の者へ密に申しけるは、隆信、近日當國に歸入り、敵を打散らして舊城に安堵すべしと、事急に思立たれて候。各ゝ以前の好を忘れ申されずば、心を一つにして與賀・河副の土民共を相催され、一領・一本（具足一領・槍一本をいふなり。）を以て、合戰粉骨を盡されよ。隆信本意を遂げられなば、各ゝへの恩賞は申すに及ばず、土民等に對しては永代斗前半公事たるべしといひ聞す。古賀は元より別條

蒲池武藏守加勢を遣す

なく、四人の郷長共も仔細に及ばず領掌して、彼の兩使をば返しけり。斯くて同七月廿日過ぎ、五人の者密談して、近隣の百姓共を忍び〳〵に相語らひ、筑後への迎船武具・兵粮等不足なく用意し、扨與賀・河副の際、隆信へ志ある武士を觸廻す。此時水町左京助信秀も與賀鄕へ來りて、鄕中の者を差催す。斯かりし程に鹿江遠江守・南里左衞門大夫父子・（以上一千餘人。）石井和泉守・弟三河守・同石見守・內田美作守・久布白又右衞門・横尾刑部少輔・立河讃岐守・堀江筑前守・同右衞門大夫・副島民部少輔・飯盛備前守・石丸備後守以下馳せ集り、彼此都合三千餘騎、兵船を揃へ筑後に押渡り、隆信を迎へて肥前へ歸らむとす。蒲池武藏守、此事を聞付け大に悅び、さらば加勢すべしとて、家人渡邊上總守・横田大膳亮・萩原志摩守に二百餘騎を差副へ、隆信にぞ屬けられける。宿の主原十郎惠俊も、三年の名殘に三人の子供の內、二人は進らすべしとて、二男左馬助・三男權兵衞を隆信へ附屬しけり。此時、隆信申されけるは、一定東の口より少貳家の者共打出で、海陸の間にて支へむと思ふなり。如何に計らふべきとあり。福地承り、是等を押へむ事は、某計らひ申すべしと、主從二三人

小船を下し、東肥前三根郡へ上り、當郡の一揆頭重松中務丞賴幸が續命院村の館に到り、賴幸に對面して一向にぞ打賴みける。重松仔細なく賴まれ、某御味方申し、此境を鎭めて罷あらんずる上は、東一方の事、御心易く思召し候へと安々と肯ひ。則ち家人共を召集めて、東の口を差固めけり。斯くて隆信は、鹿江遠江守兼明が船に召して、七月廿五日、事故なく鹿江崎に著船あり。乾堂を過ぎ同廿七日威德寺に入りて旗を揚げらる。兼ねての相圖なりしかば、福地長門守先達て與賀船津へ上り、村岡藤七兵衞が宅にありて、火を立てしかば、副島・吉富・村岡・御厨等の村長共、則ち火を合せ早速馳せ集り、其外增田圖書助・村岡與三左衞門・同名卯右衞門・古賀・德久・久米・金持以下與賀・河副の者共悉く相集る。隆信其勢既に四五千餘騎になりて、江を打渡られ、實久村潮音寺に陣して軍評定ありしに、衆議區々にして一決せず。依りて當所の若宮八幡に神樂を上げられ、其神託に任せられしに、軍を急に用ひよと託宣ありしに依って、則ち實久村を立つて西小路へ打入り、飯盛の城に高木能登守鑑房と神代の家人等がありしを追落し、夫より隆信、小井樋に陣を移さる。

斯くて高木鑑房・八戸下野守宗暘、若村に支へて大に相戰ふ。されども八戸・高木一戰の中に鬪負け精町へ引退く。此時龍造寺の軍士に、石井三河守・同子息次郎兵衞進み戰つて、敵の首七つ取り、次郎兵衞は討死しけり。斯かりし程に、鑑房は己が東高木の城へ引退き、宗暘は八戸の居城に楯籠りぬ。斯くて隆信・所々の軍に討勝たれ、本庄の梅林菴に入られぬ。

北肥戰誌卷之十二終

北肥戰誌　卷之十三

八戶宗暘落城の事

八戶城落城

隆信は、梅林菴へ陣を移され、爰にて軍の評定あつて、先づ八戶下野守宗暘を攻めらるべしと、本庄を打立たれ八戶の城へ取懸けらる。頃は天文廿二年八月八日なり。斯くて龍造寺の老臣小河筑後守武純・納富左馬助信景・福地長門守信重以下、隆信の下知を蒙りて各〻進み戰ふ。城中にも兼ねて用意したる事なれば、神代勝利、山內より加勢に來りて本丸を守り、城主宗暘は二の丸を持つて、伊東・諸熊・光岡以下の數百騎を差出し防ぎ戰ふ。爰に宗暘が棟と憑みたる浦ケ部常陸介をば、福地が手に生捕りたり。其外城兵多く討死して、旣に城戶口破れむと見えける處に、神代勝利の方より和平ありたきの由、福地が陣へ申されしかば、信重是を披露し、隆信應

諸せられて、其使に福地、卽ち城內へ入りける處に、小門口にて矢の手を負ひけり。斯くて八戸・神代兩將ともに、小城を出で隆信に面謁し、城を明渡し總構を崩して、城主宗暘は勝利を逹れて山內へ引入りけり。其日隆信、敵の端城七箇所攻め落さる。斯かりし程に、佐嘉の城を警衛せし小田駿河守政光、蓮池の城へ引退く。斯くて隆信、其威龍の水を得たるが如く、頓て佐嘉の城に歸り入られけり。然るに此二三箇年、爰かしこに隱れ居たりし龍造寺の一族家人、早速馳せ集り悅ぶ事限りなし。

小田政光軍附和平の事

隆信既に歸城せられて後、城原の江上や攻むべき、蓮池の小田や退治せむと議せられけるに、九月廿六日、江上は降參の由申しければ、さらば小田を攻むべしとて、七月八日小田駿河守政光の蓮池の城へ取懸けらる。其夜明、先づ隆信は井尾を本陣とせられ、爰にて評定ありけるに、定めて政光、城より切つて出づべし。然らむ

時は、龍造寺左馬頭信周、一備北の方より廻つて政光が跡を取切り、又兵庫頭長信、南の方より城の大手駕輿丁口へ廻り、短兵急に攻め入るべしと評議を極め、八日のまだ東雲に、南北二手に分れ、隆信は旗本にて井尾の陣を發し、靜に兵を進めらる。旗本の先手馬渡越後守榮信、先度若村の合戰に、手に合はざるを無念に思ひ、頻に旗を進む。城中にも手分をし、一陣は江口源世入道、二陣は深町理忠入道と定め、城中を押出す。然るに夜も既に明けむとする頃、北の方より神崎の本告與次郎義景、其勢三百計り矢車の旗を靡し、小田に加勢し、隆信の本陣を目に懸け切懸る。是を見て北の方に控へし龍造寺左馬頭、筋違に來りて本告と亂合ひ大に相戰ふ。本告が軍勝に乘り、佐嘉勢早負色に見えたりし處に、馬渡越後守と本告與次郎と組んで落ち、上を下へと返し、與次郎遂に下になり、越後守、其首を掻かむとしける時、本告、あら口惜しやと馬渡が右の小指を喰ひ切りぬ。されども越後守、押へて首を取りけり。本告が一勢、大將を討たれ叶はじとや思ひけむ。悉く崩れて引退く。然れども小田が先陣江口源世と、二陣の深町理忠は退かず、兵を進めて左馬頭と相戰

蓮池城合戰

ふ。斯くて兵庫頭長信は、味方の戰ふに目を懸けず、南に廻つて駕輿丁口へ攻め入り、火を散らして相戰ふ。　時に城方より崎村の犬塚左近大夫鑑直・蒲田江の犬塚民部大輔尙重・直鳥の犬塚左衞門大夫鎭尙等馳せ來り、小田勢に加はりて散々防戰す。然るに城主政光は、未だ城を守りて出でざりしが、合戰難儀と見けるにや。士卒を下知し眞黑に切つて出づ。小田右馬大輔利光・同名掃部助を初め、山田河内守・原河内守・薗田三河守・内田治部大輔・吉島新七郎・末次與七郎・横山・大隈以下の者共、政光の左右に相從ひ、佐嘉勢と相戰ふ。此時、軍烈くして寄手若干討死す。戰ひ半ばなりし時、政光己は爰を打捨て、手勢計りを引勝(すぐ)り、健兵貳百餘人を以て、其行伍を亂さず隆信の旗本へ切懸る。是を見て龍造寺一家の輩、其外小河・納富・福地・江副・安住・馬渡・秀島・立河・石井・鹿江・南里・副島以下旗本の者共、我れ先にと懸合はせ政光と相戰ふ。　時に政光の士卒大きに勵み撃つて、龍造寺方、四度路(しどろ)になり、南里左衞門大夫國有・同治部大輔胤有・同左馬大輔信有・同宮内少輔父子兄弟四人、手勢を引分け戰ひしが、小田掃部助を討取りて、父子三人・郎從三十餘人皆一所にて討た

れ、左馬大輔は深手を負ひて半死半生なり。福地長門守信重も、一族若黨引具して、命を際に相戰ひ、膝口を槍にて突かれ、肱肩を三所射させて働き得ず。秀島主計允も鐵炮に中る。水町左京亮進み戰ひ、北島河内守分取し、犬塚八郎次郎は討死して、敵も味方も入亂れ、火を散らしたる合戰なり。然るに寄手、やゝもすれば追立てられ、隆信も其體退屈して見られしに、倉町帶刀信家、いづくより求めけむ。濁酒を持來り隆信に進む。隆信、忽ち倉町が一盃に機を增し、頻に采配を揚げられしかば、佐嘉勢、足を立て直し十死一生になつて相戰ふ。時に小田が軍兵、少時怺へて見えたりしが、終に合戰利を失ひ、討たるゝ者數を知らず。中にも江口入道は、石井三河守忠本が爲めに討たれ、薗田三河守は安住石見守秀能。秀島河内守に相討せられ、東島彌九郎は村岡卯右衛門に討取られけり。斯かる處に、駕輿丁口に向はれたる龍造寺兵庫頭に、鍋島駿河守馳せ加り、此口の軍、寄手大に利を得て、城方宗徒に賴みたる犬塚左近大夫。同名左衛門大夫以下三百餘人討たれしかば、駕輿丁口既に破れて、寄手悉く攻め入りぬ。斯かりし程に、政光今は是までと士卒を引揚げ

隆信政光
和平

城中に入る。斯くて雙方衆議あつて和平調ひ、合戰を止めて隆信佐嘉に歸陣せらる。

鑑兼以下浪人

龍造寺鑑兼以下浪人の事

隆信、再び佐嘉の城に居住せられ、同十月中旬、龍造寺左衞門佐鑑兼の水ヶ江を沒收あり。鑑兼すべき樣なく、水ヶ江の城を立つて筑後の方へ浪人しけり。されども此人、元より一族といひ、其上隆信妻室の兄なりしかば、同月廿六日、石井藤兵衞・村山內藏助・鷲崎主水允・西岡慶可入道を賴み、兵庫頭長信の許まで一封の書を送り、今度土橋が逆意の事、鑑兼に於ては聊か存知仕らざる由、先非を悔い樣々懇望ありしに依つて、此度の不義宥免せられ、頓て歸國ありけり。扨逆意の張本人土橋加賀守榮益を搦捕り、罪を鳴して首を刎ねらる。又土橋が相談人西村美濃守は、加瀨の僧增誾を賴みて訴言しける故、其科を免され、龍造寺越前守家就或は左京亮といふは藤木村に蟄居しけり。是よりして隆信は、納富石見入道道周・小河筑後守武純・江副安藝

守久吉を以て執權と定め　舍兄兵庫頭長信（初名家信。中頃長述。）を、鑑兼の跡水ヶ江の城へ据ゑ、庶子流剛忠入道の遺跡とし、其長臣には石井藤兵衛兼清を尾張守になして、福地藏人助・吉岡藏人とともに附屬せられけり。

肥後南關合戰

肥後國南關軍の事

今年天文廿二年の夏、大友家の老臣小原遠江守親元入道宗惟、逆心を挾み肥後國南關に栖籠る由風聞し、府内へも其聞えありけり。抑〻此遠江守、初名は四郎左衛門とて、前大友屋形義鑑の近臣なりしが、當屋形義鎭の代になりて、去る天文十九年の夏、菊池義武一亂の時、其討手として志賀安房守・吉岡越前守と同じく肥後へ發向せし後、如何なる恨やありけむ。之を知らず。斯くて大友義鎭、是を誅伐あるべしとて、先づ彼の宗惟に一味せし本庄・中村を討果し、扨肥後・筑後の輩へ下知ありしかば、肥後衆には城越前守親冬・赤星筑前守重隆・西郷鑑孝以下、扨又筑後衆には、蒲池武藏守鑑盛・田尻又三郎鑑種を初め、同五月六日、頓に宗惟入道が居所南關へ取

小原宗惟討死

懸け、筑後勢は鷹野原口、肥後勢は小路口へ押結めて、翌くる七日終日合戰す。同八日、宗惟是までとや思ひけむ。妻子を害し其身は大手口へ切つて出で、筑後勢に相向ふ。其風情、ありたりを拂つて中々近づく樣もなし。されども蒲池彈正忠、一番に宗惟と渡り合ひ、火を出して戰ひしが、立所に討たれぬ。其次に田尻左衛門、宗惟に駈合せ命を捨て相戰ひ、是も矢庭に討たれたり。既に合戰烈しくして、敵味方の討死數を知らず。夫より宗惟町口をさして駈出で、肥後勢へ切つて懸る。時に城越前守、少時戰うて自身疵を蒙る。其次赤星筑前守請留め相戰ふに、宗徒の輩多く疵を蒙りて、合戰難儀に見えたりけり。然る處に、西鄕鑑孝、宗惟と渡り合ひ宗惟を討留めけり。此時、雙方の武勇、見る者皆舌を振はぬはなし。斯くて肥・筑の寄手、兩日の中に强敵を平げ、勝鬨を揚げて則ち歸陣しけり。

高木鑑房沒落附生害の事

天文廿三年甲寅三月、龍造寺隆信、高木能登守鑑房を征伐あるべしと、軍兵を率し

て佐嘉の居城を打出でらる。されば彼の鑑房は、天兒屋根命の御末中關白道隆には、廿一世の苗裔にて、昔は當國一の大名なり。されども中頃、北條時賴入道最明寺殿、諸國抖藪の時、當家の先祖聊か疎略ありしより家衰へ、其上今の鑑房、去る天文十七年に、仔細あつて他國へ浪人し、近年歸國したる後は、僅に先祖の地肥前國東高木を知行して、卽ち高木村に在城しけり。然るに此鑑房、勇力萬人に勝れ、早業は江都が勁捷にも超え、打物は樊噲、張良にも恥ちず、其上魔法を修し天の妙を得て、ある時は闇夜に日月を現じ、ある時は酷暑に雪を降らせ、大空に立ち大海を飛び、其行爲更に凡夫にあらず。元服の時豐後へ申送り、大友義鑑の諱字を受けて、太郎鑑兼と號す。其後龍造寺鑑兼と一名なりし故、鑑房と改名しけり。實は龍造寺伯耆入道日勇の嫡子高木右京大夫滿兼が家督なり。（日勇は滿兼が子、鑑房は鑑兼が孫。）然るに鑑房、斯く聞ゆれども、軍は時の運に依るにや。去年八月、精町の軍に打負け、東高木の城に引入りぬ。斯くて鑑房、此度龍造寺の軍勢寄來るよと聞えしかば、急ぎ手の者を引率し、三溝口へ出合ひて散々に相戰ふ。時に龍造寺の陣より歲の程十六七と見

高木鑑房龍造寺に和平を乞ふ

鑑房前田家定に殺さる

えたる清げなる若武者、鍋島左衛門大夫と名乘りて唯一騎眞前に進み、敵に當る事千變萬化せり。鑑房も士卒を下知し勵み戰ひしかども、隆信の軍士、雲霞の如く競ひ重り、竟に鑑房打負けて東高木へ引退き、子供を質人に差出し和平を乞ひけり。是を見て西高木の城主高木肥前守胤季も、同じく降參しけり。其後鑑房は、杵島郡佐留志へ赴き、前田伊豫守家定を賴みて居たりしを、尋常の者ならば其儘差置かるべき事なれども、彼の鑑房が行跡。隆信も末々如何と思はれしかば、樣々前田を賺され終に討取られけるとぞ聞えし。其有樣を傳へ聞くに、彼の鑑房、平生に因果左衛門・不動左衛門とて、金剛の力者二人身を離さず召仕ひけり。然るに鑑房、頃日前田が館にありける時、因果左衛門をば祕藏の笛を取りにとて、舊領高木へ遣し、不動左衛門唯一人召具して、新開邊へ鷹野に出でけり。扨朝飯過ぐる頃、前田が家に歸り緣に腰を懸け、不動左衛門に足を洗はせ居たりし處を、前田伊豫守、兼ねて隆信の內意を得て、時分よしとや思ひけむ。密に後へ立廻り、長刀を以て鑑房が首を討落す。時に其骸立上り、小島といふ名劍ずばと拔き、足を洗ひし不動左衛門を

懸らず切つて落し、夫より廣間へ駈け登り奥へ切つて入る。稀代の珍事なりしかば、左右なく近づく者もなし。されども前田が家人數十人、槍・長刀を以て四方より刺貫きて押臥せけり。扨彼の骸を佐留志山の頂に葬りぬ。今の代までも、荒人神（あらひと）に崇めて、野人・村老、所願を祈るに必ず成就するなり。斯かる鑑房が子供二人あり。隆信、怨志を加へられ、父が所領の內數百町を給はりけり。兄は左馬大輔盛房とて、天正十年の冬、筑後國戸原にて討死し、弟の大榮入道は同十二年の春、島原に於て隆信とともに戰死しけり。

一、隆信、筑後より歸城以後、天文廿四年に至り、小田・高木・八戸・神代、或は和平し或は沒落しければ、佐嘉の城下靜謐す。斯かりし間、蒲田江の城主犬塚民部大輔尙重も、龍造寺に隨ひ隆信の妹聟となり、巨勢・田尻・千住以下、皆龍造寺に相從ふ。

一、去年より今年に至つて、異國へ日本より亂妨の爲め、船の渡す事數千艘なり。

大友少貳の事

天文廿四年乙卯改元して弘治と號す。然るに中國の陶尾張守隆房、主君義隆を殺して以來、大内の領內悉く押領し、豐後へ申し送り、大友義鎭の舍弟三郎を申請け、大内左京大夫義長と名乘らせ、隆房も直參して公方の御諱字を給はり晴賢と改む。爰に毛利備中守隆元は、故義隆の姪壻といひ、其上遺言ありしに依りて、父の元就に談合し、彼の惡黨を退治すべしと、義長幷に晴賢と義絶あり。合戰數度に及び、今年閏十月、竟に兩人を誅伐あり。右合戰の半ば肥前城原に於て、少貳冬尙の方へ毛利隆元の狀にいはく、

謹而言上候。抑、大内幷陶尾張守晴賢與我等〔中〕半之儀、去夏以來令義絶、當國所々大内方諸要害西條神領無殘切取候。此時豐・筑之事被成御亂入、御累代之可被達御本意事可目出度候。此旨可然樣可預御披露候。恐々謹言。

九月十日　備中守隆元判

謹上　少貳殿之人々御中

一、此時大友左衛門督義鎭、西に威を振ひ九州大半知行して、先祖代々の居所豐後府

大友の三大老六奉行

少貳龍造寺不和

内に住城し、既に勅宣を蒙りて從四位に任〔叙〕し、分國七州の兵馬凡そ三十萬騎、其禮を受くるは二八月の朔日なり。府内の三大老といふは、戶次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉弘左近大夫鑑理。又六奉行といふは志賀安房守親泰・佐伯紀伊守惟教・吉岡越前守長增・朽網三河守親度・田原近江守親賢・田北大和守鑑生なり。時に肥前の少貳屋形冬尙。同舍弟政興も大友と親しくして、父資元の家を興し、三根・養父・神崎を知行あり。冬尙は城原、政興は綾部に兄弟兩城に分れて居住あり。少貳譜代の輩には、馬場・横岳・宗・筑紫・江上・本告・島・朝日・出雲・姉河・犬塚・光益を初め舊好の者共、二心なく少貳家を守護し、其外高來の有馬越前守入道仙岩・小城の千葉介胤賴、少貳に一味して城原に事を通ず。少貳と龍造寺、此時に至つて彌〻不和なり。

隆信重ねて神代と鉾楯の事

龍造寺隆信、去々年の八月、八戶の城を攻められし時、山内の地主神代勝利と和平

龍造寺神代不和

其原因

ありし故、佐嘉と山内無事なりし處に、今年弘治元年に、又手切して兩家再び鉾楯しけり。其仔細を尋ぬるに、過ぎし二月初旬、隆信使を山内へ遣し、勝利の許へ申されけるは、國中計略の爲め對面を以て談合申したき事候間、佐嘉の多布施に出合ひ給へ。付いては饗應申すべしと申送られけり。勝利も物騷がしき時分にて、如何とは思ひながら、懼るべきにあらずと、江原石見守・福島伊賀守阿含坊といふ大剛の者を初め、其外家人を勝つて召連れ、多布施へ赴き、隆信に對面あり。斯くて談合事終り饗應過ぎて、勝利は山内へ歸城ありけり。然るに此時、如何なる者のいひ出しけむ、今度の饗膳に龍造寺家人等、勝利を毒飼すべしと巧ける由申し觸しけり。是より佐嘉と山内又手切して、互に刃を研ぎ牙を嚙みけり。

城原攻幷小河筑後守神代勝利を揀む事

弘治元年乙卯三月、龍造寺隆信、少貳冬尚の居られたる神崎勢福寺城を攻むべしとして、佐嘉を打出でらる。此折節、冬尚は三根郡西島の城にありて、勢福寺城へは

隆信城原を攻む

江上左馬大輔武種在城しけり。然るに隆信は、先づ姉河彈正忠惟安を相從へ、彼等を案內者として、城原勢福寺へ取懸けらる。先手は小河筑後守信安或は榮純。前名武純。・納富左馬亅信景・福地長門守信重なり。時に神代勝利、江上に合力の爲め山內を發し、勢福寺の西猿岳に來りて陣を取る。隆信、敵城の體を量つて、先づ小河筑後守・鍋島左近將監・龍造寺石見守を以て、勝利の猿岳の陣を押へ、さて勢福寺城を攻めらる。福地長門守は、大手南の口へ押寄せて少時戰ひしが、城の地利を見て、此攻口をば與力手の者七百餘人を以て差掠め、己は小勢を引勝り、竊に東に廻り水路より攻め入りて、城內に火を懸けたり。斯かりし程に、城主武種防ぐ事を得ずして、城を出で仁比山に退きけり。扨小河筑後守・鍋島左近將監・龍造寺石見守は、神代勝利の陣所猿岳を攻めむとす。勝利一戰に及ばずして山內へ引入りけり。斯くて隆信、不日に勢福寺城を攻め落し、勝鬨を揚げて佐嘉へ歸陣あり。

隆信勢福寺を陷る

一、同三月下旬、神代勝利、山內を打出で龍造寺の近邊まで相働き、所々に放火し、己が出城千布の土生島の要害に入りけり。然るに其頃龍造寺の城中には、隆信、

近臣等を集め様々物語ありける中に、隆信申されけるは、我等弓箭を執りて當時懼るべき敵なし。されども爰に神代勝利といふ者、牒牆の中にありて、隆信が障となるなり。如何にもして彼等を討取るべき計略こそありたき事なれと申されしを、小河筑後守承り、御諚の如く彼の勝利と申すは、機鋒飽くまで尖に、前にあるかと見れば後にあり。左に現はるゝかと見れば右に隱る。然れども又此筑後守も劣るべきに候はず。頓て彼奴を易々と討取り、公の御目に懸くべしと申して、其席をぞ退きける。斯くて其頃勝利は、千布の城にありて雨強く降り風烈き夜、家人共を集め酒宴して居たりし處に、ある下女湯殿へ行きしが、走り歸りて大息つき、如何なる人やらむ、大の男の湯殿にありといふ。勝利打聞いて、いと騷しきぞ。其男は龍造寺の一の者小河筑後守にてあるべし。誰かある。湯殿へ行き勝利唯今酒盃半ばなり。筑後殿にも爰へ來り、酒呑み給へと申すべしと、だぶだぶと一盃受け、筑後守へさゝむとぞ待たれける。家人共是を聞き、如何とは思ひしかども、湯殿を見るに實にも敵の小河なり。筑後守は宵より忍び入り、勝

利を擇びし處に、顯はして本意を遂げず、其上彼の使を得口惜しとは思ひながら、些とも騷がず則ち座敷へ出で、勝利の盃を引受け呑み、思ひざしと申すぞ大和殿と、勝利へ返盃し、拳を握り齒を嚙みて、龍造寺へぞ歸りける。勝利の大器、筑後守の勇剛、聞く者舌を振はぬはなし。

神代家由來の事

肥前國山内の領主神代大和守武邊朝臣勝利の由來を、如何にと尋ね聞くに、先祖は人王八代の帝孝元天皇第三の皇子彥太忍信命の御子、屋主忍武雄心命の男玉垂命の苗裔にて、元は筑後國の大名なり。玉垂命を武內宿禰と申す。此人、其齡二百九十五歲の間、景行・成務・仲哀・神功・應神・仁德六世の帝に仕へ、三韓を征伐して天下に大功を立て、仁德天皇五十五年丁卯に薨逝ましまし、筑後國御井郡吉見嶽の內青山に、跡を垂れ給ふ高良大明神是なり。父武雄命は、又肥前國杵島郡塚崎庄へ現はれましします。卽ち武雄大明神なり。然るに武內宿禰に三人の子孫あり。一は大明

神に仕へ、神職の器を受け大祝部となり。代々凡俗ながら銃山大明神と申す。家紋木瓜なり。二は一山の座主にて、朝家の御所（マヽ）となる。家紋三巴なり。三は武器を得て、子孫弓箭を執り神代と號す。旗の紋立龍の形なり。されば神功皇后三韓御征伐の時、武內是に仕へ、筑紫へ下向ありしより、當家筑後に住する事、星霜既に一千餘年に及びぬ。然るに文治元年乙巳、神代良光が時、吉見岳（高良山の事なり。）より始めて、同國神代村に移り住す。夫より四代を過ぎて、同名民部少輔良忠が代に、文永十一年甲戌、異國の蒙古攻め來りし時、折節一夜川（上の方を一夜川といふ所あり。下の方を千年川といふ。筑後川なり。）の渡水增して、諸國の人馬渡る事を得ず難儀成りしに、彼の良忠が計らひにて、俄に假橋を架け、諸勢悉く是を渡しぬ。是れ京。鎌倉への大忠なり。又其孫神代良基が代に、足利尊氏卿九州御下向ありし時、良基、早速御手に屬し、高木・松浦の者共と一つに成り軍功を施しぬ。其後、今の勝利には曾祖父神代入道道元の子大和守勝元が時、文明の末に當りて少貳屋形政資に屬して、食祿を受く。其子を對馬守利久といふ。入道して宗元と號し、中頃は兵部少輔と稱す。其子今の大和守勝利なり。父祖以

來肥前に居住し、前大和守の時、去ぬる文明十七年に、上佐嘉庄千布の住吉社を再興す。中にも對馬守利久、弓の名人にて千布の陣内大和守、其藝に目出（めで）、頻に望みて是を壻としたり。然るに對馬守、陣内が女に相嫁して、程なく二人の子を儲く。一は女子にて伊東出雲守が妻と成る。二は男子にて新次郎と名づく。又對馬守最初に、筑後國福島兵衞大夫が女を娶りて男子あり。片目なりけり。利久、此二人の男子の中を、何れか家督にすべしと思ひしかば、兼ねて信仰の住吉大明神に參詣し御鬮を上げけるに、次男新次郎にぞ下りける。斯くて對馬守、件の御鬮に任せ家督を新次郎に讓りし後、長男は母方の苗字を名乘り、福島周防守豐島利高と號しぬ。然るに新次郎若年の頃、小城郡司千葉屋形興常に奉公しけり。されば其頃興常の家臣に、江原石見守といふ者あり。生國は武藏の者にて榎原黨なり。此石見守、ある夜新次郎と一所に臥したりしが、夙に起き語りていひけるは、我等過ぎし夜、不思議なる夢を見たり。喩へば我が身唯ゝ太（ふと）りに太りて、後には北山を枕にし、南海に足を混（ひた）すと覺えて夢さめぬ。吉夢か凶夢か覺束なし。新次如何と問ひけり。

勝利若年の頃江原石見守の夢を買ふ

新次打聞きて是は大なる悦よ。僞りて此夢を我が夢にせばやと思ひ、横手を礑と打ち舌を操つて申しけるは、いふにや及ぶ石見殿、此夢は大分の惡夢なるべし。能く案じても見給へ。御邊北山を枕にして南海へ足を混さむ時は、其身中より斬れて命は爭であるべきや。されば內々承るに、惡しき夢をば人に賣渡す時には、却つて吉夢に變ずとなり。然れば御邊は當家の重臣、我等は次々の奉公人なり。此夢を某に賣り給へ。則ち買取りて、御身の災難を某引請け申すべし。當座に夢の價を出すなりとて、金の笄を取出して、石見守にぞ與へける。江原は武勇は勝れしかども、生得愚なる男にて善惡分らざりしかば、己が災を除く上に、笄を得るよと悦びて、則ち夢をぞ賣渡しける。其後新次郎、劍術・早業鍛錬するに、一々妙を得ずといふ事なく、後には千葉家を立退き、小城・佐嘉・神崎の山々へ入りて上下をいはず弟子とするに、隨ひ靡く事、風に草木の偃すが如し。三瀨山の城主三瀨土佐入道宗利、新次郎が器量を見て、尋常の者ならず大將にもなるべき者よと思ひしかば、三瀨の城へぞ留め置きける。彼の入道の見し如く、新次郎智・仁・勇の三つ備りて、小城・

新次郎神代家を再興す

佐嘉・神崎三箇山の輩に、松瀨又三郎宗樂・畑瀨兵部少輔盛政・合瀨因幡守・藤瀨藤左衞門・梅野源太左衞門・杠紀伊守種滿・菖蒲遠江守・藤原但馬守・栗並伊賀守・廣瀧新三郎・小副川因幡守・名尾左馬允以下の頭々、悉く家人となる。斯くて新次郎旣に大勢となり、大和守勝利と號し。初は副島氏の女に嫁し、子供餘多出來、後に又千布兵庫入道淨貞が壻となりて、是にも男女の子多かりけり。其後勝利、太宰少貳冬尙に屬し、山内の輩に下知して所々を切從へ、筑前國甲良・那可・怡土三郡の内、幷に肥前と筑前の境廿六箇山を知行しけり。其間皆深山幽谷にして、石壁屛風を立てたるに異ならず。東西は七里、南北五里、其山々へ城郭を取構ふ。中にも三瀨・畑瀨・谷田・熊川・千布の土生島に五箇城を築き、筑前の原田・曲淵・佐嘉の龍造寺と武威を諍ひ合戰す。されば今こそ江原が夢を買取りたる昔の事を思合はせぬ。實に北山を悉く知行して、南海を眞下に見たるは、偏に足を混せし如くなり。又夢を賣りたる彼の江原石見守は、頓て神代の家人となりけるこそ抵しけれ。

秋月文種生害筑紫惟門沒落の事

大友勢秋月を攻む

弘治三年丁巳、筑前國秋月中務大輔文種・筑紫右馬允惟門申合はせ、豐後の大友義鎭を背きて、中國の毛利元就に相屬す。其事、府内へ聞えて義鎭立腹あり。急ぎ彼の兩人を征伐すべしとて、同年五月、戸次伯耆守鑑連・臼杵越中守鑑速・吉岡越前守長增・田北大和守鑑生を初め、各〻府内を打立ち、先づ日田へ著陣す。時に筑後國の輩も、元より大友旗下にて、豐後勢に力を合せんと、蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種以下同じく出張しけり。斯くて豐後の輩、先づ秋月文種が居所を攻むべしとて、日田の陣を發し、筑前國へ討ち入り右良山に著陣し、夫より烏留に陣更す。仍りて筑後の軍士も、豐後勢と同じく陣を進む。然るに此時、筑後簗河の蒲池鑑盛の軍士に、末吉道二入道が一族大木の一類共、豐後陣と一所にならむと打登りし處に、桑原に於て秋月家人芥田右馬助、其外餘儀なき者共出合ひ、末吉・大木と防戰し、道二父子討死して、右馬助も討たれにけり。斯くて七月初旬、豐後の軍兵に筑後勢差加はり休

秋月文種生害

文種の三子

〔鳥〕
松へ陣を寄せ、秋月館へ取懸く、宮尾口は戸次鑑連・南郡衆防戰し、野取口は田北鑑生其外筑後衆打戰ひ、何れも粉骨を抽んで城兵を追込め、館小路殘なく燒拂ふ。斯かりし程に、秋月文種防ぐ事を得ずして、古所山の本城に取登りしが、爰にも溜り兼ね、寶滿へ落行きけり。然る處に家人古野九郎右衞門心變りし、同七月十三日、文種終に生害あり、則ち其死證頸なり。を九郎右衞門、豐後衆の陣所へ持參しけり。然る間、寄手則ち凱歌を揚ぐ。彼の九郎右衞門、秋月譜代の家人として、主の先途を見捨て却つて心を變じ、其頸を切る事、前代未聞の惡逆なりしかば、豐後の諸將是を賞せず、結句大に惽み、其後大友よりも許容なかりし故、九郎右衞門終に乞食流浪の身となり、程なく命を失ひけり。主君に背きし天罰遁れざるこそ理なれ。

一、秋月文種今度生害の時、三人の男子あり。兄は九歳になりぬ。文種、此子供が事を悲み樣々歎きしを、家臣大橋豐後守甲斐々々しく、彼の三人の子供を、世間には我が子と稱して暫く養育し、後に中國へ遣し、毛利家を賴み成長す。扨五箇年を送り、三人ともに歸國し、兄は秋月左兵衞尉種實と號す。後に長門守と改め

筑紫惟門
没落

秋月を知行し、太閤殿下の御時、日向の內兒湯郡を給はりて財部城に住す。次は高橋九郎元種といふ。高橋三河守が家督にて、初は豐前の內規矩郡を知行し、太閤殿下の御時、是も日向の內土持彈正が一跡を給はり、宮崎の城に住す。其次長野三郎左衞門種展と號す。豐前の長野氏養子にて岩借城に住す。太閤殿下九州御下向の時、當城を守りて勇を現はし、甚だ御感に預り御免許を蒙りて、後は浪人となり、朝鮮御征伐の砌、加藤淸正の手に屬して、所々の戰功莫大なり。總べて此三の兄弟、皆勇將とぞ聞えし。

一、斯くて豐後勢、七月十三日、秋月文種に腹切らせ、夫より筑紫惟門を誅伐すべしと、諸勢一同に山隈原に著陣す。斯かりし間、岩屋・若杉同日に落去して、惟門は五箇山へ引入りぬ。然る處に同月廿四日、龍造寺隆信より詫言を以て、鹿江遠江守父子を討取り、其死證首なり。を豐後衆の陣所山隈原へ差送る。玆に因つて龍造寺事、宥免あつて無事なり。斯くて豐後の諸將、諸口悉く勝利を得て、則ち宮尾城へは筑後衆を差籠め勤番あり。岩屋城へは三原和泉守・高橋三河守・麥生此三人を入

れ置き、肥前勢福寺城へは豊饒鑑榮を差遣し、在番として豊後衆、其外山隈原より皆開陣したり。扨右城々の番人、暫し勤むるもあり。又一兩年ありしもあり。其後、府内よりの下知にて、宮尾の城は草野長門守眞清へ明渡し、岩屋は高橋一人にて在番し、三笠郡三千八百町知行を以て、堅固に相守りけり。

北肥戰誌卷之十三終

北肥戰誌　卷之十四

神代勝利谷田沒落の事

弘治三年丁巳の春、龍造寺隆信、敵征伐の爲め大軍を率ゐて出張せらる。時に三月十一日、小田が陣敗北す。同七月廿四日、隆信、鹿江遠江守兼明が鹿江の館を攻めらる。遠江守防ぎ戰ふと雖も、無勢に依りて叶ひ難く、父子三人忽ち討死しけり。隆信則ち鹿江が死證を持たせ、頃日豐後衆の陣したる筑後の山隈原の陣所へ差送りて、大友へ一旦和を乞はれぬ。彼の鹿江は大友の惡(にくみ)を蒙りし者なり。同八月十二日、隆信、上佐嘉へ取懸けられ神代衆と合戰あるに、山内勢多く討たれて不日に沒落す。同九月三日、江上武種も沒落。同五日、隆信、山内へ攻め入り、頃日神代勝利の居たりし谷田の城に取懸けらる。不意の事なりしかば、勝利、取敢ず僅の軍兵

神代勝利谷田沒落

を以て打敷野へ出向ひ、佐嘉勢と相戰ふ。軍半ばと見えたりしに、隆信下知を加へ、兵を引分けて東の方へ差廻し、松瀨より佛坂を越え環尾に到つて、峯傳に谷田の上の高山に登り、前後より一同にぞ攻められける。抑〻彼の谷田の城は、其地利無雙の要害にして、南は大川漲りて白浪岸を浸し、北は長山峨々と峙ち、東西は一騎打の細道にて、左右岩石劍の如し。斯かる無雙の要害と雖も、城中餘りに無勢なりしに依つて、勝利竟に防ぎ難く、城を遁れて筑前へ落行き、怡土郡に到り高祖城主原田入道了榮を賴み、長野といふ所に蟄居ありたり。斯くて隆信は、勝利を攻め落し彼の領地を押へ取り、山々へ代官を居ゑ置き、其身は頓て歸陣せらる。隆信今年廿八歲。向ふ所皆靡き、血氣盛の良將とぞ見えたりける。

勝利歸城幷八戶宗暘再び出城の事

同年の冬、神代勝利は長野に浪人にてありけるが、既に月迫に及び、家人等を集めて申されけるは、いつまで斯くてはあるべきぞ。倡(いざ)や此年明け元朝に、龍造寺より

神代勝利歸城

居ゑ置きたる代官共の始の儀式に取紛れ、油斷してあらむずる所に取懸け、一々討ち散らすべし。其用意すべしと談合し、十二月晦の夜、人數を揃へ竊に長野を打立つて、目指すとも知らず暗かりしに、態と燒松をも持たせず、九重折(つゞら)なる山路を終夜越えて熊川に出で、時分を踉(はから)ひ東雲なる頃、隆信より居ゑ置かれたる熊川の代官へ取懸けたり。勝利の量りしに違はず、明れば弘治四年正月元日未明の事なれば、代官斯かるべしとは夢にも知らず、唯〻上を下へと動轉し、一人も殘らず討たれけり。勝利、事初よしと大に悅び、則ち熊川に陣を取らる。折節大雪谷を埋め、大將も士卒も皆手瘻(かゞま)り足撓み進退自由ならずして、其日は爰に在陣ありしに、此事隱なく、河上の社人小野式部、粥を煮て持參しけり。勝利悅び、上下是を食して大に力を得、身溫りて手足叶ひしかば、其勢にて龍造寺の代官共を悉く追出す。斯かりし間、山内の者共、勝利の歸參を悅び、彼所此所より馳せ集り、隨屬く事以前の如く、山內の主君とぞ仰ぎける。此時より神代家には、元三の吉例に粥を用ひけるとぞ聞えし。

一、佐嘉郡八戶の城生八戶下野守宗暘は、去ぬる天文廿二年、隆信と和平し一旦城

勝利歸城幷八戶宗暘再び出城の事

八戸宗暘隆信に破られ神代勝利に賴る

を開きしかども、其後歸城してありけるが、是も神代と心を合せ、龍造寺に對して又々異心ある由、風聞あるに依りて、同正月元日、隆信下知を加へられ、軍兵を八戸に差向けられ、宗暘の城を攻めらる。城中には思寄らざる事なれば、男女東西に逃迷ひ、足を空にし周章騷ぐ。されども宗暘は、心早く物馴れたる大將にて、早裏門より忍び出で、山內の方へぞ落行きける。然るに彼の宗暘の妻女は、隆信の姉にて三人の子あり。今度宗暘落去の時、母子とも虜となりて佐嘉へ赴きけり。隆信是を許されず、怨敵の子なれば男子に於ては殺さるべきに極まりしを、隆信の母公慶誾尼、孫子の事なれば是を哀み、樣々宥められしに依りて安穩しけり。彼の三人の子供、男子は後に八戸助兵衞宗春と號し、女子二人は鴨打左馬大輔胤泰・犬塚勘解由眞盛が妻となりけり。斯くて隆信、宗暘が領知八戸・新庄・津留・諸隈・益田・木角・成道寺等を悉く押へ取りて、八戸の城をば破却あり。宗暘は妻子を捕へらるゝのみならず、居城を破却せられ、領知をも押へられしかば、恨骨髓に徹し忍ばれず、山內に到りて勝利を深く賴み、隆信に對し何樣仇を報いむ

とぞ計りける。

一、斯くて神代勝利は、宗陽に頼まれし故、早速其色を立つべしと、則ち宗陽と相備にて、駄市川原へ出張す。此事、佐嘉へ注進ありしかば、隆信急ぎ馬を出され、長瀬に陣を張らる。斯くて龍造寺の陣より小河筑後守・同名但馬守・納富左馬助・同名越中守・同治部大輔・内田美作守・鹿江宮内大輔・福島民部大輔・倉町上野介・同名大隅守以下の者共、駄市川原の敵陣へ押寄せ鬨の聲を揚ぐ。山内勢是を見て、足輕を出し矢を射懸け、兩將は春日山へ引登る。龍造寺の者共、續いて春日山へ陣を寄せ高城寺を燒拂ひ、成富甲斐守信種の行を以て、敵を焦すに、神代・八戸、夜中に山内へ引入りぬ。斯かりし程に隆信も、頓て佐嘉へ歸陣ある。

鐵布合戰小河筑後守討死の事

弘治四年戊午、改元して永祿と號す。龍造寺隆信、今年春日山の古戰城を修理して、人數を籠置き、山内を攻むる繋にすべしと、秋九月に彼の城の普請を調へ、初は水

隆信春日山に小河信安の一族を籠置く

神代勝利春日山を攻む

町左京助信秀が興私（マヽ）を入置かれしかども、無勢に依りて、其居は小河筑後守信安が一族小河但馬守・同石見守・同次郎少輔・同左近大夫を籠置かれけり。然るに神代勝利は、龍造寺と十死一生の軍を志しければ、城原の江上左馬大輔武種と談合し、兩旗を以て、同九月より北山の嶺に陣を取りて居たりしが、先づ龍造寺が春日山の城を打崩すべしと評定し、同月中旬、勝利の家人梅野帶刀・松瀨又三郎に軍兵を副へ、春日山へ差向く。城中の者共是を聞き、さらば城を出で北なる峯に登りて、嵩より敵を見下し岩石を投懸け、矢を放せといふ程こそあれ。小河左近大夫を初め、皆我れ先にと討つて出づ。斯かる處に淸げなる若武者一騎、唯〻一息にと登る敵あり。是は梅野帶刀が先陣に進むにてぞありける。城兵是を見て、天晴敵や、何樣組討にすべしと犇めきし處に、帶刀餘りに進み嶮しき所を踏崩し、眞逆に落ちたりけり。然る處を小河が家人二騎駈寄り、起しも立てず討取りけり。斯かる處に松瀨も續いて來り、敵味方入亂れ鬨の聲を揚げて相戰ふ。元より寄手大勢にて、城方の者利を失ひ、大將の小河左近大夫、痛手を負ひて引いて入る。山内勢、付入り城中に入

春日山落城

小河信安春日山に出陣

らむと追詰め、散々打戰ふに、左近大夫を初め同名治部少輔以下、悉く討死して、城は暫時に落ちたりけり。此事佐嘉へ隱なく、小河筑後守信安龍造寺の城中にありて是を聞き、大に牙を嚙み、えゝ無念の仕合かな。いで／＼信安馳せ向ひ、勝利が首を切り、同名共の孝養に手向けむと息卷(いきまき)して、頃は十月十五日、與力手の者殘らず引率し、佐嘉を出で北を指して鞭を揚ぐ。隆信は小河が風情、何樣卒忽あるべきと見られしかば、筑後守討たせては叶ふまじ。さらば自身も出馬すべしと、舍弟兵庫頭長信を初め追々に打出でらる。斯くて小河筑後守は、先づ春日山へ馳せ著き、城へ押寄せ見けれども、神代勢は疾く引上りて一人もあらず。弟共が死骸を初め討たれたる味方の者共、算を亂して横たはれり。信安彌々齒嚙をなし、其儘山内へ討ち入らむと進みしを、從ふ者共、筑後守を制し、今日は已に日晩に及びぬ。案内知らず敵地へ無體にて討ち入らむも危き事なり。明日峠を御越あれと申しけるに依りて、信安力及ばず、十五日の晩景は春日山に陣を取りけり。此事、早先達(寺カ)山内へ聞えけるにや。又推量しけるにや。今十五日山内の輩、轟々と集りて高野兵の

勝利小河信安を討取らむと期す

勝利信安接戰

大鐘を鳴らしければ、小城の千葉介胤賴、神代に加勢の爲め、急ぎ晴氣の城を打出で、屋形山に陣を張り、近隣の者共は小副川の寄合原に馳集る。爰にて勢を揃へ、勝利自身手分をし、其身は山内勢三千の內、一千七百を引分けて、三反田筋に懸り大野原を通りて、熊野嶺に陣を取り、嫡子刑部大輔長良は、一千三百を以て名尾口に向ふ。斯くて勝利の斥候走り來て告げけるは、既に佐嘉勢押來る。其中に葦毛の馬に乘りたる老武者の眞前に進み、頻りに鞭を揚ぐる者ありといふ。勝利打頷き、夫は小河筑後守なるべきぞ。何れ龍造寺の奴原、切所に待請け討取るべしと下知を加へて、其夜の明くるを待ちけり。

一、翌くれば十六日曙、勝利唯〻一人、河浪駿河守に槍持たせ、自ら斥候に出でけり。時に小河筑後守も、敵間を見む爲め、是も唯〻一人、下人に槍を持たせ春日山の陣所を出で、脇路より攀ぢ登りしが、特に嶮しき峯の細道にて、勝利に礑と行逢ひたり。互に夫よと見ければ、勝利、駿河に持たせたる槍おつとり、力足を動と踏み、やれ筑後守か。勝利なり。倡や勝負を決せむといふ。小河打笑みて、心得た

信安討たる

り。勝利物々しや。本より願ふ處、此合戰の雌雄は、汝と我等只二人が勝負にあるぞ、いざ參り候といふより早く、槍取直し突合ひけり。大力共の踏む足に、小砂交の岩石微塵に碎け、左右の谷へ落つる事、降る雨の如し。雙方の家人、援はむとすれども、其路一騎打にして、脇は石壁數十丈峙ち、中々馳け寄るべき樣もなし。勝利の從者河浪駿河守は、餘りに怺へ兼ね、砂を摑みて勝利の草摺の下よりぞ打ちける。筑後守は、大の男の蓋に懸り、勝利を見下し突合ひしに、勝利如何したりけむ、一の腕を突かれて扨も無念と曳聲を揚げ、突返すを筑後守受迦し、己の頰先よりの右小鬢の際に、甲の鉢を槍先白く突貫かれけり。（股をつくともあり。）鬼を欺く筑後守も、うつぶしに倒れて、えゝ口惜し／＼と二聲三聲いひけるを、河浪駿河走り寄りて首を取りけり。無念の至いふ計りなし。斯くて佐嘉勢も、小河が見えざるに驚いて、段々馳せ來る。其中に元は神代の家人梅野彈正いとふ者あり。今度小河に賺され、佐嘉勢に加はりて案內者となり眞前に馳せ來る。時に山內の先勢も次第に相近づく。其中に神代源內とて、無雙の智者のありけるが、彼の彈正が來るを見

て、傍輩共にいひけるは、あれ見よかた〳〵、昨日まで味方にありし奴めが、今日は敵の案内者となりて來るこそ面憎けれ。よし〳〵彼等を唯今手取にして見すべしと、簑笠を打著、土民の草刈を眞似て、岨しき山路の一筋ある傍に傴みて居たり。彈正、是を源內とは知らず、眞の草刈よと思ひしかば、目も懸けずして馳せ通るを、源內、得たりと彈正が馬の足を取りて、下なる谷へ引落し、押へて首をぞ掻きにける。斯くて小河が軍兵共追々來りて、筑後守討死と聞きしかば、今は何をか期すべきと、一子豐前守を先とし、堀江右衞門大夫父子四人・梅崎主水以下、其一列の輩は山內勢に駈入り〳〵討死す。斯かりし程に、後陣の佐嘉勢も續いて來り、鐵布峠に皆馳せ登る。此時勝利の旗本は、柚木川より大鹿鬣を過ぎて甑嶽に著陣す。時に勝利、士卒を下知し、敵は早鐵布に登りけるぞ。唯〻一打に打擲てと戲れ訇りしかば、山內勢勇み進みて、古川新四郎一番に槍を入る。佐嘉勢も鬨を作り、敵味方入亂れ火を散らして相戰ふ。爰に勝利の近習に、阿含坊とて山伏あり。元來薩摩の伊集院が弟にて、其長七尺に餘り、鬼髭左右に分れ、髭

禿に生ひたりしを、一揉もんでゆりかけ、態と甲を著ず大木の蔭より立現れ、其頭會て希なりし鐵炮を以て、龍造寺の者共を撰び打に討倒す。爰に於て佐嘉勢、四度路(しどろ)になり既に敗走せむと見えて、討死する輩には、石井尾張守兼清・中元寺新左衞門・副島左馬允・水町右馬助・江副新八郎・土橋孫七郎・大塚七左衞門・久保九郎兵衞・大石四郎兵衞以下、雜兵は數を知らず。其外秀島主計允・同圖書助・北島河內守(時に十五。)進み戰ふ。神代勢にも進藤新左衞門を初め、雜兵若干討死しけり。勝利は、今朝曙より槍を初め、餘りに戰ひ勞れて、喉乾き息絕えたるを、溝田新介、谷へ下り水を含みて來り、是を與へしかば、勝利漸く息を出す。斯くて龍造寺の軍兵、終に打負け散々になりて敗走しけり。勝利は勝鬨を揚げ、則ち山內へ引歸りぬ。されば今度の軍に、敵味方の死骸にて谷一つを埋め、血は草木を染め、さながら紅葉に異ならず。(此所、今頭谷といふ。矢の根・劒戟多し。)此時、何者のしたりけむ。一首の狂歌を書きて、河上の鳥居の前に立てたり。

春日山若武者先に落されて又清恥をかくぞ鐵布(かなしき)

隆信納富の諫めをきゝて歸城

此歌は、小河左近以下先達て攻め落され、又今度の軍にも打負けし事を、山内より嘲哢しけるにや。扨隆信は、河上口より旗を進められ、既に廣坂·龍瀨邊まで打入られし處に、今朝春日山の軍に、小河父子討死して味方敗軍しける由、注進ありしかば、隆信大に立腹し、彌〻急に山内へ攻め入りて、勝利を討取り、筑後守が亡心を休めむと、いらつて申されけるを、納富左馬助諫めて申しけるは、此度は筑後守が不覺にてこそ討たれて候へ。然るに御立腹の紛に、唯今山内へ攻入らるゝ事、能々御思慮候べし。彼の勝利は武功の大將なり。今朝合戰に打勝つて、早速山内へ引入りし事を、倩〻案ずるに、必ず隆信怒りの紛に押して山内へ攻め入るべし。然らむ時は、切所に引請け前後を取切つて、遁さず討取るべしと思ふなるべし。爾も彼等は案内者にて、其上岩窟に馴れ働き自由なり。味方は案内を知らずして、且つ嶮岨に馴れず働き不自由なり。然るに彼等が思ふ圖に入りて、うか〳〵と山内へ進まむ事、武略の拙きにて候はむか。先づ此度は枉げて軍を返され、重ねて謀を廻らされ、平場へ方便出し、心安く御一戰然るべしと、樣々諫

勝利小河信安の首を葬る

言申しければ、隆信も至極の道理に歸伏せられ、則ち馬を返され、河上僧座を打渡り、西の海道眞下りに、龍造寺の城へぞ歸り入れける。時に神代の家人梅野兵部少輔と古川新四郎は、鐵布敗軍の敵を追懸けて、馱市河原を下りしに、佐嘉勢返し合せ散々打戰ひ、新四郎は深手を負ひ、半死半生になりて引返し、兵部少輔は討たれにけり。斯くて勝利は、三瀨の城に歸陣し、小河筑後守が首を近邊の禪寺に贈りて葬禮し、佛事懇に取營みけり。又隆信は、歸城の後、筑後守が妻女其外從者に至るまで、深く哀憐を加へ、彼の菩提を弔らはれけり。扨信安が一男豐前守も、今度の軍に討死し、家を續ぐべき男子なかりしかば、隆信是を歎かれ、鍋島駿河守清房の三男を、彼の遺跡に定め、筑後守が娘に娶られ、小河大炊助信友とぞ申しける。其後信友、武藏守信貫又信俊と改め、天正十二年三月、島原に於て隆信と共に戰死を遂げ、二代の忠心怠らざりけり。

筑後守信安の妻女、則ち剃髮し妙泉と號し、亡夫菩提の爲め高野山に末代の寺領として田貳段、肥前加瀨庄中原の內、本願院に寄す。

筑後守信安、初武純と號す。肥後國菊池爲安が孫、小河筑後守爲純の嫡男なり。中頃筑後國山門郡の內、上小河・下小河を知行す。仍りて小河と號す。

城原攻少貳冬尙自害の事

同年十一月上旬、龍造寺隆信、宿老共を集めて申されけるは、當時城原の江上が、少貳屋形を守護し、三根・神崎を知行して、動もすれば神代と引合せ、我等が怨となるなり。所詮少貳を攻め潰さば、江上も神代も威を失ふべし。急ぎ勢福寺城を攻むべきなり。其用意すべしと申されしかば、早速陣觸あつて龍造寺の家人等馳せ集る。斯くて隆信、佐嘉を打出でられ、姉河彈正忠が姉河の城に入りて本陣とせらる。其前廉、蓮池の小田駿河守政光と、蒲田・崎村三人の犬塚へも出陣あるべき由、申送られし程に、何れも已むを得ず領掌して、政光は手勢三千人餘騎を率ゐて、西の方莞牟田口より押寄す。時に神崎の本告左馬允賴景、小田と一手になりて先陣す。二陣は犬塚の一族蒲田・崎村兩所の軍兵合せて一千五百餘騎を以て、東の方神

隆信勢福寺城を攻む

神代勝利江上武種を援けむが為に出陣

合戰

崎口より相進む。隆信は未だ姉河の城にありて、軍を出されず遊軍の如し。頃は十一月十日なり。江上は兼ねて思ひ設けし事なれば、急を山内へ告げて、神代勝利の方へ援を乞ひしかば、勝利、取る物も取りあへず、早速三瀬の城を出で、道々軍士を催し、廣瀧・一番瀬・腹卷を先手として、三瀬・松瀬・杠・藤原・名尾・梅野を旗本にて、同九日の晩景、城原勢福寺城に入る。其夜、城主江上武種、勝利と評定しけるは、以前隆信當城を攻めし時も、分內狹きに依りて、大勢を防ぎ難く味方利を失ひしなり。所詮今度に於ては、半途に出向ひ廣みにて戰ふべしと、軍を二つに分けたり。先づ一手は、勝利の山內勢に城原の軍兵相加はりて其勢三千餘騎、西の方牟田の前に出向ふ。又一手は城原衆江上石見守貞種・執行攝津入道宗圓・同越前守種兼・同中務少輔兼家・枝吉長門守種量・同周防守種次・直塚右京助種重・同治部少輔純英・波根右京助景乘・同名佐渡守景次・服部常陸介・同名伊豆守・同伊賀守・其外島・青柳・西久良木・石橋・光安を初め都合貳千餘騎、東の方神崎口を差固む。斯くて同十日の朝、小田政光・本告賴景兩勢を合せて、牟田の前の繩手に押詰む。時に山內の神代勢相懸（あひかかり）に懸

隆信の一陣小田政光戰死

り、唯〻一筋の細道の左右は澤田なりしに、鬨の聲を揚げて弓・鐵炮を射違へたり。其時、勝利の兼ねて用意ありし三間柄の大槍を、數百本眞前に立てゝ、無二無三に叩いて打ち散らす。暫く戰うと見えたりしが、小田方の先手本告左馬允賴景、一戰に打負けて政光の旗本へ崩れ懸る。政光、味方の難儀を見て、急ぎ隆信の本陣姉河へ軍使を馳せ、此口の軍烈しく候。さりながら政光に於ては一足も引き候まじ。但し自餘の味方の敗れざる前に、急ぎ御旗を進められよといひ遣す。其使、既に數箇度に及びしかども、隆信心底に深き思慮あつて、更に軍を出されず、政光大に立腹し、蓬き隆信の所存かな。よし〳〵政光討死すべしと、向ふ敵に馳合せ、東へ追詰め西へ攻め付け、死狂に切つて廻る。此政光は無雙の打物の達者にて、其合戰の行裝、偏に縛多王が鬼を狩りしも斯くあらむ。斯かりし程に、懼れて近づく者もなく、江上・神代の兩勢、政光一人に切立てられ、陣中疎になりにけり。されども敵押取籠め、打物にては叶ふまじきぞ。唯〻遠矢に射て落せと、四方より矢を放す事、降る雨の如くなり。中にも波根が射る矢、政光に中りて馬より逆に落つ。是を見て服

隆信勢福寺を圍む

部常陸介、走り懸りて首を取る。 政光の家人原河内守、主の敵あまさじと、服部を突臥せ其頸をぞ取りける。 蓮池の輩、政光の討死を見て、小田右馬大夫利光を初め、犬塚彌七郎種久・山田河内守・同善九郎・同福童丸・江口兵庫助・同善左衛門・栗林近江守・（或書に伊勢守。）内田右馬大夫・（或書に右近と。）同三左衛門・末次與七郎・同玄可舜德齋以下宗徒の者六十餘人、敵中へ駈入り〳〵討死し、殘兵は皆敗軍す。 城方江上勢にも執行攝津入道宗圓、子息越前守が見えざるを尋ねて、馬を敵陣へ乘込め討死す。 其外西和泉守・同忠三郎・同新太郎父子三人も討死しけり。 斯くて神崎口へ向うたる犬塚の一族も討負けて、伯耆守鑑貞は討死し、彈正少弼鎭[illegible]は深手を負ひて己が館へ引退く。 扨此事、隆信の本陣へ聞えしかば、其時隆信、さらば軍士を進めよと、姉河を打立つ。 則ち姉河が家人堺石見守・堀江藏人以下を先手とし、福池長門守信重・三浦下野守純就・納富左馬助信景以下大軍を率ゐて、其勢山を裂き、堂々と太鼓を早め押寄せけり。 此時、江上も神代も早速軍士を引揚げ、武種は田手の日吉城へ引籠り、勝利は横大路を西へ河窪へ廻り山内に引歸る。 時しも今宵、小雨交りに雪降りて、

隆信の政光を援けざりし理由

山路いと闇かりければ、勝利河窪に著きし時、當所白鬚大明神の神主白水讃岐守に申付け、續松を出させ、其光にて三瀨の城へぞ歸り入りける。斯くて隆信は、勢福寺城へ押寄せられ、龍造寺右衞門大夫家就・同名備後守鎭家・同伊賀守家直・納富左馬助信景・福地長門守信重・三浦下野守純就・小河玄蕃允信貞以下、彼此四千餘騎を以て、大手・搦手二手に分れ遠攻にこそせられけれ。されば今度の合戰に、隆信、小田・犬塚を援はれざる事、仔細ある事なり。彼の輩は元來少貳家骨肉の者なれば、當時龍造寺に從ふと雖も、行末の事覺束なく、必ず怨にもなるべしと思はれし故、此度先手をさせられ、態と捨殺（すてごろし）にせられしとぞ聞えし。不義の至と人々さみし申しけり。斯くて勢福寺の城中には、少貳屋形を守護して、河津紀伊守・牧左京亮・光益新三郞・宗左馬助・窪・今泉幷に江上の一族・同家人等、身命を抛つて持口を防ぎしかば、佐嘉勢敢て近づき得ず、二三日は徒に城を圍みて居たり。

一、同月十五日、隆信、勢福寺城を圍みながら、軍兵を差分けて小田政光の居城蓮池を攻めさせらる。是は此度、牟田の前の合戰に、政光を援はれず捨殺にせられし

隆信政光の居城蓮池を攻む

政光の老臣深町理忠戰死

事、彼の子供・家人等、聞きて大に恨み思ふべし。さあらば竟に隆信が仇ともなるべき間、所詮彼の城を攻め干し、政光が從者悉く鏖にせむと思案ありての事なり。斯くて蓮池の城中には、政光討死して未だ七日過ぎず、其經營に取亂し、其上龍造寺より當城を攻むべしとは、思ひ寄るべき事ならねば、鯨波を聞いて上下大に周章て東西に立迷ふ。其中に老臣深町入道理忠、城戶を持つて相戰ふ。時に佐嘉勢の中より、水町左京亮・宮崎伊勢守・北島河內守以下、進んで相戰ひ各〻分捕す。其隙に寶琳坊の住持眞如坊澄能の才覺を以て、政光の子彈正少弼鎭光・中務大輔朝光・左近大夫增光・其外老若男女、城中を出し筑後國三潴郡へぞ落し遣しける。斯くて深町入道は、城內の輩を落さむ爲め、散々に戰ひ終に討死しけり。此入道討たれしかば城は則ち落去す。扨今度討たれし城兵共の死證を、隆信の實檢に入れけるる中に、深町入道が首あり。隆信、是を見られ、さて〳〵此入道は討つまじき者なるを、我れ先年、敵の爲め城を圍まれ旣に腹を切るべきに極まりしを、此の理忠入道が情にて其圍を免れ、今には運を開き甚だ武威を振ひぬ。然るに此度、我等詞

を添へざる故討たれぬるこそ本意なけれと、大に悔まれけり。斯かる處に、年の頃八九歳の童を生捕り來れり。侍の子と見たりしかば、皆打寄りて、親の名を問ひしに、深町理忠と答へぬ。其旨、隆信へ披露しければ、大悅あつて彼の年少を助けられ、後に百町の食祿を給はり、御家人となして深町理と號し、天正十二年三月、隆信、島原にて落命ありし時、ともに忠死を遂げけり。其子孫今にあり。

一、今度蓮池落去の時、政光の父（實は祖父。）駿河入道覺派は、聊の事あつて蓮池の居城にあらず、軍散じて後、歸城して政光父子の成行、一々委しく尋ね聞き、大に悔み腹を立てしかども力及ばず、家人は皆落ち失せて主從二人になりぬ。覺派、今にはすべき樣なく、口惜しき事かな。よし〳〵今は腹を切るべしとて、城より西に當りて、藏屋敷のありしに入りて、心靜に自害しけり。一人附添ひし家人、甲斐々々しく主の死骸を取隱し、其家に火を懸け、煌の中にて腹掻切り、ともに冥火となりけるとぞ聞えし。

一、斯くて龍造寺隆信は、彌〻城原勢福寺城を圍みて、日を累ね早十二月朔日になり

龍造寺神代江上和平

隆信勢福寺城を陥る

少貳冬尙自害

ぬ。斯かる處に同月三日、河上實相院の座主増純法印の扱にて、千葉・少貳・龍造寺・江上・神代和平調ひ、此後異心あるまじき由、一紙の起請文に、龍造寺山城守藤原隆信・神代大和守武邊勝利・江上左馬大輔大藏武種と三人の名を載せ、神名に血を灑いで、河上社の寶殿にぞ籠められける。斯かりし程に、小城・佐嘉・神崎無事の化に歸して、既に寶炭の冬も暮れしかば、隆信、勢福寺城の圍を解き、急ぎ佐嘉の城へぞ歸陣ありける。

一、既に佐嘉・小城・神崎和與あつて、隆信、佐嘉へ歸陣ありしかば、少貳方の輩、一旦安堵の思ひをなし、屋形冬尙も心安く思はれけるに、翌くれば永祿二年己未正月上旬、隆信、俄に軍を起し又々城原に押寄せ、勢福寺城を去冬の如く取圍み、東西南北より攻めらる。舊冬十二月三日の和談は、其不意を擊たむ爲の僞なりけり。元より城中思懸なく油斷してありしかば、防戰叶ひ難く、江上武種、則ち降人となりて城を出で、筑後國へ赴きしかば、冬尙は羽拔の鳥の如く成果てられ、すべき樣なくして、同月十一日終に生害せられけり。生年三十三なり。法名安心本

海と號す。昔右大將朝頼公の時、彼の冬尙の先祖武藤小次郎資頼、鎭西へ下向し太宰少貳に任じて以來、今の少貳冬尙に至つて既に十三代、星霜三百七十餘年にして、當家衰滅しけるこそ歎はしけれ。斯くて隆信は、年來の家の敵少貳屋形を亡し江上をも追落して、大に悅び佐嘉へ歸陣ありけり。

或はいふ、今度江上、早く城を去りし事は、隆信、計略を以て內通ありし故、冬尙を捨てむ爲めなりと。

或はいふ、冬尙も、今度江上と同じく城を忍び出で、有馬仙岩父子を賴み、藤津の方に赴かれし處、七浦にてふと煩出し、死去ありしとも。

千葉介胤頼討死附妙見太刀由來の事

今度城原にて生害ありし太宰少貳冬尙は、前少貳資元の嫡男にて、男女の兄弟多かりけり。一人は改（政カ）興御曹司と申して、頃日は譜代の家人馬場・横岳・宗・出雲・朝日・筑紫に守護せられ、東肥前に居住あり。一人は小城郡司千葉丹波守喜胤の家督を續ぎ、

千葉介胤頼と胤連と不和の原因

其息女に相嫁して千葉介胤頼と號し、此時、晴氣の城にあり。又一人は河副の邊に忍んでありけり。末一人は女子なり。然るに晴氣の千葉介胤頼、同名の胤連と不和にして、近年合戰する事度々に及べり。其故は胤頼は元來少貳の子なり。胤連は龍造寺の壻なり。少貳と龍造寺は怨敵なり。依りて胤頼は兼ねて少貳に力を合せ、胤連は龍造寺に一味しけり。斯くて今年正月十一日、隆信、大勢を以て城原の城を取詰められ、少貳屋形冬尙必ず落去たるべき由、小城へ聞ゆ。千葉介胤連、時を得たりと悅び、同十一日急ぎ人數を催し、牛尾の城を出で同名胤頼の晴氣の城へ取懸る。

胤頼胤連合戰

時に胤頼、城を出で東の方の山路に於て胤連と相戰ふ。されども胤頼、折節無勢なりしかば合戰終に打負けて、家人十二人・又者四人討死し、其身もそこにて討たれにけり。

胤頼戰死

軍退散の後、三間寺の竹隱和尙、是を憐み其首を牛尾より乞請け、死骸と同じく則ち三間寺に葬り、七日の中陰六日よりは寺家の取成し、合戰場に卒都婆を立て施餓鬼をなし、同じく書寫經一部、十六日に之を修し懇に弔はれけり。年廿八なり。法名、禪の三間寺に於ては、天受本龍大禪定門。法華の松尾山にては

日賴と號す。然るに彼の胤賴に男子一人あり。父胤賴討死の後上佐嘉河窪へ赴き、以前の好を以て神代家を賴み、後に千葉屋形胤誠とぞいひける。此胤誠に、先祖累代相傳の重寶三つあり。一には妙見菩薩の尊像。二には妙見の太刀。三には家の系圖なり。此重寶共を、後には皆代神家へ讓り與へられ、其上平氏幷に二月星の幕紋・先祖の諱字常といふ一字を授けられけり。

千葉家の重寶

一、彼の三つの寶に由緒あり。千葉家の曩祖、昔關東下總國に任せし時、或る所の小笹の上に稚童子、忽然と現はれ居たり。（其傍に妙見菩薩の佛像と太刀一振之あり。）此兒の裝、更に尋常ならず不思議の事なりしかば、頓て帝都へ奏聞ありしに、則ち國の守護職、是を養育して子にすべき由勅定あり。其時の國守下總權介平忠常、此兒を養ひ成人にして、千葉介常將とぞ申しける。父もなく母もなく、月星を以て兩親とし、家屋の外に生れたる故、月に星を幕の紋とし、小笹の上に現はれし故、千の葉といふ心にて千葉と號し、替紋には根笹を用ふ。扨妙見菩薩を下總の國へ勸請し、其社に彼の太刀を籠め置きけり。然るに太刀の德、天に通

同由來

じけるにや。ある時、雷此太刀に望を懸け鳴下りて、是を掴み虚空に昇らむと光り渡りしを、忽ち妙見の神體現はれ給ひ、卽ち奪返し給ふとなり。其時、雷の抓きたる形あり。是より此太刀を雷太刀とも、又妙見太刀ともいひ傳へたり。然るに文明の頃、千葉介敎胤、此太刀を帶し大村を攻めて歸陣せしに、藤津濱の祇園の御諦にて、新介敎胤、杵島の大町の入江篠島の沖八丈が島ともにて船を覆し、海底に沈みしを、三年を歷て同氏胤朝の時、妙見菩薩の靈夢を蒙り、彼の海中を搜させて見るに、則ち探り當てゝ取上げたり。斯かる稀代の名劒なりし故、年經て後、此太刀、肥前太守に召されしとぞ聞えし。

北肥戰誌 卷之十四 終

北肥戰誌　巻之十五

筑前國侍島軍の事

永祿二年己未、筑前國五箇山の領主筑紫右馬頭惟門、此二三箇年、大友に攻められ山中へ引籠りしが、今年の春、居城武藏へ立歸り、大友に對し又々逆意をなしけり。此事、豐後へ聞ゆ。是を誅伐の爲め、眞光寺佐藤刑部丞を檢使として差遣し。筑後・肥前の輩へ早速惟門を退治すべき由、大友義鎭下知せられけり。然る間、筑後上下の諸將、肥前の横岳右馬頭資誠・犬塚山城守尙家・同名民部大輔尙重等、彼の兩人の檢使とともに、四月二日惟門が武藏の城へ取懸る。されども合戰に及ばず矢軍計りにて、寄手の諸軍引退きしに、惟門の家人附逐り、侍島に於て散々相戰ふ。時に大友の軍士打負けて、府內よりの檢使佐藤刑部丞立所に討たれぬ。是を見て、肥前の

犬塚尙家、筑後の星野鑑泰・問注所鑑晴・麥生兄弟返合せ〳〵皆討死しけり。其外蒲池武藏守鑑盛・田尻伯耆守親種踏留まりて、大に挑戰し、中にも田尻が手には敵の首五十三級討取りしかども、敗軍の習、其場を蹈まず。味方にも討たるゝ者、田尻尾張守種任・同名美作入道・同次郞三郞種益幷に家人七人・又者十三人、彼此戰死廿三人。疵を蒙る者田尻玄棨入道以下五人なり。斯かりし間、諸家の親類被官も討死する事數を知らず、竟に筑後衆敗軍しけり。時に草野眞淸が、大友方にて去々年より宮尾の城に在番しけるも、怺へずして落去りけり、總て豐後勢敗軍なり。

大友勢敗北

草野眞淸、其後又宮尾の城に差籠りしを、筑紫惟門、夜討を以て打崩し。惟門の子廣門の二九一丸とて、未だ年少の時、眞淸一所にありしをも抱取り、又五箇山へ引入りぬ。

秋月筑紫龍造寺大友へ和を乞ふ事

同年秋月左兵衞尉種實、後に長門守と號す。是も去々年大友に攻められ、父文種生害の後は、

大友勢秋月が古所山の城を攻む

中國へ落行き成長して、今年は十二歳になりしが、今度筑紫と申合せ、中國より舊地秋月へ歸り入り、古所山の本城に楯籠り、大友に向つて父の仇を報いむと、深く逆意を挾みけり。是に依りて豐州より彼の討手として、田北大和守鑑生、其外の宿老幷に南郡衆・肥後衆皆々出陣し、(マヽ)如早晩先づ日田表へ著陣せしめ、夫より左右良山へ陣替あり。筑後衆も出勢し、其後烏留に陣を移し、則ち休松へ差寄せ陣を取り、秋月が古所山の城を攻めむとす。されども此城無雙の要害なりしかば、容易攻め登る事叶はずして、諸手の大友勢、數日徒に城を見上げ在陣しけり。斯くて各、評定し、南郡衆と肥後勢は、其儘休松に控へ陣を取り、府内の宿老と筑後勢は庄山へ陣を移し、樣々行を廻しけれども、彌、古所山の城堅固なり。斯かりし程に次第に秋にもなり、諸勢皆山中の長陣に勞れ、其上庄山は高山にて秋霧深く、馬・物具悉く損失し、士卒大に困窮しければ、田尻伯耆守、一書を以て右の次第を申し碎き、先づ先づ山隈原へ陣を直され然るべくもや候はむかと、豐後の一將田北大和守へ申送りぬ。鑑生も是に同意し、休松に於て南郡衆の陣へも談合あり。何れも一致な

大友勢山隈に退却

りしかば、頓て諸勢、山隈へ陣替す。時に筑紫が家人共、田代まで討つて出で、豊後勢に向つて少々取合ありしかども、さしたる行に及ばず、皆五箇山へ引入りけり。斯くて大友勢、先づ古所山を閣き、肥前の龍造寺か或は少貳を攻め崩し、或は小田・江上を追出して、一（マヽ）雅意を動く間、是を攻め干すべしと談合して、八月廿八日、既に畠山まで陣を寄す。此時蓮池の小田鎮光・城原の江上武種は、浪人にて筑後にありしが、大友勢の佐嘉を攻むると聞いて大に悦び、龍鱗に付き鳳翼を攀ぢて、此度宿望を達せむと思ひ、各、筑後を打立つて肥前の舊領に入りけり。彼の小田鎮光の兄弟は、去冬隆信に攻められ、蓮池の城を落ちて、先づ私領筑後の三潴に到り、夫より頃日は坂東寺にありけり。其從者六百餘人となり。

龍造寺和を大友に乞ふ

斯くて龍造寺の城中には、大友勢を防がむと樣々評議ありしかども、所詮一旦和を乞ふべきに衆議決定し、九月十五日、隆信の名代として龍造寺左衞門佐鑑兼を、今度豊後衆の陣したる畠山へ差出し、和議を求められしかば、隆信の訴に任せ無事に調ひ、大友勢は夫より陣を返し、筑前若宮庄河底といふ所に陣を移す。斯かりし間、小田鎮光は舊領五千餘町を

秋月種實和を大友に乞ふ

筑紫惟門和を大友に乞ふ

安堵して、蓮池の城に歸り、入江上武種も本領二千五百町を返し與へられ、城原勢福寺の城へ立歸りけり。

一、斯くて大友の軍士の內、豐後の輩は筑前國河底に在陣して、彌、古所の城を差詰め、筑後の輩は河邊下野荒瀨村に到りて、夫より三桑木へ陣を寄す。然るに古所の城、長々敵に圍まれ籠城叶ひ難かりしかば、城主秋月左兵衛尉種實、詫言深重を以て和を乞ひけり。此事、田尻伯耆守取次にて、豐後の一將田北大和守鑑生承引あり。則ち其一禮の爲め、種實より同名越前守を、豐後衆の陣河底へ差出し、田尻が取合(とりあはせ)を以て、今度種實、籠城宥免の禮を述べけり。扨田尻は、古所の城へ登り、種實を同道にて江河の山中へ下り、種實下城す。然る間、秋月表先づ平均して、豐後・筑後の大友勢、皆々開陣しけり。其中にも田北鑑生は、三桑木の田尻陣所へ一宿あつて歸陣なり。

一、筑紫右馬頭惟門も、秋月が大友へ降參の由を聞いて、力を落しけるにや。五箇山隱住の所より大友に到て、深重懇望を以て降參すべき由申しける間、是も田尻

親種調達にて宥免ありけり。爰に於て九州一旦靜謐す。

河上合戰神代勝利沒落の事

龍造寺隆信使を迻りて神代勝利に戰を挑む

神代應諾して河上に出陣

永祿四年辛酉九月上旬、龍造寺隆信、使を山內へ遣し、神代勝利へ申されけるは、隆信、御邊に對し鬱憤片時も止む事なし。所詮有無の一戰を遂げて、兩家の安否を極むべし。然れば今月十三日、山と里との境なれば、河上へ出合はれよ。勝負を決し申すべしといひ迻られけり。勝利、仔細に及ばずと返答あり。其後、又勝利よりも、河浪駿河守を龍造寺へ差遣し、彌、當月十三日、河上に出合ひ勝劣の程を試み候べしといひ遣されけり。斯くて其日になりしかば、勝利、熊川の城にて勢を揃へ、都合七千餘騎河上に出張し、手合を定めて口々を差固む。先づ勝利は三瀨內藏助武家・同名長門守安家・古河佐渡守・同新四郞・嘉村讃岐守父子・畑瀨越前守父子、其外恒松・島田・菖蒲・栗並以下二千餘騎を引分けて、淀姬大明神の西の總門を本陣とす。扨大手宮原口をば、嫡子刑部大輔長良を大將にて、神代備後守蕃元・同豐前守・同兵

隆信河上に出陣

衞尉・福島周防守勝高・同伊賀守利高・中島上總介鑑連・千布因幡守家利、其外江原・梅野・國分・小副川・一番瀬を初めとし、三千餘騎を以て差固む。又大明神の前南大門へは、次男兵部大輔種良を大將にて、松瀬又三郎宗弈・同能登守利宗・杠紀伊守種滿其外合瀨・名尾・芹田以下一千三百を以て相備ふ。扨河より東都渡岐口をば、三男淸次郎周利に、八戸宗暘を副へ、西河伊豫守・古湯・杉山・鹿路・大野の者共、其外千葉介胤誠の家人彼此合せて一千五百餘騎にて固めたり。頃は永祿四年九月十三日、隆信も其信〔長カ〕ゟ其勢八千餘騎を以て、また鷄鳴に龍造寺の城を打出でられ、軍を三つに引分けて河上へ押寄せらる。先づ東都渡岐口へは、舍弟左馬頭信周・從弟左衞門佐鑑兼・小河大炊助信友以下二千餘騎にて向ひ、又河より西南大門口へは、納富但馬守信景（前名は左馬助。）を大將にて二千五百餘騎、河に副ひ松原に據つて押寄せ、隆信は三千五百餘騎にて、西山田より大手宮原口へ押詰めらる。旗本の先陣は廣橋一祐軒信了。二陣は福地長門守信重。三〔陣脱カ〕は旗本にて、後陣は龍造寺兵庫頭長信なり。又馬廻の侍に馬渡刑部少輔・倉町太郎五郎・石井刑部大輔・同源次郎とて、無雙の荒

者四人あり。隆信の馬の前後に相供す。斯くて十三日の辰の一點、先づ大手宮原口より軍始まつて、敵味方弓・鐵炮を打違へ、神代の陣よりは神代兵衞尉・江原石見守一番に槍を合す。龍造寺の先陣廣橋一祐軒、士卒を勵し、一足も退くな。懸れ〳〵と下知をなす。されども神代が山内勢、無二無三に競ひ戰うて、龍造寺の者共利を失ひ、南の方へ雪崩立ち、先陣の廣橋入道既に討たれむとぞ見えたりける。隆信兼ねての軍制に、先陣の敗は二陣の不覺、先陣の勝は二陣の手柄と定め置かる。然るに先陣の一祐軒打負けたりと遙に見られ、二陣の者共を大に怒りて、自ら采配を揚げ馬を榎木口へ乘廻され、馬廻の者共を急ぎ先陣に入替へ、二陣を賴むな。進め進めと頻に下知ありしかば、四人の荒者を先として、旗本の輩我れ劣らじと相進み、二陣の福地長門守も、五百餘騎にて入替る。時に神代の陣より武藤左近將監と名乘りて、福地に突いて懸る。長門守是を見て、能き敵なりと思ひしかば、人交もせず突合ひしに、武藤、如何したりけむ。福地が槍を請け迦し、胸板を突かれて仰に倒る。福地が與力小林播磨守走り懸りて其首をぞ取りける。此外大庭石見守は、

神代中務丞を射伏せ、納富越中守・北島河内守以下進んで分捕し、空閑三河守光家相戰うて軍功あり。斯くて南大門口松原にも、同じく軍始まりて、神代兵部大輔と納富但馬守火を散らし相闘ふ。然る半ばに、勝利の東の手都渡岐の陣に、野心の者出來て大將清次郎を刺殺しける程に、此口の軍、神代勢亂れ立つて悉く敗軍し、八戸宗暘疵を蒙り山内へ引退く。斯かりしかば、龍造寺左馬頭・同名左衞門佐・小河大炊助以下の輩、爰をば打捨て河を駈渉し、納富が攻口南大門へ押寄せ、神代兵部大輔の陣へ横合に切懸る、時に神代勢、東南の敵を防ぎ兼ね、四度路になりて見えけるを、兵部大輔、目を怒らかし士卒を下知し、一足も引くな、駈入りて皆討死せよ。爰をも破られなば、大手の軍難儀なるべし。進め〳〵と頻に采配を振つて、自身敵に相當る事數回なり。是を見て其家人松瀨能登守・馬場四郎左衞門を初め、佐嘉勢に駈入りて悉く討死す。大將兵部大輔も、餘りに進んで打戰ひ、御手洗橋の邊にて、敵に組まれて討たれにけり。斯かりし程に、南大門の軍も、山内衆打負けて皆散々になりしかば、龍造寺の軍兵、爰をも打捨て、勝利の本陣大明神の總門へ攻め近づき、後

神代勢敗軍

を取切らんとす。勝利、今は怺へ兼ね八反原の方へ引退く。斯樣に口々敗れしかども、大手宮原口の軍は、未だ果てずして隆信の旗本と、長良の軍兵東風西風相戰ふ。爰に竹藪を隔てゝ戰ふ所あり。佐嘉勢の中より馬渡刑部少輔信喜、是を見て堀の岸を傳ひ寄り、藪越に敵の突出す槍を六七本奪取りけり。斯くて龍造寺の士卒、水町左京亮信秀以下、大に進み戰つて、長良終に打負け山內へ引退く。佐嘉勢、是を大將よと見て、遁さじと追駈けたり。長良、屹と見て長身の槍に、血の付きたるを振廻し、慕ふ敵を突退く。されども佐嘉勢彌〻附慕ひ、遁れ難く見えたりしかば、長良、既に高畠榎木の下にて腹を切らむとせられけり。是を見て長良を落さむ爲め、福島周防守・同伊賀守・同彈正忠・同新三郎・神代兵衛尉・梅野源太左衛門・中島上總介以下、近づく敵に馳せ向ひ〳〵、我れ先にと討死し、江原石見守は生捕となりけり。其隙に神代備後守走り寄つて、長良の自害を押止め、能く御忍び候へと、藪の茂みへ藏し置き、己は敵に渡り合ひ、福地長門守が手の者三人切伏せ、猶長門守へ切懸りしを、福地が家人懸り隔り、備後守をば討取りけり。爰に神代勢に、西原左衛門

とて隱なき精兵あり。長良を落さむと防矢散々に射、矢種皆射盡しければ、箙をかなぐり捨て、太刀を拔いて渡り合ひ、痛手多く蒙りしかば、進退叶はずして、とある所に打臥したり。

神代父子熊川城に退却

斯くて勝利は、慕ふ敵を追拂ひ、八反原まで落ちられしに、佐嘉勢追駈け來りて、落人あるぞ。討留よと聲々に觸れ呼ばはりしかば、近邊の野伏盜賊、蜂の如くに起り集りけるを、勝利、是を追拂ひて、仔細なく熊川の城に入りけり。長良も又其夜、忍びて熊川へ來られけり。

隆信凱旋

斯くて隆信は、今度河上の合戰に打勝たれ、鐵布の無念を晴しけると大に悅び、則ち勝鬨を揚げられ、下於保村にて生捕共を誅戮あり。佐嘉へ歸陣せられけり。

或はいふ、此軍に、勝利も討たれしとて、そでなき首三つありしとなり。

或はいふ、勝利の次男兵部大輔種良、此度生捕となり、下於保村にて斬られけるとも。

或はいふ、今度生捕の中、江原石見守、下於保村にて斬られし時、敷革よりつと立つて、太刀取を蹴倒し、喉笛を喰切りけると。

扨隆信、佐嘉へ歸陣あつてより、神代領悉く沒收せられ、山内所々に以前の如く代官を居ゑられ、空閑參河守光家を以て、山内の押の爲め杤井村へ移されけり。然るに神代勝利は長良と談合あり、先づ山内を退き、重ねて本意を達すべしと妻室を具し、上松浦の草野へ落行き、夫より所縁ありしかば、父子打連れ大村の内波佐美へ赴き、彼所の地頭大村式部大輔純忠を頼まれけり。純忠仔細なく肯ひ、勝利父子の妻子をも波佐美へ迎へ、家人朝長伊勢守を附けて、是を守り深く勞り申されけり。又塚崎の後藤伯耆守貴明の許よりも、時々事問ひ申されしとど聞えし。

神代大村純忠に頼る

勝利歸城の事

斯くて神代勝利は、妻子と共に暫く波佐美に浪人にて月日を送られけるに、家人中村壹岐守　其頃山内に殘りて居たりしが、如何にもして勝利を歸城させたく思ひて、其計略の爲め嫡子外記が今年十六になりけるを、唯一人召具し、山内を徘徊す。然るにある夜悴外記、佐嘉より居ゑ置かれたる摩那子山の代官田中兵庫助が宅に

中村壹岐守父子龍造寺の代官を殺し其家を燒く

忍び入り、無念に兵庫を切殺し、扨家に火を懸け燒立てしかば、近邊の土民共驚きて、是は如何にと馳せ集る。中村父子は、闇き所に立隱れ、風と出でては丁と切り、立現はれては礑と切り、爰にて聲を立て彼所にては手を叩き、樣々働きける間、其邊の者共、彌〻立騷ぎて、佐嘉よりの代官共、聞傳へ〳〵騷動する事大方ならず。此騷の紛れに、中村父子、山内所々を駈け廻り、朋友共を相語らひ、佐嘉よりの代官悉く追出しけり。扨此事を大村に於て、勝利父子へ注進しければ、勝利・長良大に悅び、さらば歸入るべしとて、同年十二月中旬、波佐美を立ち、先づ小城山へ懸りて夫より三瀨へ歸城ありけり。斯くて勝利父子、百日の中に歸參ありしかば、山内の者共男女僧俗、悅ぶ事限なし。されば隆信、佐嘉にて是を聞かれ、樣々心を碎かれしかども力なし。

神代勝利歸城

其翌年、隆信工夫を廻らし、何とぞ叛忠の者を求め、勝利を討たすべしと、其頃山内へ西河伊豫守とて、辯舌明かに力量人に勝れたる者のありけるを、色々賺し語らはれける程に、伊豫守肯ひて、山内へ歸り勝利を討つべき行、密に三瀨又兵衞に內談す。又兵衞は、兼ねて彼の西河とは斷金の因なりけり。されど

も三瀨、此事に於ては同心せず、父長門守へ斯くと告げけり。長門守膽を潰し、早速勝利へ告げしかば、勝利打諾き、伊豫守が重陽の禮に出でける所を、三瀨又兵衞・中野新十郎に眴して討果されけり。其後は隆信も勝利を討つべき計略、中々思止まられけり。

一、今年犬塚民部大輔尙重も、本領蒲田へ歸り入りけり。近年尙重、隆信の爲め居城を去りて他國にあり。

一、隆信頃日、小田鎭光・江上武種・犬塚尙重と和平あり。鎭光は壻に取られ、武種へは次男を養子に約束あり。尙重は元より妹壻なり。

一、今年小城の祇園の神矢、北向に立ち、其矢向に蛇多く死しけるこそ不思議なれ。

少貳元盛出家附今泉播磨守忠心の事

爰に永祿四年の頃、前太宰少貳冬尙の舍弟に、御曹司元盛といふ人あり。父資元、去ぬる天文の初、肥前の多久にて生害ありし時は、此人未だ稚くて、妹君と共に少

今泉朝覺の忠心

貳の舊領佐嘉郡河副の江上村福滿寺に、聊か所緣ありて忍び居られしを、譜代の家臣今泉播磨守朝覺、亡君資元の遺言に依りて兎角撫育し、今年元盛、既に廿七歳とぞ聞えし。抑〻此朝覺、未だ若かりし時、少貳家衰亡の事を歎き、如何にもして朝廷に達し、當家を再興すべしと思立ち、出家に樣を變へて、則ち播磨坊朝覺と名を窄し、先づ六十六箇國を廻つて、諸家へも心を合せ、其上にて上洛を遂げ、竹苑柳房を初め、公家方へ緣を求め、中にも柳原大納言資定卿の許へ、常に近づき奉りけり。然るに播磨坊在京の時、頃は大永元年に、東山祇園社に參詣し、南無歸命頂禮牛頭天王、仰願はくは和光の憐を垂れ、朝覺が心中の所願を成就なさしめ給へと伏拜み、頓て新に工匠の功をなして、宮殿を修造し、其社の邊に杉と松とを多く植置きけり。然る間神官等、朝覺坊が體を不審思ひしかば、一々奏し申しけり。當今後奈良院、是を叡聞ましく、先づ朝覺坊を法橋上人に補任せられ、其上にて勅問ありけるは、抑〻上人、邊鄙の身として兼ねて在京し、祇園造營の事、如何樣仔細あるべしと勅定ありしかば、朝覺上人、傳奏に屬て申しけるは、愚僧は元來太宰少貳譜代

の家人、今泉播磨守朝覺と申す者にて候。我が身に取りては何の所願も候はず。去ながら主にて候少貳は、數代九代の貫主に候ひつれども、近年は鎭西の輩に威を奪はれ、前少貳政資父子兄弟、過ぎし明應年中、所々にて討たれ、其後家衰微して政資の末子資元、一人僅に殘り居候へども、當時は浪々の體にて、肥前國藤津と申す田舍の山中に罷在るげに候。さばかりの名家の民間に下る事、其家人として某、是を深く患ふるが故、今度上洛の次(ついで)に、牛頭天王の擁護を賴み申す處なり。希はくは此趣叡聞に達せられ、廢れたる少貳家を御立て給はり候へと、泣く〳〵勅答申しけり。其旨、悉く奏聞あり。重ねての勅定には、朝覺上人が奏し奉る處、公卿詮議の上、追つて綸言あるべき由、仰下されしかば、朝覺力及ばずして、其節は先づ罷下りけり。然るに朝覺、傳法の爲め、重ねて天文七年に上洛しける時、此事又々訴へ申せし、に勅諚ありけるは、寔に朝覺が度々奏し奉る處、哀に思召すなり。茲に因りて今度少貳家再興の事を、鎭西の武士共へ、綸旨を以て仰下さるゝなりと。則ち彼の綸旨を、傳奏の方より朝覺へぞ渡されける。上人大きに悦び、件の勅書を帶し、

龍造寺隆信元盛に對面す

天文九年に筑紫へ下向し、大内介義隆・澁河右兵衛佐尹繁を初め、鎭西の諸將へ是を披露しけれども、各〻更に勅命に隨ひ奉らず。朝覺、力及ばずして年月を送りけるが、又今年永祿四年に上洛し、傳奏に據りて少貳家再興の事を、以前の如く猶々訴へ申しけり。時に綸言ありけるは、朝覺上人重々訴へ申すに依りて、太宰少貳家再立の事を、九州の武家共へ兼ねて勅定ありと雖も、彼の少貳と申すは、將軍家に對し代々弓を引き、世を亂したる者なりとて、皆々勅命に隨ひ奉らず。强ひて又是を御立あらば、旁〻勅裁を恨むる者出來て、國家の亂となるべし。故に天氣及ばれざる處なり。所詮此上はせめて少貳が末葉を其儘にて、安穩に差置くべきの旨、肥前の龍造寺が許へ綸旨を以て仰下さるなり。當時は少貳の餘類、肥前にある由叡聞に達すと、傳奏を以て勅諚ありけり。斯かりし程に朝覺上人、數度の奏訴徒にて元盛曹司の居られたる肥前河副庄へ下著しけり。斯くて龍造寺へも、右の勅命ありしかば、隆信則ち領掌せられ、普天の下にありて、天氣に背くは勿體なし。彼の元盛に於ては、私領に隱れ住むとも、其儘に宥免すべしと、自身頓て河副の福滿寺へ

元盛朝覺の勸に依りて出家す

赴かれ、元盛御曹司へ對面あり。懇に言葉を添へられ、彌〻彼の寺にぞ差置かれける。斯くて朝覺上人、其後、元盛曹司へ申しけるは、某多年心を碎き、公を世に立て進せむと思ひ、京よ田舍よと奔走致し候へ共、時至らざれば力なし。所詮今の如く有るか無きかの御有様にて、賤家の塵に穢れさせ給はむより、今は中々釋門に入らせ給ひて、無上菩提を求められ候へと、涙と共に申しければ、元盛も袖を濡し、兎も角もよきに計らふべしと、主從頓て高野山に登り、元盛は眞福院にて髮を剃り、明くる永祿五年壬戌に、密乘の法水を請けて灌頂職位を得、大納言式部卿法印に任じ、下國ありて後、朝譽と名を改め、則ち福滿寺に住せられけり。然るに朝譽法印に、幼少より附纏ひたる家人三人あり。其中一人は今泉、幷に窪・平原なり。法印、彼の三人の從者を召して申されけるは、我は往日は一度少貳の名跡を續ぎ、汝等を股肱として、生前の恩を報ずべしと思ひしかども、終に其素懷を遂げずして今桑門に入り、既に忍辱の法衣を纏ふ。誠に前業の感ずる處、悔ゆべきにあらず。されば君臣は三世の宿緣あつて、主となり從と契るとこそ聞け。然るに汝等、今まで賴なき我等

元盛相傳重寶を三人の從者に分與す

に附添ひて撫育せし忠心の程、思へば海よりも深く、案ずれば山よりも高し。然れども今は早附添ひありても詮なき事ぞかし。三人ともに急ぎ緣を求め、如何なる主をも賴む心し。名殘も今は是までなりと、家に傳ふる腰刀と、名筆の八代集を今泉に與へられ、又少貳家の文書と錦の旗一流・太刀一振とを、窪・平原に給はりけり。三人の者共、辭するに詞なく、泪を哽びて泣く〳〵退出しけり。斯くて今泉朝覺は、天正八年庚辰正月廿日、年八十歲にして往生を遂げ、元盛法印は同十四年丙戌四月廿四日、年五十二歲にて福滿寺に遷化ありけり。

有馬勢出張丹坂軍の事

永祿五年壬戌、元盛法印の兄に政興御曹司と申して、東肥前三根・養父の邊に徊ひ居られけり。然るに豐後の屋形大友左衞門督義鎭は、元來少貳と親しかりしかば、如何にもして彼の政興を取立て、廢れたる家をも興さむと思はれし故、先づ筑後國へ招き居ゑ、扨上松浦の波多下野守鎭と、高來の有馬越前入道仙岩父子の方へ、少

有馬仙岩少貳家を再興せむとて出陣

貳家再興の事を相談ありしに、兩將ともに仔細なく同意して、波多下野守は、則ち松浦黨を初め、田代因幡守・馬渡甲斐守に觸廻し其用意す。有馬仙岩は、同名修理大夫義直に人數を添へて、藤津へ差渡し、大村丹後守純忠と談合して、大村の士卒を催し、多久へ遣して多久上野守宗利を味方に引付け、彼の軍兵を一つに合せて、一度に佐嘉へ取懸け、龍造寺を攻潰し、少貳家を立てむとぞ企てける。斯かりし程に西肥前の輩、悉く有馬に與して、先づ彼杵には西鄉石見守純堯・矢上又三郞幸治以下、下松浦には松浦丹後守親・山代豐前六郞清・伊萬里兵部大輔直以下、杵島には平井權大夫經治を初め、白石・永田・吉田・宇禮志野・原・上瀧、高來には安德・安富・神代・島原・多比良・千々岩以下皆打出でて、既に先陣は永祿五年三月十七日、杵島の横邊田まで攻め來る。此事、龍造寺に聞え、隆信急ぎ老臣等を召集め、軍の評定あつて同名の一族、其外鍋島三郞兵衞尉信房・同左衞門大夫信昌を初め、小河・納富・福地以下の輩を横邊田口へ差向けらる。此勢、早速佐嘉を立ち小城郡に到りて高田村に陣取る。千葉介胤連も、龍造寺に加勢として、譜代の家人を相催し、丹坂表へ出張す。

龍造寺の軍勢丹坂に出陣

馬渡俊光隆信に昧方して有馬勢と戰ふ

此外蘆刈の鴨打陸奥守胤忠・徳島土佐入道道可・同名治部大輔長房・同左馬助信盛を初め、今河の持永治部丞盛秀以下・空閑・粟飯原・桃崎・橋本も、皆龍造寺に加勢の爲め、丹坂口へ打出でたり。斯くて有馬の者共、急にも攻め來らず、横邊田に陣を取り、六月も既に半ばになりけり。爰に其頃馬渡兵部少輔俊光といふ者あり。有馬方へ所緣ある者なりしが、今度隆信に對し何樣忠を盡さむと思ひ、一族の野田右近允と密談して、有馬へ使を差遣す。有馬の輩、馬渡が方便とは夢にも知らずして、彼等が使に任せ、さらば先づ大將分一人砥河邊まで差遣し、龍造寺が領內を亂妨すべしと、則ち島原彌七郎に人數を添へ、船より砥河へ差向けけり。此兵船、既に柳津留の入江に漕ぎ入る。時に馬渡兵部少輔・兼ねて近隣の輩共へ言談し、牛尾山に相圖の火の火を揚げしかば、東よりは鴨打・徳島數百人にて馳せ集りて、西よりは野田・乙成出合せて、有馬船を中に取籠め、雨の降る如く散々に射る。島原を初め有馬衆、すは忻れつるよと動轉し、漕戻さむとすれども相叶はず、或は船底に隱れ、或は干潟に飛込み、手向ふ者一人もなし。佐嘉方の地下人共、是を見て手を叩き聲を揚げて、

猪鳴（をめき）呼び竹槍等にて突いて廻るに、有馬勢百餘人、目の前に討たれたり。されども大將島原彌七郎は、兎角して敵を拂ひ、牛津江・大戸ヶ里まで兵船を進め、鴨打が家人と相戰ひしが、爰にて又有馬勢四十餘人討たれ、島原は遁れて退きけり。此時、鴨打が手の者も五十餘人討死しけり。斯くて此由、佐嘉へ注進す。隆信感悅せられ、馬渡へは新恩の地百町給はり、能登守信光と改名せられ、鴨打へは小城の右原八十町加恩あり。徳島以下の者共へも、各〻恩賞給はりけり。

一、爰に佐留志の前田志摩守・同子息伊豫守も、頃〔日脫カ〕有馬と手切し、有馬より佐留志へ居ゑ置きたる代官高場新右衛門を切つて、其死證を其頃隆信、加瀨の麥新開の館に來り居られし間、則ち其所へ持參し、隆信の實檢に入れけり。隆信大悅あり、佐留志へ新田六十町幷に砥川の內五町分を前田に給はりぬ。

一、此時上松浦の鶴田因幡守・同名越前守・田代因幡守も、龍造寺に一味し、旗頭の波多下野守が大友方なりしと手切して、佐嘉へ相從ふ。中にも田代は上松浦田代の居館を立退き、佐嘉領小城郡の內納所村に來り住す。此田代、波多と手切して、

田代の舊地を引拂ひし時、波多家來の者共附慕ひて、手痛き合戰あり。嫡子左京亮・同名主殿助・同彌三郎・同源五左衞門・同新左衞門・同藤次兵衞以下討死し、二男越後守疵を蒙る。

一、此時、杵島郡横邊田の鄕士土井・井元・田中等も、前田伊豫守家定が調達を以て、皆龍造寺へ相隨ふ。斯くて有馬の者共、馬渡に方便(たばか)られ大に腹を立てゝ、同七月二日、島原彌介を大將にて、安富但馬守貞直が家人・安德上野介直治が家人、其外高來・杵島の軍士相集りて、須古の平井經治の手の者と一つになり、大勢を催して横邊田を東へ打通り、砥河村へ攻め來り、已に大橋を越えむとす。時に龍造寺方にてありつる前田志摩守は、佐留志より押來り、相浦河內守は別府より驅付け、砥河の地士泉市之介・森田越前守・江口慶林以下は、各居宅を打出で、急ぎ大橋口に支へて敵を防ぐ。俄の事なりしかば、筵・ねくぶくなどを張り竝べ、要害の體に取構へ、矢を射懸けて防戰しけり。此時、前田志摩守は餘りに進み戰ひ、隱津に於て主從十八人討死す。斯かりし間、有馬勢、此口をば破り得ず、北を指し

隆信味方の敗報をきゝて出陣

て攻め躋り、兩子岳の北なる由利岳に陣を取る。斯くて多久に陣したる大村の軍兵も、頓て由利岳に來り、有馬の者共と一つになり、近日小城に攻め入らむとす。茲に因つて先づ千葉介胤連の家人等、石原の六田繩手へ出でて相戰ふと雖も、元より小勢なりしかば打負けて引退く。此事、急ぎ龍造寺へ注進ありしに依りて、隆信自身出馬すべしとて、先づ舍弟左馬頭信周・從弟左衞門佐鑑兼・鍋島三郎兵衞信房・納富但馬守信景・同名治部大輔信純に人數を添へ、先立て丹坂口へ差遣し、其身も續いて打出でらる。鍋島左衞門大夫信昌・小河大炊助信友・百武志摩守兼通以下、隆信に相具しけり。斯くて有馬の軍兵、七月廿五日、旣に由利岳を立つて、小城へ討ち入らむと丹坂へ攻め來る。斯かりし間、近邊の鄕司等、先づ馳付けて其口々を差固む。此時馳せ集る人數には、今河の持永治部丞盛秀・同名長門守・同淸兵衞・粟原甚介・大曲彥三郎・岡の大塚左京亮盛家・板屋九郎太郎・平井の粟飯原宮內少輔・同新七郎・鳥巢大藏允・西鄕の容閑刑部左衞門・江頭主計允・津野の橋本兵部少輔・同名左近允・同右近允、其外當郡の者共相集まりて、加須村の

丹坂合戰

有馬勢敗軍

稻荷の北にて勢を揃へ、江頭筑後守を先勢とし、丹坂口を守りて、山より東西鄉に陣を取る。又丹坂の北なる姫御前塚をば、峯村の峯内藏允吉家・同弟民部少輔・同名甚左衞門・同次郎兵衞主從八十三人にて差固め、西の谷を越えて右原境に陣を取る。此者共は皆千葉家の舊臣なり。斯くて有馬の軍兵、此兩口へ攻め來り、一手は先づ姫御前塚を越えむとす。時に峯が一族、是を通さじと散々防ぎ戰ひしが、頭人の峯内藏允、七箇所疵を蒙りて引退く。殘る者共、是を見て此口を攻め破られては叶はじと、中にも峯甚左衞門は無雙の精兵にて、石の狹間より差取〔詰カ〕引詰射ける矢に、有馬勢廿三人射伏せられ、是に疲れて進み得ず、口木の方へ引返す。扨丹坂口にも合戰始まり、敵味方入り亂れて追ひつ返しつ相戰ひ、初の程は有馬衆切勝つて、既に西鄉まで攻め入りしに、龍造寺の軍士小城衆と一つになり、烈しく戰ひしかば、有馬勢忽ち打負けて、悉く崩れて引退く。小城・佐嘉の輩、勝に乘り丹坂峠を越えて、右原へ追詰めたり。爰に於て有馬勢、案内を知らずして柳瀨川に行懸り、我れ先を諍ひて川水に飛込み〳〵溺れ死す。時に小城

隆信多久城を陷る

の郡士の中に持永治部丞、軍忠を抽んで分捕しけり。此時、有馬の者共に討死の輩。先づ安徳與太郎直德・同名彌左衛門・同日向守・同兵部左衛門・同八郎次郎・同太郎左衛門・大窪金右衛門・長野土佐守・同四郎左衛門・同三郎左衛門・大塚次郎兵衛・菅太郎兵衛・河口忠兵衛・小瀬八郎左衛門・池副孫三郎。又者に忠七・三郎右衛門・孫四郎。（以上三人與太郎內。）合せて十八人は、安徳上野介直治出勢の內なり。幷に安富但馬守出勢の內、數十人其交名を知らず。此外、有馬の士卒凡そ殘らず討たれにけり。味方にも牛尾別當琳信の手の者に、叶源次郎討死し、千葉の家人等討死・手負多かりけり。斯くて隆信は、則ち別府へ打通り、多久上野守宗利が下多久の城を攻めらる。時に城主上野守は、今度丹坂へ出陣したる留主なりし故、城中頗る無勢にて、防戰叶ひ難かりしかば、城即時に落去しけり。此時、寄手佐嘉勢に成富式部少輔討死しけり。扨隆信は當城を容易く攻め取りて、急ぎ長尾口を差塞がる。是は大村・多久の者共の、此度丹坂に敗軍して、逃歸るを通すまじとの事なり。斯かりし程に、彼の兩所の士卒等、引足（ひきあし）を塞がれ、すべき樣なく、皆散々にな

りて、爰かしこの山林に北迷ふ。其中に案內者に出でたりし長尾村の倉富米滿・波佐間村の田中掃部助は、蹈留まりて討たれにけり。斯くて隆信は、多久の城に入りて人馬の息を休めらる。又有馬の殘兵共は、横邊田へ引退き、夫より久津句島に取籠り、須古の平井經治と塚崎の後藤貴明の方へ、加勢の兵を乞ひけり。

北肥戰誌卷之十五終

北肥戰誌　卷之十六

隆信有馬の殘黨と軍の事

多久宗利の先祖

龍造寺隆信は、永祿五年七月廿五日、小城郡丹坂の軍に打勝たれ、多久の城をも追落して、則ち彼の城へ入りて陣を居ゑられけり。此時、有馬に與せし輩、懇望を以て降參する者〔其脱カ〕數を知らず。其中に多久上野介宗利計りは、丹坂を敗軍し、直に須古へ赴き、平井經治をぞ賴みける。されば此宗利が先祖を尋ぬるに、多久太郎宗直とて、右大將賴朝公の御時、鎌倉に仕へてあり。ある時、右大將家御遊の次に御戲ありて、此宗直と朝比奈三郎義秀との相撲を御好あるけるに、宗直二番勝ちたり。時に右大將家、殆んど御入興あり。其褒美として六十六箇國の中に、多久と稱する所は下さるべき由、御旨を蒙り肥前の多久をも知行し、始めて下向して、子孫代々

隆信有馬の殘黨と合戰

梶峯城に居住しけり。元は攝津國の內、多久に住しける故、多久と號し、平氏なり。六十餘州に多久といふ所、三箇所ありしと云々。彼の宗直大兵なり。其齒今にあり。肉より上の長さ一寸程あり。斯くて隆信は多久の城に在陣あり。鍋島左衞門大夫信昌は、堤尾岳に取登りて備を固うし、有馬の殘黨を鎭めて陣を取らる。

一、明くれば七月廿六日、隆信、多久の陣より塚崎の後藤伯耆守貴明の許へ使を立て申遣されけるは、隆信、昨日丹坂に於て有馬の軍兵を、一戰の中に切崩し、唯今多久に在陣申すなり。然れば追付(おつつけ)當陣を横邊田へ移して、有馬の殘黨殘らず討果すべし。此時御邊我等と無事をなし給はむや。若し又有馬へ加勢あらば、先づ隆信、其表へ發向し、御邊と一戰を遂げて勝負を運に任すべしと言送られ、其返答をも相待たれず、卽時に多久を打立たれ、杵島へ陣更(ぢんがへ)あり。百堂原に到りて備を立て、朝日の旗を押立てらる。時に貴明、兎角の返答せざりけり。然る處に隆信の後口(うしろ)の方より有馬・大村の殘黨共、鬨の聲を揚げて不意に切懸る。然るに隆信は、元來機變萬化の大將にて、些(ちつ)とも騷がれず、先備を忽ち後に繰替へて、有馬勢と相戰

有馬勢敗北

ふ。佐嘉勢の中よりは、木下伊豫守・副島右近允以下、死を爭ひて打戰ひ、有馬勢には須古衆白石・村田・木田・川崎幷に高來衆安富・安德の家人等、十死一生になりて戰ふ。有馬勢は素より昨日敗軍の殘黨にてはかぐ〱しからず、亦打負けて敗走し、或は元の如く久津句島へ引退き、或は醫王寺山へ取登りけり。斯くて隆信は、不意の敵を討ち散らして、北方といふ所へ陣を移さる。此時、後藤貴明より猪熊半助を使者とし、今度の軍案〔勝カ〕利の祝儀を述べられけり。斯くて隆信、北方の陣を拂つて横邊田へ退き、福母山に陣せらる。

隆信敗軍の事

斯くて隆信は、福母村の北なる小山に本陣を居ゑられ、諸勢は南の江に副ひて陣を取り、扨須古の高岳城主平井權大夫經治を攻めらるべしと、同七月廿八日の晨、彼の城の北の大手、福母の南大橋口へ押詰めらる。先陣は納富但馬守信景にて、案内者は前田伊豫守家貞・井元上野介、彼此合せて二千餘騎なり。彼の平井經治といふ

隆信平井經治と戰ひて破らる

は、當代無雙の勇將にて、佐嘉勢の寄すると聞いて、さらば半途に出合ひ、一々討ち散らすべしと評定し、一族の川津左馬助經忠・平井刑部大輔を初め、本田豐前守純秀・同新左衞門純親・白石左近大夫純通・湯河・川崎・志自岐・永池・村田以下の者共、大橋口へ出向ひ、互に弓鐵炮を放ち懸け、火を出して防戰す。斯くて兩陣、太刀打になつて討ちつ討れつ戰ひしが、龍造寺の者共、散々に利を失ひ足々〔引足カ〕になつて引退く。平井が兵勝に乘り大勢に附慕ふ。時に龍造寺の一將鍋島左衞門大夫信昌、槍を以て敵を突き、退く味方を助けて戰はれしかば、畔に躓き逆に倒る。敵是を見て、能き武者とや思ひけむ。左右より駈寄りて信昌を討たむとす。鍋島既に危き處を、小河大炊助・百武志摩守・副島右近允駈け付けて、彼の敵を切拂ひ信昌を援ひけり。斯くて龍造寺の士卒、倚利あらずして引退くに、平井が軍兵、急に追駈け矢を射懸く。是に於て龍造寺の者共、中々難儀に及びしに、鴨打左馬大夫・副島式部少輔・野邊田左衞門尉以上三人、中の手より返して慕ふ敵を追散らす。此時、龍造寺の後拂は、龍造寺左衞門佐鑑兼・納富但馬守なり。又鍋島左衞門大夫も、手勢を以て之に加

はり、大勢の敵を追拂はる。斯かりし間、是よりは敵もさのみは慕はずして、心安くなりしかば、前田と井元に下知ありて、俄に小通村に屋敷を取構へ人數を入れ置き、則ち前田・井元に是を守らせらる。扨總勢は引退きけり。然るに又近邊の野伏共、大勢取集りて、落人あるを討取りて、物具剝げと相呼ばはり、小田に陣を取り、佐嘉勢の歸るを待懸けけり。其由、龍造寺の陣に風聞しければ、士卒猶豫して此筋を通り得ず、或は今日は日暮れぬ。明日通らむといふもあり。或は別道に懸りて引かむといふもあり。時に鍋島左衛門大夫進んで申されけるは、何條其野伏め物數ならず、信昌一人にて、唯今駈散らし通らむものをと申されしかば、隆信尤もと同意あり。鍋島、眞前に打つて小田の村中を一文字に駈け通らる。其勢ひに機を呑まれ、野伏共悉く上なる山へ引登りけり。斯かりし程に、龍造寺の諸勢、恙なく佐嘉へ歸陣す。

一、隆信、今度須古の軍に打負けられし事、隣國へ隱なし。大友より筑後に差置き兩人の守護代森越前入道・宗智・成大寺豪榮より、早速東肥前の旗下共へ觸送りし

狀に曰く、

急度令〻啓候。隆信須古表防戰打負敗北之由、其聞候。筑後上下衆其外諸口可〻被〻差寄〻之由稠敷申觸候。兩人事先以大善寺邊迄、明日晦日出張候。御三人郎〔既〕時被〻掛出〻、一行不〻可〻有〻御油斷〻候。替義候半者、猶重而可〻承候。恐々謹言。

七月廿九日

森越前入道　宗　智判

成大寺　豪　榮判

横岳殿

宗　殿

筑紫殿

或はいふ、今度隆信、須古敗軍の時、先陣を横邊田へ退かれしかば、鬱憤に堪へずして、後藤を差語らひ、押返し平井と合戰あるべしと評定ありし處に、佐嘉より注進追々にて、大友旗下の輩、隆信の留守を謀る由申來りし故、さらば先づ歸城

あるべしと、多久の明城には舍弟兵庫頭長信を殘置き、大村・松浦を押へて、隆信は佐嘉へ馬を入れられしとも。

或はいふ、此軍、永祿六年の事なりとも。 非なり。

三根郡中野城攻の事

隆信肥前に出陣し中野城を攻む

永祿六年癸亥四月一日、雹雷夥しく手拳程の三角の雹降り、人馬多く打殺さる。 時に一天闇の如し。 同二日、九重の塔炎上す。 同年六月廿二日、龍造寺隆信、少貳政興以下の敵退治の爲め、東肥前へ出馬せらる。 舍弟左馬頭信周を初め、納富但馬守・福地長門守・石井一黨其外相從ひ、先づ馬場肥前守鑑周が在所三根郡中野城へ取懸けたり。 鑑周の家人手田・川波・藥王寺、城戸を持つて大に相戰ひ、佐嘉（勢脱カ）に死亡する者數を知らず。 寄手の中より石井一門（文字カ）時に進んで合戰し、同名源次郎一番に討死し、福地が與力中溝善兵衛も討たれたり。 其外福地長門守・石井安藝守・同苗壹岐守・同肥後守・同但馬守・同三河守・同越前守・同刑部少輔・同左京亮・同五郎左衛門・同惣

中野城主馬場鑑周隆信に降參

左衞門以上十一人進み戰ひ、各〻疵を蒙り、相浦河内守・北島河内守・水町左京亮・秀島主計允も軍功を抽んで分捕しけり。斯くて合戰半なりけるに、福地長門守、城中に入り鑑周に對面し、和平の談合致しければ、肥前守是に應諾して、則ち福地を賴み軍門に降り、弟の源次郎周鎭を人質に差出す。斯かりし程に、福地、早速源次郎を召具し、甲を脫がせて、隆信へ取合せ、雙方矢を留め合戰を止めけり。既に鑑周、龍造寺へ降參しければ、當郡の少貳方宗兵部少輔尙夏・橫岳下野守賴續・防所尾張守も忽ち降人となる。斯くて隆信、夫より橫岳中務大輔鎭貞が西島の城に押寄せらる。鎭貞の家人板部・古館・原島・關屋・江頭以下口々を守り、佐嘉勢の先駈と相戰ふ。時に隆信、當城の體容易く落つまじとや思はれけむ。今度降人に出でたりし馬場肥前守・橫岳下野守を以て、鎭貞を押へ、六月下旬、先づ佐嘉へ歸陣せられけり。今度中野の城にて石井源次郎討死、其子なきに依りて、隆信、彼の一門の頭石井藏人忠清まで、納富治部大輔信純を以て、哀愁の感狀を給はりぬ。

鹽見城落去の事

有馬義直鹽見城を攻む

爰に其頃、肥前國杵島郡長島庄鹽見山城主を、澁江豐後守橘公師といふ。頃日塚崎の後藤伯耆守貴明と一味同心し、有馬に從はずして、居城鹽見に引籠りけり。然るに此時、有馬仙岩の猶子修理大夫義直、高來より渡海し藤津にありけるが、さらば鹽見を攻むべしと、永祿六年十月廿日、西右京亮を大將にて、藤津・杵島兩郡の輩を鹽見山へ差向く。此勢、既に廿日の未明、彼の城に取懸け、馬渡兵庫助以下の者兵、鬨の聲を揚げて攻口に押詰め相戰ふ。されども城主公師、士卒を下知し城戸を持つて破られず。然るに當城には、近年薩州の種子島へ渡りし鐵炮を多く籠置きけり。有馬方の者共、兼ねて是を知りしかば、如何にもして彼の鐵炮を除けむと談合し、其謀には、近き邊りの提子川といふ所に、鹽見大明神の神子居けるを相語らひ、金銀を與へて計略の旨をいひ合して、前廉より彼の城内に入置きけり。此神子、忽ち財寶に迷ひしかば、有馬衆の含めし如く、俄に物付の眞似をぞ仕たりける。扨手足

を空に踊り靑稻のありしを嚙食ひて、狂ひ〳〵申しけるは、我は是れ忝くも鹽見大明神なり。抑、當城、唯今敵に攻められし故、武具を以て是を防ぐ。甚だ愚なる事なり。我れ和光の塵に交つて、此山に跡を垂れ澁江氏を守護する事、既に數百餘歲に及びぬ。然るに刃を以て人を斬り、鐵炮を飛ばせて人を殺す事、當山の穢是に過ぎたるはなし。看よ〳〵左なくとも、神力を以て敵の惡黨を千里の外に蹴散らすべきぞ。急ぎ鐵炮等の兵具を城外へ運び出すべしと、汗水になりて口走りけり。公師を初め城中の者共、是を更に信用せず。されども公師の父下野守公親、強に正直なる男にて、祖神の託宣疑ふべきにあらずとて、鐵炮・槍・長刀悉く城外へ運び遣しけり。有馬衆是を聞きすまし、計り得たりと悅びて先を爭ひ攻め戰ふ。城中の者共、大將公師を初め大明神の神託大に相違したり。こは如何すべきとつぶやきながら、城戶を固めて防戰す。斯くて三日三夜の合戰に、城兵多く討死す。中にも三岳兎源左衞門・白石道長・彼杵何某・波佐美何某討たれて、城主公師は七箇所の手を負ひしかば、城中怺へ難くして皆散々に落行く。公師は塚崎の方へ遁去り、弟三郎

公重は討死して、十月廿三日、城は則ち落去しけり。其後公師は肥後國山鹿へ赴き、赤星重行を憑んで暫し蟄居しけるとぞ聞えし。

澁江家由來の事

抑、彼の鹽見城主澁江家の祖先を如何にと尋ぬるに、人王三十一代敏達天皇には五代の孫、井手左大臣橘諸兄公の末葉なり。此諸兄、才智の譽世に高く、聖武天皇の御宇、既に政道の輔佐たりしより後、其孫子從四位下兵部大輔島田丸、猶朝廷に仕へ奉る。然るに神護慶雲の頃、春日の社、常陸國鹿島より今の三笠山に移らせ給ふの時、此島田丸、匠工の奉行を勤めけるに、內匠頭何某、九十九の人形を作りて、匠道の祕密を以て加持しける程に、忽ち彼の人形に火便り風寄りて、童の形に化し、或る時は水底に入り、ある時は山上に倒れて神力を播し精力を勵し、召仕はれける間、思の外大營の功、早速成就なりけり。斯くて御社の造營、成就の後、彼の人形を川中に皆層り捨てけるに、動く事尙前の如く、人馬六畜を侵して、甚だ世の禍となけ

り。今の河童是れなり。此事稱德天皇、遙に叡聞ましし〱、其時の奉行なれば、兵部大輔島田丸に、急ぎ彼の化人の禍を鎭め申すべき旨、詔を下されけり。斯くて兵部大輔、勅命を蒙り則ち其趣を河中水邊に觸廻りしかば、其後は河伯の禍なかりけり。是よりして彼の河伯を兵主部と名づく。主は兵部といふ心なるべし。夫より兵主部を、橘氏の眷屬とは申すなり。然るに島田丸に六代の孫大納言好古が時、天慶四年辛丑、朱雀院より征西將軍の勅號を賜はりて、逆臣藤原純友を伐ちし忠賞に伊豫國を賜はり、子孫九代の間は彼國に住しぬ。其九代の嫡孫を橘次公葉といふ。鎌倉賴經將軍の近習にありて、薩摩守に受領す。此公葉が時、先祖累代の領知伊豫國宇和郡を常盤井關白殿へ禁裏より賜はりしかば、其代地として、公葉へは豐前國副田庄・肥後國久米鄕・大隅國種子島・肥前國長島庄を給はりて、嘉禎三年丁酉、始て豫州より肥前に來り、長島庄に移りて鹽見山に城郭を構へて居住しけり。然るに公葉には六代の孫橘薩摩彌次郎公繼・其子公經・同彌五郎以下、建武・曆應の合戰に、將軍方に屬して勳功を抽んで恩賞に預りぬ。今の豐後守公師は、公葉には十六代の後胤なり。

有馬家由來の事

抑〻肥前國高來島志自岐原今の原の城。城主有馬越前入道隨意齋仙岩と申すは、大織冠鎌足公の苗裔伊豫權守純友の嫡流にて、有馬肥前守貴純には孫子左衞門尉尙鑑の子なり。童名は軍童丸、中頃修理大夫に任じ、公方義晴公の御諱字を給はりて晴純と號し、其後、亦義の一字を申給はり、越前守義貞と改めたり。されば此仙岩、當時其威强勢の大將にて、先帝後奈良院の御時、去る天文十三年甲辰十一月に、京都へ吹擧し、勅使日野中納言晴光卿を居ながら申下し、私領濱の松丘祇園社へ出向ひ、宣命を拜し奉り、修理大夫に任じて、則ち勅使晴光卿を岩崎へ迎へ請け、種々の饗應善盡し美盡し、樣々の引出物其數を知らず。上古の事は未だ聞かず、近代には田舍の武士の官途を進むる時に、居ながら勅使を申下し、宣命を拜する事、希代の珍事なりけり。

抑〻此仙岩の曩祖伊豫權守藤原純友が事を傳へ聞くに、昔天慶の初め、武藏權守平將門と心を合せ世の亂れし時、兩人契約しけるは、此度天下を奪ひ取りて、將門は王

藤原純友亡ぶ

孫なれば帝王になるべし。純友は大織冠の末なれば、關白になるべしと談じ、將門は關東にありて自ら平親王と稱し、東百官と名づけて、私に官職を立て百官を召仕ひ、下總國猿島郡石井郷に於て旗を揚げ、純友は任國豫州に下りて、ともに逆意を企て天下を暗闇(くらやみ)になさむとす。されども王事盬なくして、將門は俵藤太秀郷が爲め、承平二年壬辰二月十三日、關東に於て梟首せられ、純友は六孫王源經基・大納言橘好古、民部少輔藤原伊傳・大藏朝臣春實・越智朝臣好方以下に攻められて、天慶四年辛丑五月三日誅伐せらる。然るに純友の子遠江守直澄、豫州を沒落し、其子孫肥前國高來島に漂著して、永く有馬に居住しけり。斯かる朝敵の末なりし故、終に上洛なり難く、年久しく邊鄙の奴子となり果て居たりしに、さいつ頃よりや、有馬浦を知行して其在名を稱して稍〻威を振ひ、近年は高來・彼杵・杵島・藤津四箇郡の內を押領し、高來の原・日江・藤津の松丘・鷲巢、此等の諸城を堅固に持ち、安富・安德・島原・多比良・千々岩・神代・志自岐其外多久・松浦・平井・馬渡・伊福・西郷・永田・宇禮志野・白石・上瀧原以下の城持共を手に屬し、旣に兵馬二萬餘騎の大名となりけり。亦往古、將門、純

友と父子の契約をなして平氏を援けし故、有馬家中頃は平姓なり。今仙岩入道は、純友二十八代の孫とぞ聞えし。

大友義鎮入道となる附耶蘇宗門に傾く事

其頃豐後の屋形大友左衞門督義鎭、其國政甚だ暴惡にして、諸人疎み嘲る事大方ならず。其上頃日、頓に入道し、亦南蠻南祥國〔マヽ〕の耶蘇宗門に傾き、佛神を蔑にし堂塔を破却す。されば其根元を尋ね聞くに、義鎭近年、専ら女色に溺れ、國中上下をいはず、若く麗しき女をいくらともなく、府内の城中に招き集め、ある時は庭上の花の下に踊を興行し、ある時は深閨の月の前に酒宴を事とし、日夜の不行義法に過ぎたり。簾中此事を大に嫉まれ、ある修驗者を賺し、金銀を與へ密に賴み、夫の義鎭を咒咀せられけり。是より義鎭、忽ち亂心となり、茫然としてある時、府内の城中を迷ひ出で、更に行方も知れざりけり。然る間、奉行中を初め豐府の侍大に驚き、こはそも何としたる事ぞと、諸方を尋ね探しけるに、臼杵の丹生島の邊にて尋合ひ、こはそも

義鎭入道して宗麟と號す

宗麟耶蘇宗門に歸依す

何としたる御有樣ぞと申しければ、さればとよ紅葉の影に誇らしてと答へられし程に、尋ねし者、是は一向亂心なりと思ひしかば、則ち丹生島の城に入れ申しけり。其後義鎭、本心に復り、簾中の咒咀を傳聞かれ、大に立腹あり。所詮世の中に佛神のあればこそ、咒咀といふ事もあれと、強に佛神を疎み思はれけり。其後義鎭、未だ年三十四にて、大德寺の悅長老を請じ、剃髮して法名三非齋瑞峯宗麟と號し、則ち家督を嫡子左兵衞義統に讓り、其身は臼杵の別業に居られけり。斯かる處に、元は禪僧なりし如露法師・因果居士といふ二人者、南蠻西祥國の邪宗にて、臼杵の丹生島に來り、上下老若共に邪法を說き聞かするに、府內六奉行の中、田原近江守親賢入道紹忍、一向是に歸依して、主の宗麟をも勸むるに、宗麟素より佛神を疎む折節といひ、其上、賢には遠く愚には近き大將なりしかば、頓て彼の耶蘇宗に傾き、偏に泥烏を貴み、彌佛神を敬はず。是よりして國中の神社・佛閣を悉く打破り、佛像・神體一々に燒捨てられしぞ淺猿しき。斯かりし間、府內の大老奉行中、大に是を悔み、中にも戶次伯耆守鑑連、時々諫詞を加へしかども、宗麟更に許容あらず、近習・外樣の輩、

大友家の滅亡近きにありと、眉を顰めぬはなかりけり。

一、永祿六年八月十三日、肥前國塚崎の城主後藤伯耆守貴明、須古の平井權大夫經治を征せむと軍兵を率して取懸る。既に貴明が先手中野一門樺島・蘆原に討ち入る。時に平井一味の輩白石左近大夫・馬渡兵庫助・林田左馬助以下出合ひて散々に相戰ふ。時に後藤が軍士利を失ひ、中野山城守重明・其子大和守・嫡孫三郎・同新七郎・同名右衞門佐忠明・舍弟僧二位達成・同弟東何某以上七人樺島に於て、一所に討たれ敗軍して引退く。其時又武雄兵部大輔討死しけり。平井方にも野田掃部允は、武雄右馬大夫が放つ矢に中りて死し、其外白石彌三郎・馬渡左馬允も討たれにけり。爰に又有馬の侍南肥後守・同筑後介兄弟は、雙方和與の談合に、頃日須古に來りて此陣中にありけるが、止む事を得ず平井方にて相戰ひ、兄は疵を蒙り弟は討死しけり。

一、同年十二月廿八日、高來の有馬左衞門佐義純、伊佐早の西鄉石見守純堯を征伐の爲め、彼の表に來り梅津に於て相戰ふ。時に有馬勢に安德上野介直治が手の

者安德九郎右衞門・同新五郎・同與三右衞門・同三郎兵衞・同太郎次郎・石橋助次郎・中間の彌六討死す。

隆信平井の須古城を攻む

龍造寺隆信重ねて須古攻附和平の事

永祿七年甲子二月、龍造寺隆信、重ねて平井經治を攻めらるべしとて陣觸あり。六千餘の兵を相催し、須古高岳城へ取懸けらる。抑〻此經治といふは、元來少貳の一類にて、父山城守經是が時より當城へ移り、既に三十餘箇年、有馬の壻となりて龍造寺の通路を斷ち、後藤とも不和にして、敵を東西に受けたり。されども經治勇氣無雙の大將にて、敢て事ともせず。然るに今度龍造寺の又々寄すると聞いて、經治士卒に下知し、隆信の軍立恐るゝに足らざるぞ。半途に悉く討散らすべしと、川津・新川崎・嚢具・白石・今村以下究竟の者共を勝つて、北の方大手の橋を越え、福母村の迦に草伏を置きけり。龍造寺の軍兵、是を知らずのさ〳〵と打つて通るに、件の伏兵、一同に嚏と起り、隆信の先陣に切懸る。佐嘉勢、是に動轉し既に敗れむと見えける

處に、二陣に續きたる鍋島三郎兵衛信房・同名左衛門大夫信昌・倉町新太郎信俊、味方を援つて先に進み、競ひ來る敵を切つては臥せ切つては伏せ、敵味方の目を驚かす。平井が軍兵、是に恐れ須古をさして引退く。佐嘉勢、勝に乘り逃ぐる敵を慕うて、高岳の城際まで押詰めたり。寄手の案内者は、德島治部大輔・同左馬助・前田伊豫守・井元上野介にて、先陣は龍造寺右衛門大夫・同名備後守・納富但馬守・小川大炊助・廣橋一祐軒なり。爰に鍋島左衛門大夫は、己が一手を以て先陣より先に進み、城の大手北の繩手にて城兵を切立て、敵の馬廻かと見えたる一勢を城中に追籠むる。是を見て先陣の內より、成富甲斐守・同式部少輔・木下伊豫守・石井新右衛門、鍋島に續いて引く敵を追駈け大城戶まで押詰めたり。斯かりし程に、龍造寺の諸勢も一同に取懸け、高岳へ攻登らむとす。時に隆信、遙に當城の體を巡見あり。廣橋一祐入道に下知せられ、難を知りて退くは軍の常なりと、士卒を引上げ城を攻められず。先づ福母へ引退き、少時陣を取らる。爰に於て雙方和平の衆議ありしに、隆信も經治も互に納得せられ、佐嘉と須古和與に決定し、則ち經治の弟平井左衛門大夫直秀左近大夫とも。

を、隆信の壻に契約あり。高岳城の大構柵欄土手を崩されけり。此時、隆信に息女なかりしかば、同名左馬大夫信純の女を養子にして、直秀に送られしとぞ聞えし。

龍造寺平井和平

隆信重ねて三根郡西島城攻の事

隆信横岳城を攻む

同年三月下旬、隆信重ねて、三根郡西島の城主横岳中務大輔鎮貞（此時未だ彌十郎。）を攻めらるべしと、東肥前へ出馬せらる。時に少貳家の舊臣共所々に出合ひ防戰す。隆信、是等を打散らし三根郡に討ち入り、横岳が城近く押詰めらる。鎮貞が家人等、宗・古館・闞屋・市武・原・板部・福島以下の者共悉く打つて出で、龍造寺の先手と相戰ふ。時に佐嘉勢の中より島内以下多く討死す。此西島の城下は、南より東西に廻りて江海漫々と、九州の渡海にして、筑後・肥後の海邊に續きぬ。然るに城主横岳、兼ねて豐後に通じ、大友宗麟の下知に随つて、亂杭・逆茂木透間なく打つて、城邊には兵船を浮べたり。北の方より乾に懸けては、米田村の境まで其口々の江筋に、一二の大橋を架け、第一龍造寺の手を堅固に守り、城中には大友より手火矢（鐵炮の事を其頃手火矢といふ。）を

神代勝利
卒去

多く加勢し、其外兵糧馬篠澤山に用意しけり。斯くて隆信、當城の體を遠見せられ、卒忽に懸りては惡かるべしと評定あり。先づ佐嘉へ歸陣せられけり。此時、横岳が方へ大友宗麟よりの狀にいはく、

到二三根郡一龍造寺山城守殿、出二當要害邊迄一相働候處、被レ遂二防戰一之段預注進候。無二心許一候條、則對二方角衆一無事之助言肝要之由申遣候。定而不レ可レ有二別義一候。彌堅固之覺悟無二申迄一候。自然爲二隆信一强而一雅意之仔細候半者、重而承可レ得二其意一候。尙年寄ども可レ申候。恐々謹言。

卯月二日　　　　　　　　　　　　　　　　宗　麟判

横岳彌十郎殿

神代長良千布落城の事

永祿八年乙丑の春、肥前國佐嘉・小城・神崎・三ケ山の地主神代大和守武邊勝利、膈の症を受け三月十五日、行年五十五歲にして、畑瀨の城に卒去あり。嫡子刑部大輔長

良、家督を相續す。されば此勝利、多年弓箭を執つて武威を振ひ、龍造寺と相挑む事數度なり。然れども去る永祿五年の冬、龍造寺の老臣納富但馬守が計らひにて、隆信と竟に和談し、嫡男長良の息女四歳と聞えしを、隆信の三男鶴仁王丸の妻室に契約あり。其後、兩家聊か害心あるまじき由、神文を互に取かはして、山と里との間心安くなりぬ。然る間、去年永祿七年に、父勝利は、畑瀨の山中に城を築きて隱居あり。子息長良は上佐嘉の內千布の高橋土生島の城へ移られけり。然るに長良の妻室は、鹿江遠江守兼明の女にて、此腹に男女の子二人にあり。一は長壽丸とて十一歲、次は龍造寺へ約束の女、初菊とて今年は十歲なり。斯くて彼の兄弟今年永祿八年四月、三瀨の古弓の館にて疱瘡、兩人同時に墓なく成られけり。近日勝利の死去に打續き、長良夫婦の悔いふ計りなし。されば力及ばず合瀨の萬福寺虎山和尙を請じて葬禮し、悲歎の淚更に乾かず愁鬱の思に泣暮さる。此事、龍造寺へ隱なし。隆信大に悅び、納富但馬守・龍造寺美作守を招いて密に申されけるは、神代長良、頭日二人の子に後れ歎き沈みてある由傳聞く。此時を窺ひ計略を以て討亡す

隆信神代の居城を攻む

べし。兩人急ぎ千布へ赴き斯々の事をいひ聞かせ、長良を方便るべしと仔細を含め、長良の居城土生島へ差遣さる。兩人則ち佐嘉を立ち千布へ赴き、案内を乞うて長良に對面し、詞を巧みに申しけるは、貴公、頃日二人の御子に後れ給ひ、悲の泪に暮れらるゝの段、隆信承はられ御同意に悔まれ候。さりながら縱ひ姫君御早世ましまし、倅鶴仁王が緣は空うすとも、此後も彌〻盡未來際別心有るべからずと、今又改め一紙の起請文を送られて候とて、神文一通差出しけり。長良は是を方便とは露知らず、彼の兩使を奔走あり。斯くて兩人、我々事は少し所用之ある故、是より城原へ赴き候なり。明後日參候仕り、御返事を承るべしとて、暇を乞ひ密に佐嘉にぞ歸りける。隆信斯樣に、長良を忻り澄し、扨其夜の曉に、納富但馬守先手とし、龍造寺美作守信明・高木左馬大輔盛房・副島民部大輔光家以下六百餘騎にて、淵高木より攻め上り、千布の土生島へ取懸け、鬨の聲を嚏と揚ぐ。兼ねて又隆信、城原の江上武種へ加勢の兵を乞はれ、其相圖ありしかば、江上の家人等城原より馳せ來り、土生島の北の方權現原の横路を一面に立遮る。土生島城中の男女、此程の泪の中に

神代長良城を落つ

思寄らざる事なれば、正體もなく仰天して、途方を失ひ周章騒ぐ。佐嘉勢の中にも、納富但馬守信景一陣に進んで、早城戸口を打破つて大庭に亂れ入る。長良、拳を握り遠侍に躍り出で、口惜しき次第かな。あの隆信といふ日本一の無道人にだしぬかれ、今斯かる見苦しき死をする事よ。よし〳〵力なし。速に腹を切らむと、押肌脱がれし處を、妻室頻に止められ、島田入道鶴栖・大塚隱岐守以下の家人共も、樣々制して早く御落あれと勸めしかば、長良承引ありて、自害を思留り主從廿人計り、北小門より出でらる。寄手是を見て、洩さじと押取り込む。神代の家人共、主を落さむと、神代左京亮・同名左馬介・大塚隱岐守・中野新十郎・古河新四郎・秀島伊賀守・福所大藏・福島式部少輔以下駈け塞り〳〵、前後左右を切拂つて、終に長良を落しけり。斯くて寄手の軍兵に、空閑三河守光家馳せ加り、火を散らして相戰ふ。福所大藏は、猶も長良を延さむ爲め、客殿に立ち大音聲を揚げて申しけるは、近からむ人は目にも見よ。遠からむ者は音にも聞け。是は神代長良なり。運命唯今に極まりて腹を切るぞ。首を取つて恩賞に預れといひもあへず、腹十文字に搔破り、うつ

伏に臥しぬ。是を見て福島式部少輔も、敵中に駈け入り討死す。斯くて長良は附添ひし者も散々になり、今は僅に島田入道鶴栖・古川新四郎・松延勘内計りを召具して、金立權現の下宮の邊まで落ちられしが、妻室の存亡覺束なくて、勘内が十五になりしを土生島へ歸し、事の體を見せられけるに、婦人は唯〻呆れて居られしを、勘内つと參り、公は早遙に落延び給ふ。然れども御前の御事心許なしとて、金立より某を歸されて候。早々御出で候へ。何方へも急ぎ御供申すべしと勸め申すに、婦人承引あらず、我が身の上は兎も角も、汝は一人なりとも、急ぎて追付き申すべし。殿の御行方こそ心許なけれと申されしを、勘内、とく〳〵と頻に諫め申しければ、婦人は乳人と共に城の後の堀に橋を用意し忍出で、主從三人河窪村藤付の山伏の坊まで落ち著かれけり。斯くて土生島城には、猶敵味方入亂れ命を際に相戰ふ。爰に城兵の中に、神代左馬助は、長良の行方を尋ねて、金立の松原まで馬を早め落ちたりしに、味方の者共追々に駈付け、廿四人になりにけり。左馬助此等を從へ、座主町を過ぎけるに、頃は四月下旬にて、廿四日の朝辰の刻になりぬ。然るに彼の

左馬助が物具、折節朝日に映ひて、一際勝れ爽かなりしを龍造寺の者共、是を大將長良よと思ひて、透間もなく追駈る。左馬助は其頃壯年過ぎ、淸げなる若武者なり。佐嘉勢の慕ふを見て、事々しの奴原やと、道より取つて返し、近づく敵に切つて入り、廿四人の者共、一人も殘らず討死しけり。龍造寺の者共、左馬助が首を取り、是を大將なりと悦びて、勝鬨を揚げ歸陣しけり。然るに長良は、先づ金立の下宮の西なる木蔭に忍び居、夫より廿四日の朝金立山に登り、座主雲上寺の成長法印に對面あり。當寺に暫し休息し、扨主從三人、名尾山へ懸りて名尾式部大輔が許へ、島田入道を以て事の次第を告げられしかば、式部大輔肝を潰し、急ぎ鎧引立て弓押張り主從六七人、島田と連れて出迎へけり。長良、此等を召具し、恙なくて畑瀬の城へぞ落かれける。折しも其日は、勝利の六七日に當るとて、上下の男女集り居、長良を見て悅ぶ事限なかりけり。

長良畑瀬の城に入る

北肥戰誌卷之十六終

大正七年三月八日印刷
大正七年三月十一日發行

國史叢書　北肥戰誌一

定價金一圓二十錢

不許複製

編輯兼發行者　國史研究會
右代表者　今村勝一
東京市牛込區市ケ谷柳町二九番地

印刷者　楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所　國史研究會
東京市牛込區市ケ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
電話番町四一六六番